

2 石器 (第13図～第20図、図版7～図版9)

1 石鏃 (第13図1、2、図版7の1、2) 無茎鏃2点である。基底辺に抉り込みをもったものである。図1はほぼ完形品で、入念な剝離調整を両面から施している。図2は尖頭部若干欠損している。やはり両面加工である。縁辺部の鋭さがなく部厚い感じを受ける。使用痕は明瞭でない。

2 石匙 (第13図3～5、図版7の3～5) 横形のみ3点の出土である。図3と4は周縁両面加工、図5は上側辺のみ両面加工で下辺は片面加工である。図3は、第1次剝離による剝片ではなく、扁平な原石を調整剝離して形を整えたもので $\frac{1}{3}$ 程度欠損している。

3 スクレーパー類 (第14図15～17、第15図1～21、第16図23、24、図版7の15～29)

削器又は搔器と思われる。刃部加工の明瞭なものである。形の上から次のように細分した。
a—石匙のつまみ部が欠けてなくなったような形となっているものである。刃部はいずれも両面加工である。(図15～17)

b—ほぼ二等辺三角形を呈し、尖頭部鋭利で基部が厚いものである。基部にはプラットフォームを残し、片面に高い稜が尖頭部まで走る。左右両側辺共鋭利な刃部角になっている。(図18～21)

c—湾曲部をもつ不定形のものである。基部を除く側辺はすべて刃部として使用できる鋭利さをもつ。片面加工部分が多い。湾曲部も刃部として使用されたく、図18は入念に刃部加工されている。基部厚く、下端部及び側辺は鋭利である。(図22、23、29)

d—ほぼ楕円形を呈すものである。基部は厚く、下端部は鋭利になるがその下端部の形はやや細くなっているもの(図24、26)と丸みをもつもの(図25)がある。いずれも下端部の縁辺に刃部加工を施している。稜線部高く、横断面は平べったい三角形や菱形状となる。

e—不定形で比較的厚手、刃部加工が1辺にだけ見られるものである。図27と28は、図中下端の縁辺だけの加工である。刃部角は直角に近いものから 30° 程まで一定でない。

4 石筥 (第14図6～14、図版7の6～14) 比較的小型のもの8点、大型のもの1点である。両側辺を剝離調整し、下端部にも入念な刃部がつけられる。明瞭な使用痕は認められない。図6と13は上半部欠損している。図12と14は、やや下半部ふくらみを持つ形である。図12や9は片面加工であり、スクレーパー類にも含めることができる。

5 打製石斧 (第16図30～34、図版7の30～34)

縁辺部に、荒く両面から剝離調整された、比較的大型の打製石器である。石筥とは大ききで区別した。5点出土。大部分両面加工であるが、下端の先端部辺では片面に自然面を残しているものがある(図31や33)。刃部角はゆるやかである。

6 磨製石斧 (第16図35～37、第17図38～39、図版7の35～38)

刃部の判明するのは図35の蛤刃だけである。他はすべて胴部上半のみ残存する。磨き調整の擦痕が見られる。図38の折損面は、後に又磨かれて平坦面となっている。

7 石斧様粗製石器 (第17図40～48、図版8の40～48)

形は石斧様であるが、明確な刃部がなく、縁辺の一部に剝離痕や敲打痕を残す類である。石器と認めがたいものをも含む。石斧の未完成品又は打割敲石等に使用されたものか判然としない。

8 扁平大型打製石器 (第18図49～53、第19図54～56、図版8の49～56)

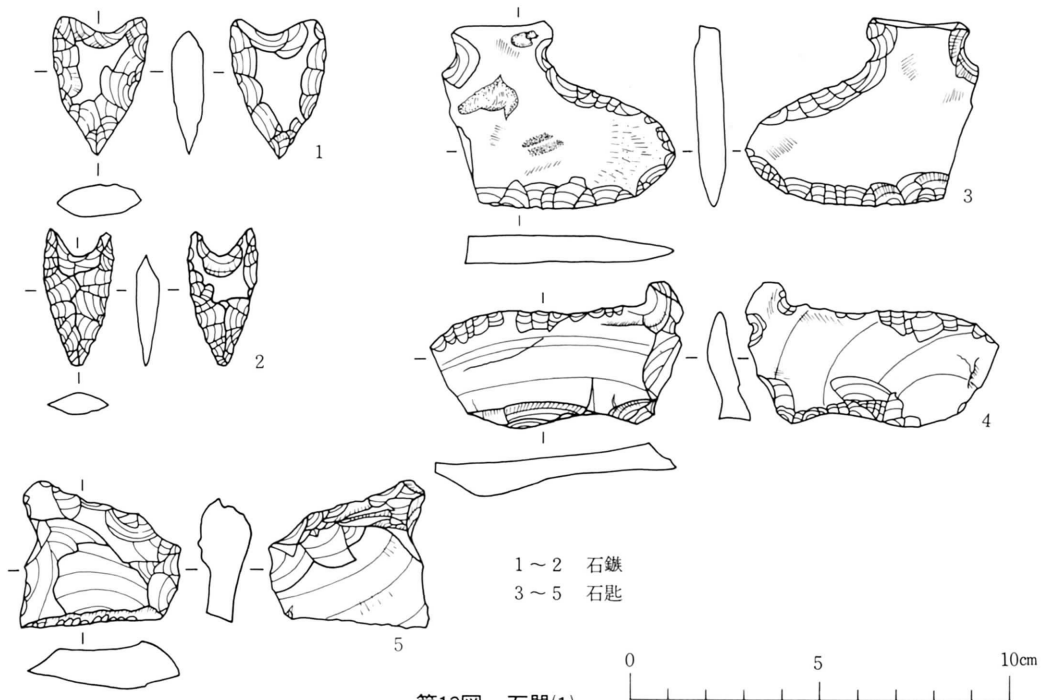
重量300g～1.4kgの一部打製の剝離痕をもつ大型のもので、丸みをもつ先端部を一方にもつ。使用痕は認められず、機能は不明であるが、敲打打割又は土掘り作業等が想定される。上下どちらが機能面かも判別できない。

9 石皿 (第20図72、図版9の72) 磨擦痕跡のあるものは3点であるが、同石材の石皿様のものはかなりある。図72は縁辺やや高く中央に凹みをもつ。

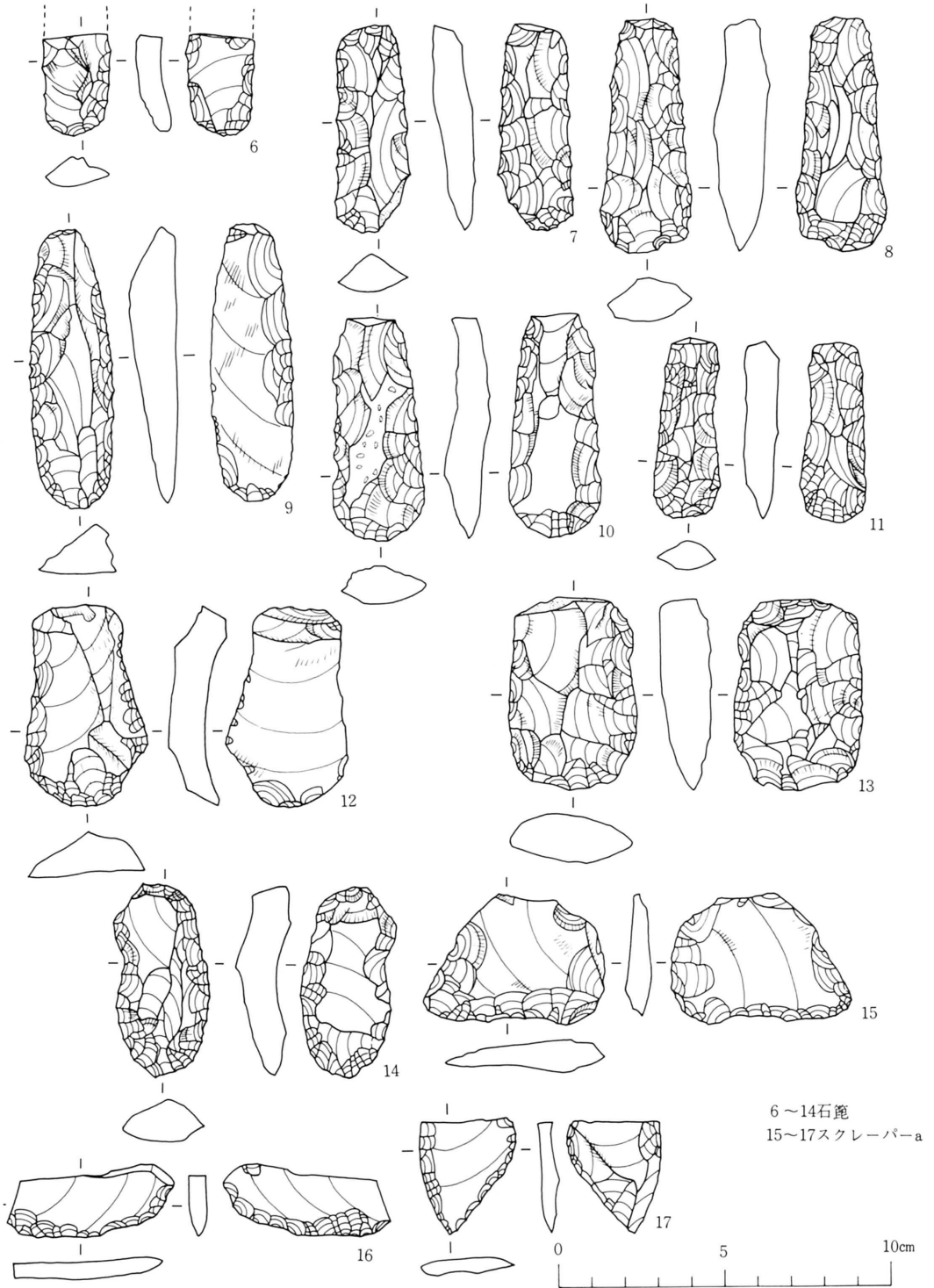
10 磨石 (第19図57～62、第20図63～67、図版9の57～67)

円形又は楕円形の擦痕を有するものである。断面卵形が多く、平坦なものもある(図63)。

11 その他 (第20図68～71、図版9の68～71) 角棒(図71)や丸棒(図68～70)などで擦痕を残しているものである。用途は不明で、石器と見るかどうか疑わしいものである。

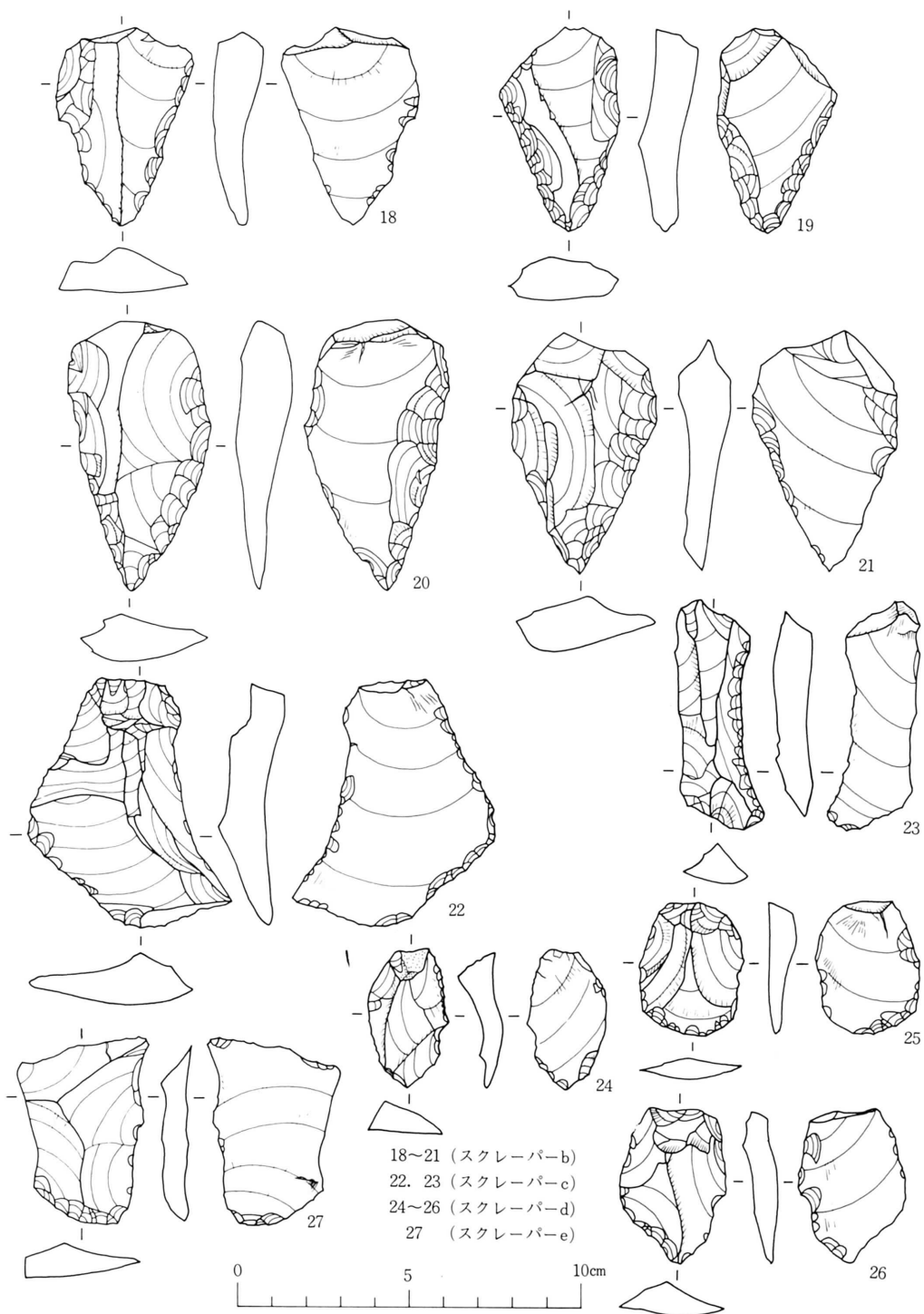


第13図 石器(1)

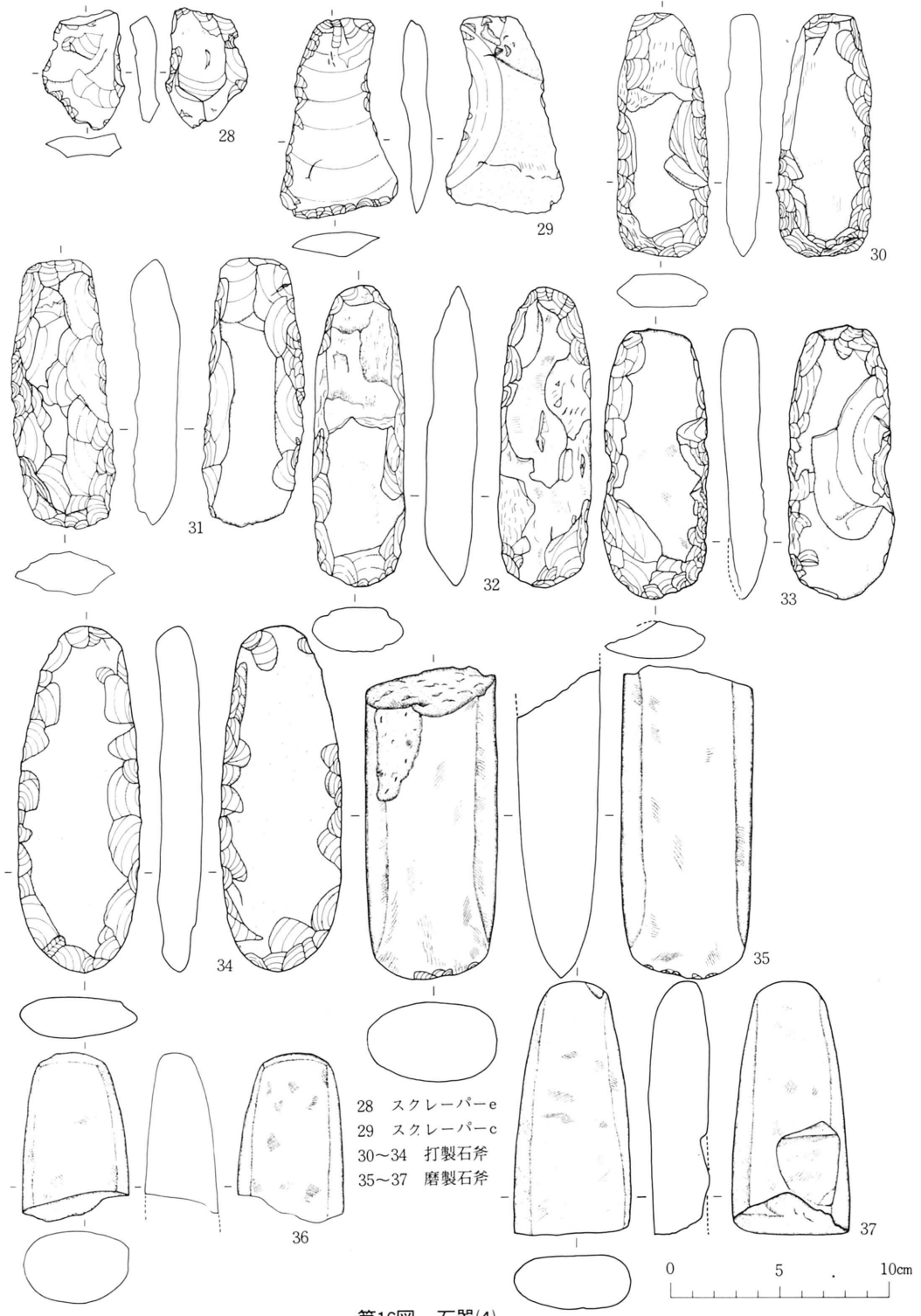


6～14石籠
15～17スクレーパー-a

第14図 石器(2)

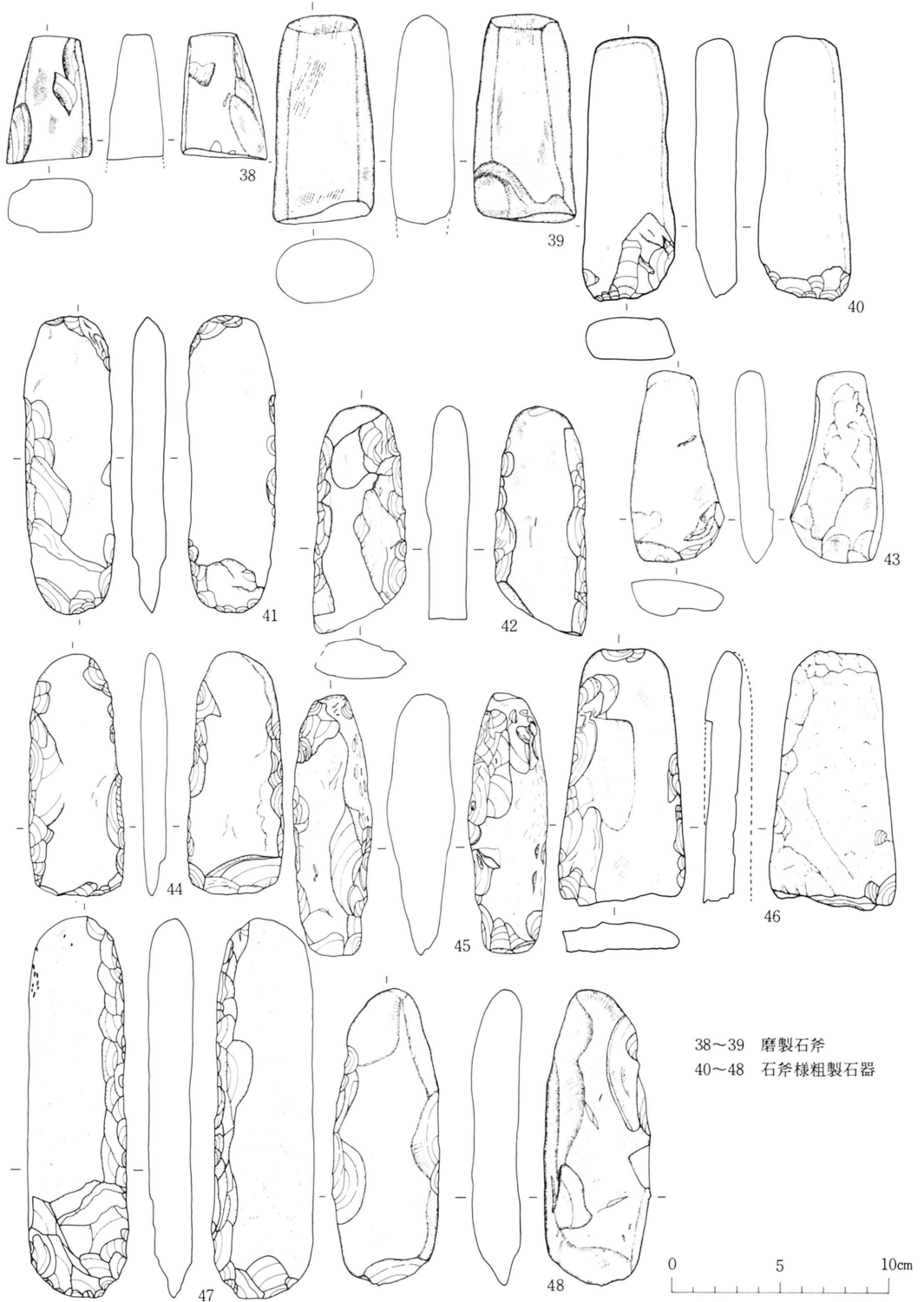


第15図 石器(3)



- 28 スクレーパー-e
- 29 スクレーパー-c
- 30~34 打製石斧
- 35~37 磨製石斧

第16図 石器(4)



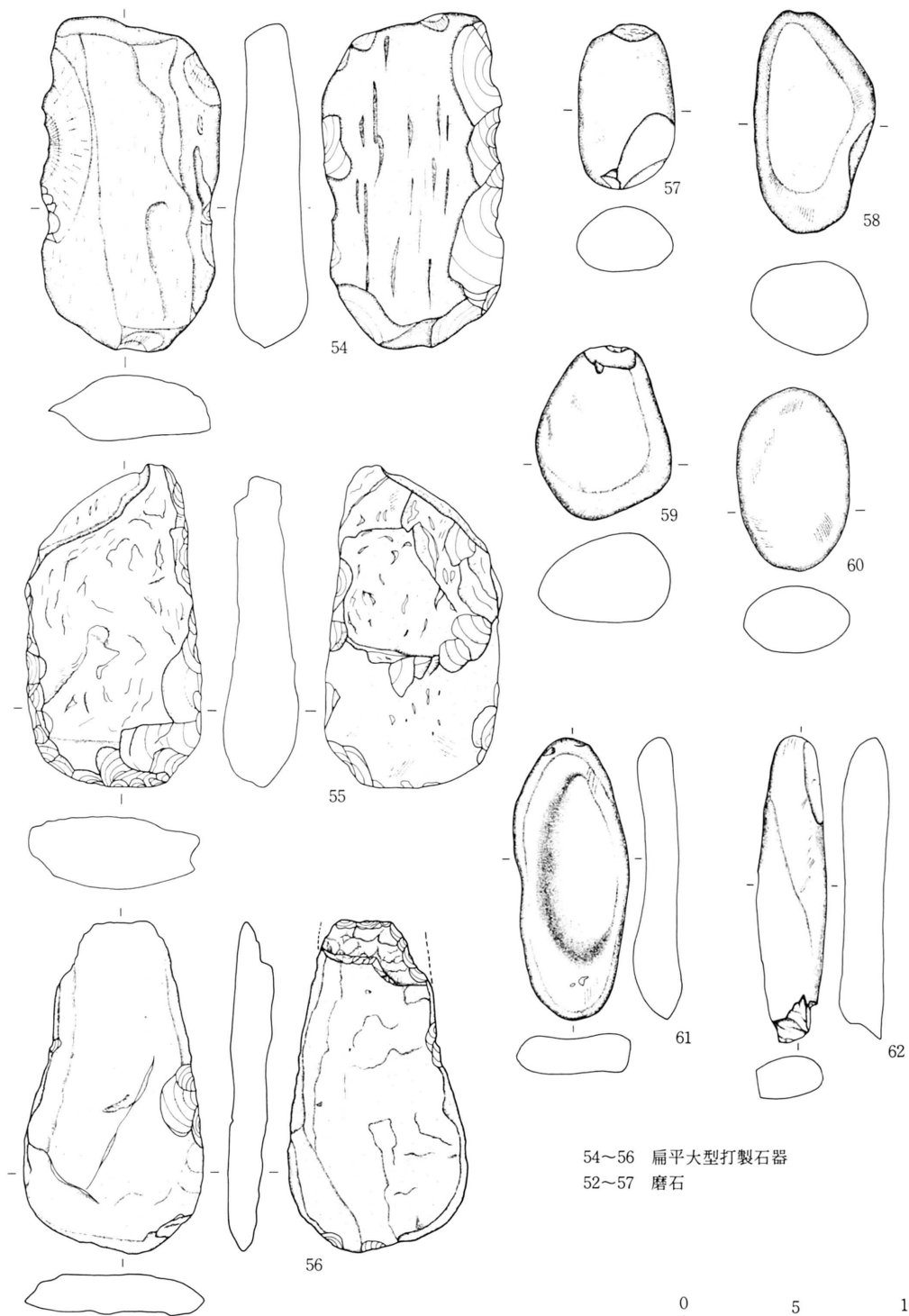
38~39 磨製石斧
40~48 石斧樣粗製石器

第17圖 石器(5)

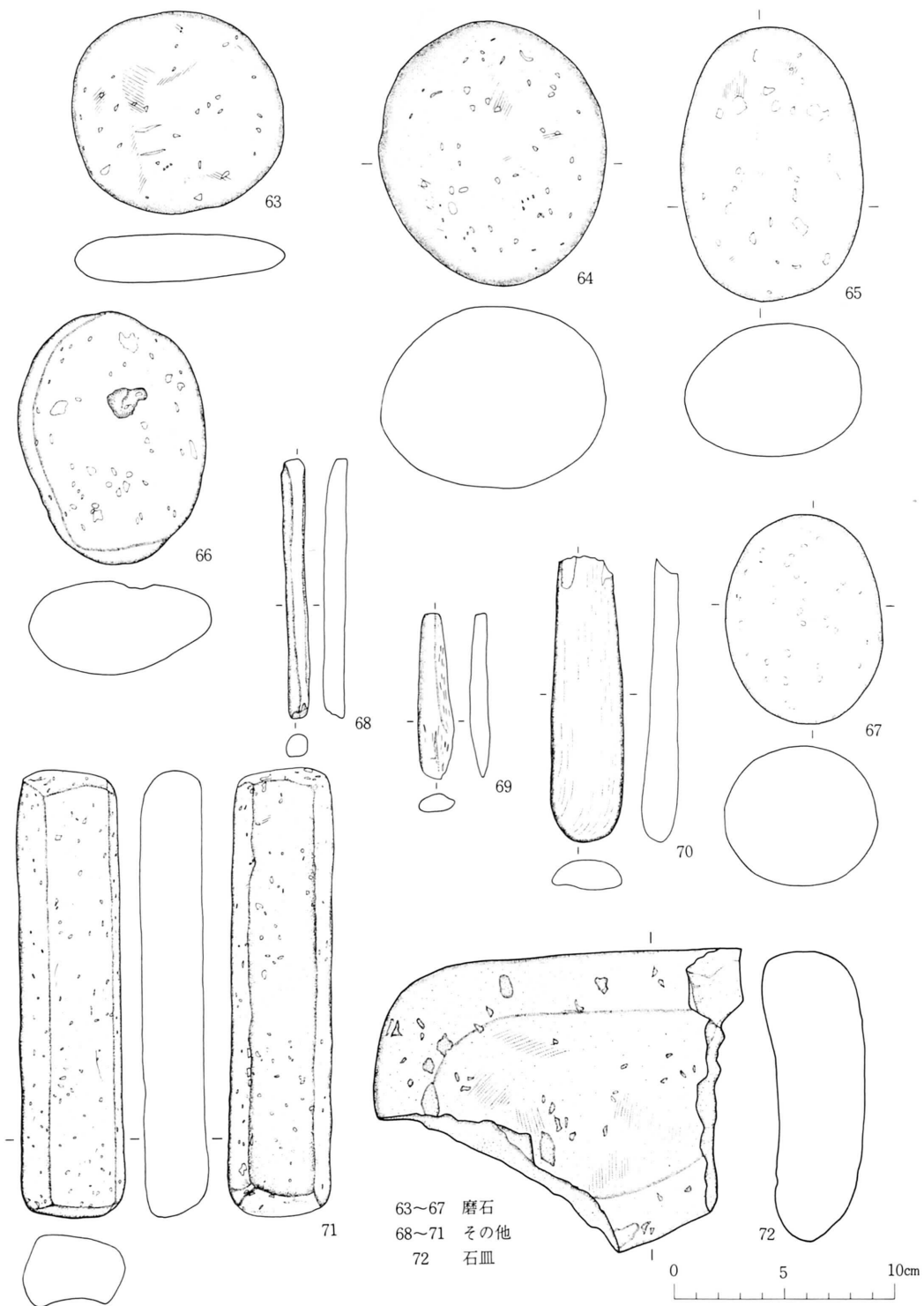


49~53 扁平大型打製石器

第18図 石器(6)



第19圖 石器(7)



63~67 磨石
68~71 その他
72 石皿

第20図 石器(8)

第7表 石器観察表

図面 番号	出土地点	登録 番号	分 類	最大長 (cm)			重量 (g)	材 質
				たて	よこ	厚さ		
1	Dst 56 1号住	1	石 鏃	3.7	2.5	0.9	6.7	流紋岩
2	Dst 56 2号住	2	" "	3.5	1.9	0.7	2.5	珪質泥岩
3	D d 15表	3	石 匙	5.0	6.0	0.7	25.7	泥質細粒凝灰岩
4	Dst 56 1号住	5	" "	3.9	6.7	0.9	10.2	珪質泥岩
5	" "	30	" "	3.8	4.2	1.4	21.8	珪質泥岩
6	" "	10	石 篋	2.0	1.0	0.8	5.3	珪質泥岩
7	Bab52黒色土中	9	" "	6.1	2.1	1.1	15.8	硬質泥岩
8	Eef 炉址	13	" "	7.0	2.8	1.5	27.8	硬質泥岩
9	Dst 56 1号住	12	" "	8.2	2.5	1.5	33.2	硬質泥岩
10	" "	14	" "	6.6	2.7	1.1	25.4	硬質泥岩
11	" "	8	" "	5.2	2.0	1.1	11.2	硬質泥岩
12	" "	23	" "	5.9	3.7	1.7	30.8	珪質泥岩
13	" "	11	" "	5.7	3.7	1.6	41.4	珪質泥岩
14	Dqr 56赤褐	21	" "	5.7	2.8	1.3	23.3	珪質泥岩
15	Bab56、59、62、黒	4	スクレーパー	3.9	5.5	0.9	17.8	泥質細粒凝灰岩
16	Ckl 56表下	6	" "	5.0	2.2	0.4	5.8	泥質細粒凝灰岩
17	Dst 56 1号住	7	" "	3.3	2.9	0.5	4.7	珪質泥岩
18	Dst 50ピット群	17	" "	5.7	3.9	1.4	23.9	珪質泥岩
19	" "	20	" "	5.9	3.5	1.3	24.8	泥質細粒凝灰岩
20	Dst 56 2号住	19	" "	7.8	5.0	1.6	40.5	珪質泥岩
21	" 1号住	18	" "	6.9	4.2	1.6	32.7	硬質泥岩
22	Eef 12表	27	" "	7.3	5.9	1.5	45.6	珪質泥岩
23	Dst 50ピット群	25	" "	6.8	2.5	1.7	17.1	クリン質凝灰岩
24	Dst 56 2号住	22	" "	4.1	2.2	1.3	9.2	鉄質石英
25	Dqr 12表下	24	" "	3.8	3.0	0.8	7.7	硬質泥岩
26	Dst 56 2号住	16	" "	1.5	3.1	0.9	10.3	泥質細粒凝灰岩
27	Dst 56 1号住	28	" "	5.4	4.9	1.0	15.1	珪質泥岩
28	Bab50黒色土中	29	" "	5.9	3.7	1.2	23.2	鉄質石英
29	Dst 3赤褐	26	" "	9.0	5.5	1.4	47.3	泥質細粒凝灰岩
30	Dst 2号住	54	打製石斧	11.1	4.2	1.7	126.3	千枚岩
31	C区麦採	49	" "	12.3	4.5	2.4	160.5	硬質泥岩
32	D b 50表下	53	" "	13.6	4.3	2.3	220.2	千枚岩
33	Eef 12表土	52	" "	12.2	4.8	2.0	170.1	硬質泥岩
34	Dst ピット群	37	" "	15.7	5.4	2.2	305.1	粘板岩ホルンフェルス
35	C d 06表下	42	磨製石斧	14.2	6.0	3.9	522.0	淡緑色中粒質凝灰岩
36	Bst 15表	39	" "	7.6	4.9	3.3	169.8	変朽安山岩
37	採	41	" "	11.7	5.4	2.8	292.4	粘板岩ホルンフェルス
38	Dst 56 1号住	44	" "	5.7	5.0	2.6	87.3	粘板岩ホルンフェルス
39	Dst 50ピット群	38	" "	9.8	4.7	3.2	235.0	粘板岩ホルンフェルス
40	Dst 56 1号住	43	石斧様粗製石器	11.9	4.2	1.9	193.8	凝灰質硬砂岩
41	" "	86	" "	13.7	4.1	1.6	140.5	凝灰質粘板岩
42	" "	46	" "	10.4	4.2	2.1	132.0	淡緑色中粒質凝灰岩
43	Dst 56 1号住	70	" "	8.8	4.3	1.6	84.6	粘板岩ホルンフェルス
44	Cij 3表下	55	" "	11.1	4.2	1.7	126.3	千枚岩
45	z z	47	" "	12.0	3.1	3.2	176.7	粘板岩ホルンフェルス
46	Dst 56 2号住	51	" "	11.9	5.8	1.7	166.4	絹雲母片岩
47	Cqr 59表(溝)	87	" "	17.6	4.7	2.2	294.4	粘板岩
48	C表採	45	" "	13.5	4.9	2.3	235.6	粘板岩ホルンフェルス
49	Bab50黒下	68	扁平大型打製石器	22.7	8.9	5.0	1,412.0	粘板岩ホルンフェルス
50	Dst 56 2号住	33	" "	14.6	7.8	3.4	585.0	硬質泥岩
51	C C 56表下	66	" "	17.5	6.3	4.2	720.1	粘板岩ホルン
52	Cqr 59表下(溝)	31	" "	13.4	7.4	2.5	322.7	粘板岩ホルンフェルス
53	Cブロック表採	34	" "	13.7	7.8	2.5	446.7	淡緑色凝灰岩
54	Cqr 62表	35	" "	14.9	8.0	3.4	520.5	粘板岩ホルンフェルス
55	c表採	32	" "	14.2	7.8	3.2	470.7	粘板岩ホルンフェルス
56	c表採	36	" "	14.8	7.9	1.7	279.1	淡緑色凝灰岩

図面 番号	出土地点	登録 番号	分類	最大長 (cm)			重量 (g)	材 質
				たて	よこ	厚さ		
57	不明	102	磨 石	7.3	4.3	2.9	133.4	細粒凝灰岩(珪化作用をうけた)
58	不明	101	〃	9.9	5.4	4.3	339.1	〃
59	不明	103	〃	7.7	6.0	3.9	242.5	〃
60	不明	92	〃	8.0	4.9	3.1	180.1	含凝灰質角礫質珪質泥岩
61	Bab 50黒色土中	65	〃	12.5	5.1	2.2	170.2	石質細粒凝灰岩
62	Cq 60~68	60	〃	13.5	3.0	2.2	126.4	含凝灰質角礫石質凝灰岩
63	Dst 56 1号住	95	〃	9.0	9.5	2.6	304.4	複輝石安山岩
64	Dst 50ピット群	105	〃	11.8	10.1	8.2	1,387.1	複輝石安山岩
65	〃	89	〃	12.4	8.2	6.1	984.0	〃
66	Dst 56 1号住	85	〃	11.2	8.3	4.3	589.9	複輝石安山岩
67	Dst 56ピット群	107	〃	9.4	7.1	6.4	581.0	複輝石安山岩
68	Dqr 56赤褐	58	そ の 他	11.7	1.1	1.1	21.7	粘板岩ホルンフェルス
69	Bd 3	57	〃	7.4	1.6	0.8	11.2	粘板岩
70	Dst 50ピット群	61	〃	12.9	3.3	1.6	9.4	凝灰質砂質粘板岩
71	〃	63	〃	20.4	4.7	3.3	533.0	流紋岩
72	不明	115	石 皿	16.7	13.6	4.9	1,411.5	複輝石安山岩

V 考察とまとめ

1 遺跡の性格

中荒巻遺跡を載せる扇状地形の金ヶ崎段丘上には、旧石器時代～奈良平安時代の遺跡が数多く確認されている。縄文時代中期前葉～中葉に属する遺跡群の中で、多くの遺物が出土し調査済になっているのは、夏油川下流域の梅ノ木遺跡と宿内川上流の高谷野原遺跡がある。北上川寄りの扇状地裾部では、本遺跡が最初である。前述の2遺跡と北上市樺山遺跡、鳩岡崎遺跡、衣川町の北館遺跡、等の遺構や遺物の比較から、北上以南の北上川中流域における縄文中期前葉～中葉の文化内容がかなり明らかにされ得る状況になってきた。その意味で本遺跡も重要な位置にある。調査区域内から検出された遺構は少ないが遺物の分布はほぼ全域に見られ、調査区外の周辺表土にも採集されていることから、遺跡の規模はかなり広範囲にわたると予想できる。今回の調査では住居跡の構造を明瞭に残すものではなく、又遺物の磨滅が激しく遺存状況は必ずしも良くない。遺跡の全体像は今後の調査を待つ他ないが、集落形成には好適な立地環境である。遺構と遺物から縄文中期前葉の中規模な集落遺跡とみなされ、継続調査が望まれる。

2 遺構

住居跡と確認されたものは3棟であるが、Dst 50ピット群及び炉跡部分に少なくとも1棟は存在し、Eef 炉跡にも1棟仮定できる。検出された3棟は遺存状態が悪く、壁が浅いことや主柱穴のほとんどは明瞭でないことなど、不十分さは否めない。遺物から見ると3棟とも第IV群土器(大木 8a~8b)が多く、ほぼ同時期と推定される。ただ調査区南半のDst 56住居跡には第I~II群土器(大木 6~7a)が比較的含まれており、その位置ないしは近辺にやや古い時期の住居跡の存在が考えられる。しかし調査時点では確認し得なかった。Dst 56 1号、2号住居跡の前後関係は切り合いや床面、遺物からの判別は困難である。

平面形はBC 3住居跡は長楕円形、Dst 56 1号、2号住居跡は円形、Dst 炉跡を囲むピット群

— 中荒巻遺跡 —

に想定される住居跡もDst 56住と同規模の円形プランと思われる。炉跡はDst 56住居跡のものをはじめ4基とも石囲い炉で規模、形態は相似するが、Dst 2号住居跡のそれはやや長方形、他はほぼ円形を呈する。いくつかの不定形ピットや焼土ブロックが検出されているが住居跡に伴うと明確に認められるものはない。石囲い炉を持ち円形や楕円形プランをとる住居跡は、縄文中期中葉の最も一般的な形態である。類例は西田遺跡^(注7)、堂ヶ沢遺跡^(注8)、繫Ⅲ遺跡^(注9)、野駄遺跡^(注10)、大地渡遺跡^(注11)、樺山遺跡、梅ノ木遺跡などに参見される。

埋設土器は1基である。掘り込みの中に土器を埋設したものと思われるが、土器の崩壊が著しく、周辺に関連する遺構もないことから、性格は全く不明である。尚胎土分析は行っていない。その他長径35～40cm大の川原石が、調査区の数カ所に検出されているが、使用痕跡不明瞭で判然としない。

3 遺物

〔縄文土器〕 本遺跡の第Ⅰ群、Ⅱ群土器はそれぞれ大木6式と大木7a式に比定している。両者の判別は器形でなく、主に竹管文による沈線施文と貼付文形態の相違によるものである。前期末大木6式～中期初頭大木7a式は、その境界をめぐって問題になっている部分である。本遺跡では層位的な把握はもちろん、出土量も多くないので確かなことは言えない。

本遺跡のⅠ群1類は、長根貝塚第1群2類～3類^(注12)、清水貝塚深鉢Ⅲa～Ⅲbの一部^(注13)、庄司合遺跡第Ⅱ群^(注14)、牧田貝塚6群などに類似し、器形、文様モチーフ、貼付文に共通性がある。第Ⅰ群2類は1片だけであるが前述の3遺跡には1類土器とほぼ同量の出土が同層位中であつたらしい。いずれも大木6式とされている。本遺跡のⅠ群土器で他の大木6式と言われるものとの相違点は、爪形の刺突文が見られないことと、十三坊台系土器が混じっていないことの2点である。

大木7a式については内容不明な部分が多いとされるが、口縁部の平行沈線、刺突文、鋸歯状文などをとらえて第Ⅱ群とした。Ⅰ群との違いは既述のように竹管の使用法に置いたので、モチーフ的には、Ⅰ群に近い。従って厳密な意味で時期的に分けて考えようとするものではない。Ⅱ群1類と2類は、長根貝塚3群、清水貝塚深鉢Ⅳ、天神ヶ丘3群1、2類^(注16)、大館Ⅲ群などに類似し大木7a式とみなされる。第Ⅱ群3類は五領ヶ台系土器と称される大木7a式併行のものである。

第Ⅲ群～Ⅳ群土器はそれぞれ大木7b～8b(中期前葉～中葉)に比定されるものであるが、この間の詳細な編年は、あいまいな点が多く、本遺跡の分類にも疑問が残るところである。従来から知られている各時期の特徴を筆者なりにとらえて分類基準とした。破片が大部分であり、器形については不明の部分が少なくない。

Ⅲ群1類と2類は撚糸圧痕文を用いてることで抽出した。大木7b式に撚糸圧痕文が多用される契機を円筒式土器に求める見方もあるが定かでない。又、しばしば大木7a式にも含めている

報告例があるので、断定はできないが一応大木7b式として一括した。Ⅲ群3類、4類は沈線文を用いているものである。4類は2類の隆起線に添う撚糸疋疋文が沈線文に置き換った技法である。

第Ⅳ群土器1類と3類は、隆起線の曲線文、区画文、渦巻文が表現され、又口縁上端に太い隆帯による渦巻状の突起など用いられることから、ほぼ大木8a式とみなされる。Ⅳ群2類はそれに伴出するものであろう。Ⅳ群4類は3類の平行隆起線の両側を沈線で縁どって調整している点で、3類のより新しいものと考えられるし、「棘」のついた剣先状渦巻文も使用される。多くの報告書ではこれを大木8b式の特徴としている。Ⅳ群6類のグループも、大木8b式に伴うものとされており、中でも図74の土器は最も新しいもので、むしろ大木9式に含めている著者も見うけられる。Ⅳ群5類の頸部や胴部をめぐる平行沈線の曲線文は大木8a式と8b式に共通して用いられているようである。

以上のことから大旨、Ⅳ群1、3類は大木8a式に、4類と6類は大木8b式に、そして2類と5類は両型式に伴うものととらえた。同型式内の土器組成は、BC3住居跡で、ある程度把握できそうである。ただ本遺跡の分類上では、大木8a～8bにいたる、ちょうど境目にあたる時期かと推定される。器形は口縁内湾のキャリパー形深鉢、直上ぎみで胴部にやや張りを持つ深鉢、口縁やや内湾ぎみの浅鉢の組み合わせで、口縁外反し胴部に張りを持つ深鉢は認められなかった。施文はⅣ群各類に見られるものであるが、Ⅳ群6類に分類されたものは含まれていない。いずれ復元個体が少なく良好な資料とは言えないであろう。

〔石器〕 石鏃や石匙が比較的少なく、石筥やスクレーパー、その他の打製石器が多いことが特徴的である。縄文中期には打製石斧や石筥の増加が認められるという傾向と符合している。使用痕跡を明瞭に見わけることができなかつたため、各石器の機能については類推に留まる。とくに石斧様粗製石器と名付けたグループ及び従来から石鏃と呼ばれるものに類似する扁平大型打製石器には、石器として疑しいものも含まれている。「その他」に分類した磨製の石器も同様である。使用石材は鋭利さを持つ類には珪質泥岩、硬質泥岩（奥羽山地）、磨製石斧、磨石、大型の各種石器は粘板岩ホルンフェルス、複輝石安山岩、細粒凝灰岩（奥羽山地）など傾向性がある。数は少ないが北上山地産の千牧石、粘板岩、硬砂岩も見られる。

4 結び

報告書記述の上で、検出遺構の断面と堆積土について若干不備な点があった。尚調査区北西部分の水田地域は調査しなかつたので、遺跡全体の遺構は記述された以外にもいくつか存在した可能性はある。現在は自動車道となっているが幸い調査区の東と西の周辺地域は、まだ調査できる地形を残しており、今後の調査でさらに遺跡の規模、性格が明らかにされるであろう。

（注1）旧石器時代のものは、成沢遺跡

— 中荒巻遺跡 —

- (注2) 梅ノ木遺跡 東北縦貫道関連遺跡発掘調査報告IX、岩手県教育委員会文化課
- (注3) 高谷野原遺跡 報告書1973年3月刊金ヶ崎町教育委員会
- (注4) 樺山遺跡 報告書は「北上市史第1巻」
- (注5) 鳩岡崎遺跡 48～50年発掘実施 報告書は57年度発行予定 岩手県教育委員会文化課
- (注6) 北館遺跡 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書V 昭和55年3月 岩手県教育委員会文化課
- (注7) 西田遺跡 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VI 昭和55年3月 岩手県教育委員会文化課
- (注8) 堂ヶ沢遺跡 御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター 昭和55年2月
- (注9) 繫Ⅲ遺跡 御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター 昭和55年2月
- (注10) 野駄遺跡 東北縦貫道関連遺跡発掘調査報告書第11集 岩手県埋文センター 昭和55年2月
- (注11) 大地渡遺跡 東北縦貫道関連遺跡発掘調査報告書VII 岩手県教育委員会文化課
- (注12) 長根貝塚 宮城県遠田郡湧谷町 県教育委員会 昭和44年
- (注13) 清水貝塚 大船渡市清水貝塚発掘調査概報 昭和51年3月 県文化財愛護協会
- (注14) 庄司合遺跡(第二次調査) 一関市 報告書52年3月 一関市教育委員会
- (注15) 牧田貝塚 陸前高田市 報告書46年3月 陸前高田市教育委員会
- (注16) 天神ヶ丘遺跡 稗貫郡大迫町 報告書49年3月 大迫町教育委員会
- (注17) 大館町遺跡 盛岡市 報告書53年3月 岩手大学考古学研究会

かみ もち だ
上 餅 田 遺 跡

遺 跡 名：上餅田(略号 KMD75)

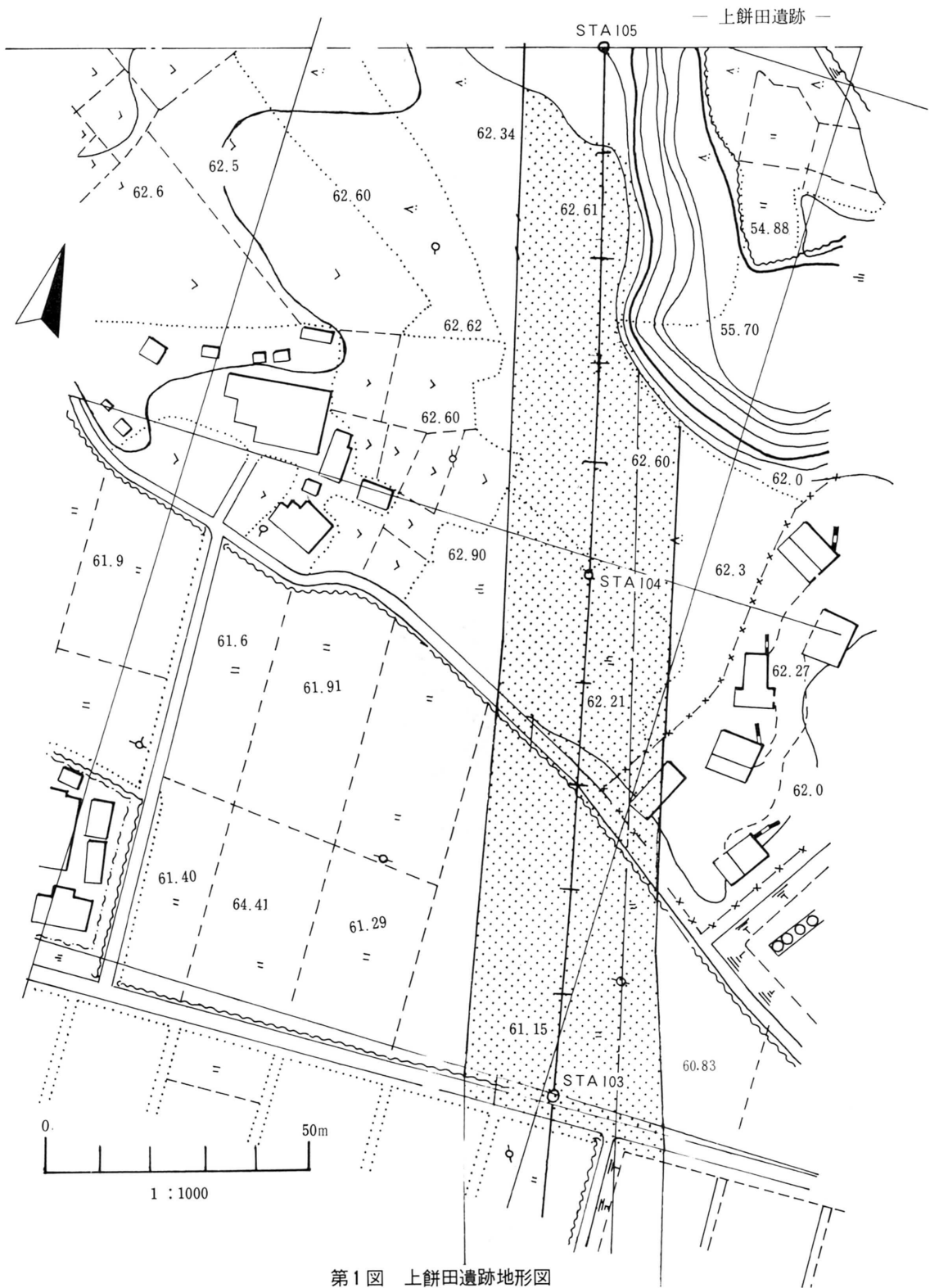
所 在 地：胆沢郡金ヶ崎町字南野中

調 査 期 間：昭和49年5月18日～6月19日

昭和50年6月9日～9月30日

調査対象面積：5,600㎡

発掘調査面積：5,600㎡



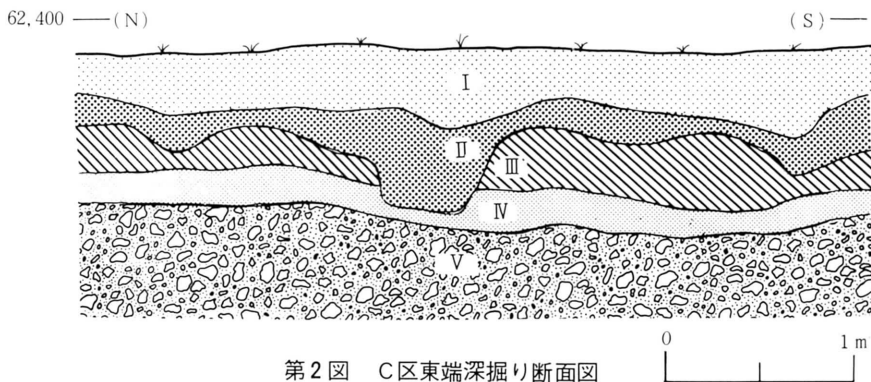
第1図 上餅田遺跡地形図

I 遺跡の位置と立地

本遺跡は金ヶ崎町字南野中、国鉄東北線金ヶ崎駅の北西0.7 kmのところに位置する。遺跡は、胆沢川の左岸、夏油川によって形成された六原扇状地の金ヶ崎段丘上にあり、遺跡の北側を東流する宿内川の侵食によって形成された段丘崖に沿って東西にのびる平坦地にある。標高は62 m前後であり、南側は一段低い水田となっている。比高は約1 mである。現況は一部畑地の他は杉、雑木の多い林野である。(第1図) なお、遺跡が広がっているとみられる西方は、水田、宅地、東方は宅地となっている。当遺跡の北には低地をはさんで中荒巻遺跡、南には西根、鳥海A、B遺跡等東北自動車道関連の遺跡があり、その他、西根遺跡(西根縦街道古墳群、原添下の住居跡等)胆沢川をはさんで、玉貫、膳性遺跡等がある。

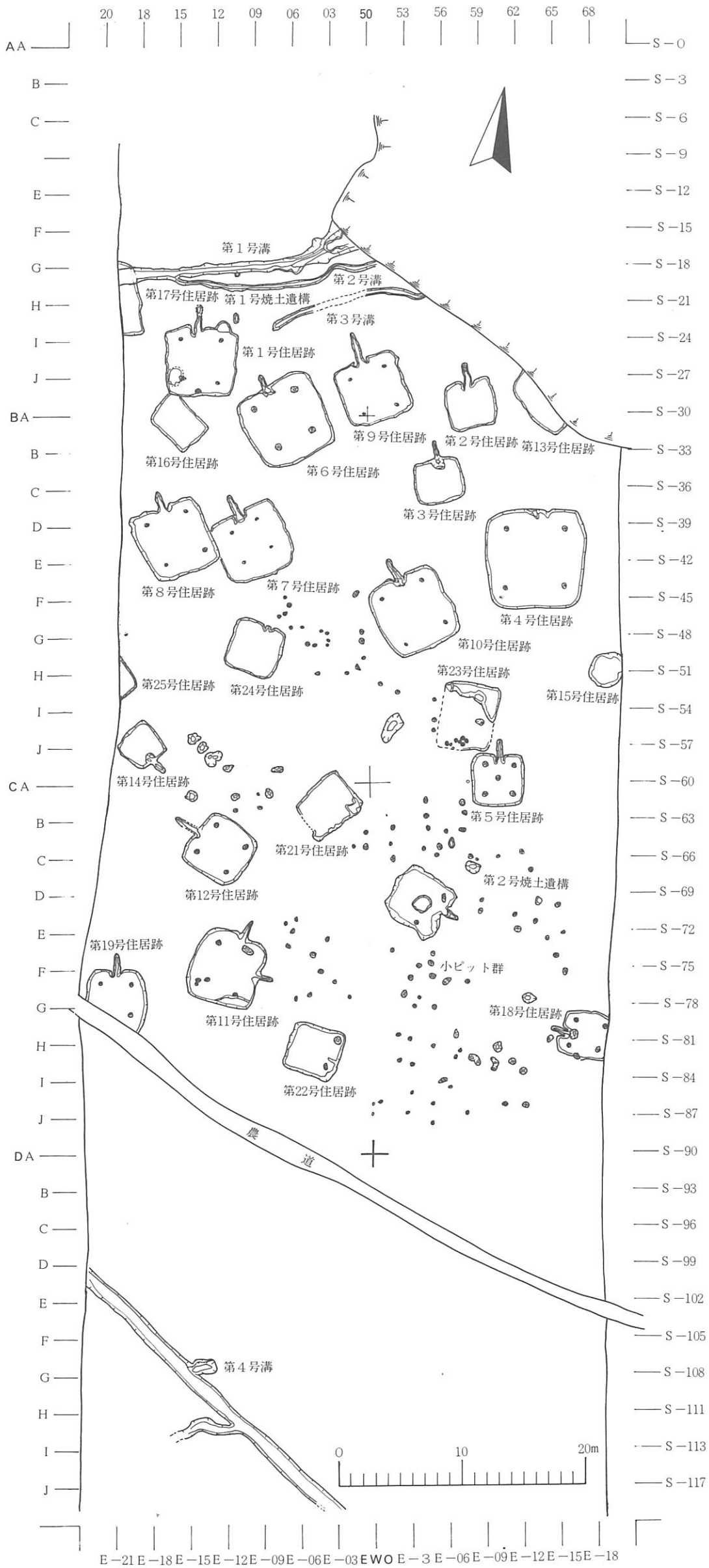
II 遺跡の基本層序(第2図)

場所によって部分的な違いはあるものゝ、遺跡の基本的な層序は次の通りである。



第2図 C区東端深掘り断面図

- 第I層 黒褐色(10 Y R $\frac{3}{4}$) 表土である。腐植質土で木根、草根等が網目のように入りこんでいる。層の厚さは30~40cmで攪乱が著しい。土師器、須恵器、縄文土器等の破片が出土している。
- 第II層 暗褐色(10 Y R $\frac{3}{8}$) 粘土の少ないシルト層である。草木根がわずかに入りこんでいる。土師器、須恵器、縄文土器等の破片が多く出土している。層の厚さは10~30 cmである。
- 第III層 明黄褐色(10 Y R $\frac{7}{6}$) 堅くしまり、粘性の少ないシルト層で、下方になるにつれ小礫が多くなる。層の厚さは10~30cmである。なお、この層が遺構検出面である。
- 第IV層 明黄褐色(10 Y R $\frac{7}{6}$) III層の漸移層でシルトと小礫(径3 cm前後)の混じった礫層である。この層は遺跡の中央C区附近では最も高い位置にあり、南、北にそれぞれ緩い傾斜をもって続いている。



第3図 上餅田遺跡遺構配置図

第V層 黄橙色(10 Y R 7/8) 約3～6 cmの礫と砂とが混じった礫層である。下位になるにつれて礫が大きくなっている。

Ⅲ 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡25棟、溝4本、焼土遺構2基、小ピット群等である。遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、紡錘車、砥石、石器等がある。ここでは、これらの発見された遺構とその出土遺物について述べていく。なお出土遺物は、実測可能なものについては、可能なかぎり図示したが、甕については、下半部のみのは割愛し、破片については、遺構ごと出土層別に破片集計表にまとめた。なお、堆積土の出土遺物については、消極的ではあるが、遺構の年代推定の資料になり得るものや遺構の性格等を考える上で参考になるものとして遺構ごとに図示記載した。なお、本遺跡の調査内容に関しては、若干の紹介が行われている(上餅田遺跡現地説明会資料 1975 岩手県教委)が、本報告書の記載内容がそれらに優先するものである。

1 竪穴住居跡とその出土遺物

第1号住居跡(A H 18)(第4図)

〔遺構の確認〕 調査区北西端近くの地山面で確認したものである。

〔重複〕 第16号住居跡を切って構築されている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形を基調とした隅丸方形で、規模は長軸(東西)約5.75 m、短軸(南北)約5.70 mである。床面積は約37.7㎡である。

〔堆積土〕 4層に大別することができる。1層は暗褐色の腐植質土で住居内のほぼ全域に広がり、中央附近では床面まで及ぶ。2層は炭化物を含む暗褐色シルト層、3層は黒褐色シルト層で、いずれも壁沿いに見られる。4層の黒褐色腐植質層は主に木根の攪乱部分にみられるものである。

〔壁〕 地山を壁としているが全体として削平をうけ残りは良くない。南壁は比較的しっかりしており比較的鋭い立ち上がりを呈するが、他の壁面は皿状に近い緩い立ち上がりである。残存壁高は南壁17 cm、次いで東、北壁13 cm、西壁は9 cmである。第16住居跡を切っている南西隅は黄褐色シルトで埋め戻して壁を構築している。

〔床〕 地山をそのまま床としており固くしっかりしている。全体として南から北へ緩かに傾斜しているがほぼ平坦である。但し、カマド前、南西隅には広く木根による攪乱が床面下まで及んで床面がこわされている。

〔柱穴〕 住居内に認められたピットはP₁～P₄の4個であり、これらは対角線上に位置するものである。深さ、形状等からみて柱痕は認められないが柱穴とみられるものである。堆積土

は、炭化物を微量含む暗褐色シルト1層のみである。

〔カマド〕 北壁中央にとりつけられている。本体は天井部がすでになく両側壁も削平をうけ残りがよくない。両側壁はシルト及び白色粘土でもって構築されており先端部のおさえや芯材として土師器の甕や石等が使用されている。燃焼部はやや八字に開き床面には約40cm×50cmの範囲に焼け面が認められ、中央部からは坏が正立の状態出土した。燃焼部内には側壁の崩れたとみられるシルトや焼土、炭化物の堆積がみられた。燃焼部から煙道部へは奥壁際で約10cmの段差をもち、幅35cm、長さ165cmの地山をくりぬいたトンネル状の煙道が緩かな下り傾斜をもって続いている。煙出部には特に掘り込みはみられない。長軸方向はN-10°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料は、床面及びカマド内出土の土師器の他、紡錘車、砥石、側壁等に使用した土師器等がある。

土師器 完形品、復元可能なものを含め実測可能なものは坏6点、高坏（脚部）2点、甕7点、甑1点等がある。いずれも製作の際ロクロ未使用のものである。

坏（第5図1～6） 底部形態が丸底のもの（1～3）と平底風のもの（4～6）がある。前者は外面体下部に段が巡るもの（1、3）と、稜の巡るもの（2）とがある。（1）は体部外面下半に段が巡りそれと対応する内面に稜（くびれ）がみられる。段から上はやや内湾気味に外傾し、段から下は丸味をもち底部へとつづいている。調整は段から上はヘラミガキ、下はヘラケズリの後ヘラミガキがなされている。内面はヘラミガキされ黒色処理されている。（3）は底部が欠損しているので正確な器形は不明だが体部下半に軽い段が巡り、段から上は内湾気味に外傾している。口縁部はヨコナデ、段から下はヘラミガキがなされている。（2）は体部外面に稜を有し、それと対応する内面にも稜がみられる。口縁部は内湾気味に外傾しており稜から下は緩い丸味をもちながら底部へと続いている。調整は磨滅している部分が多いが内外ともにヘラミガキがほどこされている。後者は、いずれも沈線或は稜が巡るものである。器形は体部から口縁部までわずかに丸味をもって外傾するが（5）はやや直線的である。調整は（4）が内外ともにヘラミガキ内面は黒色処理がなされている。他は磨滅のため調整技法は不明である。

高坏（第5図7、8） いずれも脚部の一部で内外ともにヘラミガキの技法がみられ、坏部内面は黒色処理がなされている。

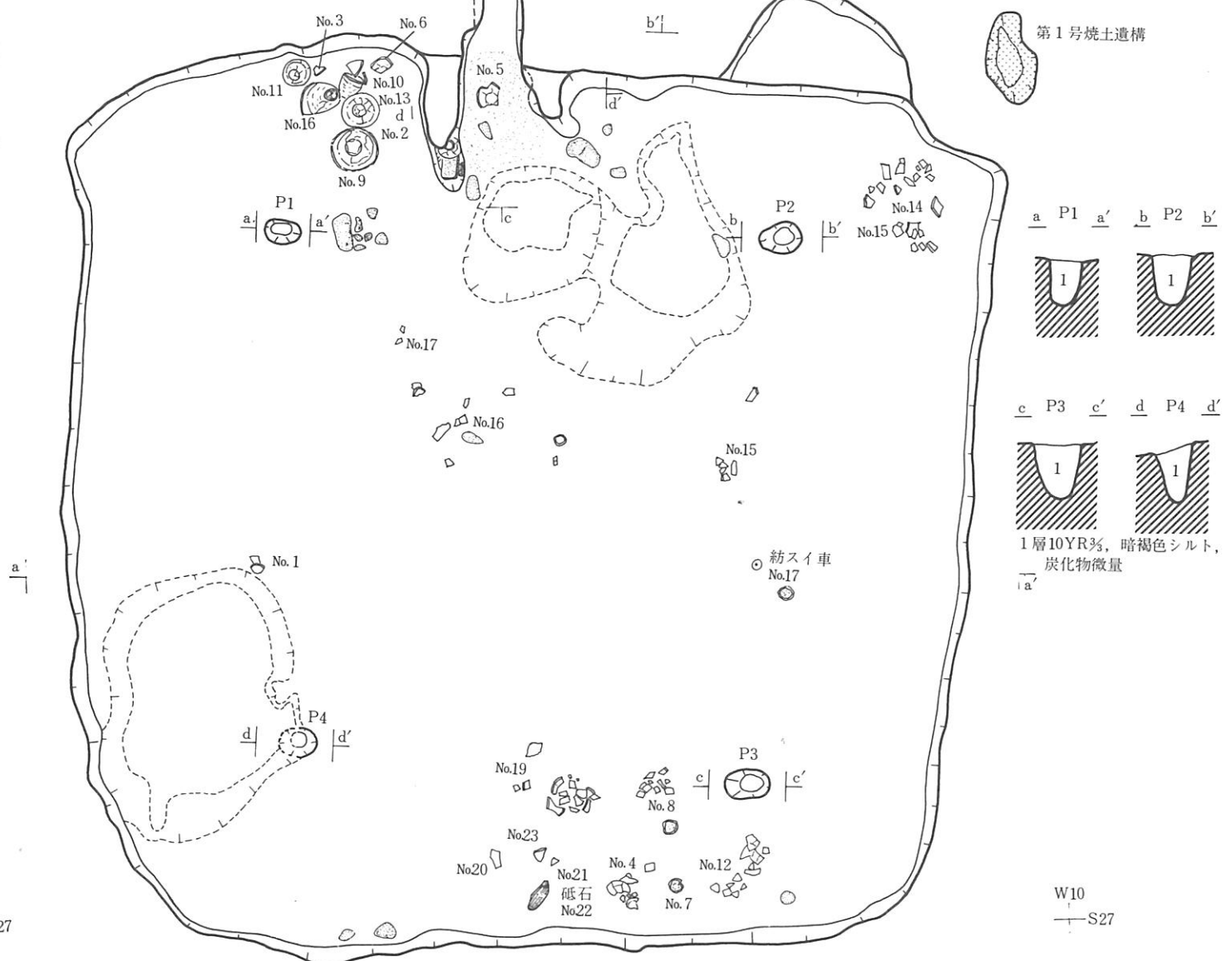
甕 第5図（9～15） 最大径が口縁部にあり器高が口径より大きいもの（9～12）、同じく器高が口径より小さいもの（13）、最大径が体部にあり器高が体部径より大きいもの（14、15）がある。

（9～12）は、いずれも頸部に段が巡り、口縁部と体部が区別されており、口縁部が軽く或いは強く外反する長胴のもの（9～11）と底部が欠損しており、正確な器形は不明であるが体

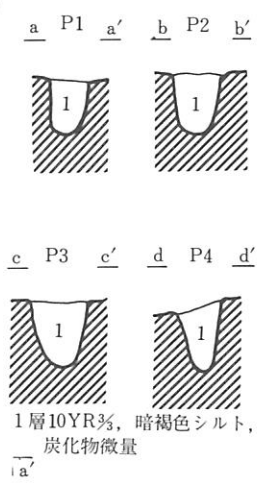
W17
+ S21



W10
+ S21

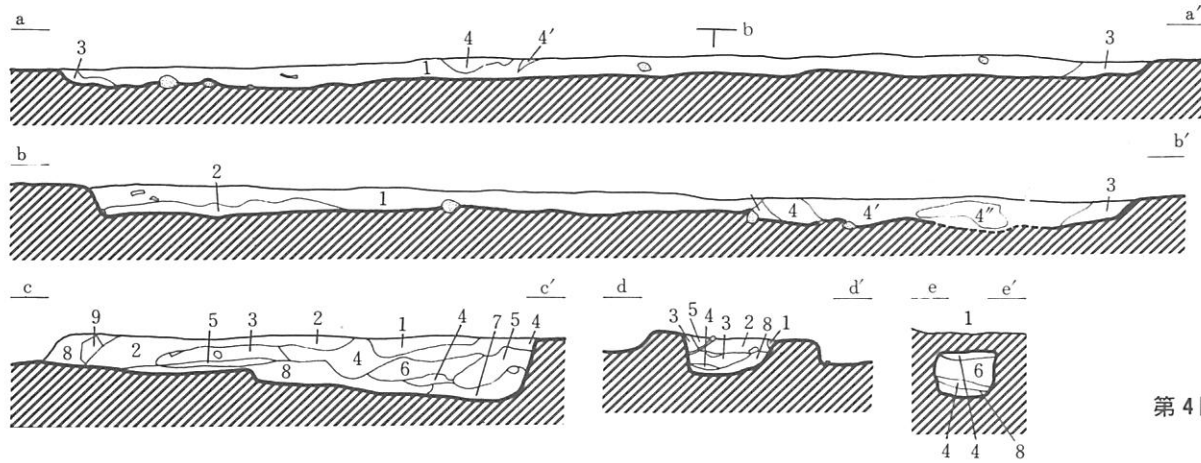


第1号焼土遺構



W17
+ S27

W10
+ S27



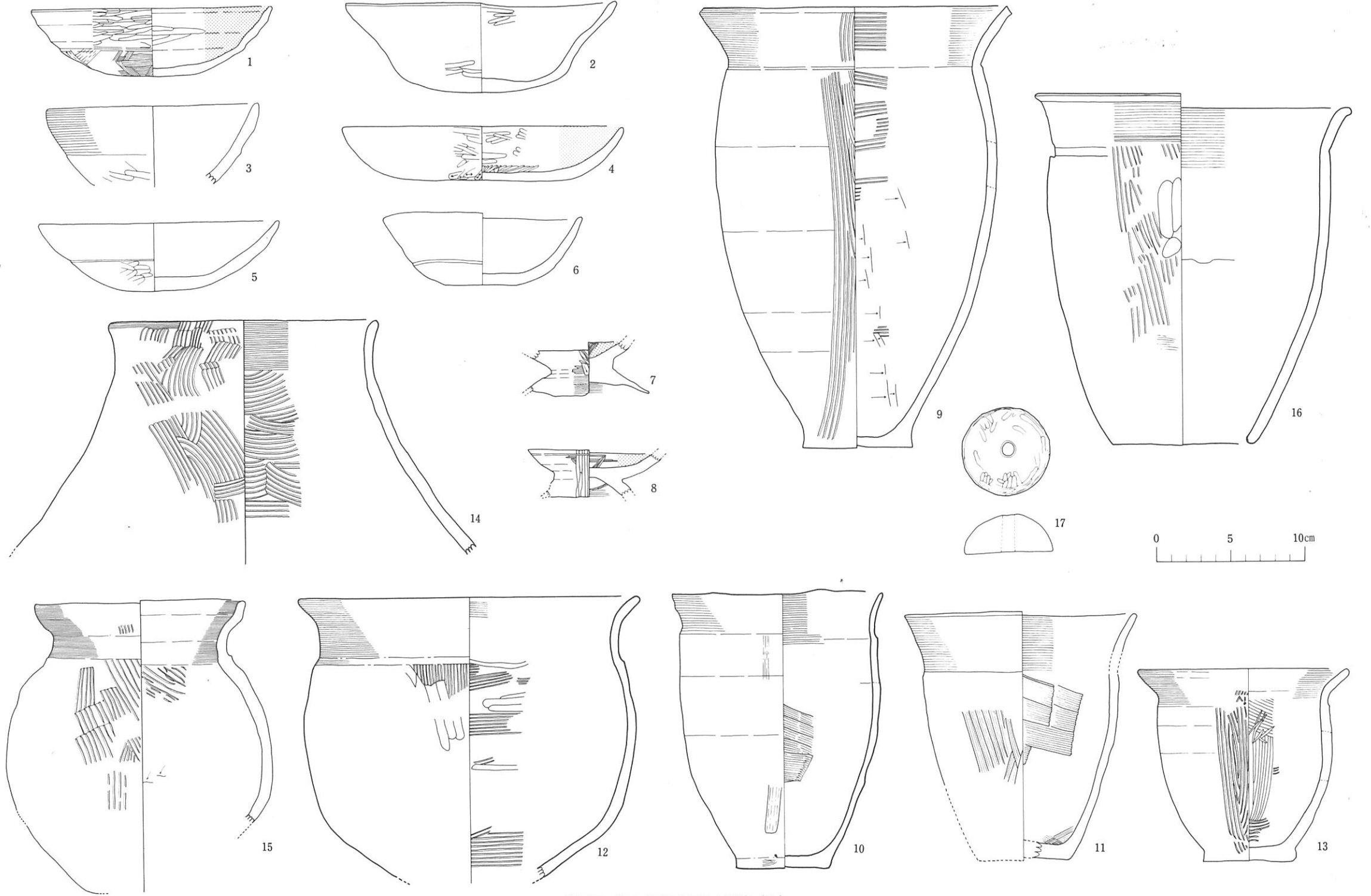
第4図 第1号住居跡

堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR3/3 暗褐色	腐植土	粘性やなし, 小礫を少量含む
2	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を含む
3	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	わずかに地山のシルトが混じる
4	7.5YR3/1 黒褐色	腐植土	しまり悪く粘性もなし, ボサボサしている
4'	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	地山のシルトを含む, しまりなし
4''	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	黄色, 白色のシルトを含む

カマド, 煙道部, 堆積土

層	土色	土性	備考
1	10 YR5/6 黄褐色	シルト	粘性なし, 地山の上と同じ, 小礫をわずかに含む
2	7.5YR3/3 暗褐色	シルト腐植土	焼土, 炭化物をわずかに含む
3	2.5YR6/4 近い黄色	シルト	カマドの袖部のものと同じ
4	10 YR4/4 褐色		地山の汚れたもの (粗い) サラサラしている
5	2.5YR2/3 極暗赤褐色		炭化物, 焼土, ススで汚れている
6	10 YR4/4 褐色	シルト	地山の汚れたもの, 4層より焼土スス多い
7	10 YR4/4 褐色	シルト	地山の汚れが強く (4層より)
8	2.5YR3/4 極暗赤褐色		地山の焼けたもの
9	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	2層と類似, 攪乱著しい

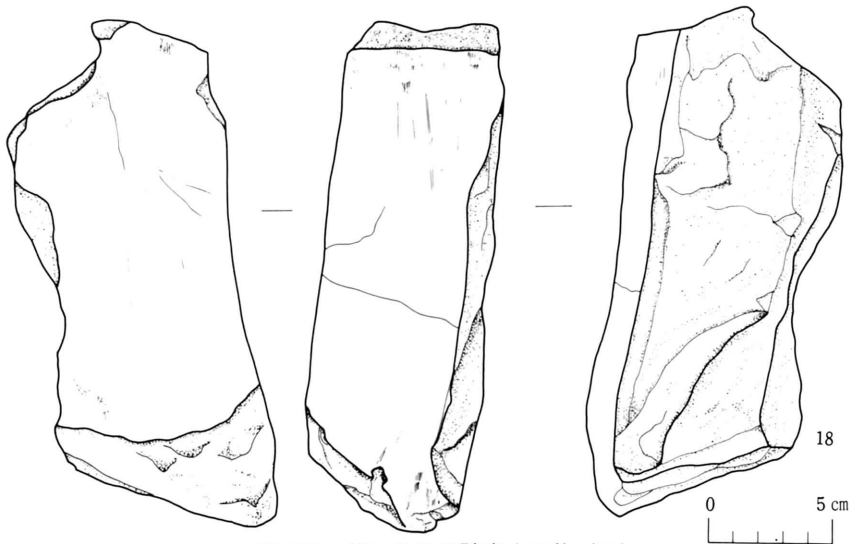


第5図 第1号住居跡出土遺物(1)

部中半がふくらみをもち口縁径とほぼ同径の球胴に近いものと推定されるもの(12)がある。器面調整は口縁部の内外面が、いずれもヨコナデなのに対して(9)は、体部内外面刷毛目、(10)は、外面下半に軽いケズリ内面はヘラナデ、(11)は、外面刷毛目、内面ヘラナデ、(12)は、内外面刷毛目後一部に軽いケズリがみられる。

(13)は、口縁が外反し頸部に軽い段が巡り口縁部と体部を区画している小形の甕である。器面調整は、口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面は刷毛目後一部に軽いミガキがみられる。

(14、15)は頸部に段が巡り、口縁部はわずかに直立後内湾気味に立ち上っているもの(15)と口縁部が外傾して体部との区別のないもの(14)とがある。(14)は、体部下半が欠損しているため正確な器形は不明であるが下ぶくれの球胴と推定されるものである。器面調整は(15)は口縁部の内外面ともヨコナデ、体部内外面ともに刷毛目である。又(16)は、外面は、口唇部にわずかにヨコナデがみられる他は粗い刷毛目、内面の、口縁部のヨコナデ、体部は刷



第6図 第1号住居跡出土遺物(2)
(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	4.6	16.2			A I a1
2	床面	土師器(坏)	ヘラケズリ	ヘラミガキ		6.5	18.2			A I b2
3	床面	土師器(坏)	ヨコナデ・ヘラミガキ			(5.3)	14.2			A I a2
4	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		3.6	18.9			A II b2
5	カマド	土師器(坏)				4.5	16.0			A II a2
6	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ		4.9	13.4			A II a2
7	床面	土師器(高坏)	ナデ・ヘラミガキ	黒色処理	(有蓋)					A
8	床面	土師器(高坏)	ヘラミガキ	黒色処理	(有蓋)					A
9	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ		29.5	20.3	7.3		A I a1
10	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ		18.6	14.3	6.4		A I a1
11	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		16.6	15.6	(6.1)		A I a1
12	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・ヘラナデ		18.6	23.0			A I a2a
13	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉底	13.0	13.9	6.5		A II a1a
14	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(15.7)	18.2			A II b2
15	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(19.5)	14.2			A II b2
16	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		23.6	21.3	9.7		
17	床面	粘薬車	ミガキ	ヨコナデ・刷毛目		2.5		5.9		
18	床面	磁石								

毛目である。(15)は器種としては壺形土器の中に分類した方がよいのかもしれない。

甑 (第5図16) 頸部に段が巡り口縁部と体部を区画しており、口縁が外傾している無底のものである。器面調整は口縁部の内外面ともにヨコナデ、体部外面は刷毛目後一部にミガキがみられる。内面は摩滅のため不明である。

紡錘車 (第5図17) 断面が半円形を呈する土製のものである。(直径5.9cm、高さ2.5cm)表面はヘラミガキが施されている。

砥石 (第6図) 3面が孤状に使用されているもので最大長約20.2cm、最大幅約8.5cm、高さ約5cmである。石材は淡緑色凝灰岩である。

第2号住居跡 (A J 56) (第7図)

〔遺構の確認〕 A調査区の北東、第9号住居跡の東約3m、第18号住居跡との間の地山面で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形である。規模は長軸(東西)約4.1m、短軸(南北)約3.9mである。床面積は約16.0㎡である。

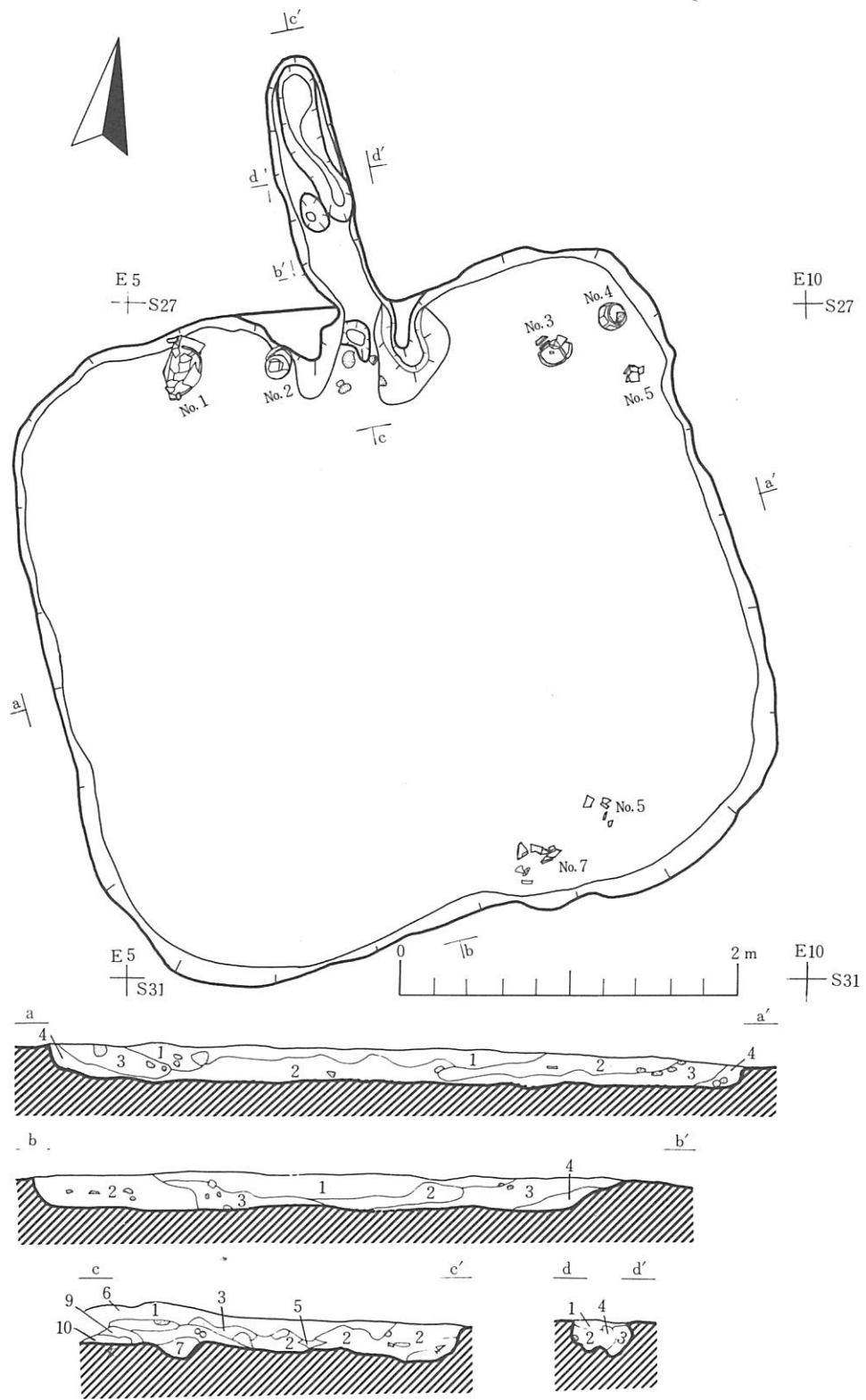
〔堆積土〕 4層に大別することができる。1層は黒褐色の腐植質土で主に住居の中央部分に堆積しており、床面までは達していない。2層は暗褐色のシルト混じりの腐植質土で1層の外側に主に堆積し、中央付近では、1層の下にあり床面上にも堆積している。3層は暗褐色のシルトで2層の外側、壁際に近い方に堆積している。第4層はにぶい褐色のシルトで主に地山の崩れたものとみられ壁際に堆積し、カマド近くでは焼土、炭化物を含んでいる。

〔壁〕 地山を壁としており、最も残存状況の良好な南壁で約22cm、他は17~18cmである。壁の立ち上がりは比較的急である。

〔床〕 地山をそのまま床としており固いが、床面には小礫が突出しており、凹凸が激しい。全体として北から南にわずかに傾斜している。

〔柱穴〕 住居内にピットは認められない。

〔カマド〕 北壁中央にとりつけられている。燃焼部と煙道部よりなる。本体は天井部が崩落して既がない。西側壁は黄褐色シルトでもって構築されており、左側壁には芯材として土器器のカメの下半底部が入れてあった。燃焼部は平坦であり、住居外に当たるところより緩い傾斜でそのまま煙道部へと移行している。両側壁及び底面は熱をうけ赤変し固くなっている。又、中央部には支脚石とみられるやはり熱のため赤変した丸い川原石があった。燃焼部内の底面に小ピットがあるが支脚石と関連あるものかどうかは不明である。煙道部は長さ約160cm、幅約40cmで、特に煙出しのためのピットはみられない。煙道部の底面は木根により一部こわされている。長軸方向はN-18°-Wであるが、これに対して燃焼部はやや西寄りにずれている。



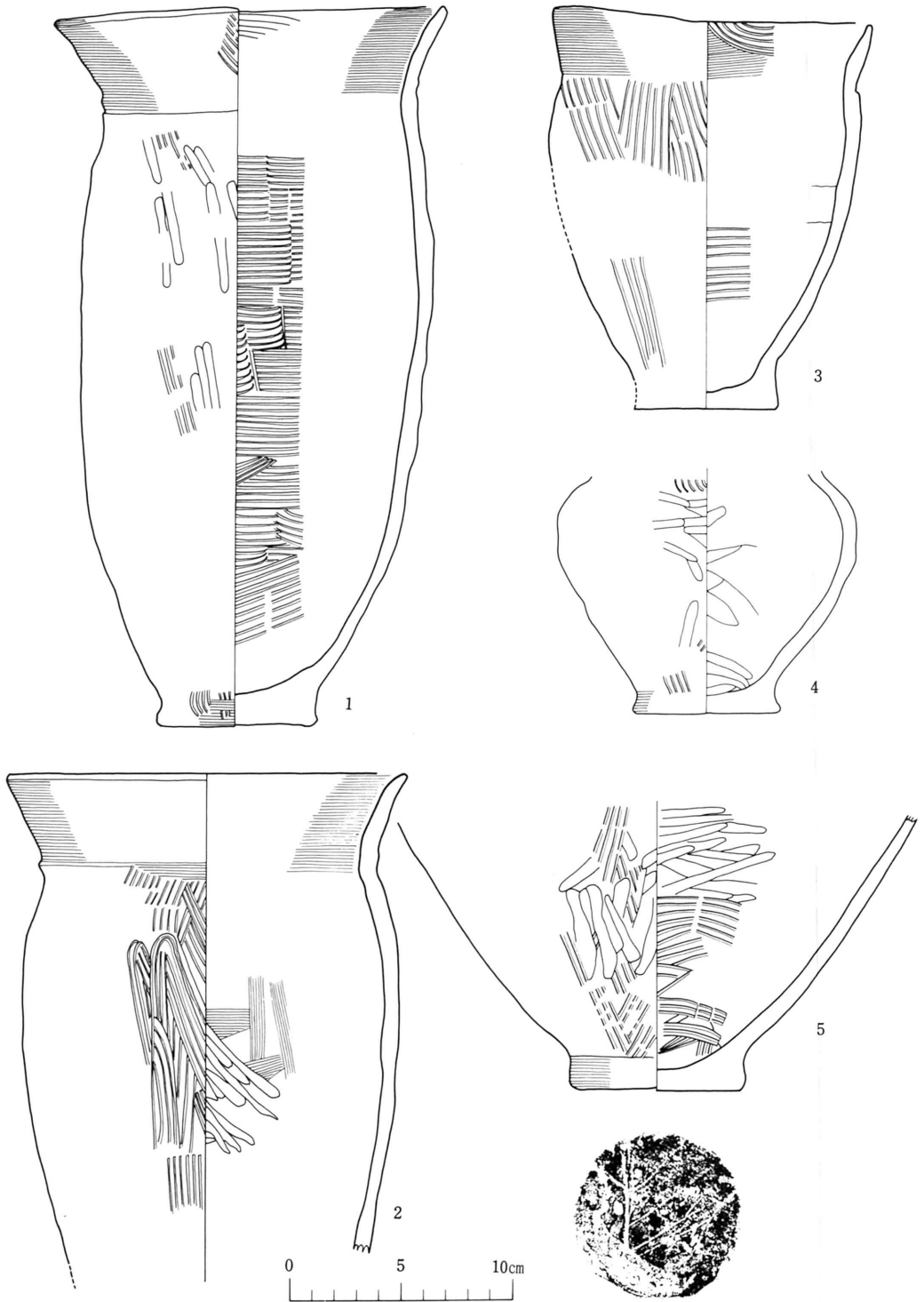
堆積土

層	土色	土性	備考
1	5YR2/2 黒褐色	腐植質土	木根なし
2	5YR3/3 暗褐色	腐植質土	シルト混じる
3	5YR2/3 暗褐色	シルト	小礫含む
4	5YR4/4 にぶい褐色	シルト	焼土混じる

カマド堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR3/2 極暗褐色	シルト	炭化物微量
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	
3	5YR3/3 暗褐色	シルト	焼土混じる
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	
5	5YR4/4 にぶい赤褐色	シルト	焼土
6	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	焼土含む
7	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	
8	7.5YR7/3 にぶい橙色	シルト	焼土, 灰
9	2.5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土, 炭化物
10	2.5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土, 灰を含む

第7図 第2号住居跡



第8図 第2号住居跡出土遺物

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料は床面出土の土師器がある。

土師器 完形品、復元可能なものを含め実測したものは、大小の甕5点である。

甕（第8図1～5） 最大径が口縁にあるもの（1～3）と、最大径が体部にあるもの（4、5）とがある。前者はいずれも肩部に段を有し、口縁部が外反或いは外傾するもので、特に(1)は口径に対して器高が特別に高い胴長の甕である。器面調整は、口縁部内外面は一部刷毛目を残しているところもあるがヨコナデである。体部外面は刷毛目のもの（2、3）一部ヘラミガキをしているもの(1)があり、内面についても（1、3）は刷毛目、(2)はミガキ、ナデが施されている。

次に、後者は体部上半から口縁部にかけて欠損しているため、正確な器形は不明であるがいずれも球胴とみられるものであり体部内外面にヘラミガキが施されているものである。(5)は木葉底でモミ痕がみられる。これらはいずれもロクロ未使用の土師器である。

（出土遺物観察表）

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・刷毛目		32.5	17.5		7.5	A1a11
2	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目 ヘラミガキ		(21.2)	17.5			A1a11
3	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	ナデツケ	18.0	14.5		6.5	A1a11
4	床面	土師器(甕)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	木葉底	(10.5)		13.5	7.0	AIIIa
5	床面	土師器(甕)	ヘラミガキ	ヘラミガキ 刷毛目	木葉底	(12.8)			7.5	AIIIa

第3号住居跡（BB53）（第9図）

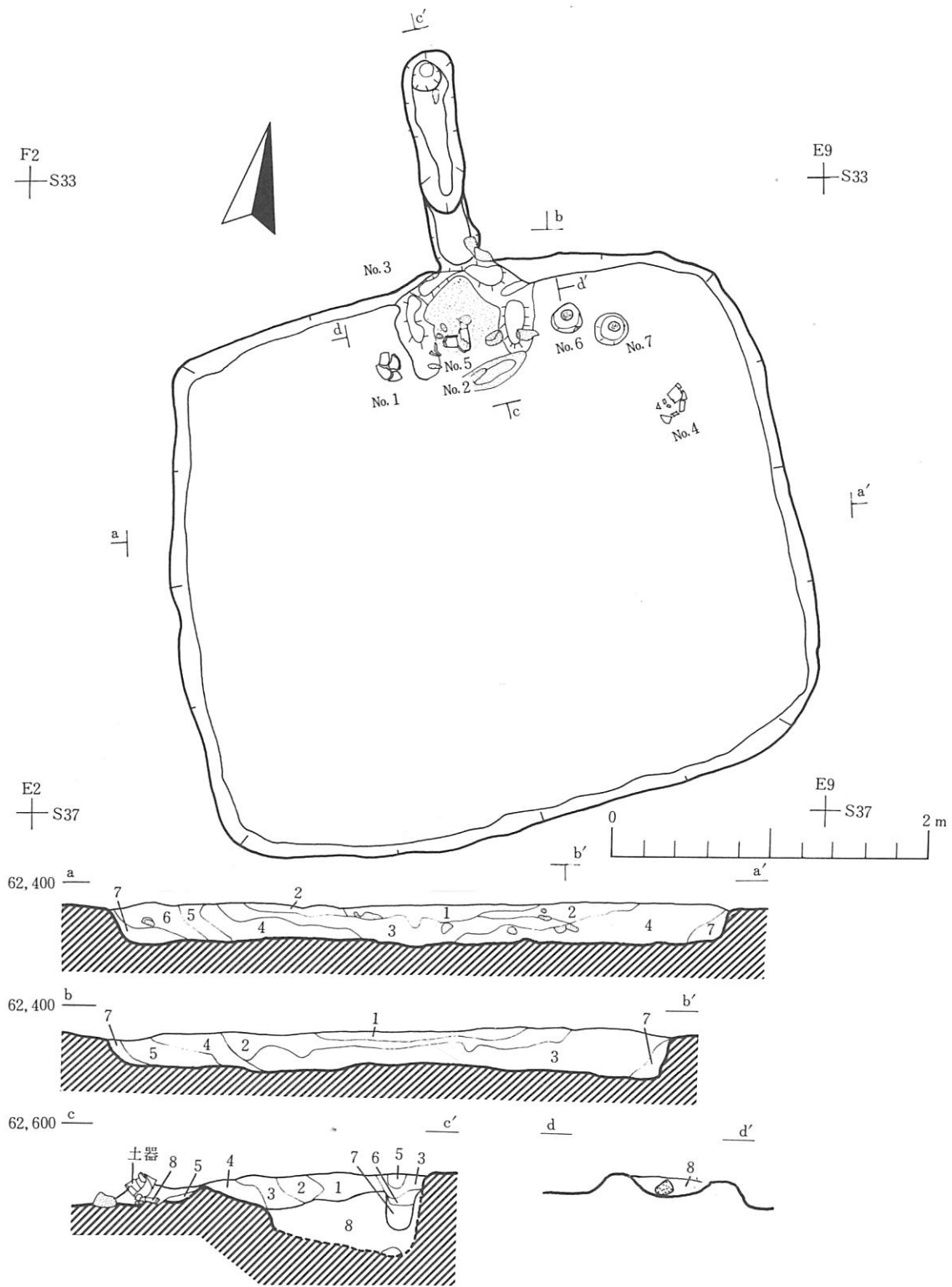
〔遺構の確認〕 B調査区の北端ほぼ中央、第9号住居跡の南約5m、第4号住居跡との間の地山面で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形である。規模は、長軸（東西）約3.9m、短軸（南北）約3.5mである。床面積は約13.7㎡である。

〔堆積土〕 7層確認されたが4層に大別することができる。1層は、黒褐色の腐植質土で住居の中央部分を中心に堆積しており、床面には達していない。2層は褐色のシルトで壁沿いをのぞくほぼ全域に堆積している。3層はおよそ住居の西半分の壁沿い近くに堆積しているものである。4層は暗褐色のシルトで壁際に堆積している。

〔壁〕 地山を壁としており、立ち上がりも急でしっかりしている。残存状況の良好な北壁は約30cm、その他は25cm前後の壁高である。



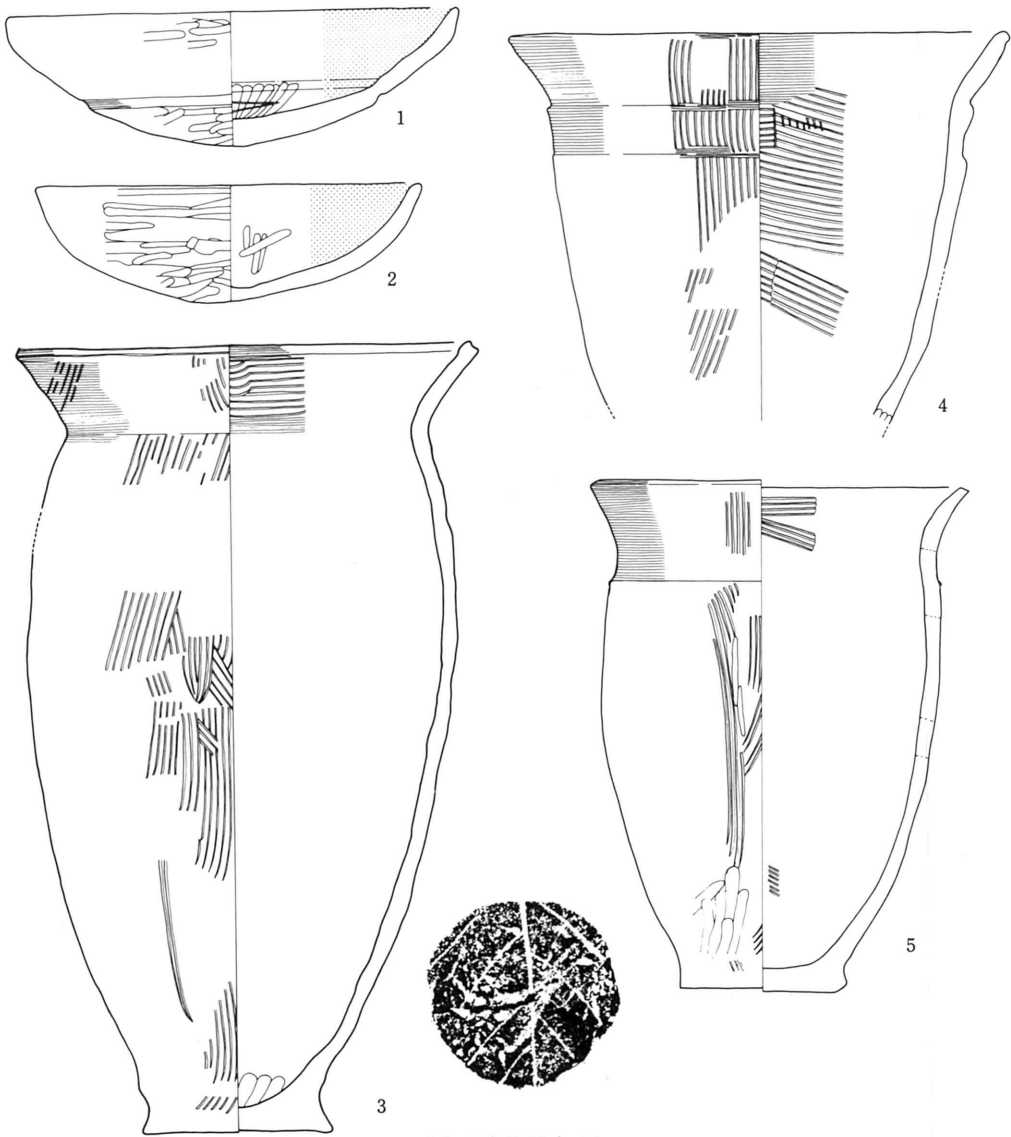
カマド煙道部堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	粘性わずかにあり
2	7.5YR5/6 明褐色	シルト	地山の土
3	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	粘性わずかにあり
4	7.5YR2/3 黒褐色	シルト	地山の土混じる
5	7.5YR5/8 明褐色	シルト	袖部の土と同じ、炭化物、焼土微量
6	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を微量に含む
7	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物微量、礫を多く含む
8	2.5YR5/2 灰赤色	シルト	焼土、炭化物微量に含む

堆積土

大別	層	土色	土性	備考
I	1	7.5YR3/1 黒褐色	腐植質土	粉状バミス、小礫が若干混じる
	2	7.5YR3/2 黒褐色	腐植質土	粉状バミス1層より少ない
II	3	7.5YR4/3 褐色	シルト	粉状バミス微量混じる
	4	7.5YR4/3 褐色	シルト	
	5	10YR3/4 暗褐色	シルト	
III	6	7.5YR4/4 褐色	シルト	小礫特に多い
IV	7	10YR3/3 暗褐色	シルト	径3cm前後の礫が入り、風化礫か底部に含む

第9図 第3号住居跡

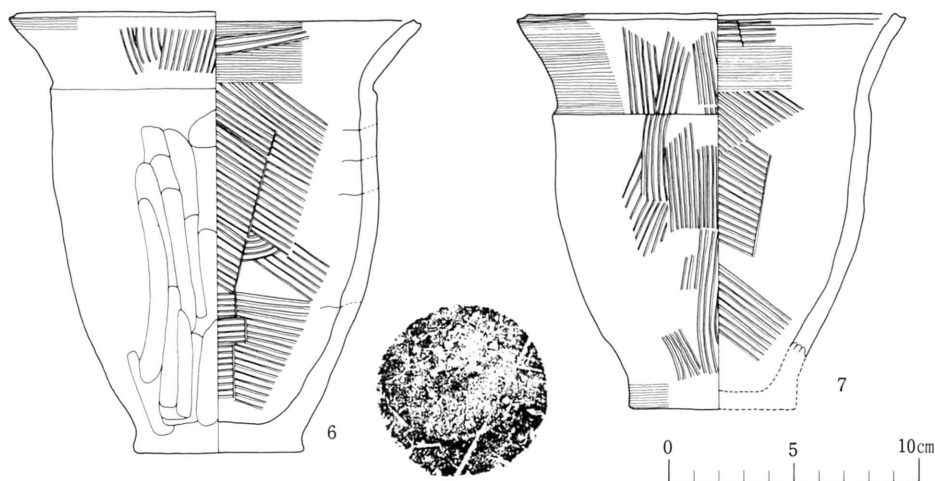


(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調 整		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番号
			外 面	内 面						
1	床 面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	ミガキ	4.7	15.4			A I a1
2	3の甕の中	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	ミガキ	5.3	18.1			A I c2
3	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・ナデ	木葉底	31.5	18.2	7.7		A I ali
4	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(16.0)	20.1			A I ali
5	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・掬斐目	ヨコナデ・ナデ		20.5	15.1	6.7		A I alii
6	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	17.6	16.5	6.8		A I ali
7	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		15.8	15.6	(6.2)		A I alii

0 5 10cm

第10図 第3号住居跡出土遺物(1)



第11図 第3号住居跡出土遺物(2)

〔床〕 地山をそのまま床としており、平坦で固い。

〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 北壁ほぼ中央にとりつけられている。本体はすでになく燃焼部と煙道部よりなる。両側壁は黄褐色シルトで固めて構築されている。燃焼部は奥行約60cm、幅約40cm、床面は熱を受けて赤変し固くなっている。又、焚き口部のところには天井部を構築する際使用したとみられる長さ約50cm、径20cmの長楕円状の川原石がカマドの方向に対して横方向に倒れ、その支柱に使用したとみられる川原石も内側に折れて倒れていた。燃焼部中央に支脚として使われたとみられる熱で赤変した径10cmの川原石があった。煙道へは奥壁でやや上り、その後緩かな傾斜でもって下った後、わずかな登りでもって煙出部に至る。煙出部には煙道底面より約30cm低い径20cmの煙出しピットがある。なお、煙道の規模は長さ約150cm、幅約30cmである。この煙道の底部は地山でなく黒褐色土中に微量の炭化物が認められ、深く地山まで掘り込み煙道として使用し、その後、埋め戻して再び使用したことも考えられる。長軸方向はN-18°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料は、カマド内、及びカマドの両脇床面等より出土した土師器がある。

土師器 完形品 復元可能なものを含めて実測したものは坏2点、甕5点であり、いずれも製作に際しロクロ未使用のものである。

坏(第10図1、2) いずれも底部形態が丸底のものである。これには体部外面下半に段の巡るものと、無段のものがある。(1)は体部外面下半に段が巡り、それと対応する内面にくびれが

みられる。段から上は外傾気味に口縁に向い口唇近くでやや内湾するもので、下方は丸味をもって底部へと続く。器面調整は内外ともにヘラミガキで内面には黒色処理が施されている。(2)は体部中半よりやや内湾する口縁をもち下半は丸味をもって底部へとつづく。器面調整は内外面ともにヘラミガキ、内面は黒色処理されている。

甕 (第10図3~5、第11図6、7) いずれも最大径が口縁部にあり、器高は口径より大きいものである。頸部には段、或いは軽い段が巡り口縁部と体部を区画している長胴のものである。その中で(4)は口縁部の下に二重に段が巡っている。口縁部が外傾気味のもの(3、4、6)と外反するもの(5、7)とがある。器面調整は口縁部内外面ともに一部刷毛目痕を残しているものもあるのがヨコナデである。体部外面については、(6)がヘラケズリ、(5)は下半にヘラケズリがみられる。他はいずれも刷毛目であり、内面については(3、5)が単位は不明であるがナデの他はいずれも刷毛目である。なお(6)の底部は木葉底であるがモミ痕がみとめられる。

第4号住居跡 (BC59) (第12図)

〔遺構の確認〕 B調査区の南側第3号住居跡の南東約3mの地点の地山で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形はやや胴張りの隅丸方形である。規模は長軸、短軸ともに約7.9mであり、床面積は62.4㎡と本遺跡の中で最も広い。

〔堆積土〕 3層に大別される。1層は黒褐色の腐植質土で径2~3cmの小礫を多く含むもので主として住居の中央付近を中心に堆積し、床面には攪乱部分を除き堆積していない。2層は暗褐色のシルトで1層と同じように径2~3mmの小礫を多く含むもので、住居のほぼ全域にわたり堆積し、床面のほとんどの部分に広がる。3層は褐色のシルトで地山の明褐色土を含み礫も多い。床面の低い部分に堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているものであるが壁面には礫が多く小さい凹凸が多い。壁の残存状況は約20~22cmであり、壁の立ち上がりは比較的急な立ち上がりを呈している。

〔床〕 地山をそのまま床としているものであるが床面は小さな凹凸が激しく径2~3cmの小礫が多く出ている。小礫をびっしり敷きつめたような様相を呈している。

〔柱穴〕 床面上より検出されたピットは6個である。そのうち対角線上に存在するP₁~P₄の4個のピットは、他の2個に比較して深いものであり、位置、形状等から柱痕は認められないがそれらに該当するものとみてよいものであろう。埋土は黒褐色の腐植質土と地山のシルトの混じった灰黄色シルトの2層である。

〔カマド〕 北壁の中央にとりつけられている。検出されたカマドは燃焼部のみで煙道部にあたる部分が丁度上部よりの攪乱が及んでおり、煙道部が当初より無かったものか、完全に破かいされていないものが判然としない。奥壁部分の立ち上がりの様子からみると前者の線が強い。

カマド本体の天井部は既になくシルトで構築された両側壁の残存状況も非常に悪く左側壁はかろうじて形をとどめている状態である。燃烧部は奥行約50cm、幅約60cmの舌状を呈し、底面は平坦である。焼土の堆積はあるが熱のための変化はあまりみられない。底面中央附近には、支脚として使用したとみられる熱で赤変した小甕が2個ふせた形で並んで出土した。又、焚口部にはカマド本体を構築した時に使用したとみられる長さ約60cm径約25cm、長さ30cm、径15cm前後の楕円状の石が倒れていた。長軸方向はN-10°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料は、カマド内出土、及びカマドの両脇やその他の床面より出土した土師器がある。

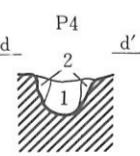
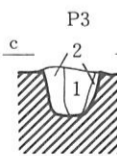
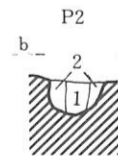
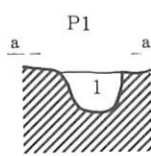
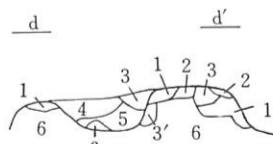
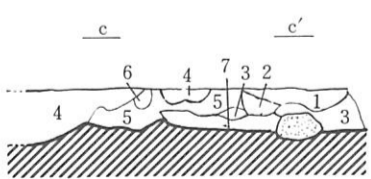
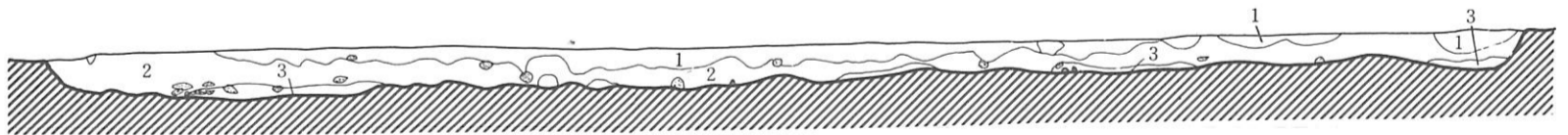
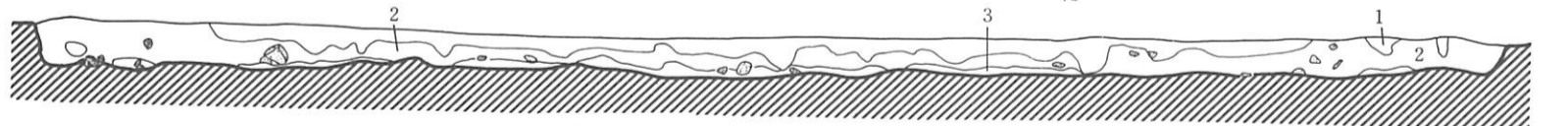
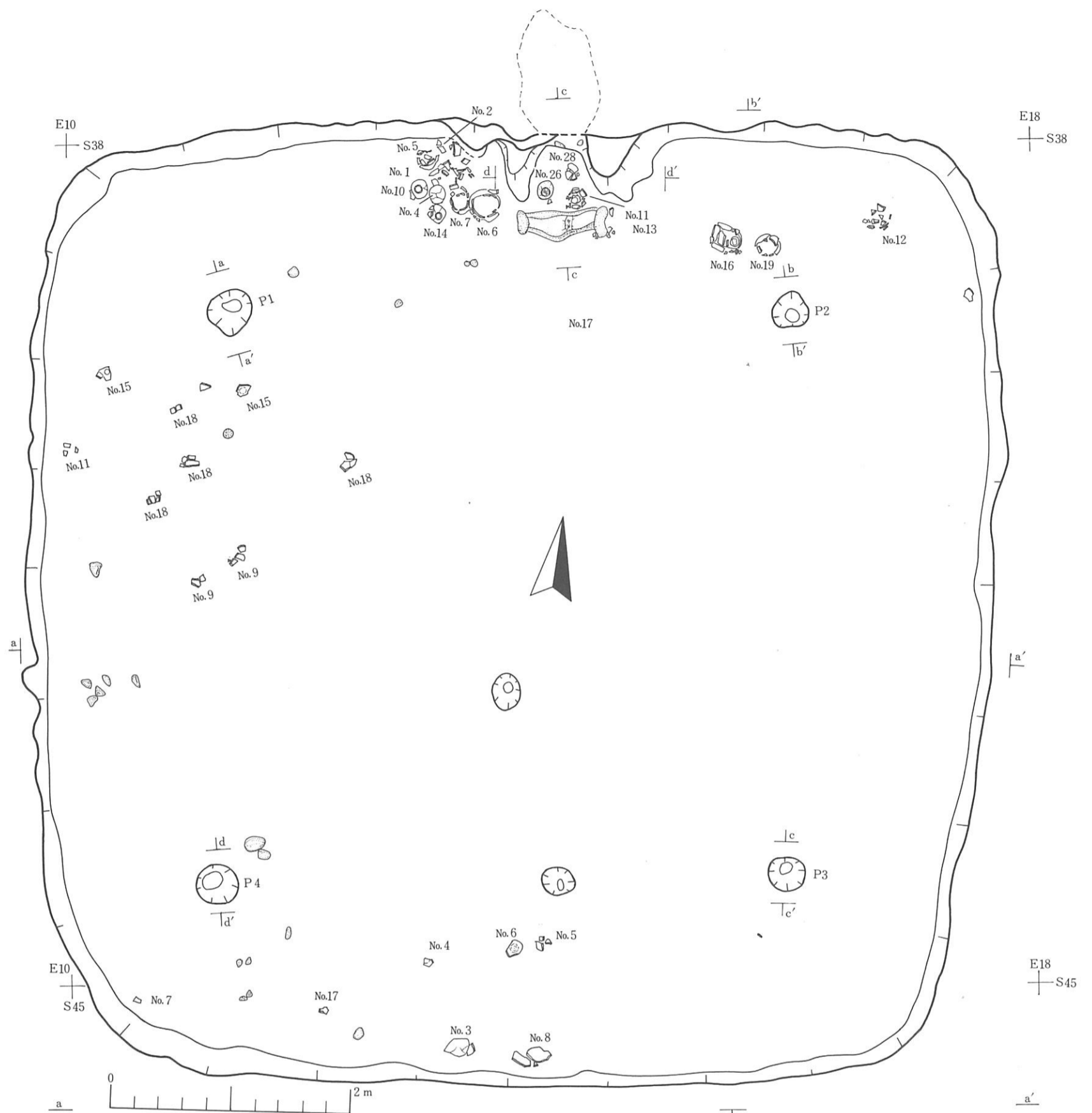
土師器（第13図1～19） 完形品及び復元可能なものを含めて実測したものは坏3点、高坏2点、甕12点、甑2点である。いずれも製作に際してロクロ未使用のものである。

坏（第13図1～3） 底部形態が丸底のもの（1、2）、平底風のもの（3）がある。体下部外面に段の巡るもの（2、3）、わずかに沈線の巡るもの（1）がある。いずれも、対応する内面にくびれを有するものである。器形は（1）は段から上は外傾気味に内湾し、（2）は外傾気味に内湾し口唇部近くで直立しているものである。又、（3）は大形の坏で段より上は外傾し下半はやや直線的に底部につづいているものである。器面調整は、内外面ともにヘラミガキがなされ（1、2）は内面が黒色処理されている。

高坏（第13図4、5） いずれも丈が低く外方へ開いた脚部を有するもので坏部体下部に段が巡っており対応する内面にくびれのみられるものである。坏部の形態はいずれも段より上が外に開く外傾気味のものである。脚部は（4）は内湾気味に「八の字」に開き、（5）は直線的に「八の字」に開くもので（5）は中央に段が巡る。器面調整は内外面ともにていねいなミガキであり、内面は黒色処理されている。

甕（第13図6～15、第14図16～17） 最大径が口縁部にあり器高が口径より大きいもの（6～9）、同じく器高が口径より小さいもの（10～15）、最大径が体部にあり体径より器高の大きいもの（16、17）がある。器高が口径より大きいものは、いずれも頸部に段が巡り口縁部と体部を区画しているものであるが、いずれも体部下半から底部にかけて欠損しているもので正確な器形は不明であるが胴部がやや直線的な長胴のものと思われる。口縁部は直立外反するもの（6）、外反するもの（7、8）、直立気味のもの（9）がある。器面調整は口縁部の内外面は一部刷毛目痕を残しているものもあるが、いずれもヨコナデ、体部外面は一部ケズリのみられるもの（9）もあるが刷毛目である。また内面はいずれも刷毛目である。

次に、器高が口径より小さいものは、頸部に段が巡り口縁部と体部を区画しているもの（10～13）と無段のもの（14、15）がある。これらはいずれも口縁部がわずかに外反するか直立気



カマド堆積土

層	土色	土性	備考
1	5YR1.7/1 黒色	腐植質土	木根なく細礫混入
2	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	やや粘性あり、小木根 細礫混入
3	5YR3/2 暗赤褐色	シルト	焼土混じる
4	10YR5/6 黄褐色	シルト	1層と5層の攪乱したもの
5	10YR6/6 明黄褐色	シルト	粘土質の強いシルト
6	10YR4/4 褐色	砂質シルト	3-5mm 礫が多く入っている
7	5YR4/6 赤褐色	焼土	

袖部堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR4/4 褐色	シルト	ボサボサした土、小木根、細かい礫混入
2	5YR3/3 暗赤褐色	シルト	
3	10YR6/8 明黄褐色	シルト	
3'	10YR5/6 黄褐色	シルト	汚れがつよい
4	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	木根、攪乱
5	7.5YR2/3 黒褐色	シルト	
6	10YR6/8 明褐色	シルト	地山と類似

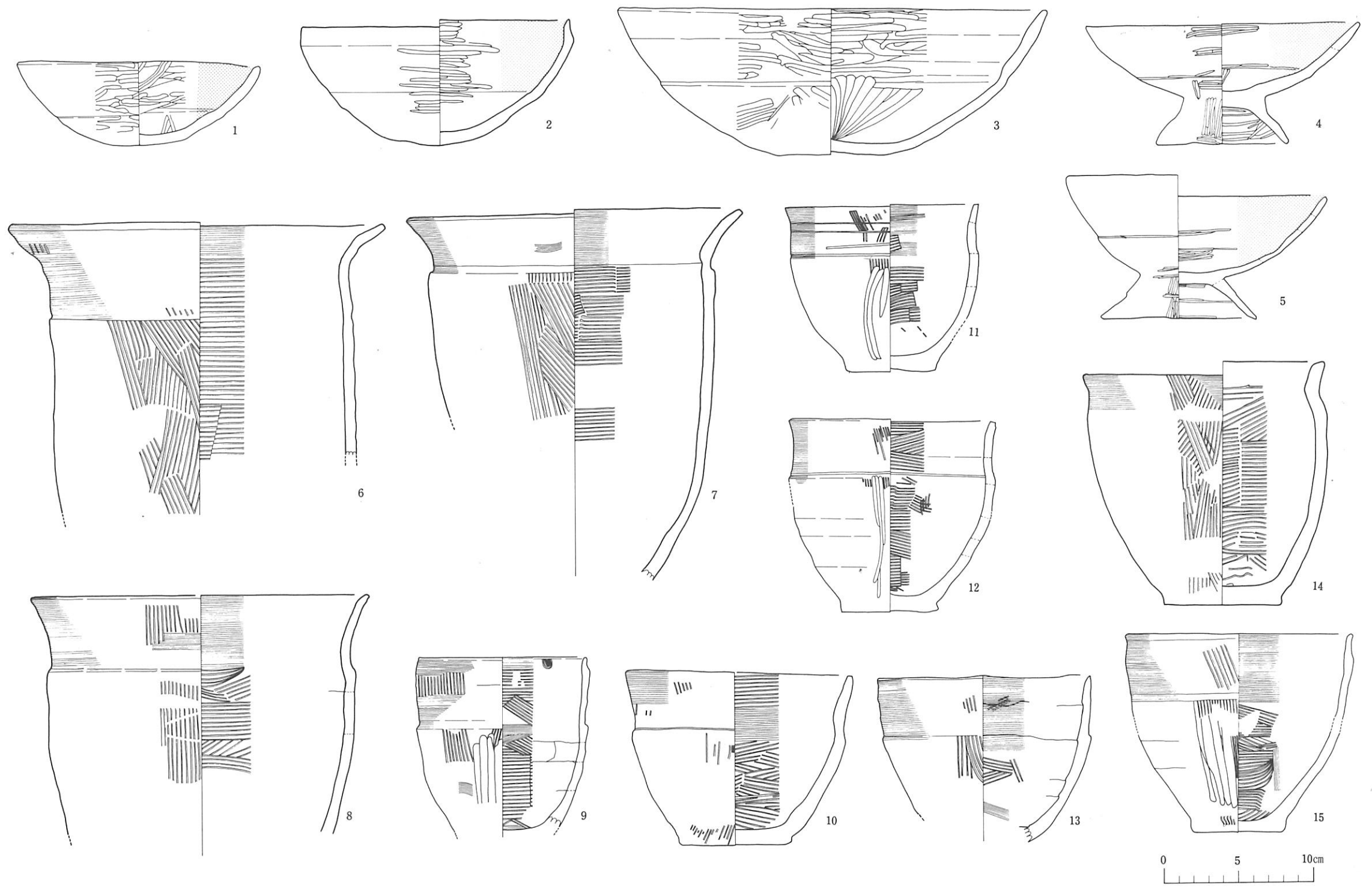
堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR3/1 黒褐色	腐植質土	粘性なく径2-3mmの小礫が多く含まれている。木根
2	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	粘性なく径2mm-3cmぐらいの小礫を多く含む。小木根
3	10YR4/4 褐色	シルト	1.2層より荒く2-3cmの小礫が含まれている

柱穴堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR1/3 黒褐色	腐植質土	シルト混入
2	2.5YR4/2 灰褐色	シルト	地山のシルトか黒褐色土が混入

第12図 第4号住居跡



第13図 第4号住居跡出土遺物(1)



(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調 整		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番号
			外 面	内 面						
1	床 面	土師器(坏)	ハラミガキ・ハラミガキ	ハラミガキ・黒色処理	ハラミガキ	5.5	16.2			A I bl
2	床 面	土師器(坏)	ハラミガキ・ハラミガキ	ハラミガキ・黒色処理	ハラミガキ	8.1	17.8			A I al
3	床 面	土師器(坏)	ハラミガキ・ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	9.8	28.8			A I al
4	床 面	土師器(高坏)	ハラミガキ・ハラミガキ	ハラミガキ・黒色処理		8.0	18.2	8.7		A II b
5	床 面	土師器(高坏)	ハラミガキ・ハラミガキ	ハラミガキ・黒色処理		9.6	17.3	10.2		A II b
6	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(19.0)	25.0			A I alii
7	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(24.5)	22.5			A I alii
8	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(15.8)	22.8			A I alii
9	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・刷毛目		(11.2)	11.3			A I blii
10	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		11.7	14.7	7.0		A I ali
11	カマド内	土師器(甃)	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・刷毛目		10.0	12.8	5.9		A II alii
12	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・刷毛目		12.8	13.3			A II alii
13	カマド内	土師器(甃)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(10.8)	14.2			A II ali
14	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		16.2	16.3	7.8		A II bli
15	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・刷毛目		13.2	15.4	5.8		A II bli
16	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	23.2	16.6	22.2	8.0	A III a2i
17	床 面	土師器(甃)	刷毛目	ハラナデ		(10.2)		12.3		A IV a
18	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・刷毛目	刷毛目・刷毛目		19.3	19.0	6.8		
19	床 面	土師器(甃)	ヨコナデ・刷毛目	刷毛目・刷毛目		17.5	18.5	7.7		

第14図 第4号住居跡出土遺物(2)

— 上餅田遺跡 —

味の小形の甕である。器面調整は口縁部の内外面はいずれもヨコナデ、体部外面は刷毛目後ヘラミガキをしているもの（11、12）、ヘラケズリがみられるもの（10、15）があり、その他は、刷毛目である。なお、内面は、いずれも刷毛目である。

体径より器高の大きいものはいずれも頸部に段が巡り、口縁部と体部を区画しているもので⑩は最大径が胴部中半にあり、口縁部は直立し、口縁端がやや内傾気味の球胴であり、⑪は、口縁部と底部を欠くが球胴のものとして推定されるものである。器面調整は、⑩は、口縁部内外面は刷毛目痕を残しているがヨコナデ、体部内外面は刷毛目であり、⑪は体部外面は刷毛目、内面はヘラナデである。

甕（第14図18、19） いずれも無底のもので、口縁部に段が巡り口縁部と体部を区画しているもの⑫と沈線のめぐるもの⑬でいずれも体部から口縁部にかけて外傾気味の器形をしているものである。器面調整は、口縁部外面は刷毛目痕を残しているがヨコナデ、口縁部内面、体部内外面は刷毛目である。なお、底部近くには軽いケズリがみられる。

第5号住居跡（B J 56）（第15図）

〔遺構の確認〕 B調査区の南東、C区にまたがる地点で第23号住居跡と北壁をほぼ接するような形で確認されたものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形である。規模は、長軸(東西)約4.3m、短軸(南北)約4.2mである。床面積は約18.1㎡である。

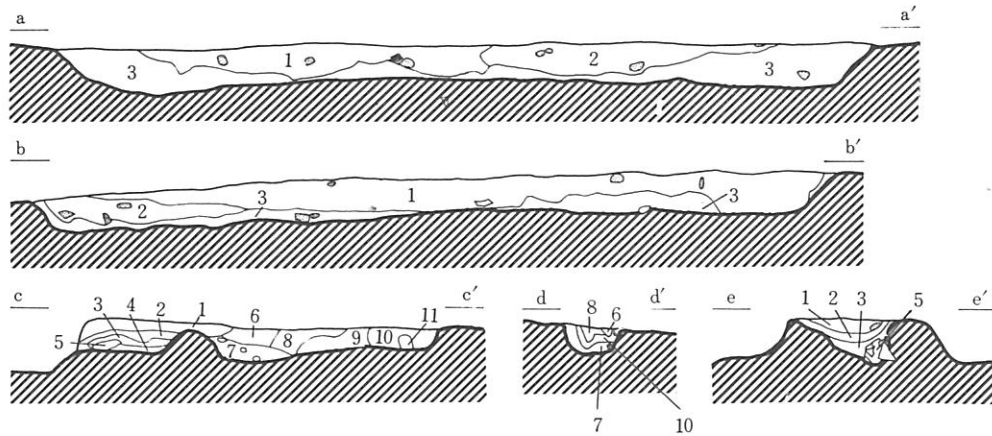
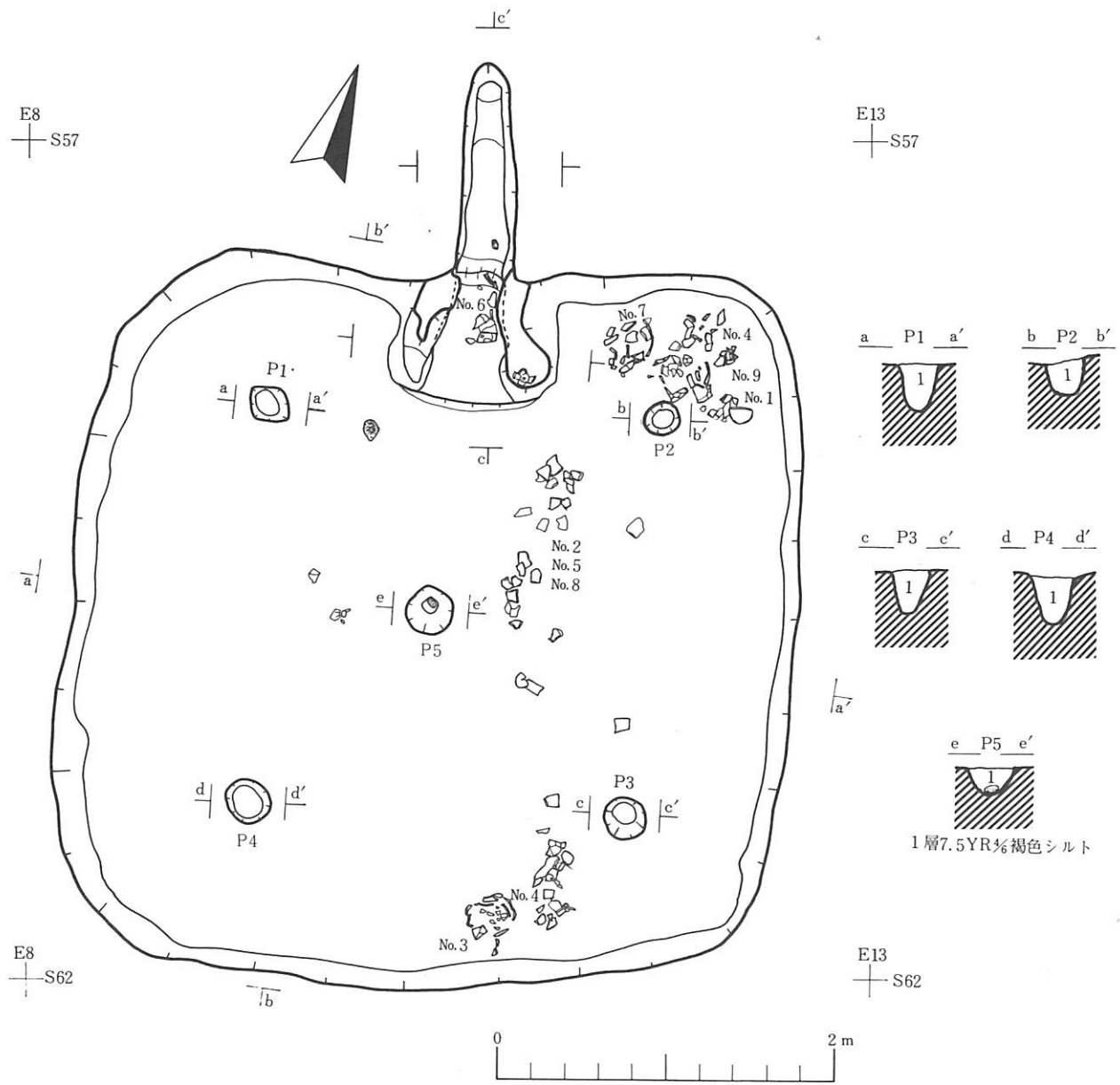
〔堆積土〕 3層に大別することができる。1層は黒褐色の腐植質土であり住居の中央附近を中心に堆積しており中央部では一部床面に達している。2層は暗褐色のシルトで炭化物や小礫を多く含んでおり壁沿い近くより中央に向かって堆積し一部床面にも堆積している。3層は地山のシルトの混じった暗褐色のシルトで壁際から中央に向かって床面に堆積しており、中央部にはほとんど堆積しておらない。

〔壁〕 地山を壁としており、残存状況も比較的良好であり残存壁高は北壁で約26cmで他もそれに近い残り方を示している。壁の立ち上がりは比較的ゆるやかである。

〔床〕 床面は地山をそのまま床としており固くしまっている。やや南に傾斜しているがほぼ平坦である。

〔柱穴〕 住居内からはP₁～P₅まで5個のピットが検出された。そのうち柱痕はみとめられなかったがP₁～P₄ピットが位置、深さ等から、それに該当するものと思われる。なお、中央部に存在するP₅も、位置、深さ等から上屋構造を支える働きをしたものの跡とも考えられるが性格的には不明である。

〔カマド〕 北壁中央にとりつけられている。燃焼部と煙道より成る。燃焼部と煙道の取り付



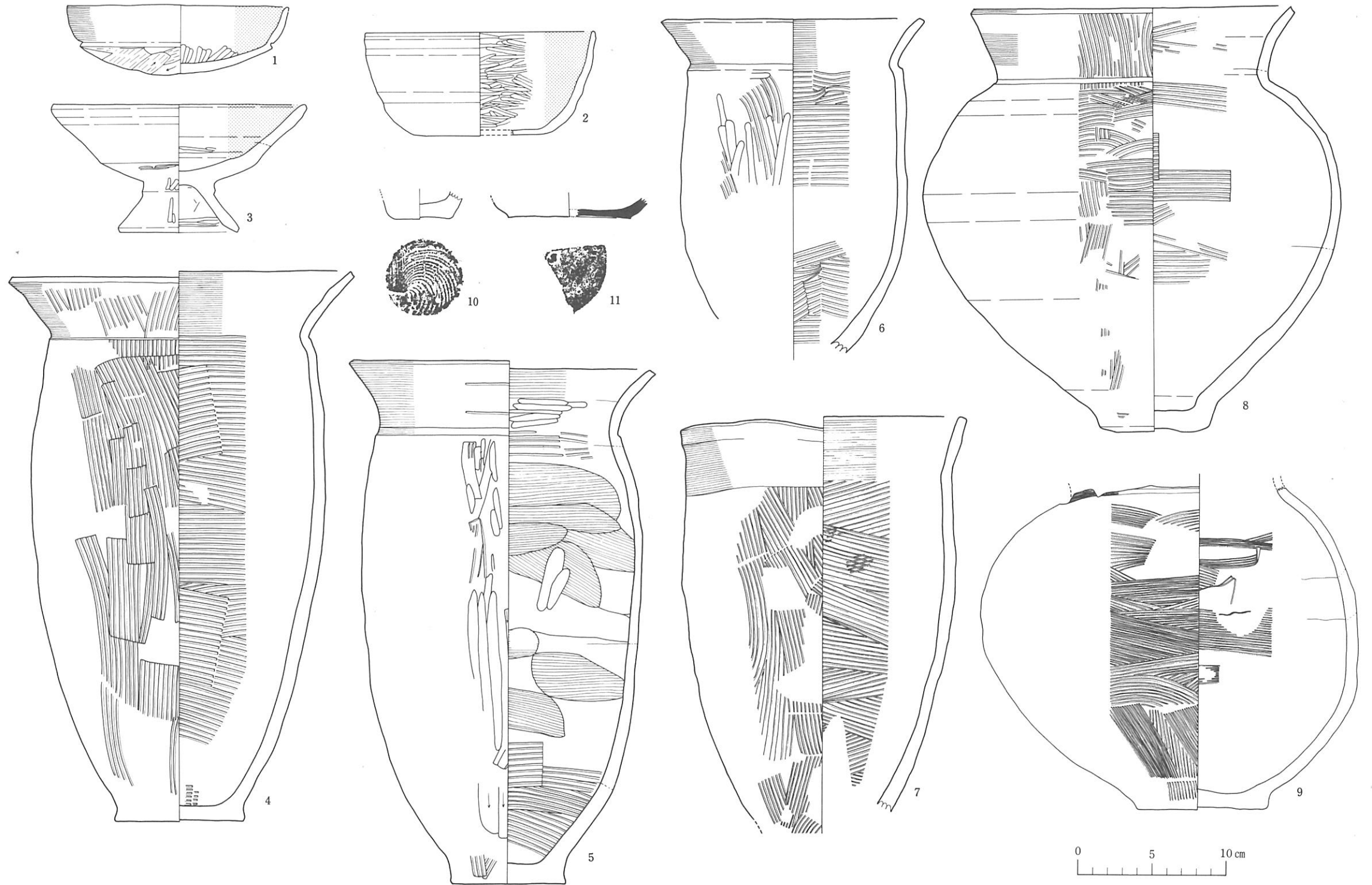
堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	腐植質土	小木根、小礫含む
2	7.5YR3/2 暗褐色	シルト	炭化物を含む 5cm内外の礫多し
3	10YR4/2 暗褐色	シルト	腐植質土と地山のシルトの混じったもの

カマド堆積土

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	7.5YR4/3 褐色	シルト	木根	7	5YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物、スス状のものを多量に含む
2	7.5YR4/2 灰褐色	シルト		8	5YR4/4 にぶい赤褐色	シルト	焼土微量
3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト		9	5YR4/6 褐色	シルト	焼土微量
4	7.5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土	10	5YR4/6 赤褐色	シルト	
5	7.5YR6/6 橙褐色	シルト	焼土	11	10YR3/3 暗褐色	シルト	多量の炭化物を含む
6	7.5YR3/2 黒褐色	腐植質土					

第15図 第5号住居跡



第16图 第5号住居跡出土遺物

け部分には、灰白色のシルトでトンネル状にカマド部分を覆ったとみられる天井部の一部が存在し、又、両側壁はシルト及び白色の粘土質シルトで構築されていた。燃焼部の規模は、奥行約80cm、幅約50cmで焚き口が広い「八の字」形を呈しており、底面は床面よりやや高くなっておりあまり熱をうけた様子が認められない。燃焼部の中央には支脚として使用したとみられる土師器の甕の他、破片が多く存在した。煙道部へは燃焼部奥壁際で約10cmの段差をもって煙道へと移行している。煙道は長さ約130cm、幅35cmの煙出部に向かってやや登り気味のものであり、煙出部のピットは皿状で特に深く掘り下げられていない。長軸方向はN-10°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料としては、カマド内及び床面出土の土師器がある。

土師器 完形品、復元可能なものを含めて実測したものは坏2点、高坏1点、甕6点である。

(2)は製作に際してロクロ使用したものであり、他はロクロ未使用のものである。

坏(第16図1、2) (1)は、底部形態が丸底で、体部外面下半に段を有し、対応する内面にもくびれの認められるものである。段より上は内湾気味に外傾する口縁を有するもので、器面調整は、体部外面は段より上がヨコナデ、下がケズリ、内面はミガキであり、黒色処理されている。(2)は回転糸切りの平底のもので、摩滅のため単位は不明であるが一部周辺を再調整してある。底部近くよりやや外傾気味に立ち上り口縁部近くで直立する口縁を有している。器面調整は外面はロクロ、内面はヘラミガキで黒色処理されている。

高坏(第16図3) 坏部は体部下半に稜が巡り対応する内面にも稜が巡る。それより上はやや外傾気味の口縁部である。又、脚部は「八の字」に開くもので坏部に比して少し低く小さめなものである。器面調整は内外面ともにいいヘラミガキで内面は黒色処理されている。なお、坏部の切り離し技法は調整のため不明である。

甕(第16図4~9) 最大径が口縁部にあり、器高が口径より大きいものと最大径が体部にあり器高が体径より大きいもの(同じもの)がある(8、9)。前者は、頸部に段を有し、体部と区画

(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(坏)	ヨコナデ・ケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	ケズリ	4.5	14.4			A I a 1
2	床面	土師器(坏)	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理		6.9	(15.6)		(8.8)	B II
3	床面	土師器(坏)	ミガキ・ミガキ	ミガキ・黒色処理		8.6	17.0		8.1	B II b
4	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	ナデ	37.0	23.5		8.6	A I a 1 i
5	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	35.0	20.0		7.8	A I a 1 ii
6	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・刷毛目		(23.5)	17.5			A I a 1 ii
7	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	"		(27.0)	20.5			A I b ii
8	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	"	木葉底	28.1	21.3	28.1	7.3	A III a 3 ii
9	床面	土師器(甕)	刷毛目	刷毛目		(21.6)		25.2	8.8	A III a 2
10	推横土	土師器(甕)			回転糸切り	(1.6)			6.1	
11	推横土	土師器(坏)			ヘラ切り	(1.2)			(8.1)	C

しているもの(4~6)と無段のもの(7)がある。これらは口縁部が外反、外傾するもので胴部中央がややふくらむ長胴形で、器面調整は、口縁部内外面はヨコナデがほとんどで一部(5)の内面にミガキがみられる。体部は、外面にミガキのみられるもの(5、6)、内面にナデのみられるもの(5)の他はいずれも刷毛目である。

後者についてみると(9)は口縁部を欠くため正確な器形は不明であるが(8)は口縁部が「く」の字に外側に外反するもので、最大径が胴部中半よりやや上部に存在する球胴のものである。器面調整は口縁部はヨコナデ、他は刷毛目である。

〔堆積土出土遺物〕(第16図10、11)

(10)は土師器の小甕と推定されるものの底部で回転糸切りのもの、(11)はヘラ切りの須恵器坏底部である。

第6号住居跡(AJ12)(第17図)

〔遺構の確認〕 調査区の北西、第1号住居跡のすぐ南東、約1mの地山面で確認された。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形はやや胴張りを呈する隅丸方形で、規模は長軸(東西)約6.5m、短軸(南北)約6.4mである。床面積は約41.6㎡である。

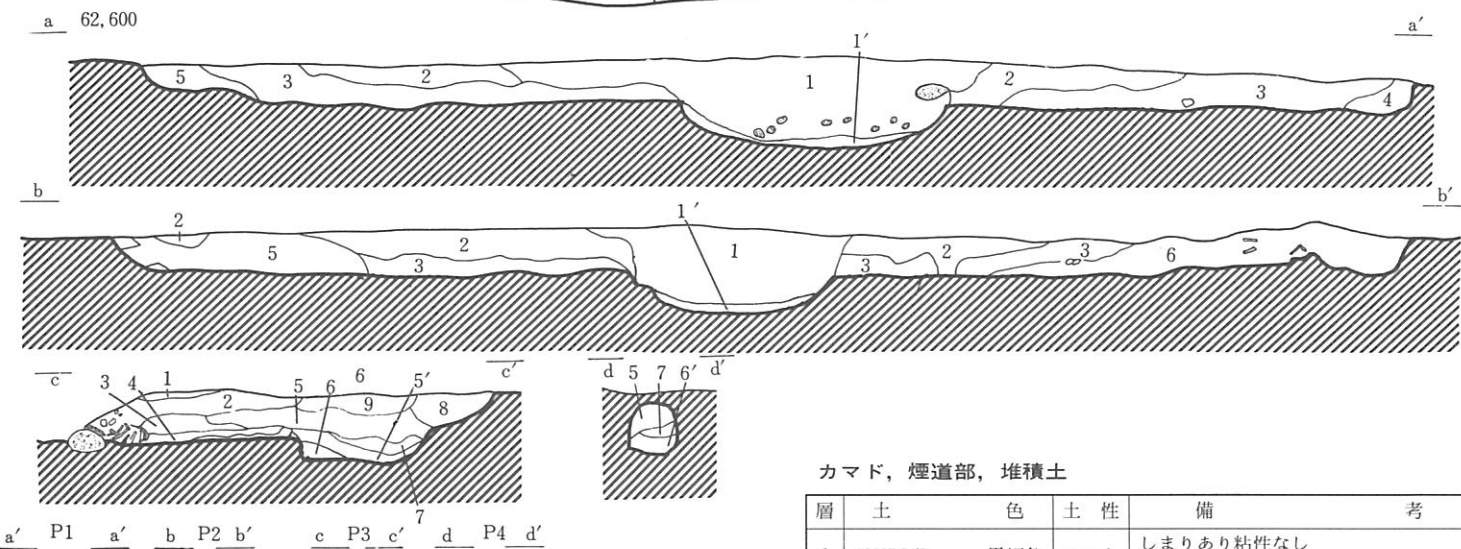
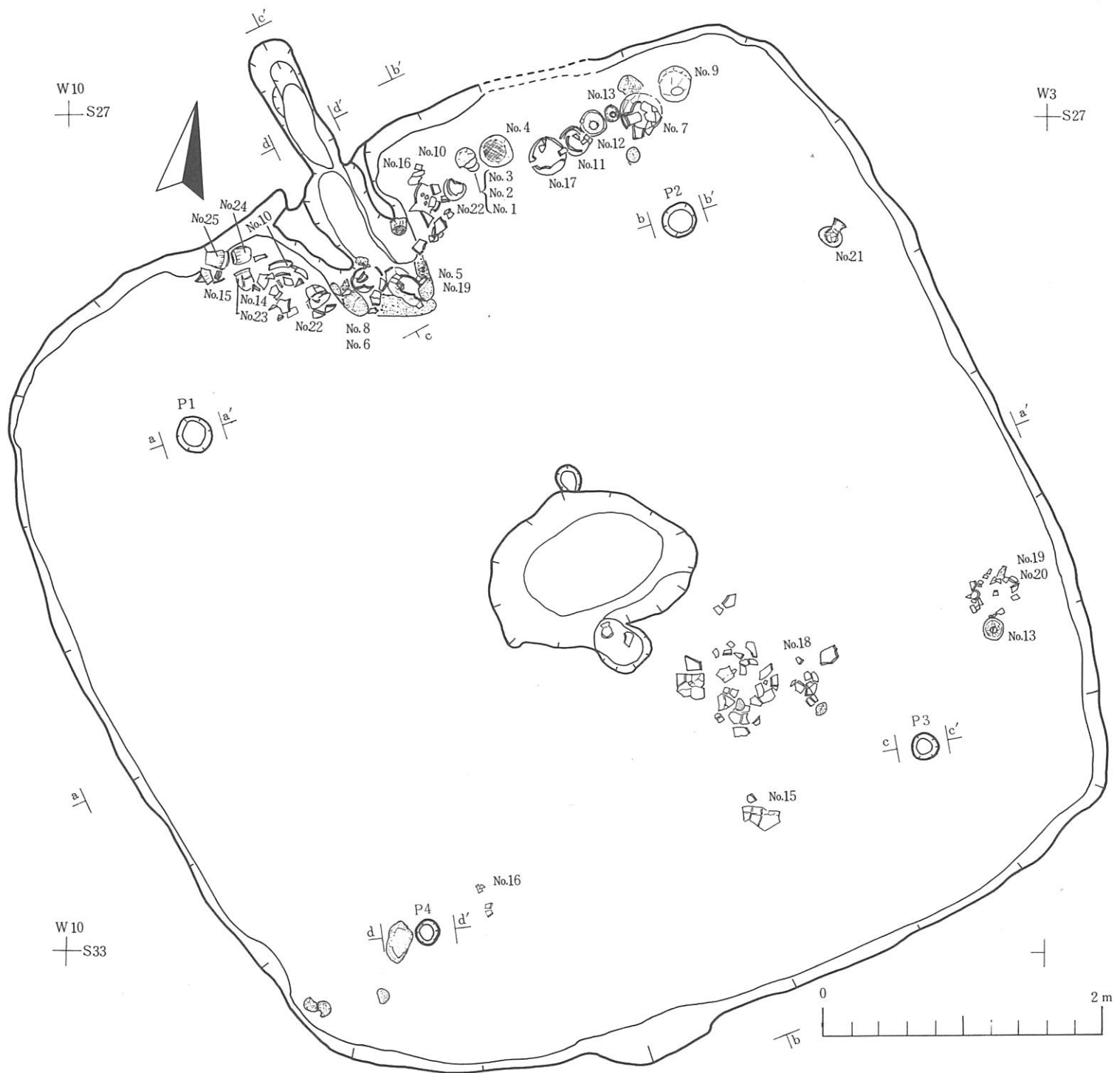
〔堆積土〕 6層に大別することができる。1層は黒褐色の腐植質土で住居内のほぼ中央にみられるもので後世に掘り込まれたとみられるピットに堆積していたものである。1'層は、同質のもので地山のシルトの混じりが多い。2層は極暗褐色の腐植質土でこれは住居跡中央附近に広がり一部は床面まで堆積している。3層は暗褐色土で壁際近くから中央附近に向って堆積しており、4、5層の褐色土は主に壁際に堆積している。6層の褐色土はカマド附近に堆積しているもので特に土師器片を多量に含んでいる。

〔壁〕 地山を壁としているもので北壁の北東側が一部攪乱により約1mばかりこわされているが、他は比較的残りが良好で壁の立ち上がりもやや鋭い立ち上がりを示しているところが多い。壁高は南壁の残存の良好なところで約20~23cmである。

〔床〕 地山をそのまま床としておりほぼ平坦で固くしっかりしている。中央部分は後世の掘り込みにより床面がこわされている。

〔柱穴〕 床面上から検出されたピットは中央のピットを含め5個である。そのうち、対角線上にあるP₁~P₄の4個が深さ形状等がそれに該当するものとみられるものである。

〔カマド〕 北壁のほぼ中央にとりつけられている。燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部の天井部分はすでになくシルトで構築された両側壁のみが残存していたものである。燃焼部は奥行約80cm、幅約30cmの楕円状を呈し、床面にはわずかに焼け面が認められた。又、焚き口部には、カマドの本体部に使用されたとみられる長さ約50cm、巾約20cmの長構円形の川原石がカマドの



(1層) 7.5YR4/3 褐色土, 明褐色のシルトまじる

堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR2/2 黒褐色	腐植土	小礫が少しまじる
1'	7.5YR2/2 黒褐色	"	腐植質土で1層よりややシルトの混りが多い
2	7.5YR2/3 極暗褐色	"	ややしまるが粘性がなくバサバサした土である礫と木根が多量に入り腐植土, 木根により攪乱されたもの
3	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	シルト質土で粘性がなく礫や小木根多く含む
4	7.5YR4/4 褐色	シルト質土	
5	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	シルト質土で風化礫を少し含む
6	7.5YR3/4 褐色	シルト	土師器片を多く含む

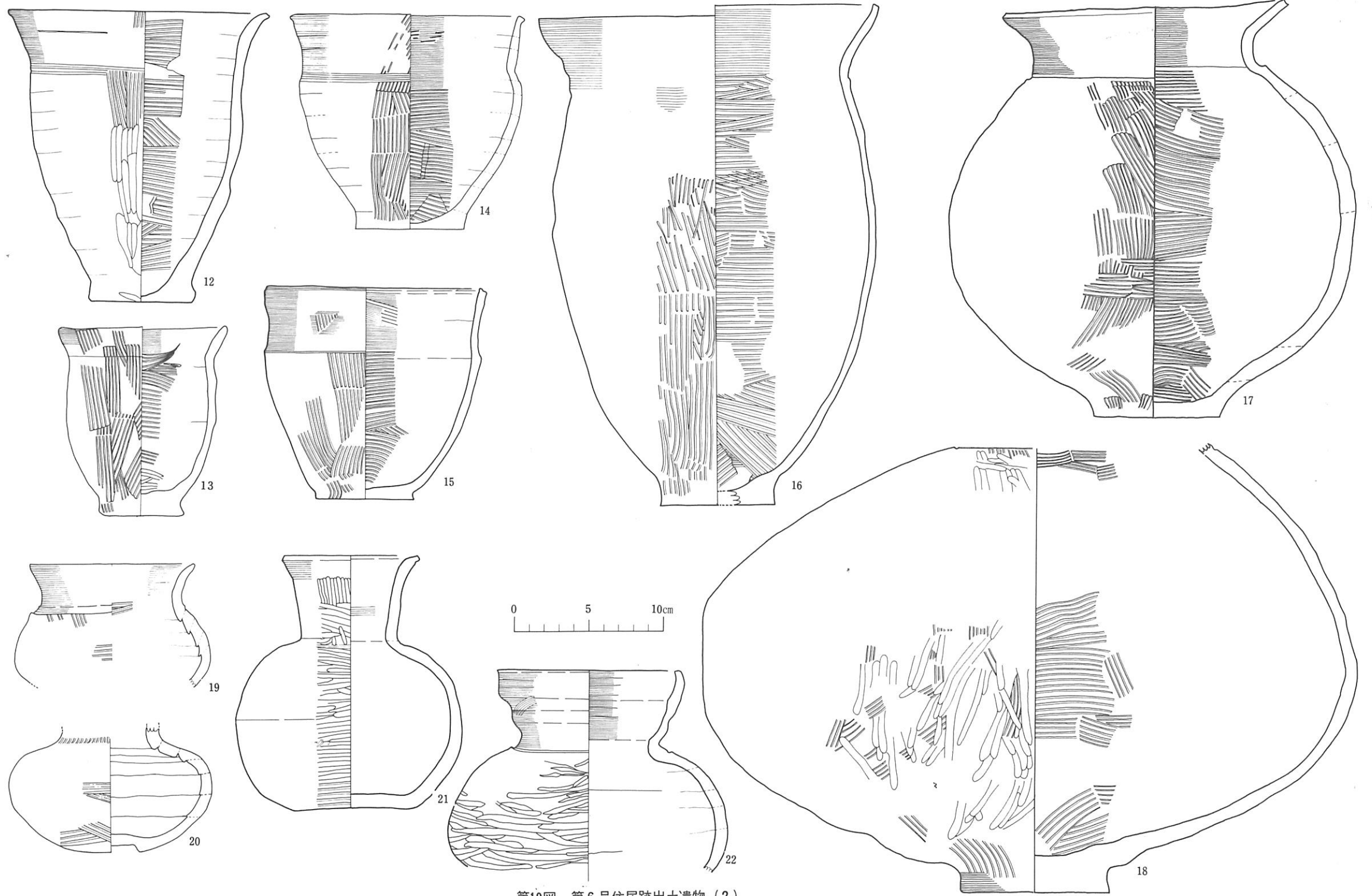
カマド, 煙道部, 堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	しまりあり粘性なし 黄褐色のシルトを多量に含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	しまりあり, 小礫を含む, 土師片含む
3	10YR5/6 黄褐色	シルト	黒褐色がまじる, 袖部のくずれたもの
4	5YR3/4 極暗赤褐色	シルト	焼土混じる, 炭化物微量
5	5YR4/4 褐色	シルト	3層のシルト質土に焼土 ススの混じったもの, 炭化物微量
6	2.5YR3/6 極赤褐色	焼土	焼土, 炭化物微量 焼土が固くブロック状に入っている
7	10YR4/4 褐色	シルト	5層の汚れの強いもの
8	10YR4/6 褐色	シルト	よくしまっている 1層の黒褐色土がまじって
9	10YR3/3 暗褐色		攪乱土

第17図 第6号住居跡



第18图 第6号住居跡出土遺物(1)



第19図 第6号住居跡出土遺物(2)

方向に対して横方向に、そして、両側壁の先端には、それぞれ支柱として使用されたとみられる長さ約25cm～30cm、幅約15mの楕円形の川原石が倒れていた。又、右側壁には芯材として甕の下半部をふせて使用していた。燃烧部内からは土師器の甕2個体の他、坏、その他多くの破片が出土している。燃烧部から煙道へは奥壁際で約10cmの段差をもち、長さ約100cmの地山をくりぬいたトンネル状の煙道が続いていた。煙出し部は煙道部より一段高く浅い皿状であり掘り込みは認められない。長軸方向はN-36°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料は床面及びカマド内出土の土師器がある。

土師器(第18・19図1～22)完形品、復元可能なものを含め実測したものは、盃1点、坏4点、高台坏1点、甕14点、壺形土器2点等がある。いずれも製作に際してロクロ未使用のものである。

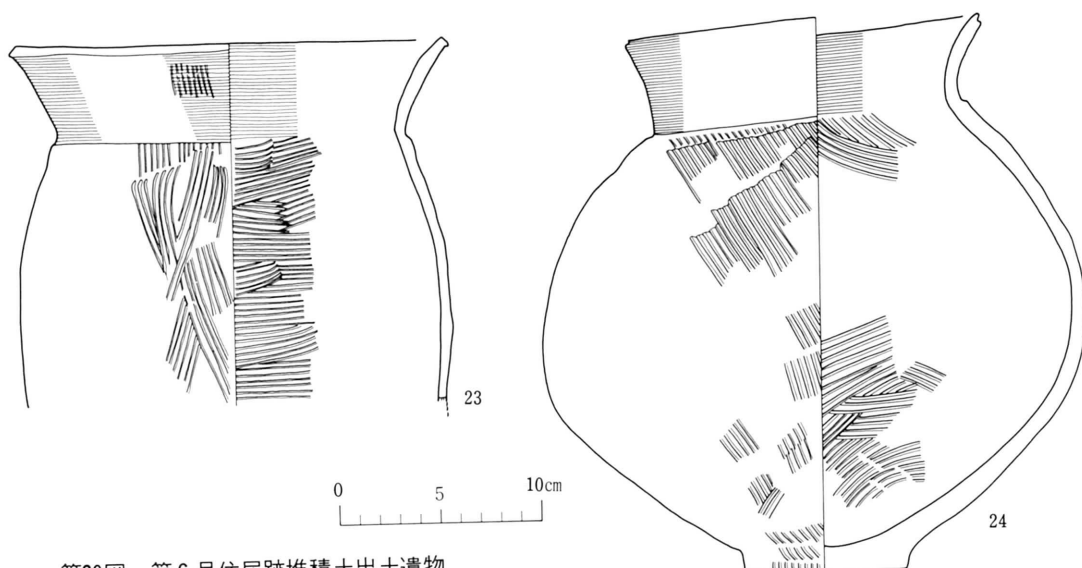
盃(第18図1) 底部形態が丸底で体部下半から内湾して丸味をもって口縁に至るもので口縁径に比して体部径が大きいものである。器面調整は外面がヘラミガキ、内面はナデである。

坏(第18図2～5) 底部形態が丸底のものでいずれも外面体下部に段或は稜の巡るものである。(2)は体部外面に軽い段が付き対応する内面に稜がみられる。段からはやや内湾気味に外傾し、段からは丸味をもって底部へと続いている。器面調整は内外ともにヘラミガキ、内面には黒色処理が施されている。(4、5)は大形の坏で、やはり体部外面に軽い段が付き対応する内面にくびれがみられる。段からはほぼ直線的に外上方に張り出し下部は丸味をもって底部へつづく。器面調整は、外面は段から上がヘラミガキ、下部は刷毛目をそのまま残しており、内面はヘラミガキで仕上げている。(3)は体部下半外面に稜が巡り、それに対応する稜が内面にあるものである。段からは外傾し、口唇部近くから直交している。下部は丸味をもって底部へつづく。器面調整は内外ともにヘラミガキ、内面は黒色処理が施されている。

高坏(6)は坏部のみで脚部を欠いているもので、外面体部下半には段が巡り対応する内面にくびれがみられる。脚部に接合する近くは強く外傾し、段から上もやはりやや直線的に外傾している。器面調整は、内外面ともヘラミガキ、内面は黒色処理が加えられている。

甕(第18図7～11、第19図12～20) 最大径が口縁部にあり器高が口径より大きいもの(7～13)同じく器高が口径より小さいもの(14、15)最大径が体部にあり器高が体径より大きいもの(16、17)同じく器高が体径より小さいもの(18～20)がある。

器高が口径に比べて大きいものは、頸部に段を巡らさないもの(7～9、13)と、段を巡らし口縁部と体部を区画しているもの(10～12)がある。器形をみると無段のものは、口縁部が内湾気味に外傾しているもの(8)と、外反するもの(7、13)がありいずれも胴部中半がやや丸



第20図 第6号住居跡堆積土出土遺物

(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(壺)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	6.0	8.1			A I c 2
2	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ	4.5	14.8			A I a 2
3	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ	5.9	(16.7)			A I a 1
4	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・刷毛目	ヘラミガキ	刷毛目	7.6	23.0			A I a 1
5	カマド内	土師器(坏)	ヘラミガキ・刷毛目	ヘラミガキ	刷毛目	7.4	23.8			A I a 1
6	カマド内	土師器(高坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		(6.8)	15.6			A II
7	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・底ナデ	木炭底	28.5	21.9	7.1		A I b 1 ii
8	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		33.4	22.9	(7.8)		A I b 2 i
9	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目 ケズリ	ヨコナデ・刷毛目		28.2	20.9	8.4		A I b 1 iii
10	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・刷毛目		29.1	20.3	7.8		A I a 1 ii
11	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(21.8)	20.5			A I a 2 ii
12	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・刷毛目		19.4	17.2	6.8		A I b 1 ii
13	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		12.7	11.4	5.7		A I b 1 ii
14	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		14.3	15.1	7.3		A II a 1 i
15	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		14.2	15.0	6.2		A II a 1 i
16	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・刷毛目		32.5	(18.0)	20.8	8.4	A III a 2 ii
17	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		28.0	19.2	27.4	8.5	A III a 2 ii
18	床面	土師器(甕)	ヘラミガキ	刷毛目		(29.8)		43.9	9.9	A IV a 2
19	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・ナデ		(8.2)	11.2	13.2		A IV a ii
20	床面	土師器(甕)	刷毛目	ナデ		(7.9)		13.6	3.8	A IV b 2
21	床面	土師器(壺)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ナデ	ヘラミガキ	17.1	9.8	15.2	8.8	
22	床面	土師器(壺)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ナデ		(13.4)	12.4	18.8		
23	堆積土	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(17.8)	21.9			A I a 1 ii
24	堆積土	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		27.3	17.8	26.7	8.0	A III a 2 ii

味をもって張る長胴である。器面調整は、口縁部内外面はいずれもヨコナデ、体部については内外面にナデのみられるもの(7)と、いずれも刷毛目のもの(13)がある。一方、有段のものについては、口縁部が軽く、或は鋭く外反する長胴で器面調整は、口縁部の内外面はいずれもヨコナデ、体

部外面は、ケズリのあるもの（10、12）、刷毛目のもの（11）があり、内面はいずれも刷毛目である。

次に、器高が口径より小さいもの（14、15）は、いずれも頸部に段を巡らし口縁部と体部を区画しているもので、口縁部は直立気味にやや外傾しているもので、頸部径と口縁径がほぼ同じ浅い胴部を有するものである。器面調整は、口縁部内外面はいずれもヨコナデ、体部内外面は刷毛目である。

器高が体径より大きいもの（16、17）は、頸部に段が巡り口縁部と体部を区画し、口縁部は直立外反するもので、いずれも最大径が胴部中半にあるもので（16）は長胴、（17）は球胴のものである。

次に、器高が体径より小さいもの（18～20）は、いずれも口縁部や底部が欠損しており正確な器形は不明であるが、最大径が体部中半にあり楕円形に近い胴形を呈しているものである。

（19、20）は成形の際の巻き上げ痕が段状に内面に残っており、かなり雑な成形をしているものである。器面調整は（18）は体部外面はヘラミガキ、内面は刷毛目、（19、20）は、体部外面は刷毛目、内面はナデである。

壺（第19図21、22）（21）は頸部に段がなく、口縁部が直立外反する長頸の壺で、体部は楕円状を呈し、底部は平底である。器面調整は外面は口唇部近くはヨコナデ、その他頸部から体部そして底面にかけてヘラミガキが施されている。内面の単位は不明である。刷毛目後ナデが施されている。（22）は底部が欠損しており正確な器形は不明であるが頸部に段が巡り、口縁部は内湾気味に外傾しているものである。器面調整は、口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面は単位は不明であるがナデが行われている。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く、堆積土より多量の土師器が出土したが、実測したものは甕2点である。

土師器 いずれも製作に際しロクロを使用していないものである。

甕（第20図23、24） 最大径が口縁部にあり器高が口径より大きいと推定されるもの（1）と最大径が体部にあり器高が口径より大きいもの（2）がある。前者は、頸部に段が巡り、口縁部と体部を区画し、口縁部が外反する長胴である。後者は、やはり頸部に段が巡り、口縁部と体部を区画し、口縁部が外反し、最大径が体部中半にある球胴である。器面調整は、口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部は、内外面ともに刷毛目である。

第7号住居跡（BC15）（第21図）

〔遺構の確認〕 B調査区の西、第6号住居跡の南西約3mの地点の地山面で第8号住居跡と西壁を接する形で検出されたものである。

〔重複〕 第8号住居跡（BC21）によって西壁の北半が切られている。

〔平面形・規模〕 平面形は、方形を基調とした隅丸方形である。規模は長軸（東西）約 5.8 m、短軸（南北）約 5.6 m である。床面積は約 32.5 m² である。

〔堆積土〕 4 層確認できたが 2 層に大別することができる。1 層は礫の入り方の多少により異なりがみられるが、いずれも腐植質土で、主に住居の中央附近に堆積している。2 層は、赤暗褐色のシルトで明褐色の地山のシルトがまじるものであり、壁際より中央にかけて堆積し、一部は、第 8 号住居跡の壁となっている。

〔壁〕 地山をそのまま壁としている。西壁の北半分は第 8 号住居によってこわされており、南東隅の壁は攪乱によって一部こわされている。残存壁高はいずれも 9 cm 前後であり、立ち上がりは比較的急である。

〔床〕 地山をそのまま床としており、ほぼ平坦で固くしっかりしている。南東隅は、攪乱が床面まで及んでおり一部がこわされている。

〔柱穴〕 床面上から検出されたピットは対角線上にある P₁～P₄ のピット 4 個である。これらは位置、形状、深さ等から柱痕は認められなかったがそれに該当するとみられるものである。埋土は、小礫を多く含む褐色のシルト一層のみである。

〔カマド〕 北壁中央にとりつけられている。燃焼部と煙道部よりなる。本体の天井部は既になくシルトで構築されている両側壁も削平されて扁平な残存状態である。燃焼部の規模は幅約 50 cm、奥行約 80 cm で、ほぼ平坦であり、底面は熱を受けて赤変している。又、底面より土師器のカメの下体部分二個体が出土しており、支脚として使用された可能性がある。煙道部へは奥壁との段差もなくそのまま移行しており、やゝ下りながら煙出部に至る。煙出部にはピットは認められない。規模は長さ約 140 cm、幅約 30 cm で、煙道の底面には他の住居のそれと較べて比較的多くの焼土がみられるのが特徴である。長軸方向は N-40°-W である。

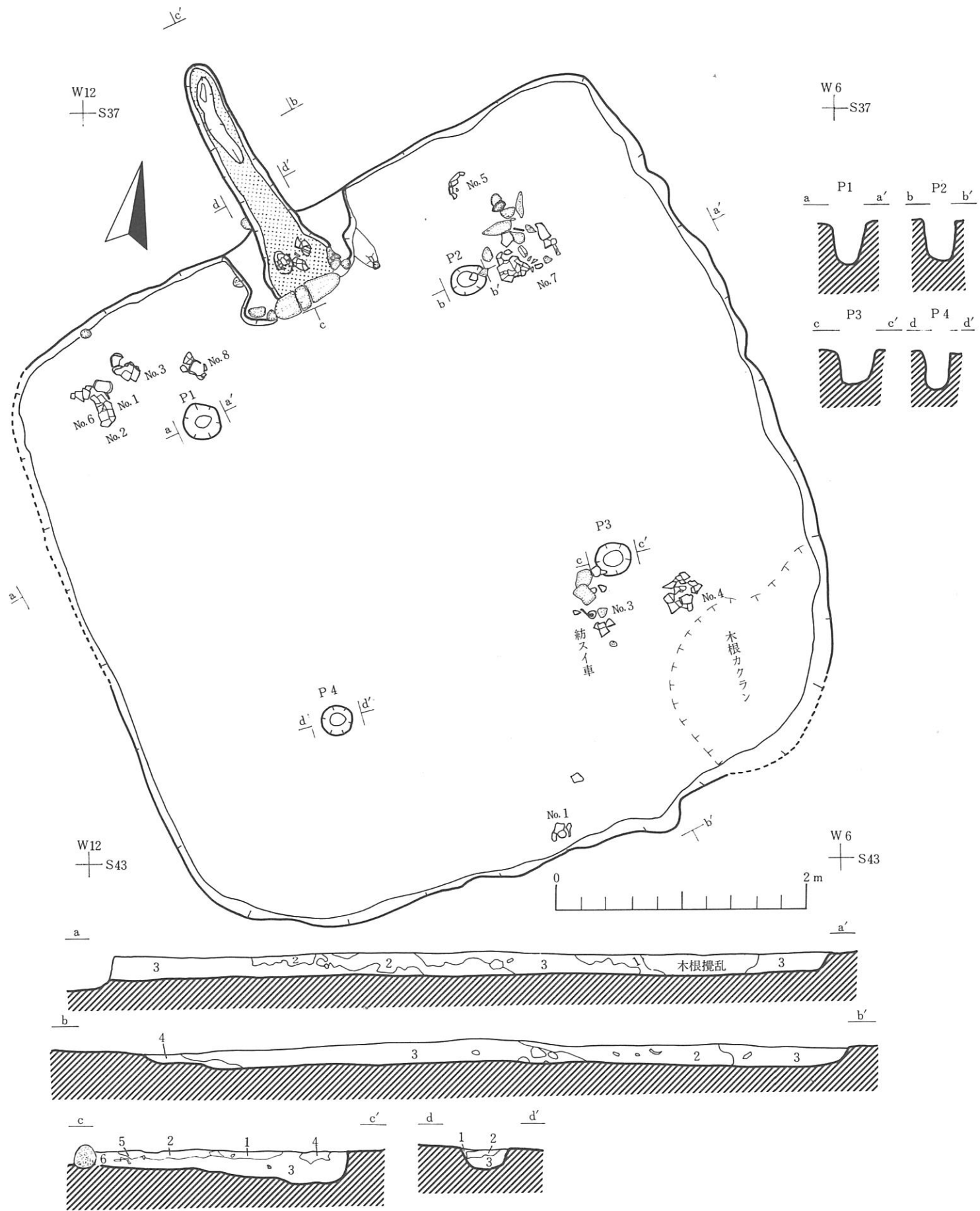
〔貯蔵穴状ピット等〕 いずれも認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用の年代を決定するための資料は、カマド内及び床面出土の土師器、紡錘車等がある。

土師器 完形品、復元されたもの等を含めて実測したものは、高台付坏 1 点、甕 7 点である。いずれも製作に際しロクロ未使用のものである。

高坏（第 22 図 1） 坏部は外面体部下半に段が巡り、それに対応する面にくびれがみられる。器形でみると脚部に接合する近くはやゝ内湾気味で段より上は外傾気味の坏である。

脚部は「八」字形に外反しており、坏部に比較して低い脚部である。器面調整は、坏部外面、口唇部近くにヨコナデがみられる他、坏部、脚部の内外面ともにヘラミガキされ、内面は黒色処理されている。又、外面全体に「朱」が塗られている。なお、坏部の切り離し技法は不明である。



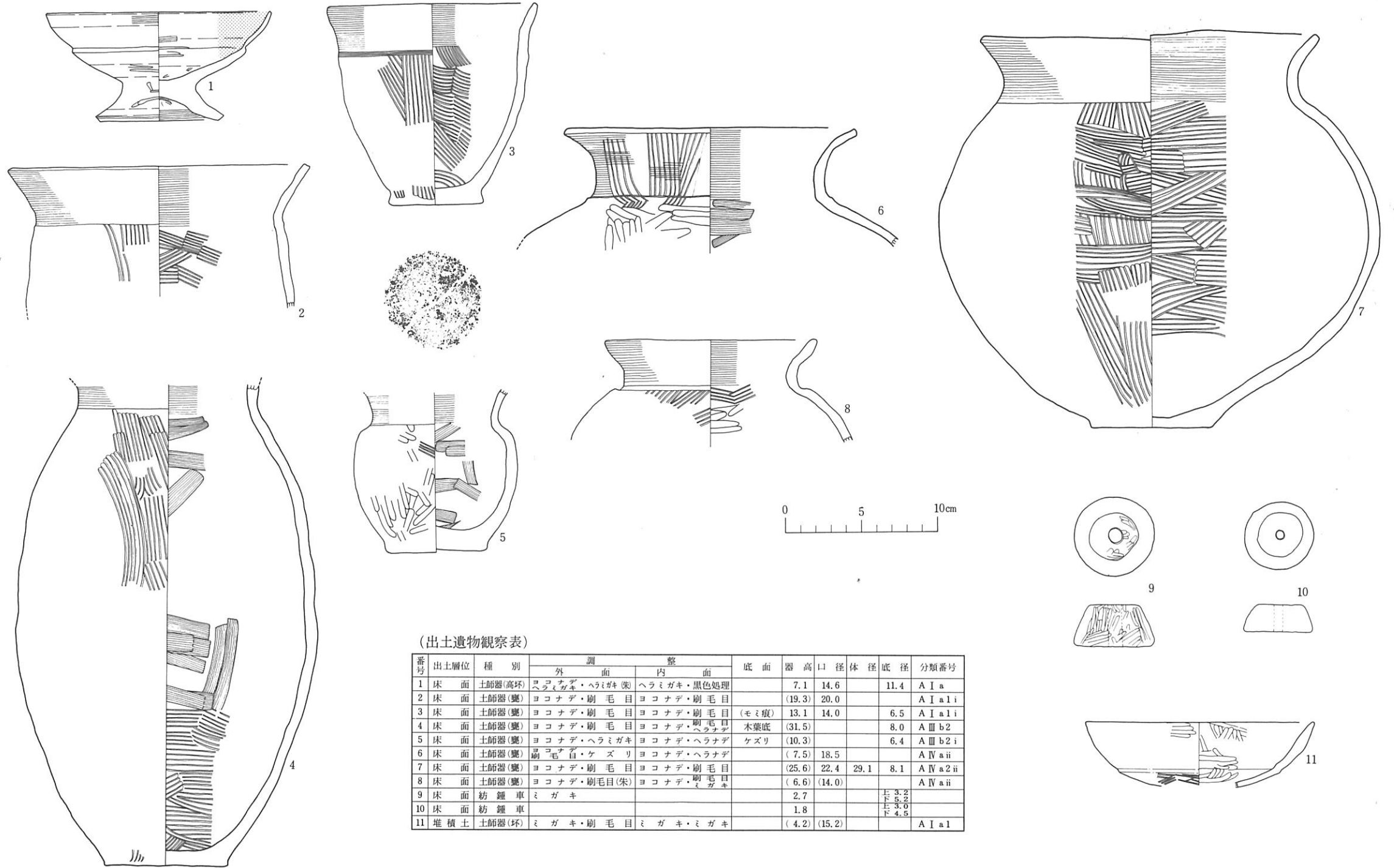
堆積土

大別	層	土色	土性	備考
1	1	7.5YR3/3 暗褐色	腐植質土	木根、攪乱あり、礫少ない
	2	7.5YR3/4 暗褐色	腐植質土	小礫を含む
2	3	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	細かい礫、地山のシルト多量に含む
	4	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	礫が少ない

カマド堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR4/6 褐色	シルト	地山に類似
2	7.5YR4/4 褐色	シルト	焼土が微量、炭化物多量に含む
3	5YR4/4 暗褐色	シルト	炭化物が微量、焼土を多量に含む たき口部より煙道立ち上りまで焼土がびっしりあった
4	7.5YR4/4 褐色	シルト	炭化物、焼土ともに多く含む
5	7.5YR5/8 明褐色	シルト	地山と類似、袖部のくずれたものか
6	2.5YR3/6 暗赤褐色	シルト	焼土

第21図 第7号住居跡



(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調		底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(高坏)	ヨコナデ・ヘラミガキ(朱)	ヘラミガキ・黒色処理		7.1	14.6		11.4	A I a
2	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(19.3)	20.0			A I a 1 i
3	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	(モミ痕)	13.1	14.0	6.5		A I a 1 i
4	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	(31.5)			8.0	A III b 2
5	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ	ケズリ	(10.3)			6.4	A III b 2 i
6	床面	土師器(甕)	刷毛目・ケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ		(7.5)	18.5			A IV a ii
7	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(25.6)	22.4	29.1	8.1	A IV a 2 ii
8	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目(朱)	ヨコナデ・刷毛目		(6.6)	(14.0)			A IV a ii
9	床面	紡錘車	ミガキ			2.7			上 3.2 下 5.2	
10	床面	紡錘車				1.8			上 3.0 下 4.5	
11	堆積土	土師器(坏)	ミガキ・刷毛目	ミガキ・ミガキ		(4.2)	(15.2)			A I a 1

第22図 第7号住居跡

甕（第22図2～8） 最大径が口縁部にあり器高が口径より大きいもの（2、3）と、最大径が体部にあり、器高が体部径より大きいものと、（4、5）小さいもの（6～8）とがある。（2、3）は頸部にわずかに沈線状の軽い段が巡り体部と区画しているもので、口縁部は外傾或は外傾気味のものである。器面調整は内外面ともにヨコナデ体部は内外面ともに刷毛目である。なお（3）は木葉底にモミ痕のあるものである。（4）は口縁部が欠損しているが、胴部が中央でふくらみ上下に長く楕円形状を呈している長胴のものである。器面調整は口縁部の内外面ともにヨコナデ、体部内外面は刷毛目である。内面にはヘラナデ、刷毛目がみられる。（5）もやはり口縁部が欠損しており正確な器形は不明であるが、肩の張る小形の球胴に近いものと思われるものである。器面調整は口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデである。（6～8）は下半部が欠損しており正確な器形が不明なものもあるがいずれも頸部に段の巡るものであり、口縁部が直立外反する球胴の甕であろう。器面調整は、口縁部の内外面ともに一部刷毛目痕を残しているものもあるがヨコナデであり、体部外面は（6）に軽いケズリがみられる他は刷毛目である。内面は（6）がナデ、（8）はミガキがみられるが、他は刷毛目である。（8）の外面は摩滅した部分が多いが「朱」を塗った跡がみられる。

紡錘車（第22図9、10）

紡錘車は2個出土している。いずれも断面が台形を呈する土製の紡錘車である。器面は（9）が細かいヘラミガキ、（10）もやはりヘラミガキが施されているが単位は不明である。

〔堆積土出土遺物〕（第22図11）

土師器 製作に際しロクロ未使用のものである。（11）は、丸底と推定される坏で底部下半に段が巡り対応する内面にもくびれのあるものである。器面調整は外面は段より上はミガキ、下は刷毛目をそのまま残している。内面はヘラミガキされているものである。

第8号住居跡（B C 21）（第23図）

〔遺構の確認〕 B区西端の地山面、第7号住居跡の西壁と接する形で確認したものである。

〔重複〕 第7号住居跡の西壁の北半を切っている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形である。規模は長軸（南北）約5.8m、短軸（東西）約5.7mである。床面積は約33.1㎡である。

〔堆積土〕 4層認められたが3層に大別される。1層は、いずれも黒褐色の腐植質土であり、一部攪乱が及んでいるものである。これらは住居の壁際を除く中央附近に堆積している。北半では一部床面に達している。2層は褐色のシルトで壁際を除く床面に主に堆積している。3層は、暗赤褐色のシルトで地山の黄褐色のシルトを含み、壁際に堆積している。

〔壁〕 地山を壁としているものであるが、東壁の南半は第7号住居跡の埋土を壁としている。残存壁高は南、東壁は25cm内外なのに対して北、西壁は約15cmと残りがわるい。

壁の立ち上がりは比較的急でしっかりしている。

〔床〕 地山をそのまま床としているもので比較的平坦で固い。

〔柱穴〕 床面上から検出されたピットは対角線上にあるピット P₁～P₄ の4個のみである。柱痕跡も認められず他の住居跡に比べて深さは少し浅いものもあるが配置の規則性等からみてそれに該当するものとみてよいものであろう。

〔カマド〕 北壁のほぼ中央にとりつけられている。燃焼部と煙道部よりなる。本体の天井部は既になく、両側壁も上部をかなり削平されているが、シルトを舌状に固めて構築しているものである。燃焼部の規模は幅約0.7m、奥行0.6mで焚口部が「八字」に開いた形である。床面は平坦で焼土が堆積していたが底面はあまり熱をうけた様子がみられない。中央部からカメの下半部が底部を上に乗せた形で出土しており、支脚として使用された可能性が強い。煙道へは特に段差がなく移行している。煙道は長さ約135cm、幅約30cmでやや下り気味にとりつけてあり、特に煙出部にはピットはみられない。長軸方向はN-30°-Wである。

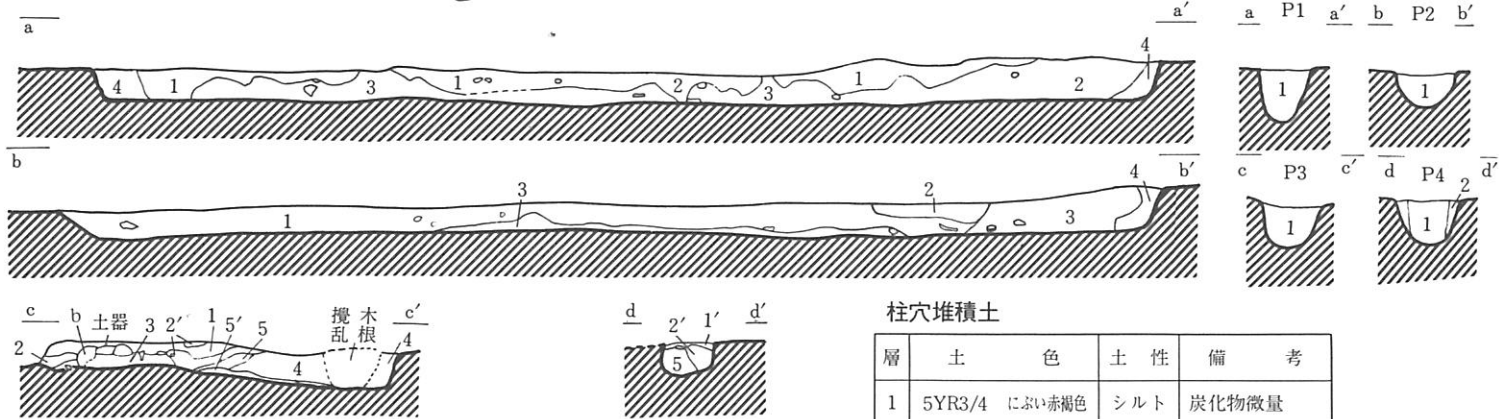
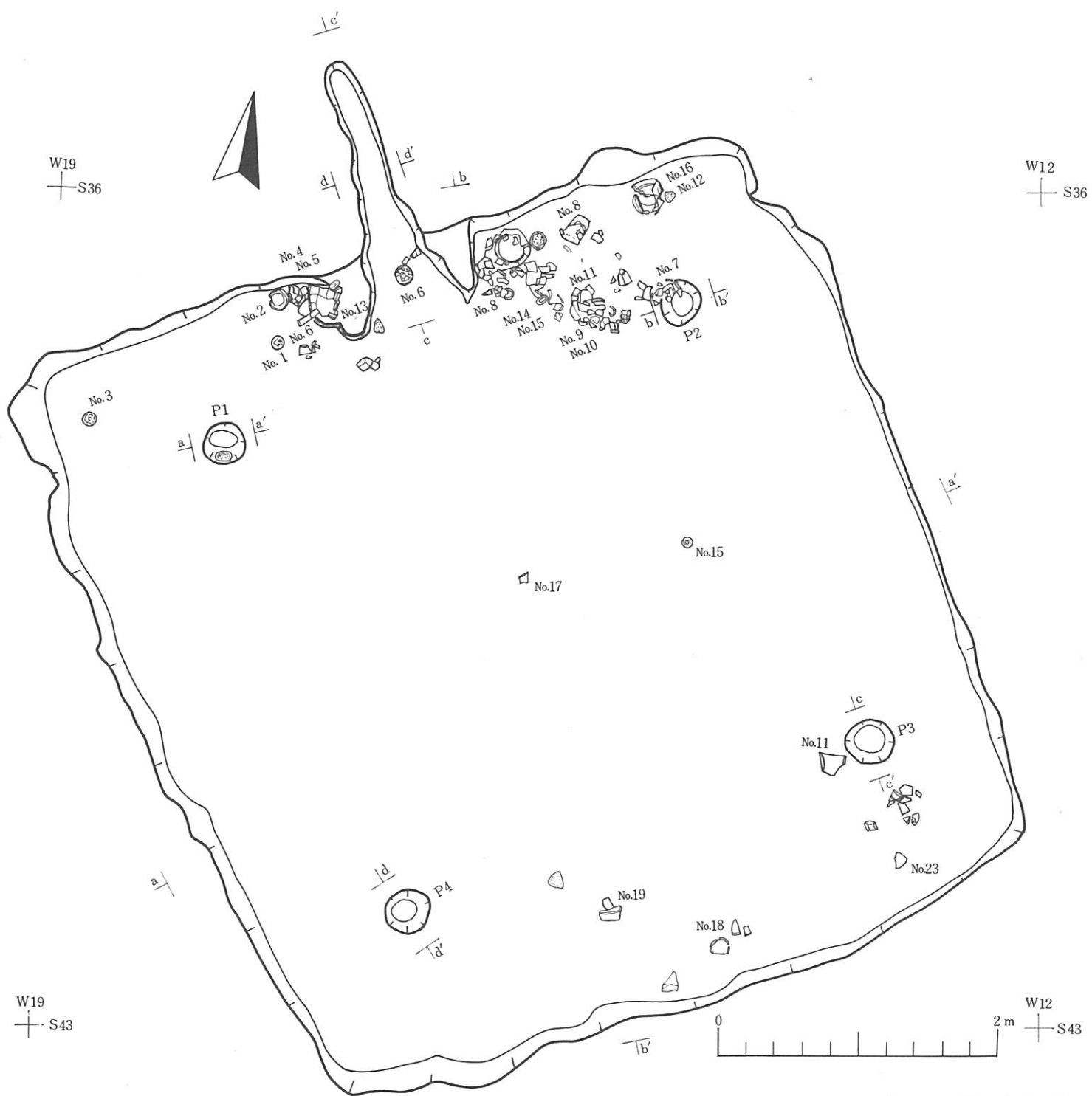
〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用年代等を決定するための資料はカマド内及びカマドの両脇の床面から出土した土師器や紡錘車がある。

土師器 完形品及び復元可能なものを含めて実測したものは、坏4点、甕11点である。いずれも製作に際してロクロ未使用のものである。

坏 (第24図1～4) 底部形態はいずれも丸底のものである。体部下半に段のめぐりものと無段のものがある。(3、4)は体部外面下半に段の巡るものであるが対応する内面に稜(くびれ)はみられない。器形は段から上は内湾気味に立ち上り、口唇部近くは直立気味のものである。段から下はゆるやかな丸味をもって底部へとつづく。器面調整は内外面ともにヘラミガキされており、(3)は内面を黒色処理している。一方、無段のもの(1、2)は、底部近くより内湾直立気味に立ち上る口縁を有する(1)とやや外傾的な立ち上りを示す(2)がある。器面調整は(1)は内外面ともにヘラミガキ、内面は黒色処理がなされているのに対して(2)は、体部外面は口縁部がヨコナデ他は刷毛目である。内面については摩滅のため技法は不明である。

甕 (第24図5～16) 最大径が口縁部にあり器高が口径より大きいものと、最大径が体部にあり器高が体径より大きいものがある。最大径が口縁部にあるものは、頸部に段を巡らし体部と口縁部を区画しているもの(5、6、10～12、14)と、無段のもの(7～9、13、15)とがある。有段のものは、口縁部が外傾するもの(6)と、外反するもの(5、10～12、14)とがある。底部はいずれも底縁部分が張り出しているものがほとんどで、胴部がやや直立気味のものや、ややふくらみもち丸味の強い胴張りのもの等、長胴のものである。器面調整は、口縁部の内外面はいずれもヨコナデである。一方、体部外面は刷毛目、或は刷毛目後ケズリのもの(10～



柱穴堆積土

層	土色	土性	備考
1	5YR3/4 赤褐色	シルト	炭化物微量
2	7.5YR1/8 明褐色	シルト	

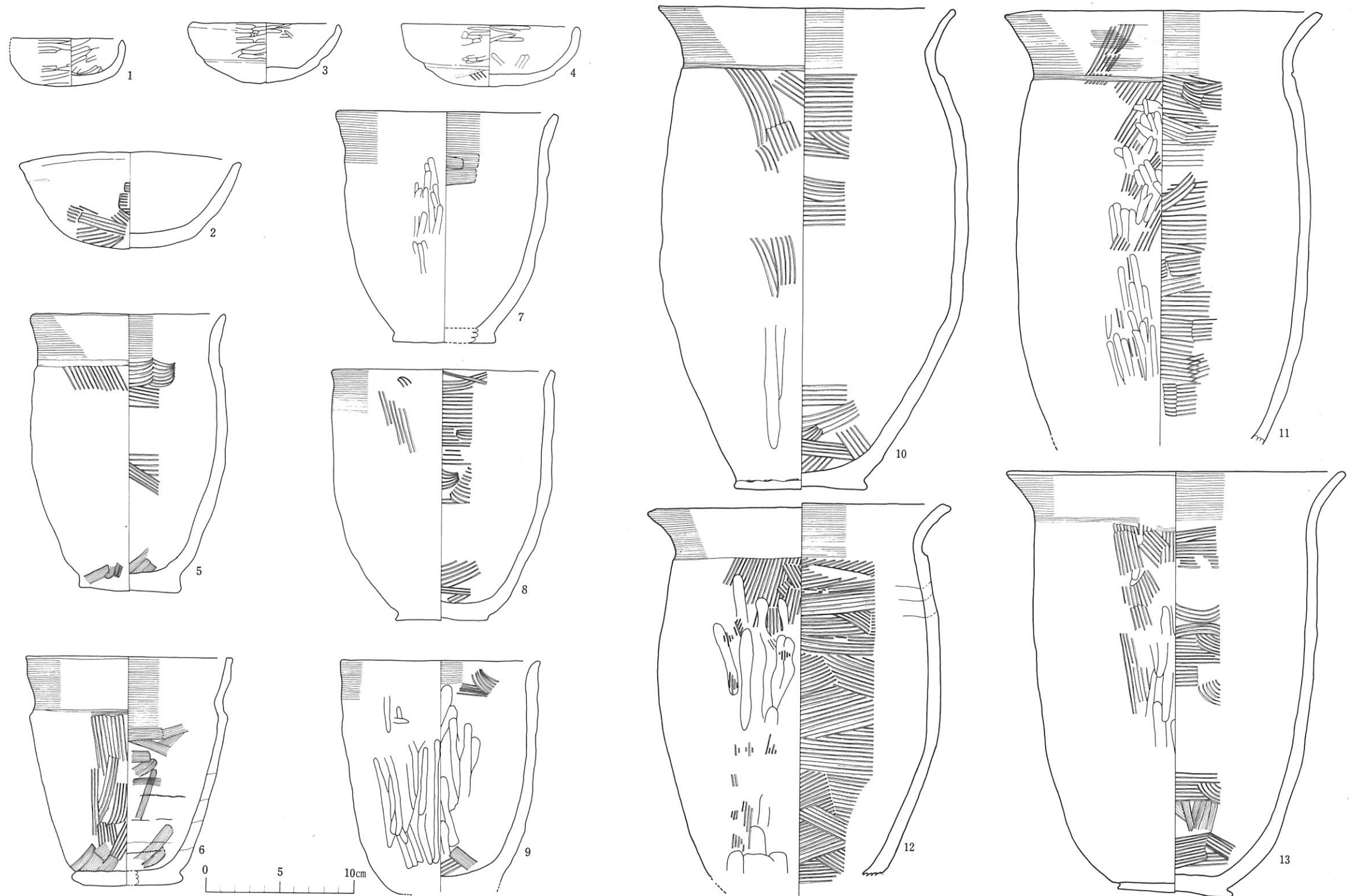
堆積土

大別層	層	土色	土性	備考
1	1	7.5YR3/4 暗褐色	腐植質土	小礫を含む
	2	7.5YR2/2 黒褐色	腐植質土	木根を多く含む攪乱層
2	3	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	2cm内外の小礫を多く含む地山のシルトまじる
	4	5YR2/4 極暗赤褐色	シルト	明黄褐色のシルトを多く含む

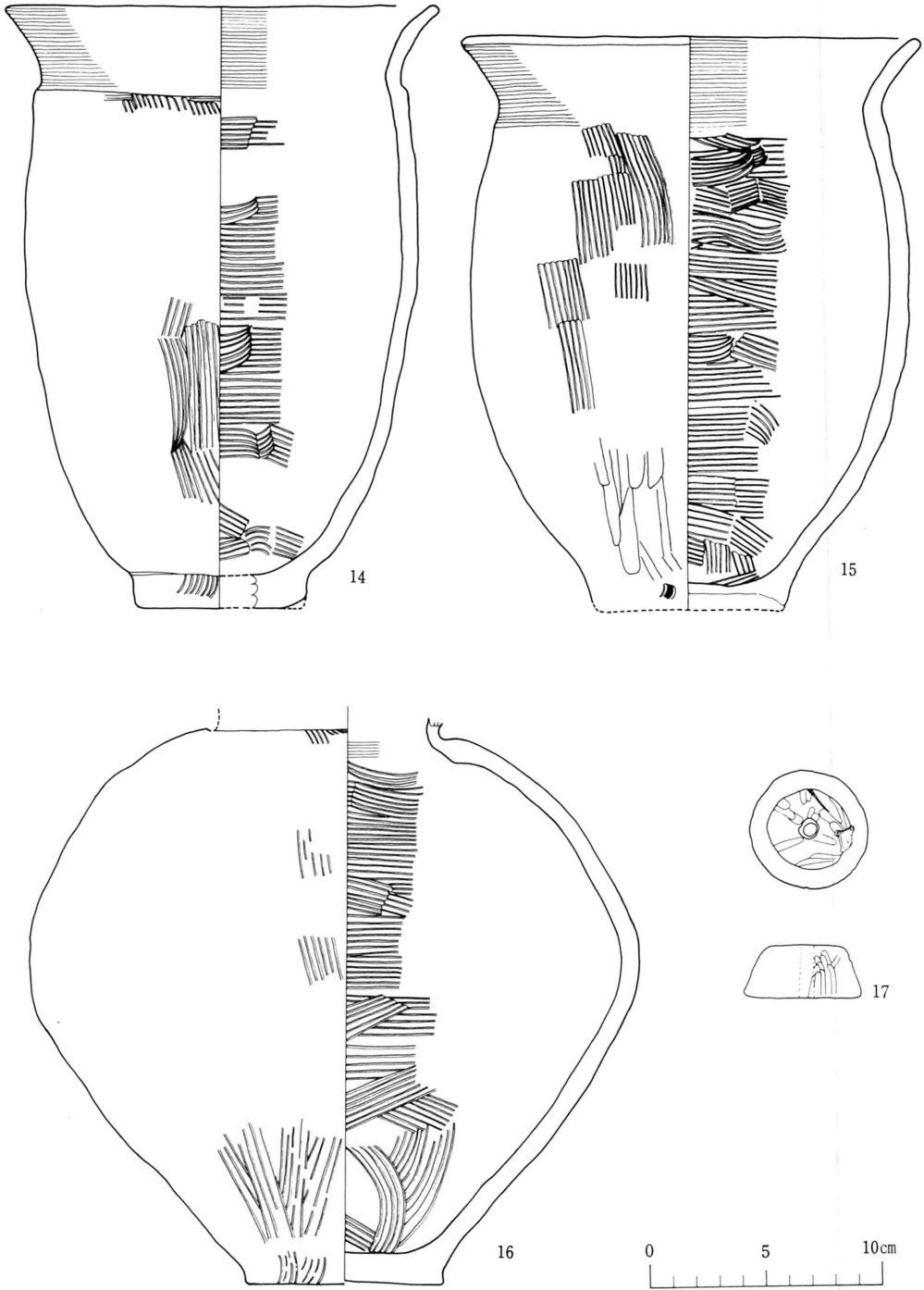
カマド堆積土

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	7.5YR4/3 褐色	シルト	微量の焼土を含む	3'	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	炭化物を含む
2	5YR3/6 暗赤褐色	シルト	焼土に褐色土の混じる	4	7.5YR4/4 褐色	シルト	粘土微量
2'	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	焼土, 炭化物が含まれる	5	2.5YR2/4 暗赤褐色	シルト	焼土
3	5YR3/6 暗赤褐色	シルト	焼土	5'	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	
				6	7.5YR3/3 暗褐色	腐植質土	

第23図 第8号住居跡



第24図 第8号住居跡出土遺物(1)



第25図 第8号住居跡出土遺物(2)

(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ	3.2	7.5			A I c 2
2	床面	土師器(坏)	ヨコナデ・刷毛目		刷毛目	6.4	15.0			A I c 2
3	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		3.9	10.2			A I a 2
4	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.1	12.0			A I a 2
5	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目 ナデ	ヨコナデ・刷毛目 ナデ	木葉底(モミ痕)	18.6	13.0	7.0		A I a 1 i
6	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目 ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ		15.4	13.8	(7.0)		A I b 1 ii
7	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・刷毛目		15.5	14.3	(7.0)		A I b 1 i
8	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・ナデ		16.8	15.4	7.1		A I a 2 ii
9	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ		(15.7)	13.4			A I a 2 ii
10	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目 ケズリ	ヨコナデ・刷毛目		32.1	20.0	8.8		A I a 2 ii
11	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・刷毛目		(28.7)	21.4			A I b 1 i
12	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目 ケズリ	ヨコナデ・刷毛目		(24.6)	20.3			A I a 2 ii
13	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目 ケズリ	ヨコナデ・刷毛目 ナデ		28.5	22.8	7.7		A I b 2 ii
14	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		25.9	18.8	(7.2)		A III a 2
15	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目 ケズリ	ヨコナデ・刷毛目		24.8	20.0	(8.0)		
16	床面	土師器(甕)	刷毛目	刷毛目		(24.4)		26.3	8.5	
17	床面	紡錘車	ミガキ		上底3.4 下底5.0	2.3				

12) や、底部近くにナデの認められるもの(5、6)等がある。(5)の底部は木葉痕であるがモミ痕が認められる。内面については刷毛目(10~12、14)、刷毛目後ナデのもの(5、6)がある。

無段のものは、口縁部がやや直立気味のもの(8、9)と外反するもの(7、13、15)とがある。器形は(15)が体部中半がふくらみ胴張りを呈している他は直立気味の胴部を有するものである。器面調整は、口縁部の内外面はいずれもヨコナデ、体部外面はミガキのみられるもの(7、9)下半にケズリのあるもの(13、15)等があり、内面は、刷毛目(8、15)、ナデ(7、9、13)等がある。

最大径が体部にある(16)は口縁部が欠損しているため正確な器形は不明であるが体径より器高の高い胴部中半の張りの強い球胴の甕とみられるものである。器面調整は体部の内外面ともに刷毛目である。

紡錘車(第25図17) 1個出土している。断面形が台形状を呈する(上底3.4cm、下底5.0cm高さ2.3cm)土製のもので表面は細かいミガキが施されている。

第9号住居跡(A I 03)(第26図)

〔遺構の確認〕 調査区の北側、第6号住居跡の東、約1.5mの地点の地山で検出したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 北東隅が少し東に張り出しているが、ほぼ隅丸方形に近いものである。規模は長軸(南北)約5.45m、短軸(東西)約5.35mである。床面積は約29.2㎡である。

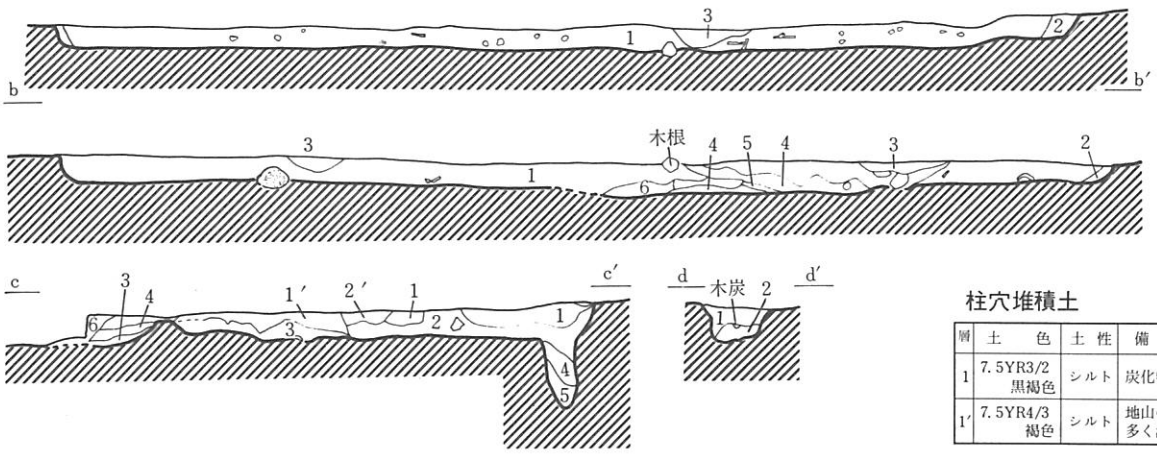
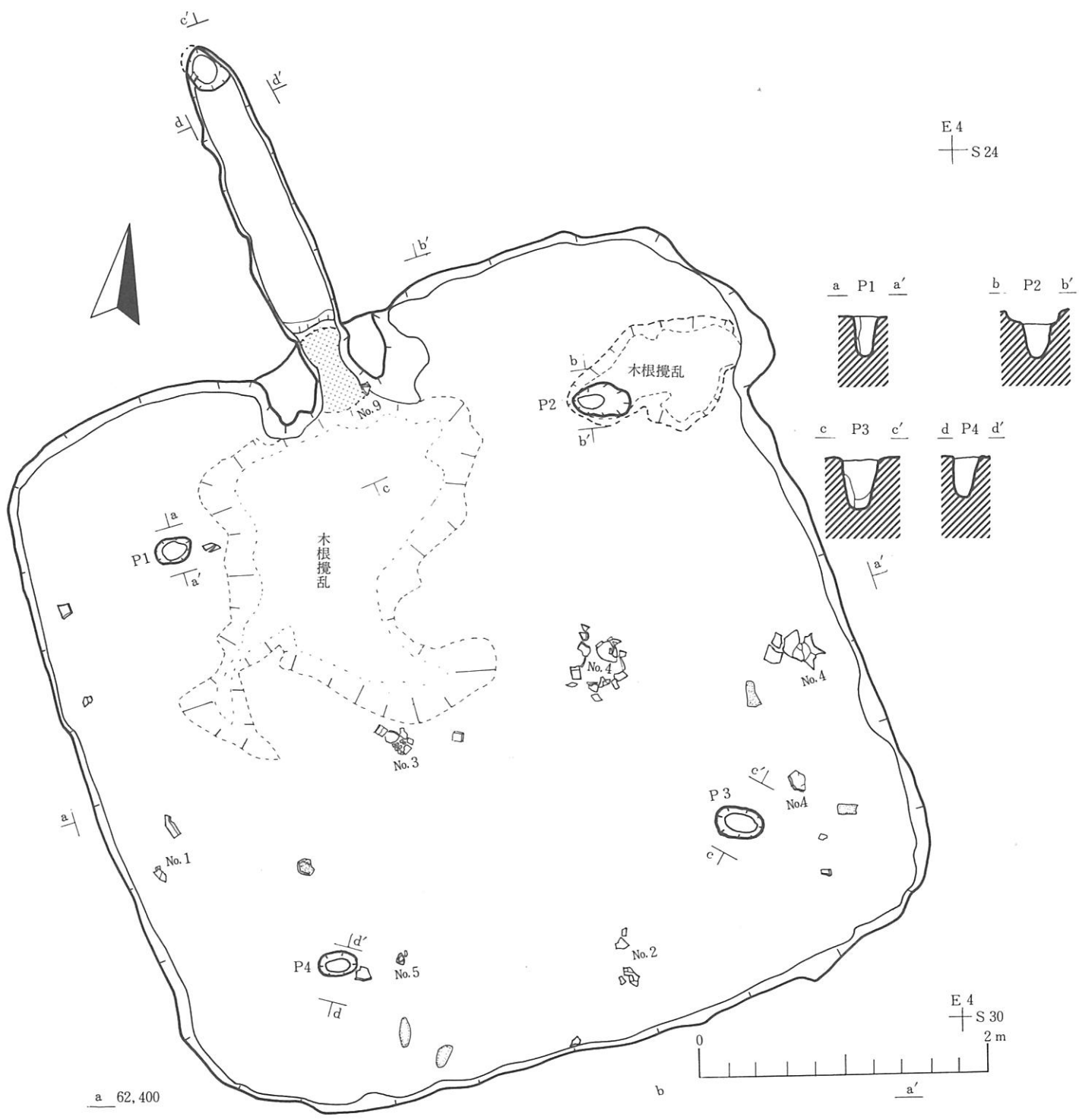
〔堆積土〕 部分的には細分されるところもあるが、全体としては2層に大別される。1層は

W3
S24

E4
S24

W3
S30

E4
S30



柱穴堆積土

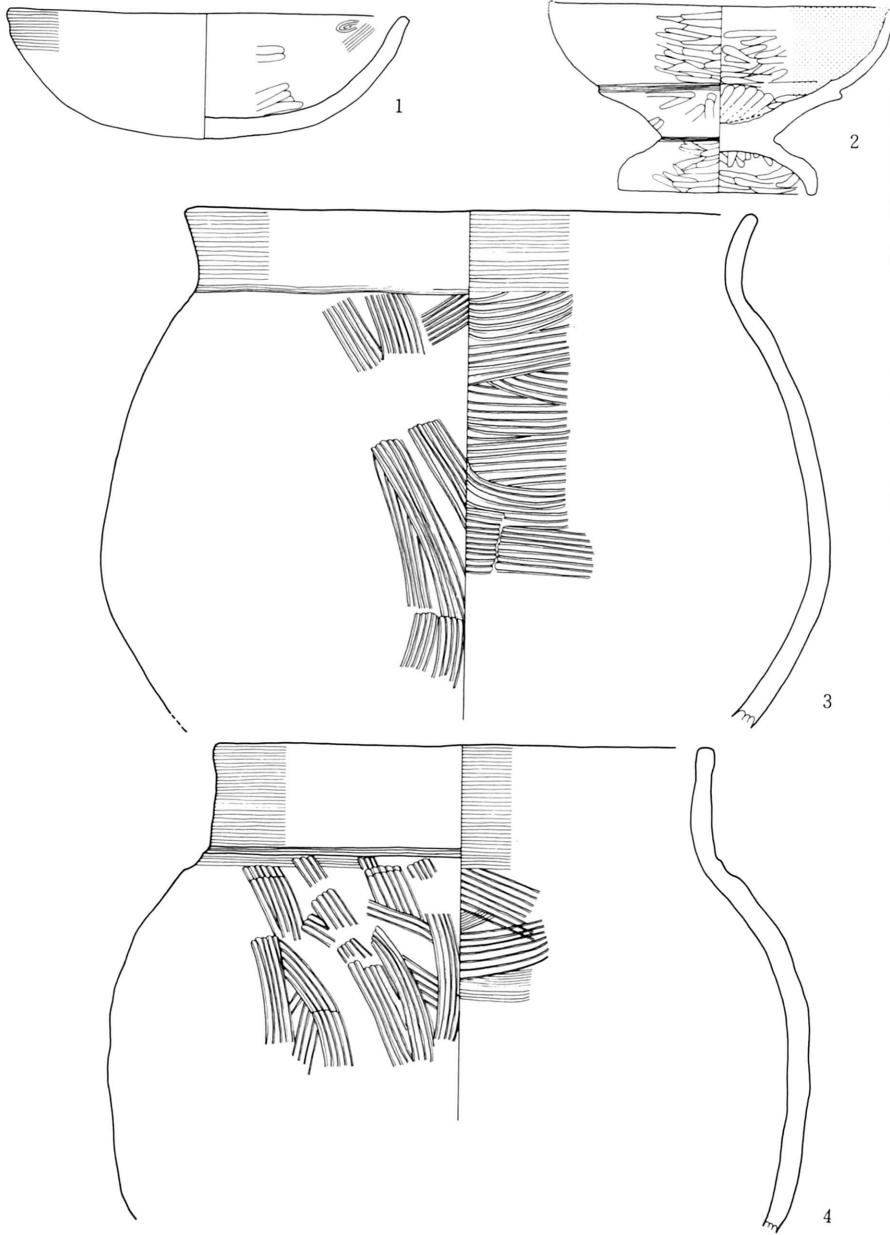
層	土色	土性	備考
1	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物微量
1'	7.5YR4/3 褐色	シルト	地山のシルト 多く混じる

堆積土

層	土色	土性	備考
1	5YR3/2 暗赤褐色	シルト	シルト質の土で礫木根を多く含む
2	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	地山のシルト質土が混入している
3	5YR2/2 黒褐色	腐植質土	腐植質の土であり、少ししまりあり
4	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	粘性なし、パサパサしている
5	10YR5/8 黄褐色	シルト	地山のブロック
6	5YR3/2 暗赤褐色	シルト	地山との攪乱

カマド、煙道部堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR4/6 褐色	シルト	炭化物、焼土をわずかに含む (粘土? 人為的にかぶせたもの)
1'	10YR4/6 褐色	シルト	1層より焼土を多く含む
2	5YR3/3 暗褐色	シルト	固くしまり粘性なし、炭化物微量
2'	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	1層より汚れが強い
3	5YR3/6 暗赤褐色	シルト	焼土
4	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	固くしまり、黄色のシルト少し混じる
5	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	固くしまる、少し礫及び炭化物を伴う
6	10YR4/6 褐色	腐植土	



第27図 第9号住居跡

0 5 10cm

暗赤褐色のシルト質土で壁際を除くほぼ全域に堆積し、2層は暗褐色のシルトで主に壁際に堆積している。中央部から北のカマド前にかけて攪乱層が床下まで及んでいる。

〔壁〕 地山を壁としているが全体に削平をうけ残存状態はあまり良好とはいえない。壁高は西壁の約18cmが最高である。壁の立ち上がりは急な立ち上りを示している。

〔床〕 地山をそのまま床としているが、礫が多く露出しており凹凸が激しい。又、カマド前から中央部にかけてと、北東隅は木根による攪乱が床面下まで及び床面がこわされている。

〔柱穴〕 住居内に認められたピットはP₁～P₄の4個であり、これらは対角線上に位置するものであり、深さ、形状等から柱穴とみられるものである。なお、P₂は上部が木根によりこわされている。

〔カマド〕 北壁ほぼ中央にとりつけられている。燃焼部と煙道部よりなる。本体は天井部が既になく両側壁部分も削平をうけて住居の外の地山面とほぼ同じで扁平になっていたものである。両側壁は明褐色シルト及び褐色土の混じった土で構築されていたものである。燃焼部床面は奥壁際より前方に緩かに傾斜している。側壁内面と底面は熱を受けて赤変し固くなり、中央にはやはり赤変した支脚石が置かれていた。床面から約5cmの段差をもって煙道部へと移行している。煙道部は長さ約215cm、幅約45cmで緩い傾斜をもって先端の煙出部へと続く。煙出部には煙道底面より約40cm低い径約20cmのピットが存在する。長軸方向はN-30°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料は床面出土の土師器がある。

土師器 完形品及び復元可能なものを含めて実測したものは坏1点、高坏1点、甕2点である。いずれも製作に際しロクロ未使用のものである。

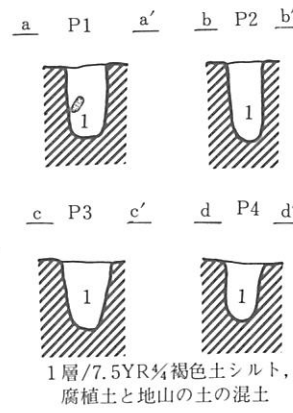
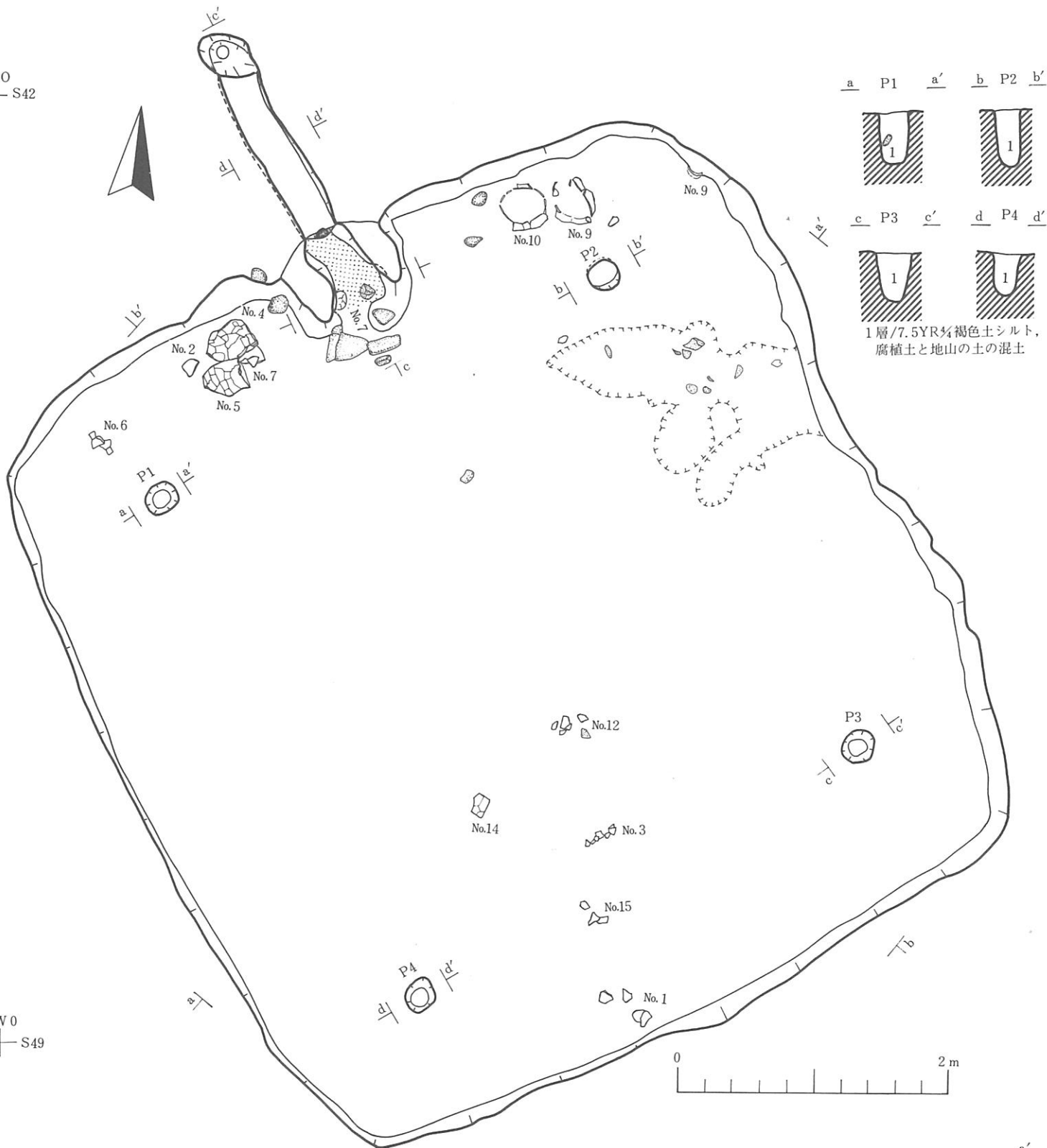
坏 (第27図1) 底部が丸底のもので、体部外面は無段、内湾気味の口縁部を有するものである。器面調整は外面口縁部近くにヨコナデがみられ、それにより下はヘラミガキとみられるが単位は不明である。又、内面はヘラミガキが施されている。

高坏 坏部の形態は外面体部下半にはっきりした段を有し対応する内面に陵が巡り、内湾気味の口縁部を有するもので「八」の字に開いたやや内湾気味の脚部をもつものである。器面調整は、坏部、脚部の内外ともにヘラミガキが施され外面には「朱」塗られ、内面は黒色処理されている。なお、坏部の切り離し技法は脚部接合の際のナデ、ミガキ調整のため不明である。

甕 (第27図3、4) いずれも最大径が体部にあるもので下半から底部にかけて欠損しているので推定の域を出ないが、器高が体部径より小さいと思われるものである。(3)は頸部に沈線が巡り、口縁部が外反するもので、(4)は頸部に段を有し口縁部は直立気味に立ち上がるもの

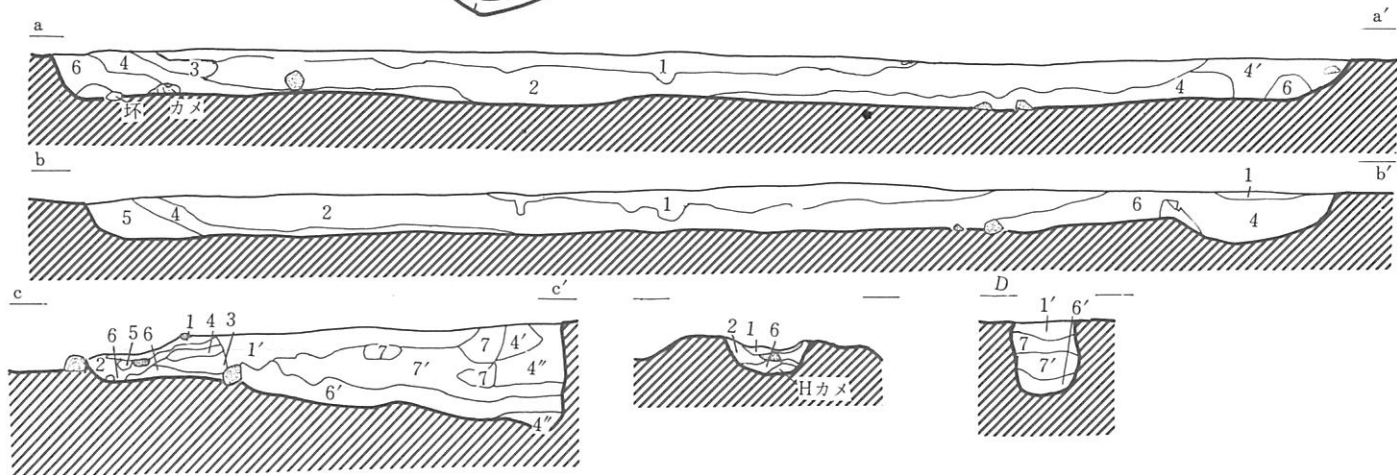
EWO
S42

E8
S42



EWO
S49

E8
S49



堆積土

大別	層	土色	土性	備考
1	1	7.5YR2/2 黒褐色	腐植質土	部分的に粘状バミスを含む (7.5YR8/2 灰白色) 厚さ2~5cm
2	2	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を微量に含む, 礫を多く含む
	2'	7.5YR3/3 暗褐色		2層の特に礫の多い部分
3	4	10YR2/3 黒褐色	シルト	しまりがあり粘性もかすかにある礫を多少含み 黄褐色バミスが微量混じる
	4'	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	色調的に異なるのみ
4	5	10YR4/4 黒褐色	シルト	しまりがよく礫を多く含む 地山のシルトを多く含む
	6	7.5YR7/3 褐色	シルト	しまりあり礫を少し含む

カマド堆積土

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	腐植質土	礫を多く含む	4''	10YR5/6 にぶい黄褐色	シルト	炭化物が微量含まれる
1'	7.5YR2/3 黒褐色		ほぼ同じ	5	10YR2/3 暗褐色	シルト	炭化物を多量に含む
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土をわずかに含む	6	10YR4/6 褐色	シルト	焼けている, 炭化物含まず
3	10YR4/6 褐色	シルト	炭化物を微量に含み焼土を含む	6'	7.5YR2/3 黒褐色	シルト	焼土が混じる
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を微量に含む	7	7.5YR5/8 明褐色	シルト	焼土炭化物混じる
4'	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	4層の土に少し黒褐色土が混じる				

第28図 第10号住居跡



第29図 第10号住居跡出土遺物

(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調 整		底面	器高	口 径	体 径	底 径	分類番号
			外 面	内 面						
1	床 面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・	ヘラミガキ	5.4	15.0			A I b 1
2	床 面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ	5.3	16.2			A II a 2
3	床 面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		(6.1)	(17.0)			A I b 2
4	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	31.9	20.9		6.4	A I a 1 ii
5	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	ナ デ	28.4	19.9			A I b 2 ii
6	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	18.9	12.2	14.8	7.1	A III a 2 i
7	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・	木葉底	13.5	11.0		6.3	A I a 1 ii
8	カマド内	土師器(甕)	刷毛目・刷毛目	刷毛目・刷毛目		11.6	11.1		7.9	A II a 1 ii
9	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	28.9	24.9	28.0	7.8	A III a 1 ii
10	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	30.2	23.9	34.0	8.9	A IV b 2 ii

である。器面調整は口縁部の内外ともにヨコナデ、体部は内外ともに刷毛目である。

第10号住居跡（B E 50）（第28図）

〔遺構の確認〕 B調査区のはぼ中央、第4号住居跡の西約3mの地山面で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は西壁隅がそれぞれやや角張っているがほぼ隅丸方形といってよいものである。規模は、長軸（東西）約6.3m、短軸（南北）約6.0mである。床面積は約37.8㎡である。

〔堆積土〕 6層認められたが4層に大別される。1層は所々に厚さ2～5cmの灰白色の粉状パミスの混じるもので、黒褐色の腐植質の強い土である。主に、住居の中央部に皿状に堆積し床面には達していない。2層は礫の多い少いの違いはあるが、いずれも炭化物を微量に含む暗褐色のシルトで、壁沿いを除くほぼ全域に堆積し中央に寄るに従って薄くなっており中央近くでは床面に達している。3、4層は地山の明褐色シルトの混じりの多少はあるが、黒褐色、褐色のシルトでいずれも壁際より中央に向かって堆積しており、中央に寄るほど薄くなっている。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているものである。残存壁高は最も良好な西壁が約25cmで、他は20cm前後であり、壁の立ち上がりは比較的急である。

〔床〕 地山をそのまま床としており、全般的に平坦で固い。北東部分に一部攪乱が床面まで及んでいるところがある。

〔柱穴〕 床面上から検出されたピットは対角線上にあるP₁～P₄の4個のみである。これらは位置、深さ形態等その規則性からみて、柱痕は認められないけれども、それとみてよいものであろう。なお埋土は褐色のシルト1層のみである。

〔カマド〕 北壁の中央にとりつけられている。燃焼部と煙道部からなる。本体の天井部は既になく、シルト質白色粘土で構築された両側壁が残存したものである。燃焼部は奥行約60cm、幅約40cmで、底面はほぼ平坦で焼土が薄く堆積していた。焚口部附近は、カマド本体を構築する時に使用したとみられる径約10cm、長さ20cm前後の楕円状の川原石が2、3個倒れていた。又、燃焼部内には支脚石として使用したとみられる赤変した川原石がありそのそばから小形の甕がふせた形で出土した。煙道部は長さ約170cm、幅約30cmの規模をもつ。これは地山とくりぬいたトンネル状の煙道で底面は煙出部へ向って緩い下り傾斜をもっている。煙出し部に浅い皿状の掘り込みがある。長軸方向はN-35°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料はカマド内やカマドの両脇の床面やその他の床面より出土した土師器がある。

土師器 完形品、復元可能なものを含めて実測できたものは坏3点、甕7点である。これら

は、いずれも製作に対してロクロ未使用のものである。

坏（第29図1～3） 底部形態が丸底のもの（1、3）平底風のもの（2）がある。体部外面下半に段がケズリ、ミガキのために、浅い沈線となって巡るもの（2、3）その全ったくないもの（1）とがある。なお、沈線の巡るものの内面に対応するくびれはみられない。

前者は沈線より上は外傾気味の口縁を有し、下はやや直線形で底部に至るわずかに丸味が残る。器面調整は内外面ともにヘラミガキがなされ、内面黒色処理が施されている。後者は、やや内湾気味の立ち上がりを示し、口唇部近くがわずかに直交気味の口縁で、底面は中央部がややへこみほぼ平面に近い。器面調整は内外面ともにヘラミガキである。

甕（第29図4～10） 最大径が口縁部にあり器高が口径より大きいもの（4、5、7）と同じく口径より器高の小さいもの（8）と、最大径が体部にあり器高が体部径より大きいもの（6、9）と同じく器高が体部径より小さいもの（10）がある。最大径が口縁部にあるものうち（4、5）は、頸部に軽い段が巡り体部と区画しているもので、口縁部が外反する長胴のものである。（5）は、口縁径とほぼ同じ体部径が下半にある下ぶくれを呈している長胴である。（7）は、頸部に段が巡り体部と区画し、口縁部が直立気味のやや張る小形の甕である。器面調整は、口縁部内外面はいずれもヨコナデである。体部については、（4、5）は外面に一部ケズリがみられ（7）は刷毛目である。内面は、一部不明なところもあるがほぼ刷毛目である。（8）は、頸部に段が巡り体部と区画し、口縁部が直立気味の少し肩の張る小形の甕で、器面調整は口縁部の内外面は一部刷毛目痕を残しているがヨコナデ、体部内外面は刷毛目である。

次に、最大径が体部にあるものについてみると、（6、9）は頸部に段が巡り体部と区画しているもので、（6）は口縁部が直立する器高に比べて体部径が小さい張りの少い長胴に近い形のものである。（9）は、口縁部が直立外反する最大径が胴部中半よりやや上にある球胴である。

（10）は、頸部に段のないもので口縁部が直立外反する最大径が胴部中半にある球胴である。これらの器面調整は、口縁部の内外面はいずれもヨコナデ、体部については（6）の外面下半にケズリがみられる他は内外面ともに刷毛目である。

第11号住居跡（C E 15）（第30図）

〔遺構の確認〕 C調査区の南西地域、第12号住居跡の南約4 m、第19号住居跡の東約3.4 mの地点の地山で確認したものである。

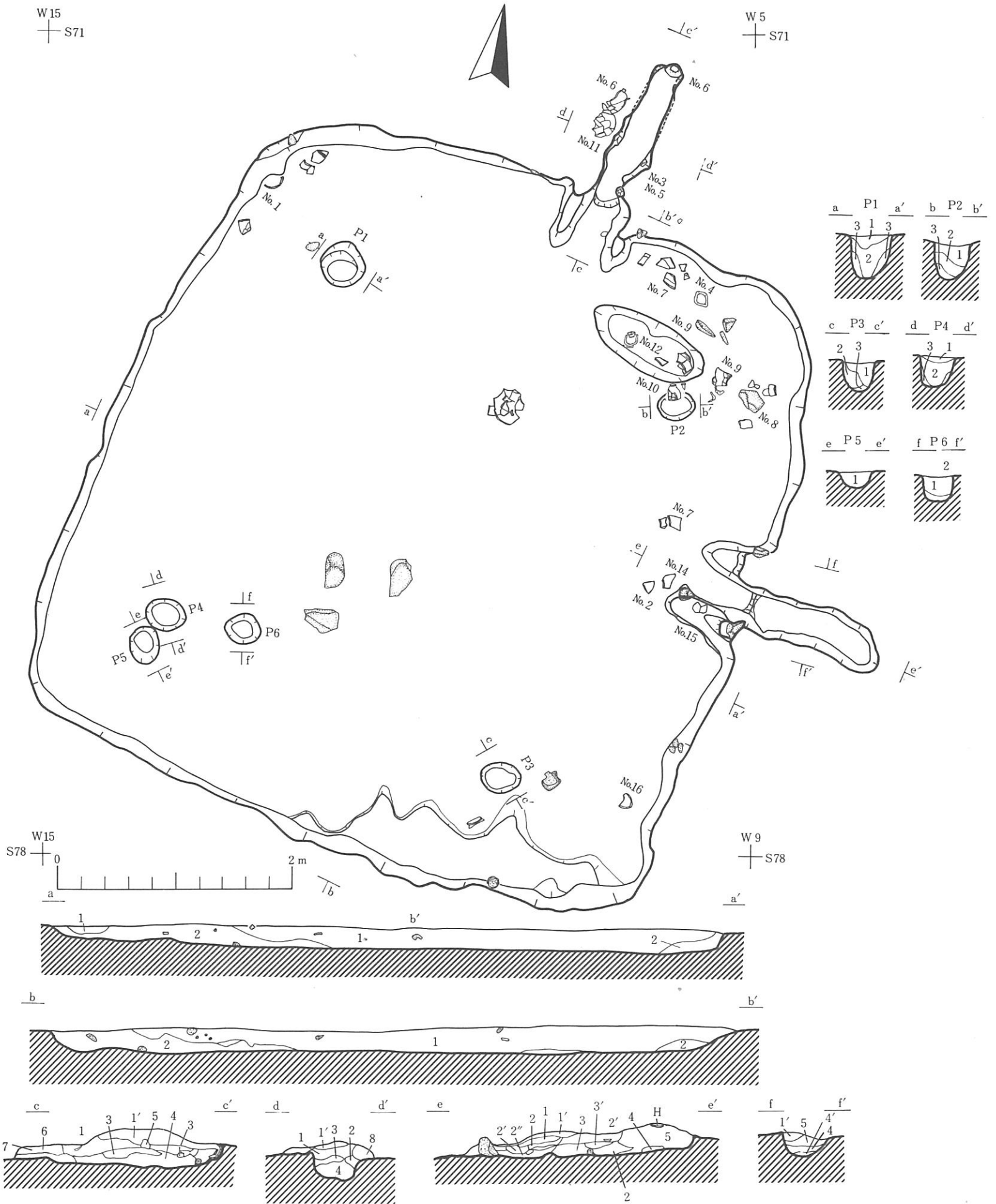
〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は、南東隅はやや丸味が強いが、ほぼ隅丸方形といってよい。規模は、長軸（南北）約5.8 m、短軸（東西）約5.7 mである。床面積は、約33.1 m²である。

〔堆積土〕 2層に大別される。1層は、黒褐色の腐植質土で、壁沿いを除いてほぼ全域を覆っている。2層は、褐色のシルトで壁沿い、特に、東、南側では流れこんだような形で堆積し

W15
S71

W5
S71



堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	腐植質土	炭化物を微量含む
2	10YR4/3 におい黄褐色	シルト	焼土微量・砂質シルト混じる

カマド(南)堆積土

層	土色	土性	備考
1	10 YR 3/3 暗褐色	シルト	焼土微量含む
1'	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	1層が形よく焼土の小品を多く含む
2	10 YR 4/5 におい黄褐色	シルト	汚れが一番つよい炭化物微量
2'	10 YR 4/4 褐色	シルト	焼土微量
2''	2.5 YR 6/3 におい黄色	シルト	焼土・炭化物微量
3	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物含む
3'	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	ブロック状の焼土・炭化物を多く含む
4	5 YR 3/3 暗赤褐色	シルト	焼土・炭化物
4'	5 YR 5/6 明赤褐色	シルト	焼土・炭化物なし
5	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土の小ブロック炭化物含む

カマド(北)堆積土

層	土色	土性	備考
1	2.5 YR 7/6 明褐色	シルト	木根多し
1'	10 YR 4/4 褐色	シルト	腐植土による汚れつよい
2	10 YR 5/6 黄褐色	シルト	炭化物・焼土が含まれている
3	2.5 YR 3/4 極暗赤褐色	シルト	焼土・固くなっている
4	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	焼土・炭化物・スス状のもの多く含む
5	2.5 YR 5/4 におい赤褐色	シルト	焼土ブロック
6	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土小ブロック点在
7	10 YR 3/3 暗褐色	腐植質土	
8	10 YR 3/2 黒褐色	々	炭化物、スス状のもの混じる

柱穴堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
2	10YR3/2 黒褐色	腐植質	
3	10YR3/2 黒褐色	腐植質	地シルトまじる

第30図 第11号住居跡

ている。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているが、南東隅は、攪乱が及んでおり壁面に出入りが多い。残存状況は、最も残りの良い東壁で約20cmであり、西壁は約11cmしかない。壁の立ち上がりは緩かである。

〔床〕 地山をそのまま床面として使用しているもので固くしまっているが、小礫が顔を出し小さな凹凸が激しい。床面は、西から東へわずかに傾斜している。なお、南東隅に床面より10cm内外高い不整形な張り出し部分が存在するが性格は不明である。

〔柱穴〕 床面上から検出されたピットは全部で7個である。そのうち、対角線上にあるP₁～P₄ピットが、柱痕は確認されなかったが、その位置や形態等からみて柱穴に該当するものと思われる。

〔カマド〕 北壁やや東寄り及び、東壁やや北寄りの2ヶ所にとりつけられている。いずれも燃焼部と煙道からなり、天井部は崩落、削平されてすでない。北壁のカマドは、両側壁の残存状況が悪くシルトで構築された扁平で舌状を呈した側壁が残っているのみである。燃焼部は、奥行約70cm、幅約34cmの規模をもち、底面はほぼ平坦で焼土が堆積していた。奥壁右側には、高坏の脚部がつきささるような形で存在した。煙道部へはわずかな段差をもって移行している。煙道部は、長さ120cm、幅約34cmの規模で、煙出部にはピットは認められない。ただ、煙出部の壁面に土師器の甕の下半部分を底部を下にし、やや上方を向ける形で使用していた。なお、煙道の西脇には、球胴の甕及び煙出部に使用された長胴の甕の上半部分が黄褐色シルトの中に埋まる形で存在した。長軸方向はN-1°-Wでほぼ磁北と一致している。

次に、東壁のカマドは、両側壁は黄白色のシルトで構築されており、右側壁の先端部にはおさえとして、川原石が使用され、その他焚き口近くには、天井等の本体を構築した時に使用したとみられる楕円状の川原石（径約10cm、長さ25cm）が倒れていた。なお、両側壁は熱を受け内部まで赤変していた。燃焼部は、奥行約70cm、幅約30cmで床面はややくぼみ、やはり焼土の堆積が認められた。煙道部へはわずかな段差をもって移行している。煙道は長さ約110cm、幅35cmで、煙出部のピットはみられない。上部が削平されているため、皿状に残っているだけである。長軸方向はN-103°-Eである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 カマド右前の床面には楕円状の長軸約110cm、短軸約44cm、深さが最大10cm内外の皿状のピットがある。床面より土師器の甕が出土しており人為的な施設とも考えられる。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料は、カマド内、及び煙道、床面等より出土した土師器がある。

土師器 完形品、復元可能なものを含めて実測したものは、坏3点、高坏2点、甕7点であ

る。いずれも製作に際してロクロ未使用のものである。

坏（第31図1～3） 底部形態が丸底を呈するものである。（1）は体部外面下半に沈線を巡らし（2）は段を有するもので、いずれも対応する内面にはくびれはない。口縁部は内湾気味に外傾するものである。器面調整は外面は口縁部から底部にかけてヘラミガキ、（1）は底部に一部刷毛目が残る。内面はいずれもヘラミガキで黒色処理されている。（3）は内湾気味の口縁部の破片で器形も確かではないが二次加熱を受けて赤変しているものである。

高坏（第31図4、5） 外面体部下半にケズリによる軽い段が巡っており、口縁部は、内湾気味に外反する坏部である。器面調整は、内外面ともにヘラミガキ、内面は黒色処理されている。又、外面には、「朱」が塗られている。（5）は、口縁部が欠損しているので正確な器形は不明であるが、脚部が「八」字に大きく開き坏部に比べて低い脚部を有する大形の高坏である。体部外面下部には軽い沈線が巡っている。器面調整は磨滅のため単位不明のところが多いが、内外面ともヘラミガキである。又、内面は黒色処理され、外面には「朱」が塗られている。なお、底部の切り離し技法は不明である。

甕（第31図6～11） 最大径が口縁部にあり、器高は口径より大きいもの（6～10）最大径が体部にあり、器高が口径より小さいもの（11）がある。前者は、頸部に段が巡り体部と区画しているもので一部下半の欠損し、正確な器形が不明なものもあるが、いずれも長胴のものである。（10）の底部木葉痕の中に「モミ」痕が認められる。口縁部は強く「く」の字に外反するもの（7、8）外傾するもの（9）直立気味のもの（10）がある。器面調整はいずれもヨコナデであり体部外面は、一部ケズリのみられるもの（6、8、9）の他は、いずれも刷毛目である。後者は、口縁部が欠損しているが最大径が体部中半にある球胴である。頸部に段が巡り、体部と区画している。器面調整は体部外面が刷毛目、内面は一部ナデ、他は刷毛目である。

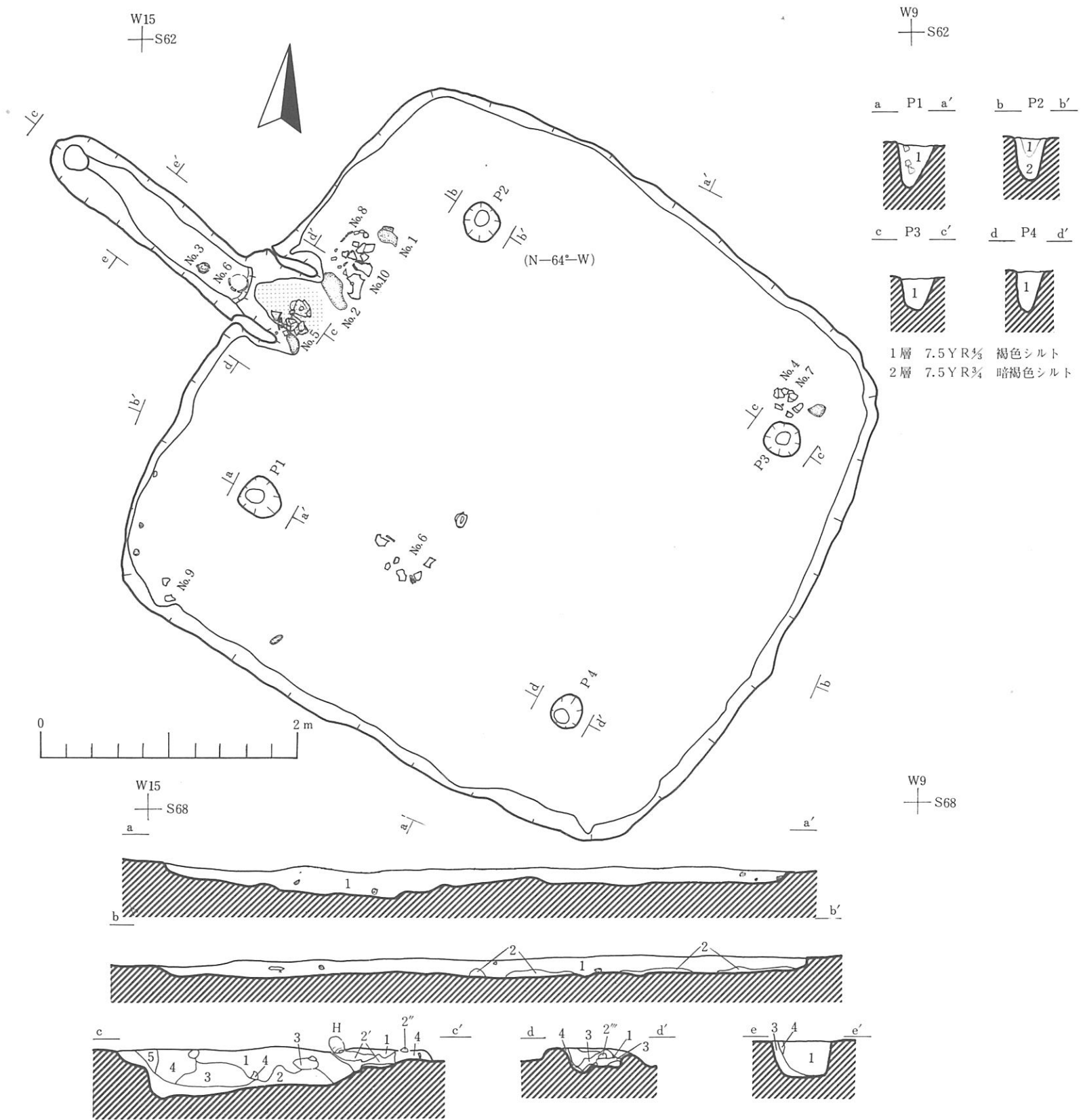
甌（12） 頸部に軽い段が巡り体部と区画しているもので、口縁部は直立気味の無底である。器面調整は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面は一部ケズリ他は刷毛目である。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く堆積土から多量の土師器の破片と少量の須恵器、縄文土器の破片が出土している。実測したものは土師器1点、須恵器1点である。

土師器

坏（第31図13） 製作に際してロクロを使用していないもので、底部形態は丸底と推定されるものである。外面体部下半に段が巡り、対応する内面にくびれを有するもので、段より上は外傾する口縁をもつものである。器面調整は、内外面ともにヘラミガキされ、内面は黒色処理されている。

須恵器



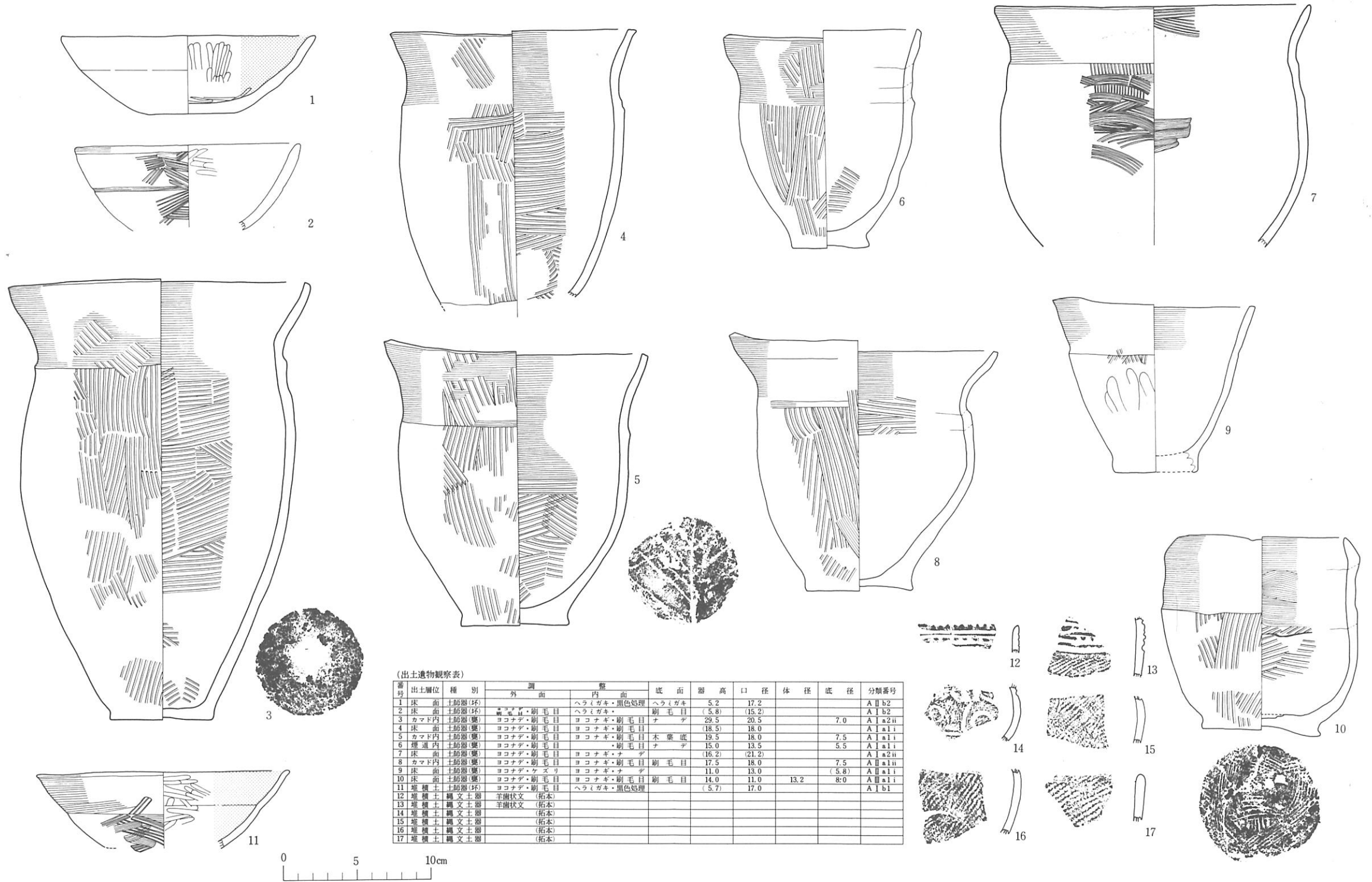
堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR 黒褐色	腐植質土	
2	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	焼土, 炭化物微量

カマド堆積土

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	5YR4/4 にぶい赤褐色	シルト	焼土, 炭化物を含む	3	5YR3/4 暗褐色	シルト	焼土混じる
2	10YR4/6 褐色	シルト	炭化物微量	4	5YR3/6 暗褐色	シルト	〃
2'	10YR4/6 褐色	シルト	2層より汚れがつよい	5	5YR4/4 にぶい赤褐色	シルト	
2''	10YR7/6 暗褐色	シルト	汚れなし	6	5YR5/8 明赤褐色	シルト	
2'''	7.5YR4/4 褐色	シルト	暗褐色土混じる				

第32図 第12号住居跡



(出土遺物観察表)

発見 時期	出土層位	種別	外 面		内 面		底 面	器 高	口 径	体 径	底 径	分類番号
			外 面	内 面	底 面	内 面						
1	床 面	土師器(坏)	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.2	17.2				A b2
2	床 面	土師器(坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(5.8)	(15.2)				A b2
3	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナギ・刷毛目	ナ	ナ	29.5	20.5		7.0		A a2ii
4	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナギ・刷毛目	ナ	ナ	(18.5)	18.0				A a1i
5	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナギ・刷毛目	木裏底	ナ	19.5	18.0		7.5		A a1i
6	煙道内	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナギ・刷毛目	ナ	ナ	15.0	13.5		5.5		A a1i
7	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナギ・ナ	ナ	ナ	(16.2)	(21.2)				A a2ii
8	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナギ・刷毛目	刷毛目	刷毛目	17.5	18.0		7.5		A a1ii
9	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナギ・ナ	ナ	ナ	11.0	13.0		(5.8)		A a1i
10	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナギ・刷毛目	刷毛目	刷毛目	14.0	11.0	13.2	8.0		A a1i
11	堆積土	土師器(坏)	ヨコナデ・刷毛目	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(5.7)	17.0				A b1
12	堆積土	縄文土器	羊歯状文	(拓本)								
13	堆積土	縄文土器	羊歯状文	(拓本)								
14	堆積土	縄文土器	(拓本)									
15	堆積土	縄文土器	(拓本)									
16	堆積土	縄文土器	(拓本)									
17	堆積土	縄文土器	(拓本)									

第33図 第12号住居跡

埴形土器 (第31図14) 底部に高台部の剝離した跡があり、埴形に近い器形のもので推定されるもので外面はきれいに整形され内面には凹凸のはっきりした、ロクロ痕が残っている。底部の切り離し技法は不明である。

第12号住居跡 (C A 15) (第32図)

〔遺構の確認〕 C調査区の北西、第14号住居跡の南東約6.4m、第21号住居跡の北西約4.4mの地点で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形である。規模は一辺がともに約4.8mの正方形に近いものであり、床面積は約23.1㎡である。

〔堆積土〕 ほぼ1層である。黒褐色の腐植質土で住居のほぼ全域に堆積しているものである。床面近くにはシルトが小ブロック状に堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま壁としており、壁の残存状況はあまり良好ではなく、西壁の最も良いところで約19cm前後であり、他は10～13cmである。壁の立ち上がりもゆるやかなところが多い。

〔床〕 地山をそのまま床としている。床面は礫まじりで凹凸が多く一定していない。北西隅は木根による攪乱が床面下まで及んでいる。

〔柱穴〕 床面上より検出されたピットはP₁～P₄の対角線上より検出されたもの4個である。P₁は、上部を木根で攪乱されており他の3個に比べて検出面は低い。柱痕跡は認められず又、深さの面で少し浅いと思われるものがあるが位置、形態等からこの4個のピットは柱穴とみてよいものであろう。

〔カマド〕 西壁中央にとりつけられているものである。燃焼部と煙道部よりなるもので本体天井部は既になく両側壁のみが残存していたものである。両側壁は褐色のシルトを固めて構築したもので両側壁の先端には、カマド本体を構築した時に利用したとみられる長さ約60cm径約20cm長さ約20cm径約15cmのそれぞれ楕円状の川原石が倒れていた。燃焼部は奥行約50cm幅40cmで舌状を呈しほぼ平坦で底面には焼土の堆積がみられた。煙道へは奥壁で約20cmの段差をもって外方に下り移行している。煙道は長さ約200cm、幅約42cmで緩い傾斜をもって煙出部へと続く。煙出部には浅い皿状のくぼみがあるが特に段差は認められない。地上へは途中に段をもって上方へ出ている。なお、燃焼部には土師器の甕が横たわり、奥壁と煙道の境にも甕があった。長軸方向はN-64°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕

土師器 完形品、復元可能なものを含めて実測したものは、坏2点、甕8点である。これらはいずれも製作に際し、ロクロ未使用のものである。

坏（第33図1～2） 底部形態が平底風のもの(1)と丸底と推定されるもの(2)の2点である。前者は底部がやや丸味を持ちながら内湾気味に外傾しているもので段、沈線等は認められない。後者は底部が欠損しているため定かでないが体部中半に沈線状の段のあるもので口縁部ではやや内湾気味に外傾しているものである。調整は、前者は外面が磨滅しているため不明内面はヘラミガキされ黒色処理されている。後者の口縁部はヨコナデそれより下は刷毛目であり内面はヘラミガキが認められる。

甕（第33図3～10） 最大径が口縁部にあり、口径より器高の大きいもの(3～7)同じく器高の小さいもの(8、9)がある。その他に(10)は最大径が体部にあり口径より器高の大きいものである。

前者は、頸部に軽い段が巡り、体部と区画しているもので底部が欠損しているものもあるがいずれも口縁部は外反(3)或は外傾(4～6)するもので胴部中半にふくらみをもつ胴張り気味の甕である。その中で、(7)は底部が欠損しているが口縁部と体部の径がほぼ同じ胴ぶくれの甕とみられるものである。器面調整は、口縁部内外面はいずれもヨコナデ、体部内外面は(10)の内面がナデの他はいずれも刷毛目である。底部は、ナデにより調整しているもの(3、6)、木葉底のもの(5)がある。

後者は、やはり頸部に軽い段が巡り、体部と区画しているもので、口縁部が外反し胴部中半がふくらみ気味のもの(8)と底部からほぼ直線的に外傾し、じょうご形に近い形のもの(9)がある。

器面調整は、口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面は(8)刷毛目、(9)はケズリ、内面は単位が不明であるがナデである。

(10)は頸部に軽い段が巡り体部を区画しているもので、底部より内湾気味に直立してそのまま口縁部にいたり、口唇部が内傾している筒形に近い器形である。器面調整は口縁部の内外面はヨコナデ、体部内外面は刷毛目である。底部も刷毛目で調整している。

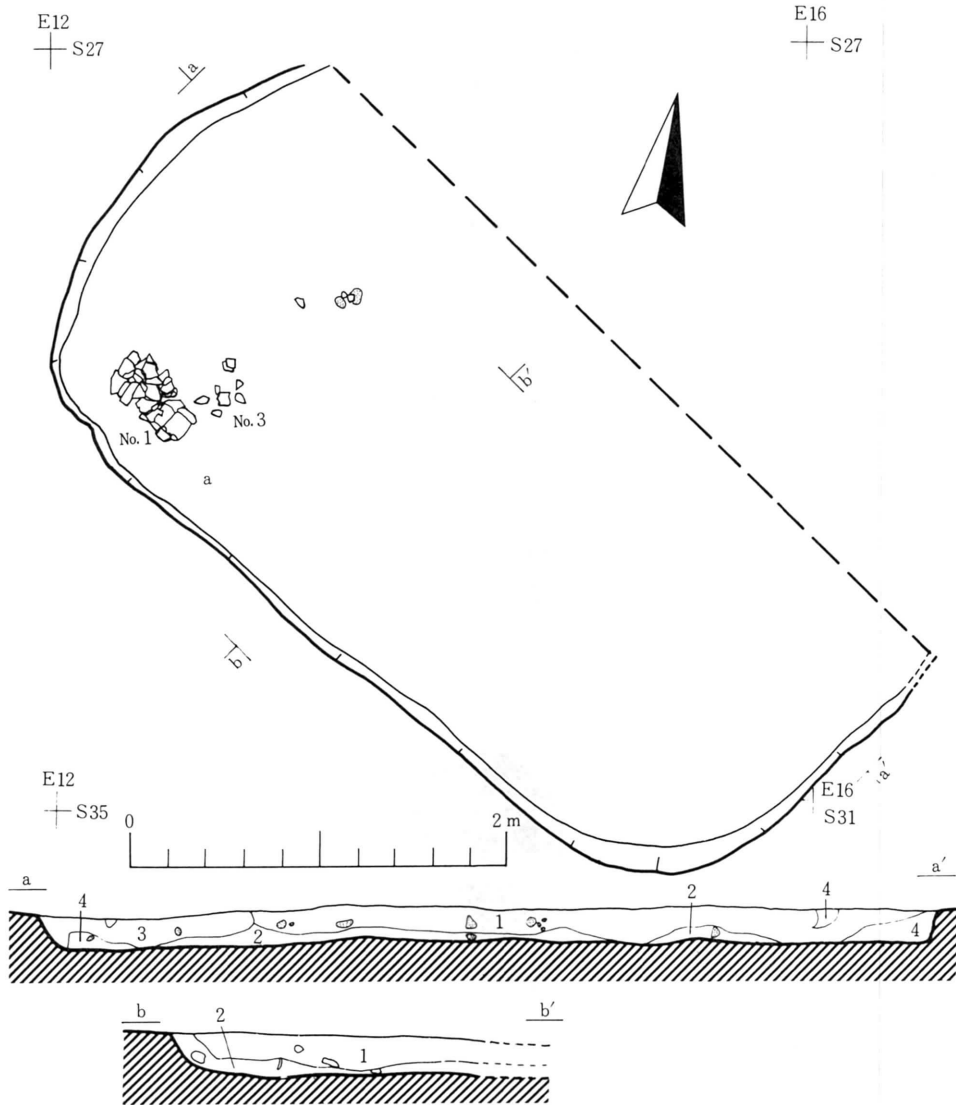
〔堆積土出土遺物〕 別表の如く、堆積土より土師器、縄文土器片が出土しているが、実測したものは土師器の坏1点と縄文土器片の拓本6点である。

土師器 製作に際してロクロを使用していないものである。

坏（第33図11） 底部形態は丸底と推定されているもので、体部外面中半に稜が巡り、対応する内面にも稜の認められるものである。段から上は外傾気味の口縁を有するものである。器面調整は体部外面は陵より上は粗いナデ、下は粗い刷毛目であり、内面はヘラミガキされ黒色処理されている。

縄文土器

鉢形土器（第33図12～17） 簡略化された羊歯状文や雲形文等の施文してある薄形の鉢形土



堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR2/3 極暗褐色	腐植質土	草木根混じる
2	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	明褐色シルト混じる
3	10 YR3/3 暗褐色	シルト	
4	2.5YR6/5 明黄褐色	シルト	

第34図 第13号住居跡

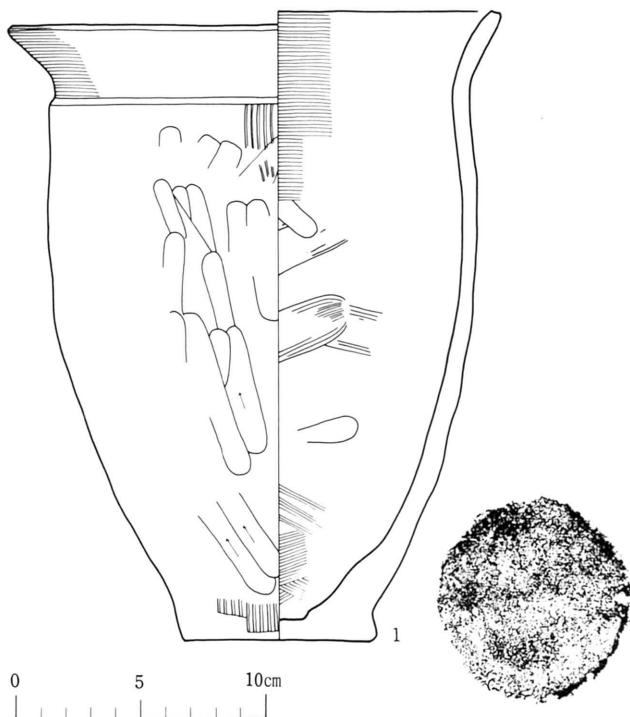
器とみられるものや縄文のみ施文されたものの破片である。

第13号住居跡 (A J 62) (第34図)

〔遺構の確認〕 調査区北東端の段丘崖際の地山面で確認された。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 住居跡の北半が自然崩落により失なわれているが、残存する壁の状況から(東西)約4.8mの長さを持つ方形を基調とする住居跡と推定される。全体の規模は不明である。



(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調		底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ツメズリ	ナデ調整	24.7	19.8		7.8	A J a1ii

第35図 第13号住居跡出土遺物

いる。

〔柱穴〕 検出した部分には認められない。

〔カマド〕 不明である。

〔貯蔵穴状ピット等〕 不明である。

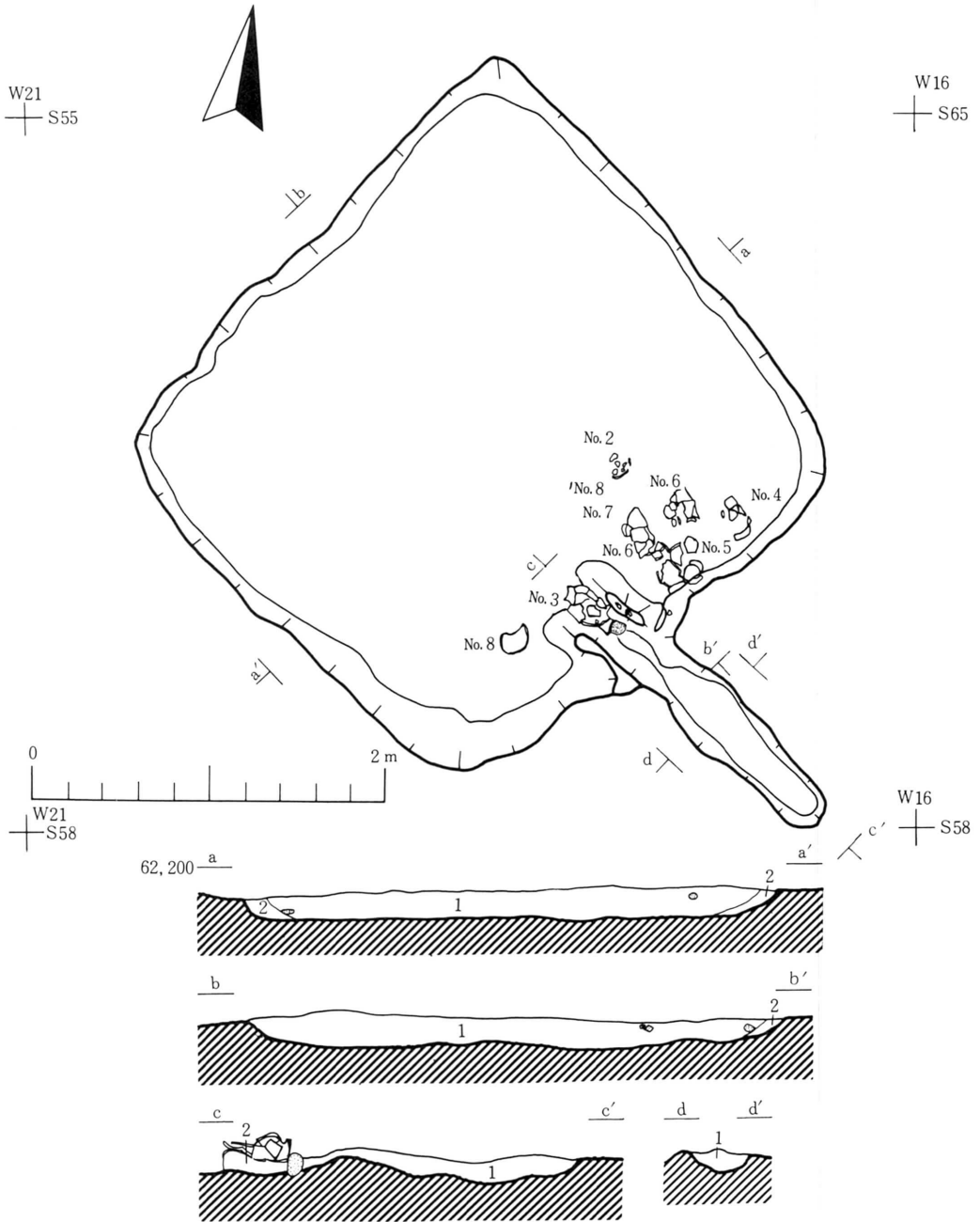
〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料は、床面南東隅より出土した土師器がある。製作に際しロクロ未使用のものである。

土師器(第35図1) 復元され実測可能なものは甕1点である。これは最大径が口縁部にあり、器高は口径より大きいもので、頸部に軽い段を有し体部と区画され、口縁部は外反する長

〔堆積土〕 4層に大別することができる。1層は極暗褐色の腐植質土で主として住居内の西側部分を除く全域に分布している。第2層は暗褐色のシルトで住居内の中央部分を中心に堆積している。又、3層の暗褐色シルトは西壁、4層の暗褐色シルトは東壁際にそれぞれ堆積している。

〔壁〕 地山を壁としているもので、北壁、東、西壁の一部はすでになく、最も残存状況のよい南壁で見ると比較的急な立ち上がりを呈している。壁高は約23cmである。

〔床〕 地山をそのまま床としているもので固くしっかりして



堆積土

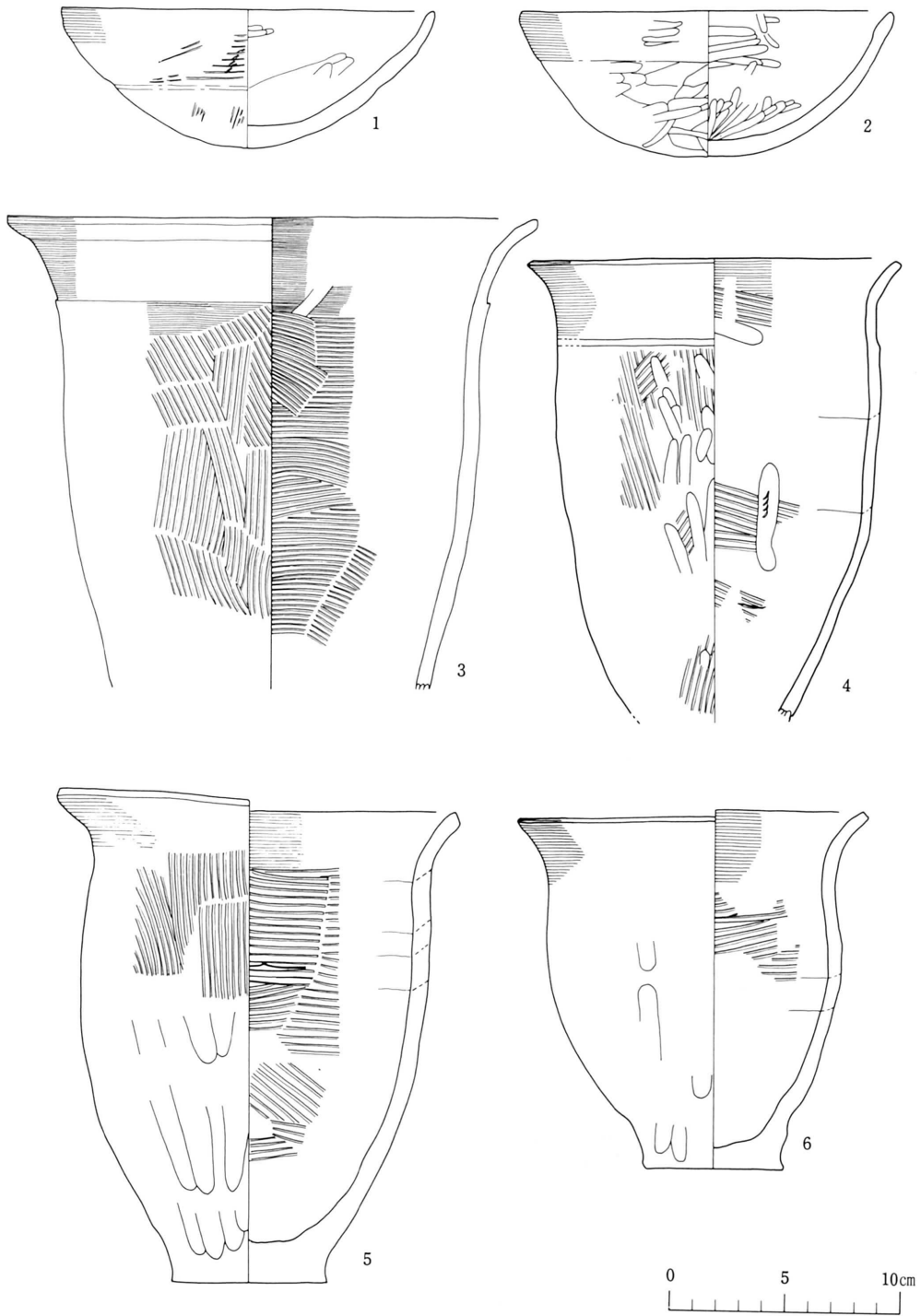
層	土色	土性	備考
1	5YR2/2 黒褐色	腐植質土	小木根, 炭化物微量
2	5YR3/3 暗赤褐色	シルト	小木根, 炭化物微量

カマド堆積土

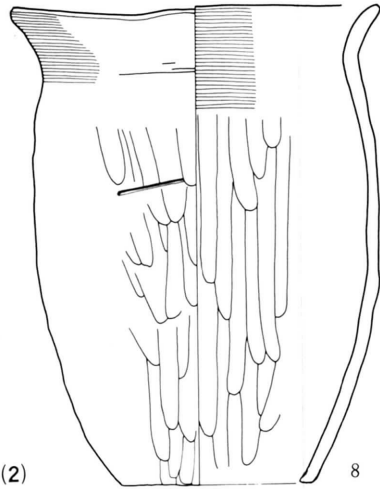
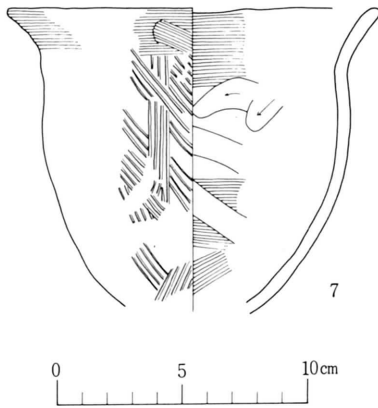
層	土色	土性	備考
1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物微量に含む
2	5YR3/6 暗赤褐色	シルト	焼土を含む

第36図 第14号住居跡

— 上餅田遺跡 —



第37図 第14号住居跡出土遺物(1)



第38図 第14号住居跡出土遺物(2)

(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(坏)	ヨコナデ・ハケメ	ミガキ・ミガキ		6.0	16.3			AIb2
2	床面	土師器(坏)	ミガキ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	ミガキ	6.3	16.3			AIb2
3	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(20.4)	23.1			AIa1ii
4	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(19.7)	16.2			AIa1ii
5	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		21.4	17.5	6.8		AIb1ii
6	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・刷毛目	ケズリ	15.7	15.2	6.1		AIb1ii
7	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・ナデ		(12.5)	15.0			AIb1ii
8	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ		19.4	14.9	7.9		

胴である。器面調整は、口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目後ケズリ、内面は刷毛目後一部ケズリ、下半より底部近くにかけてはナデにより調整されている。底部はナデによる調整が行われている。

第14号住居跡 (B I 21) (第36図)

〔遺構の確認〕 B調査区の南西隅、第25号住居跡の南、約2mのところの地山面で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は北隅が角であるが全体としては隅丸方形といえる。規模は長軸(東西)約3.2m、短軸(南北)約3.1mである。床面積は約9.9㎡である。

〔堆積土〕 2層に大別される。1層は炭化物をわずかに含む腐植質土で、壁際を除く住居内全域に堆積している。第2層は暗赤褐色のシルトで主に壁際に堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているもので、壁の立ち上がりは比較的なだらかである。残存壁高は、西壁で約16cm、他は12~15cmであり、残存状況はあまりよくない。

〔床〕 地山をそのまま床として固くしまっている。但し床面には小礫が多く小さな凹凸が目

立つ。

〔柱穴〕 住居内に柱穴とみられるピットは認められない。

〔カマド〕 東壁はほぼ中央にとりつけられている。本体の天井部は既になく、燃焼部と煙道部よりなる。左側壁は比較的良好に残存しているのに対して、右側壁はほとんど崩落している。いずれもシルトで構築し中に芯材として石を使用している。燃焼部は奥行約70cm、幅20cmと細長い底面であり熱を受けた様子があまりみられないが燃焼部の中央には熱をうけて赤変した支脚石とみられる径10cmの川原石が存在した。又、カマド内部には甕が煙道方向に倒れた形で存在した。煙道へは奥壁までやや上り、壁際よりだらだらと下っているもので煙出部には特にピットは認められない。煙道の規模は長さ約130cm、幅40cmであり、長軸方向はN-103°-Eである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

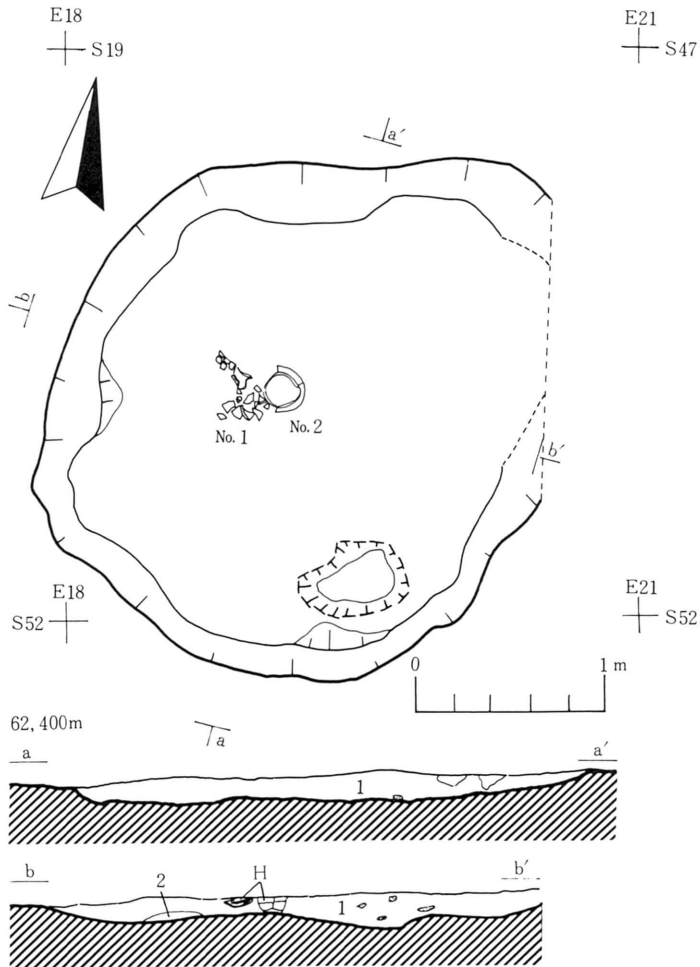
〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料はカマド内及びカマドの両脇の床面より出土した土師器がある。

土師器 完形品、復元されたもの等実測したものは坏2点、カメ5点、甕1点である。製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。

坏 (第37図1、2) いずれも底部形態が丸底のものである。(1)は口縁部が内湾気味に外傾し、体部外面下半に比較的深い沈線が、(2)は口縁内湾し体部外面上半に浅い沈線がそれぞれ巡るものである。いずれも対応する内面にくびれは認められない。器面調整は(1)は口縁外面にヨコナデがみられ他は多少磨滅しているがミガキと思われるものであり単位は不明である。又、内面はやはりミガキである。(2)は内外面ともにミガキで内面黒色処理されているものである。

甕 (第37図3～6、第38図7) いずれも最大径が口縁部にあり、器高は口径より大きいものである。頸部に段を有するもの、無段のものがある。(3、4)は底部が欠損しているが頸部に軽い段が巡り、口縁部が外反するもので、器面調整は口縁部は内外ともにヨコナデ、体部外面は(1)は刷毛目、(2)は刷毛目後一部にケズリが施されている。一方(5～7)はいずれも無段で口縁が外反し胴部がふくらみをもつ長胴である。器面調整は、頸部を境にして口縁部は内外面ともにヨコナデ(5、6)は外面体部にケズリが施され、内面は刷毛目である。(7)は体部外面粗い刷毛目内面は刷毛目、一部ナデである。

甕 (第38図8) 最大径が口縁部にあり、口径より器高の大きいものである。口縁部が外反し胴部前半がややふくらみをもつ長胴であり無底のものである。器面調整は口縁部内外面はともにヨコナデ、体部内外面はヘラミガキである。



堆 積 土

層	土 色	土 性	備 考
1	10 YR 3/2 黒 褐 色	腐植質土	炭化物微量, 木根多し
2	2.5 YR 7/4 浅黄橙色	シルト	砂質シルトのブロック

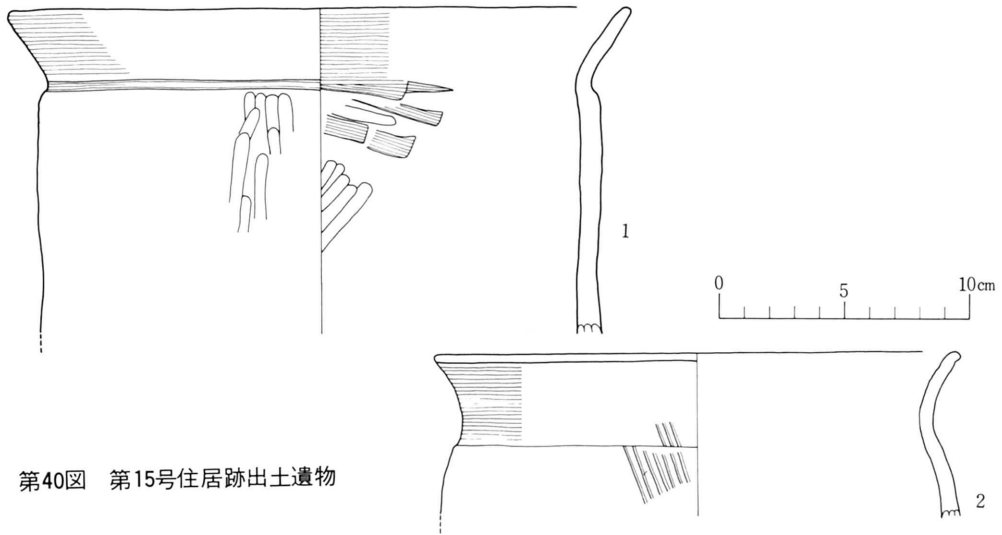
第39図 第15号住居跡

第15号住居跡 (B G 68) (第39図)

〔遺構の確認〕 B調査区の南東端、第4号住居跡の南東約5mの地点の地山面で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形の東側の一部は調査区域外にあるため不明であるが、北壁がやや直線に近い他はいずれも曲線的であり隅が明確でない不整形に近い形である。規模は長軸(東西)約2.7m、短軸(南北)約2.5mである。床面積は約6.8㎡である。



第40図 第15号住居跡出土遺物

(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ		(13.4)	(24.6)			A I a l i
2	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・		(6.4)	(21.0)			A I a l i i

〔堆積土〕 2層に大別できる。1層は、黒褐色の腐植質土で住居の床面をはじめほとんど全域に堆積している。炭化物を微量含むもので木根による攪乱が著しい。2層は浅黄橙色のシルトで床面直上に部分的にわずかに堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているものであるが、壁の残存状況は最も残りの良いところで約20cm前後である。北壁はやや直線的な他はほぼ曲線を描いている壁面である。立ち上がりは緩かで皿状に近いところもある。東側の一部は調査区外のため確認されていない。

〔床〕 地山をそのまま床としているものであるが、礫が多く凹凸が激しい。

〔柱穴〕 認められない。

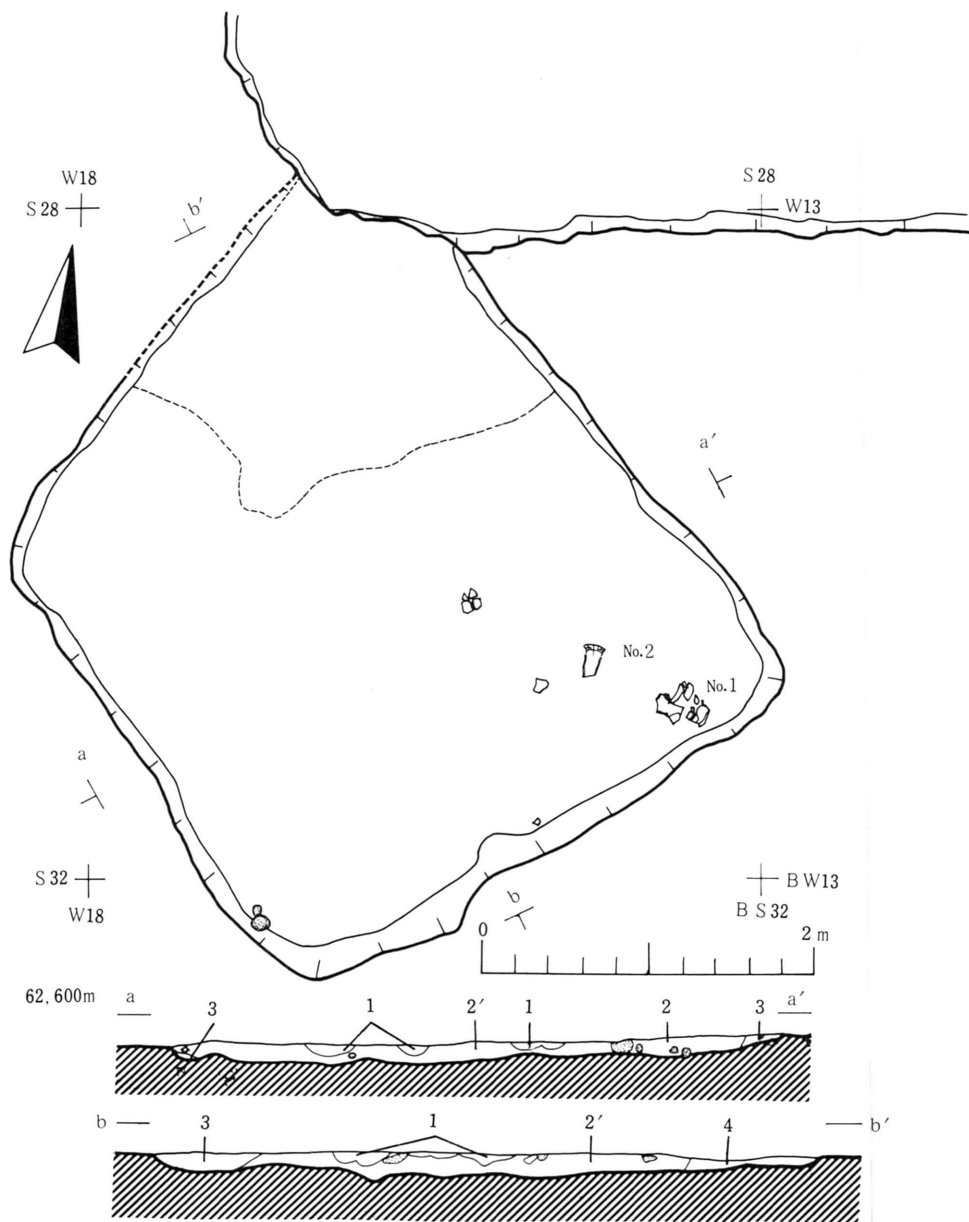
〔カマド〕 認められない。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料は床面出土の土師器がある。

土師器 完形品はなく実測したものは下半部を欠損した甕二個体のみである。いずれも製作に際してロクロ未使用のものである。

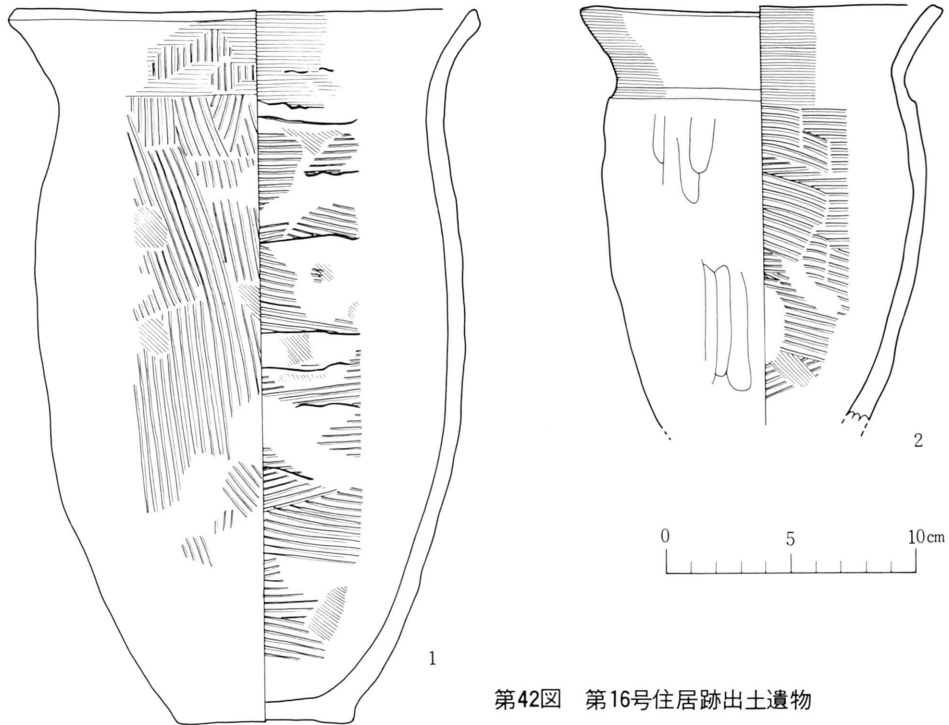
甕(第40図1、2) いずれも体部下半から底部にかけて欠損しているのではっきりしないが最大径が口縁部にあり器高が口径より大きいと推定されるもので、(1)は頸部に段を有するもので口縁は外傾し胴部はやや直線的なものである。器面調整は口縁部内外面はヨコナデ胴部外面は細かいヘラケズリ、内面はナデ、ミガキが一部みられる。(2)は口縁部が外反し頸部に軽い段が巡り、胴部はややふくらみをもつものと推定される。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外



堆積土

層	土色	土性	備考
1層	7.5YR 暗褐色	腐植質土	炭化物微量
2層	7.5YR 褐色	シルト	小礫を含む
2'層	7.5YR 暗褐色	シルト	〃
3層	7.5YR 褐色	シルト	汚れ少ない
4層	7.5YR 明褐色	シルト	褐色土に地山のシルトが大小のブロック状に混じる

第41図 第16号住居跡



第42図 第16号住居跡出土遺物

(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調 整		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番口
			外 面	内 面						
1	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	28.4	18.9		7.3	A I b 1 II
2	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・刷毛目		(16.7)	14.5			A I a 1 II

面は刷毛目がみられる。内面は磨滅のため不明である。いずれの土器も、内外面にスス状のものが付着し、二次加熱を受けて表面は剝落しているところが多い。

第16号住居跡 (A J 18) (第41図)

〔遺構の確認〕 A調査区の北西端第1号住居跡のすぐ南の地山面で確認したものである。

〔重複〕 第1号住居跡によって北東隅が切られている。

〔平面形・規模〕 平面形は北東隅が少し張り出している。不整隅丸長方形である。規模は長軸(南北)約3.9m、短軸(東西)約3.4mである。床面積は約13.6㎡である。

〔堆積土〕 4層に大別される。1層は黒褐色の腐植質土で住居の中央部分を中心に部分的に堆積しているもので床面まで達していない。2、2'層は褐色のシルトで壁際を除くほぼ全域に堆積している。3層は壁際に堆積しているもので地山の崩れたものであろう。4層は第1号住居跡を構築する際に埋めた土とみられ褐色のシルトと地山の明褐色シルトの混土で明褐色シルトが大小のブロックになって混じっている。

〔壁〕 地山を壁としているが削平により残存状況は良くない。特に残存の良い東、南壁でも壁高は約10cmである。壁の立ち上がりは緩かである。

〔床〕 地山をそのまま床としておりほぼ平坦である。

〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 認められない。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等年代を決定するための資料は、床面出土の土師器である。

土師器 完形品、復元可能なものを含め実測したものは甕2点である。製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。

甕（第42図1、2）ともに最大径が口縁部にある器高は口径より大きいものである。口縁部はいずれも外反するもので（2）は頸部に段が巡り（1）は無段である。器面調整は口縁部は内外ともにヨコナデ、体部外面は（2）はヘラケズリ（1）は刷毛目、内面はいずれも刷毛目である。

第17号住居跡（A F 21）（第43図）

〔遺構の確認〕 調査区の北西端の地山面で確認された。西側は調査区外のため南、北壁の一部と東壁のみを検出したものである。

〔重複〕 第1号溝（A G 18）によって東西に切られている。

〔平面形・規模〕 東壁約5.75m、南壁約1.8m、北壁約0.9m、他は未検出のため不明である。

〔堆積土〕 4層に大別することができる。1層は黒色の腐植質土で住居内のほぼ全域に堆積している。2、3層は礫の多少により2層に分けているが本質的には同質のシルトであり、住居の南から北に堆積している。4層は褐色シルトで南壁際に、5層は同じく主に床面近くに堆積している。

〔壁〕 地山を壁としているもので検出された壁は比軽的急な立ち上がりを呈し、残存する壁高は約20cmである。北東隅近くは第1号溝によりこわされている。

〔床〕 地山をそのまま床としており、固くしっかりしている。

〔柱穴〕 検出された部分には認められない。

〔カマド〕 不明である。

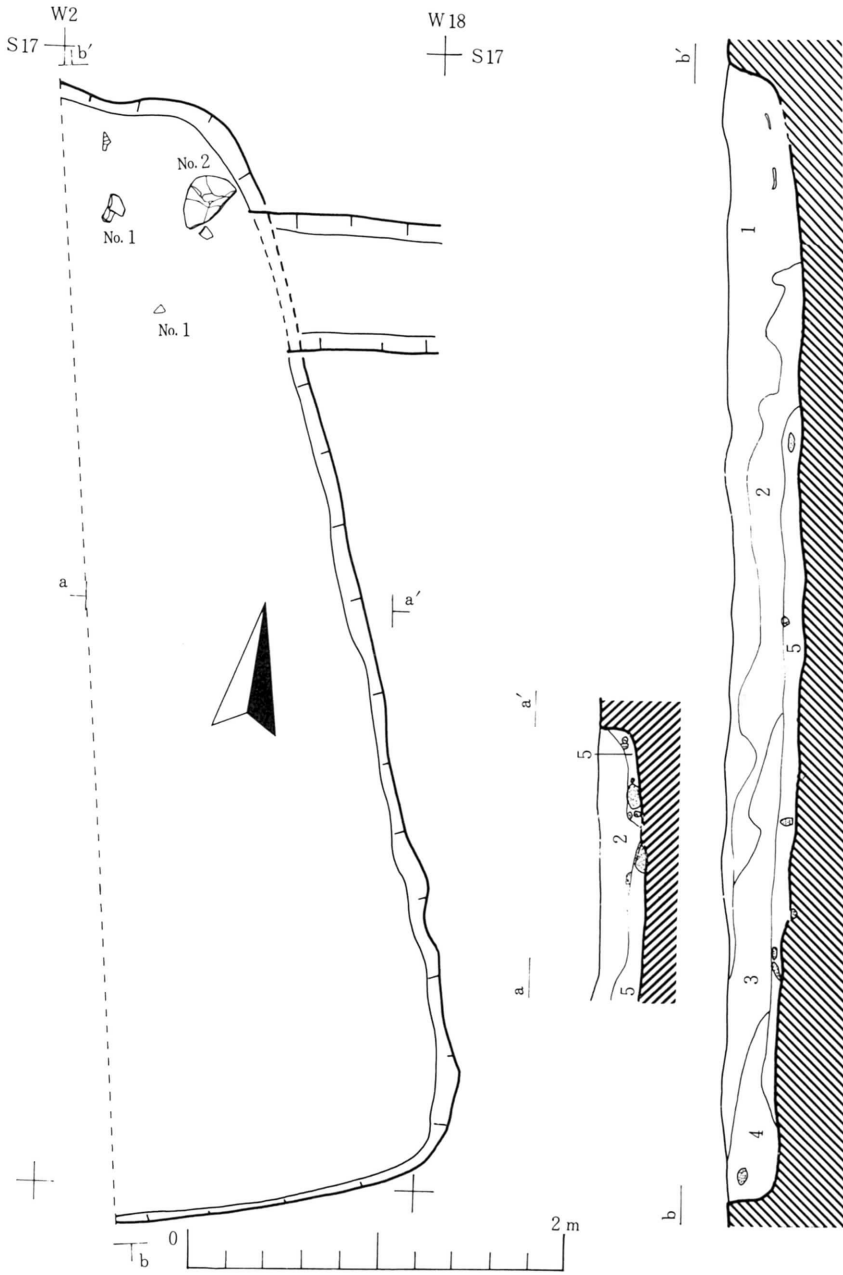
〔貯蔵穴状ピット等〕 検出された部分には認められない。

〔年代決定資料〕 住居跡の構築及び使用等の年代を決定するための資料は、床面出土の土師器がある。

土師器 実測可能なものは坏、甕各1点である。いずれも製作に際してロクロ未使用のものである。

坏（第44図1） 底部形態は平底風のもので、外面体下部に陵が巡るものである。なお、内

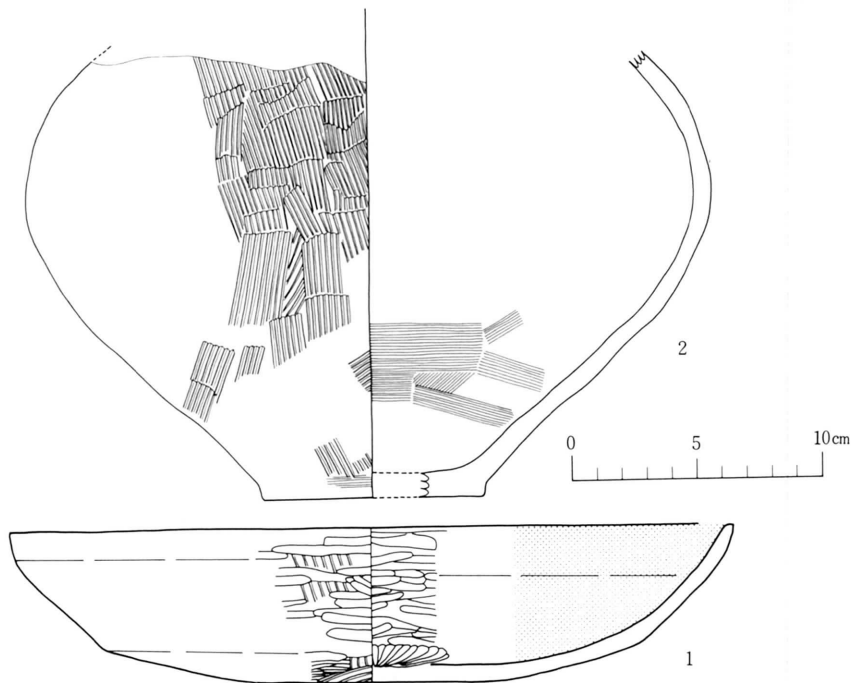
— 上餅田遺跡 —



堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR 2/1 黒色	腐植質土	
2	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	粘性はあまりない。小礫が若干混じる
3	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	2層に比べて礫が少し大きい
4	7.5YR 4/4 褐色	シルト	粘性少ない
5	7.5YR 4/4 褐色	シルト	粘性少なく礫の混りなく地山の砂質シルトが多く混じている

第43図 第17号住居跡



第44図 第17号住居跡出土遺物

(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・刷毛目	ヘラミガキ・黒色処理	刷毛目	6.1	28.9			A II a 2
2	床面	土師器(甕)	刷毛目	ナデ		(17.8)		27.5	(9.0)	A IV 3

面には稜が認められない。稜から上はやや内湾気味に外傾し、陵から下はゆるやかな丸味をもって底部へと続く。器面調整は陵から上は刷毛目後ヘラミガキ、下は刷毛目をそのまま残している。内面はヘラミガキ後黒色処理されている。

甕 (第44図2) 口縁部から頸部にかけて欠損しているため正確な器形は不明であるが残存部から推定して最大径が体部上半にあり、器高が体部径より小さい球胴の甕とみられるものである。器面調整は外面が刷毛目、内面はナデである。

第18号住居跡 (C G 65) (第45図)

〔遺構の確認〕 C調査区の南東端、第22号住居跡の東約17mの地点の地山で確認されたものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 東部分は調査区域外なため検出できなかったが、現状からみて平面形はほぼ隅丸方形に近いものと見られる。規模は、長軸(南北)約4.1m、短軸(東西)現存部分約3.9mである。床面積は検出部分で約16㎡である。

〔堆積土〕 7層確認されたが3層に大別することが出来る。1層は、腐植質の強い黒褐色土

で住居の中央付近を中心に皿状に堆積し、一部は床面まで達しているところもある。又、この層は木根の攪乱が多く及んでいる層である。2層は褐色のシルトで1層の外側の中央に流れ込むような形で堆積し床面まで達している。3層は黄褐色のシルトが主で壁際より中央に向かって堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているもので、南、北壁の一部と東壁は区域外なため検出できなかった。壁の立ち上がりは一般に緩かで、残存壁高も南壁で約20cmとあまり良好ではない。

〔床〕 地山をそのまま床としており、礫まじりであるが固くしまっている。やや南に傾斜した床面である。中央附近は木根の攪乱が床面まで及んでいる。

〔柱穴〕 床面上から検出されたピットは、対角線上にあるP₁～P₄ 4個の他、中央東寄りのピットである。深さ、位置等その規則性から柱痕は認められなかったがP₁～P₄が柱穴と考えられる。他のピットは不整形で底面も一定せず、人為的なものとはみなしがたいものである。

〔カマド〕 西壁中央にとりつけられている。燃焼部と煙道部よりなる。本体は天井部が既になく、黄褐色のシルトで構築した両側壁が残存し、焚口前には、本体を構築する際に使用されたと思われる長さ約45cm、幅約25cmの楕円状の川原石がカマド方向に対して横に倒れていた。燃焼部内には多量の土師器の甕の破片が存在した。煙道は長さ約100cm、幅約40cmで燃焼部より段差もなく住居外にのびている。煙出部にピットはない。長軸方向はN-83°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

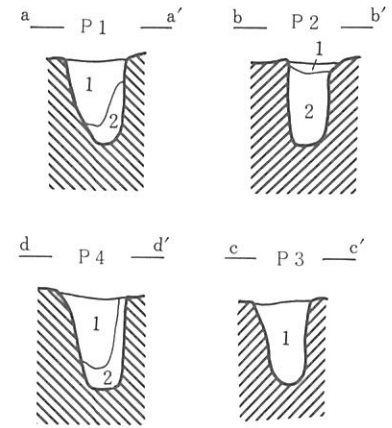
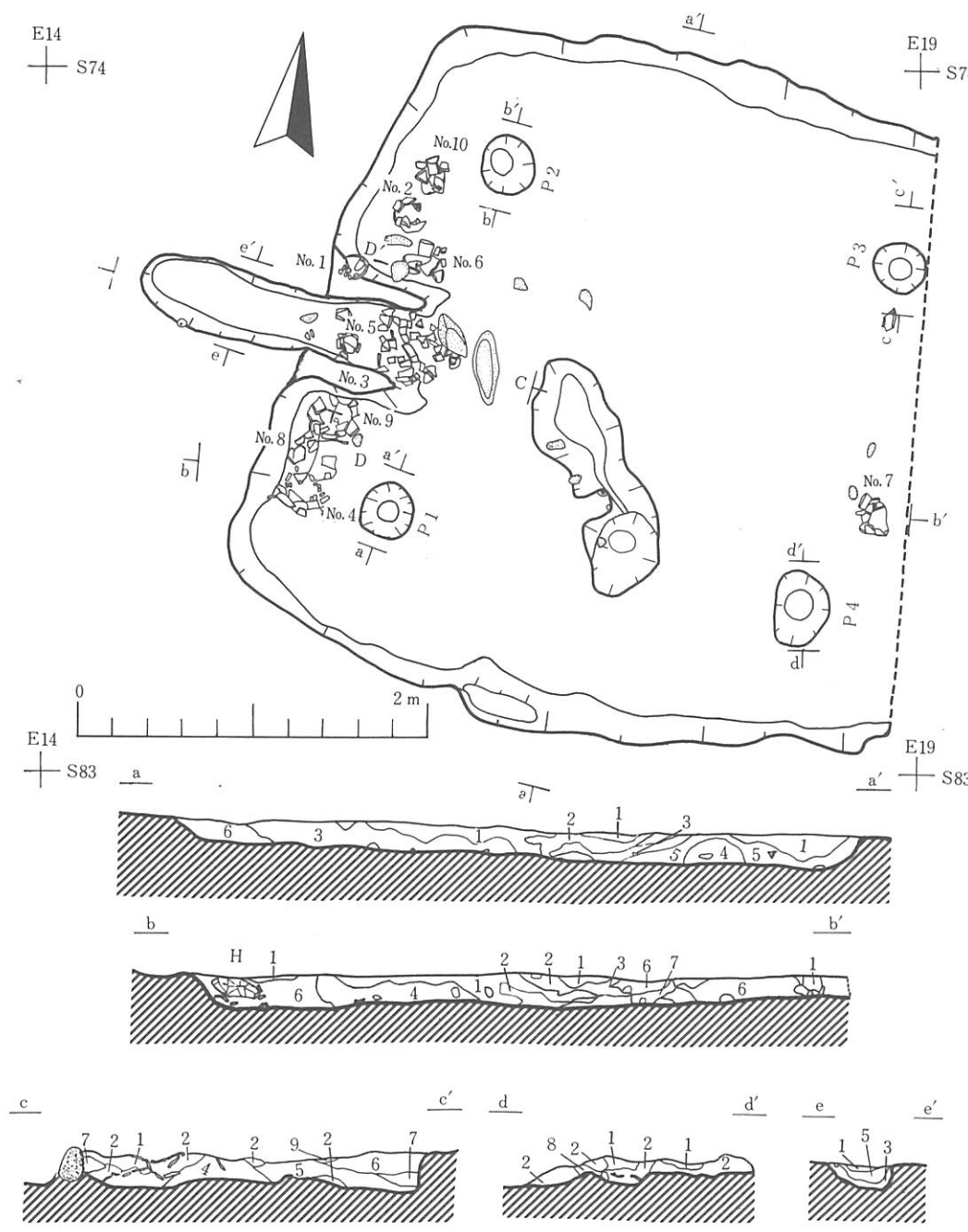
〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料としては、カマド内、及びカマドの両脇、その他の床面より出土した土師器がある。

土師器 完形品、復元可能なものを含めて実測したものは、坏1点、高坏1点、甕7点、甑1点である。製作に際していずれもロクロ未使用のものである。

坏（第46図1） 底部形態が丸底のもので、体部外面下半に軽い段が巡り、対応する内面にもくびれがみられるものである。段から上は、やや外傾気味の口縁を有するものである。器面調整は、内外ともにていねいなヘラミガキで内面は黒色処理されていないが、カマド内から出土しているもので黒色処理がとんだものとも考えられる。

高坏（第46図2） 坏部は体部外面下半に段が巡り、それに対応する内面にはくびれがみられる。器形をみると、脚部に接合する近くは内湾気味に外傾し、段より上は、やや直線的に外傾する。脚部は坏部よりやや直線的に下った後「八」の字に開くもので、坏部に比して比較的低いものである。なお、坏部の切りはなし技法は接合時の調整により不明である。器面調整は、一部は磨滅のため不明確であるが、坏部、脚部の内外ともにヘラミガキであり、坏部は内面黒色処理されている。

甕（第46図3～9） 最大径が口縁部にあり、器高が口径より大きいもの（3～6）と、最



柱穴堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR ² / ₂ 黒褐色	シルト	小木根、小礫多し
2	10YR ³ / ₄ 暗褐色	シルト	粘性なく、小礫多し

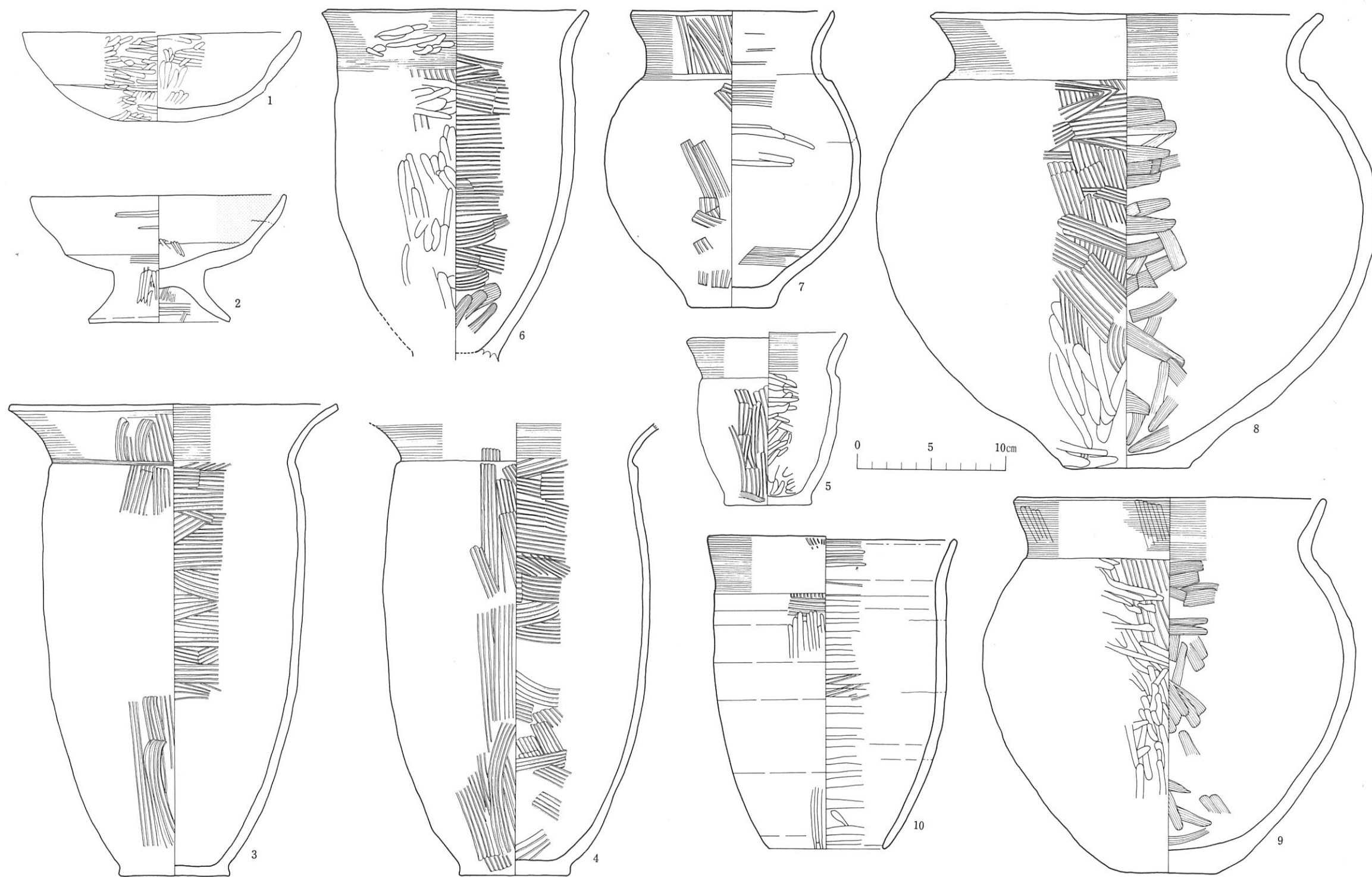
堆積土

大別層	層	土色	土性	備考
I	1	7.5YR ² / ₂ 黒褐色	腐植質土	木根多い (攪乱)
	2	10YR ⁵ / ₄ にぶい黄褐色	シルト	(攪乱)
II	3	7.5YR ⁴ / ₄ 褐色	シルト	径2~3cmの小礫が多く入っている
	4	10YR ⁴ / ₄ 褐色	シルト	小礫、木根が少い
	5	10YR ⁷ / ₃ 暗褐色	シルト	
III	6	10YR ⁴ / ₃ にぶい黄褐色	シルト	径5mm前後の小礫混じる
	7	7.5YR ⁴ / ₃ 褐色	シルト	" "

カマド煙道部堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR ² / ₂ 黒褐色	腐植質土	木根なし
1'	7.5YR ³ / ₂ 黒褐色		1層に2層の土が混じる
2	10YR ³ / ₃ 暗褐色	シルト	
3	5YR ⁴ / ₆ 赤褐色		2層の土が少し混じる焼土
4	7.5YR ⁴ / ₄ 褐色	シルト	粘性なし、小礫を含む
5	7.5YR ³ / ₄ 暗褐色	シルト	4層より細かい、少量の木根と5mm~10mmの小礫を含む
6	7.5YR ⁴ / ₄ 褐色	シルト	粘性なし、4層より赤味をおびている
7	7.5YR ⁴ / ₃ 褐色	砂質シルト	炭化物少量
8	7.5YR ² / ₂ 黒褐色	シルト	炭化物、焼土を少量含む
9	10YR ⁶ / ₆ 明黄褐色		粘が荒く粘性なく小礫を多く含む

第45図 第18号住居跡



第46図 第18号住居跡出土遺物

(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番号
			外面	内面						
1	カマド内	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	6.0	19.5			A I a 1
2	床面	土師器(高坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		8.5	16.5		6.3	A II a
3	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	31.9	21.8		7.5	A I a 1 Ⅱ
4	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	ナデ	(30.1)	18.6		7.5	A I a 2 Ⅱ
5	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・ヘラナデ	ナデ	11.6	10.9		6.0	A I a 1 Ⅰ
6	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・刷毛目 ナデ		(23.3)	17.9			A I b 1 Ⅰ
7	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目(朱)	ヨコナデ・刷毛目 ナデ	木葉底	19.9	13.5	17.2	6.5	A III a 2 Ⅱ
8	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目 ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉底	30.4	26.6	33.8	8.5	A IV 2 Ⅱ
9	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉底	25.3	21.2	25.2	6.6	A IV b 1 Ⅰ
10	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ナデ		20.9	16.5		7.9	

大径が体部にあり器高が体径より大きいもの(7、9)、同じく小さいもの(8)がある。前者は、頸部に段が巡り体部と区画しているもの(3~5)と無段のもの(6)があり、口縁部は外反、或は外傾する長胴の甕である。(5)は特に小形である。器面調整は(6)は口縁部の外面に一部軽いケズリがみられる他は内外面ともにヨコナデである。体部は(6)は外面が軽いヘラケズリ、(5)は内面がナデの他は、内外面ともにいずれも刷毛目である。後者は、頸部に段の巡るもの(7、8)と無段のもの(9)がある。口縁部は直立外反するもの(7)、外反するもの(8)、「く」の字に外傾するもの(9)とそれぞれ異り(7、8)は最大径が胴部中半にあり球胴なのに対して(9)は、上半にありやや肩張りのする器形である。又、(9)の底部は平底(木葉痕)である。器面調整は、口縁部の内外面はいずれもヨコナデであるが、体部については、(7)は外面、刷毛目、内面刷毛目、一部ナデ、(8)は外面は刷毛目と下半ケズリ、内面はナデ、(9)は外面は刷毛目後ミガキ、内面はナデである。なお(7)は外面全体に「朱」が塗ってあり内面も胴部下半から底部にかけて「朱」が雑に塗られている。

甕(第46図10) 最大径が口縁部にあり、口径より器高の高い無底式の甕である。口縁部は、直立気味にわずかに外反するもので頸部には体部と区画する段はない。器面調整は、口縁部外面はヨコナデ、体部はミガキ、内面はていねいなナデである。

第19号住居跡(C F 24)(第47図)

〔遺構の確認〕 C調査区の南西端、第11号住居跡の西約3.5m、東西に走る農道の脇の地山で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 南西部の一部が農道の下に入り込んでいるため検出出来ず、従って、正確な平面形は不明であるが、住居の各コーナーの丸味が強い隅丸方形と推定される。規模は長軸(南北)約5.2m、短軸(東西)約5.0mである。床面積は現存部分で約25㎡である。

〔堆積土〕 ほぼ2層に大別される。1、1'層はいずれも腐植質の黒褐色土である。1層は小礫が多く含まれている。住居の壁沿いを除くほとんど全域に堆積している。2層は、褐色のシ

— 上餅田遺跡 —

ルトで主に壁沿いに堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているもので、西壁、南壁の約 $\frac{1}{2}$ が確認されていない。壁の残在状況は最も良好な西壁で約30cmである。立ち上がりは比較的緩かで深皿状を呈している。どのコーナー部分も角張らず、特に丸味が強いのが特色である。壁面も直線的でなく孤状に近いものである。

〔床〕 地山をそのまま床面としており、比較的平坦で固くしまっている。

〔柱穴〕 床面上から検出されたピットはP₁～P₃の3個である。いずれも対角線上に位置するものであり、その位置、形態等から、柱痕は認められなかったが柱穴とみられるものである。

〔カマド〕 北壁のほぼ中央にとりつけられている。燃焼部と煙道部とからなる。本体の天井部は既になく、両側壁が残存していた。左側壁は土師器の甕の破片を芯材として黄褐色のシルトを固めて構築したものであり、右側壁は熱のうけた方が強く赤変しており、残りはあまりよくない。燃焼部の規模は、奥行約70cm、幅は最も広い焚き口部で約50cmで中央がやや狭い。底面は皿状を呈し床面より少し高くなっており、奥に向かってやや昇り気味である。煙道へは、奥壁でわずかな段差をもって移行している。煙道は長さ約95cm、幅約48cmで奥壁際より緩い下り傾斜をもって煙出部に至る。煙出部はピットがなく地上へは緩い角度で立ち上がる。長軸方向はN-7°-Wである。

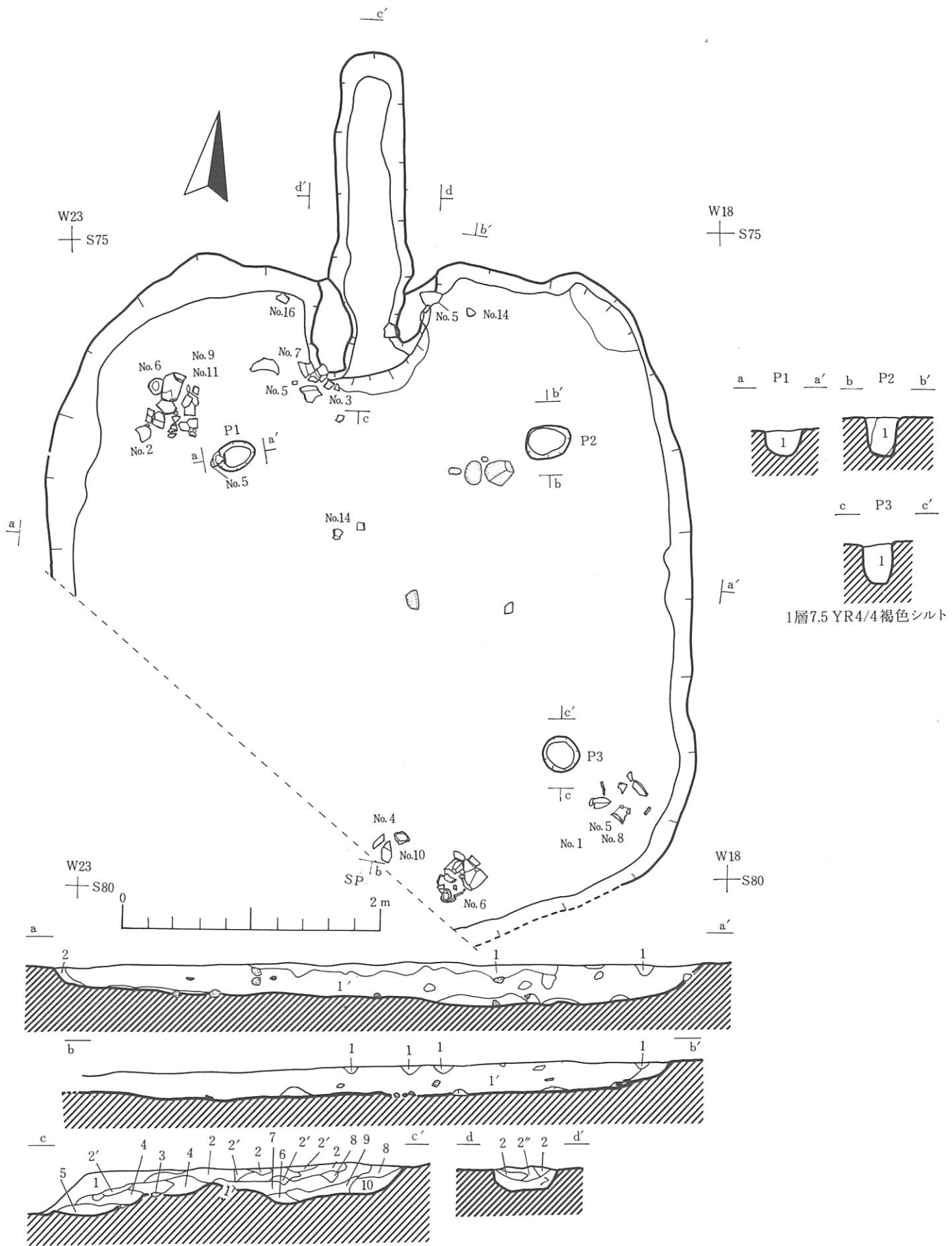
〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用の年代等を決定する資料としては、床面出土の土師器がある。

土師器 復元及び破片で実測したものは坏4点、甕7点である。いずれも製作に際してロクロ未使用のものである。

坏 (第48図1～4) 破片のため正確な器形が不明なものもあるが、いずれも底部形態は丸底のものである。(1)は、外面体部中半に沈線状の軽い線が巡るものである。(2～4)は、体部中半或は下半に段が巡り、対応する内面にくびれがあるもので、段より上はほぼ外傾気味の口縁を有するものである。(2)は、口径に比べて器高の高いものと推定される。器面調整は一部磨滅しており単位の不明なものもあるが、いずれも内外ともにヘラミガキが施されている。(1、2)の内面は黒色処理されているものである。

甕 (第48図5～11) 最大径が口縁部にあり、器高が口径より大きいもの(5～9)、同じく、器高が口径より小さいもの(10)、最大径が体部にあり、器高が体径より小さいもの(11)とがある。(5～9)は、いずれも頸部に段を巡らし口縁と体部を区画しているものであるが(6)は沈線状で軽い段である。口縁部は外反するもの(5～8)外傾する(9)ものがある。(5)は、口縁が外反し胴径が口縁径とほぼ同じで最大径が中半よりやや下にあり、下ぶくれの感じの長胴



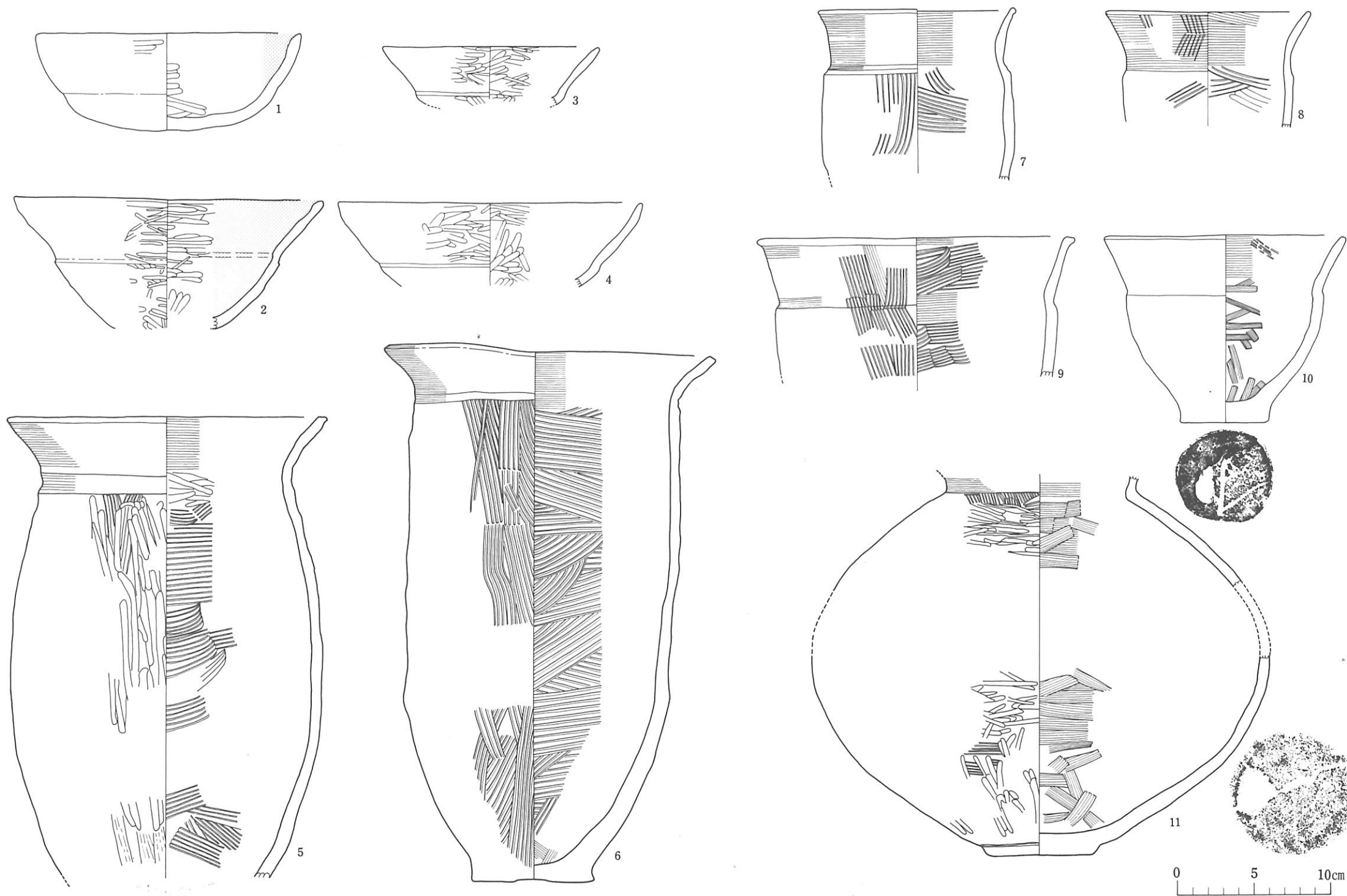
カマド堆積土

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	炭化物微量	5	2.5YR 4/8 赤褐色	シルト	焼土, 固くしまる
2	2.5YR 7/6 明黄褐色	シルト		6	7.5YR 4/4 褐色	シルト	炭化物, 焼土をわずかに含む
2'	10YR 5/3 黄褐色	シルト	わずかに黒褐色土まじる	7	7.5YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物微量
2''	10YR 3/3 暗褐色		2'より更に汚れが強い	8	10YR 2/2 黒褐色	腐植質土	
3	5YR 5/3 赤褐色	シルト	焼土炭化物を含む	9	10YR 3/2 黒褐色		炭化物, 焼土微量を含む
4	10YR 3/3 暗褐色	シルト	炭化物, 焼けた小石含む	10	10YR 3/3 暗褐色	シルト	炭化物微量

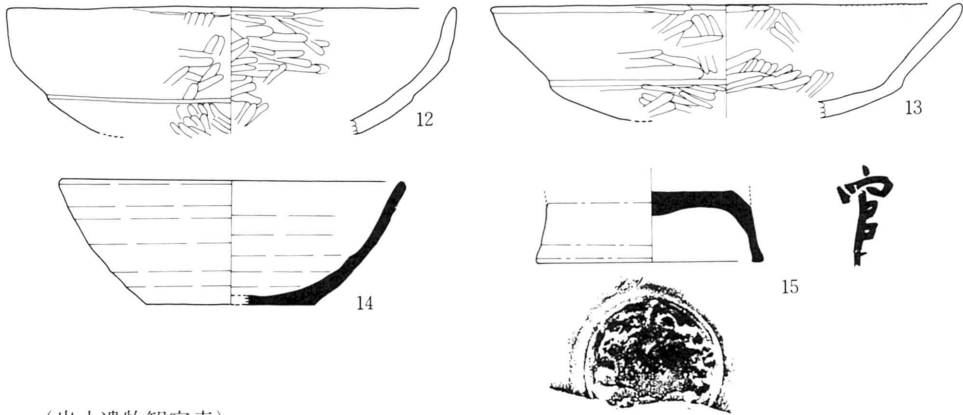
堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR 2/2 黒褐色	腐植質土	
1	7.5YR 2/2 黒褐色	腐植質土	小礫を多く含む
2	7.5YR 2/2 褐色	シルト	地山と2層の混土

第47図 第19号住居跡



第48図 第19号住居跡出土遺物 (1)



(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		6.3	17.8			A Ib2
2	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		(8.5)	(20.4)			A Ia1
3	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラミガキ		(3.8)	(14.2)			A Ia1
4	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラミガキ		(5.5)	(19.9)			A Ia1
5	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・刷毛目		(29.8)	21.0			A Ia2II
6	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		34.5	21.8	8.2		A Ia1I
7	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(10.8)	13.1			A Ia1I
8	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(7.3)	13.4			A Ia1I
9	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目		(9.0)	20.8			A Ia1I
10	床面	土師器(甕)		ヨコナデ・ナデ		12.2	15.8		5.8	A IIa1I
11	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ		(24.5)		(29.8)	7.2	A IVb2
12	堆積土	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ		(5.0)	18.0			A Ia2
13	堆積土	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理		(4.5)	18.8			A Ia1
14	堆積土	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラ切り	5.0	13.8		(6.7)	C
15	堆積土	須恵器(高台部)	ロクロ痕	ロクロ痕		(2.8)			9.1	C

第49図 第19号住居跡出土遺物(2)

の甕である。又、(6)は口縁が外反し、胴部が直線的で、器高が口径に比して特に高い甕である。(7~9)は下半が欠損しているため正確な器形は不明であるが比較的張らない長胴であろう。器面調整は、口縁の内外面はヨコナデ、体部外面に(5)は、軽いケズリがみられる他は、胴部上半がやや丸味を有する口縁の外反する小形の甕である。器面調整は体部外面は磨滅のため不明である。内面の口縁部はヨコナデ、体部はナデがみられる。(11)は口縁部が欠損しているため正確な器形は知り得ないが、最大径が体部中半にある球胴で、口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部外面は刷毛目後、ヘラミガキ、内面はナデが施されているものである。

〔堆積土出土遺物〕

土師器 完形品はなくいずれも破片であり、製作に際しロクロ未使用のものである。

坏 (第49図1、2) いずれも底部形態は丸底と推定されるものである。(2)は高坏の坏部かもしれない。体部下半に段の巡るもので(2)は対応する内面にくびれのみられるものである。(1)は段より上は内湾直立気味、(2)は外傾気味の口縁を有するものである。器面調整は、内外面ともにヘラミガキがなされ、(2)は内黒処理されている。

須恵器

復元できるものはなく、いずれも破片である。

坏（第49図3） 体部から口縁部まで内湾気味に外傾するもので、底部切り離し技法は回転ヘラキリであり、わずかに調整のあとが認められる。

高坏（第49図4） 坏部を欠損しているもので、高台内外面はロクロ調整痕のみである。高台はあまり開かず比較的高いものである。高台接合時の時の調整によって切り離しは不明である。坏底部外面には菊花状文調整痕が残っている。底部外面には「官」と読める墨書痕が認められた。

第20号住居跡（C C 53）（第50図）

〔遺構の確認〕 C調査区のはぼ中央、第21号住居跡の南東約7m、第5住居跡の南西約7mの地点の地山で確認されたものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ方形であるが南東隅に丸い張り出しがみられる。規模は長軸（東西）約4.8m、短軸（南北）約4.5mである。床面積は約21.6㎡である。

〔堆積土〕 ほぼ1層である。黒褐色の腐植質土で、小礫、木根等が非常に多く含まれている。その他、地山のシルトが小ブロック状に入っている。

〔壁〕 地山をそのまま壁としたもので、壁は小礫が多く入り込んでいるため凹凸が激しく、壁面は出入りが多く直線的でないところが多い。残存壁高は比較的良好な北壁で約23cmであり立ち上がりも比較的緩かで深皿状である。

〔床〕 地山をそのまま床面としているものであるが、礫が多く凹凸が激しい。

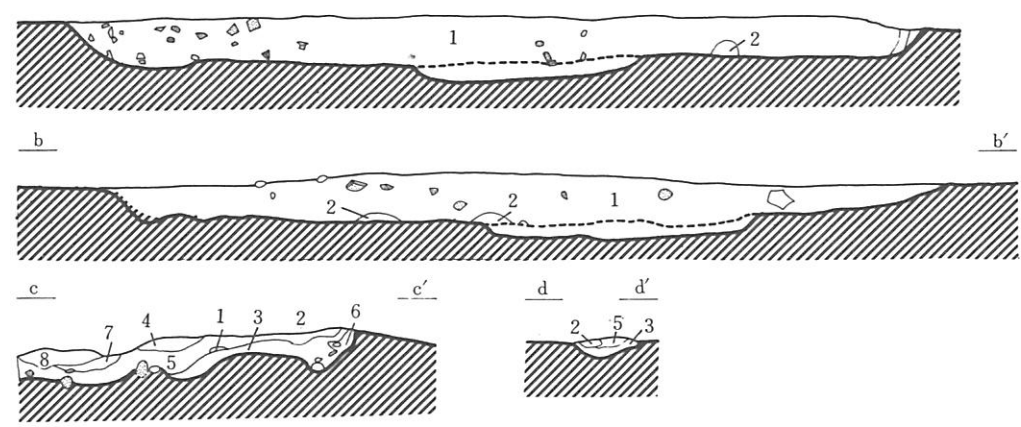
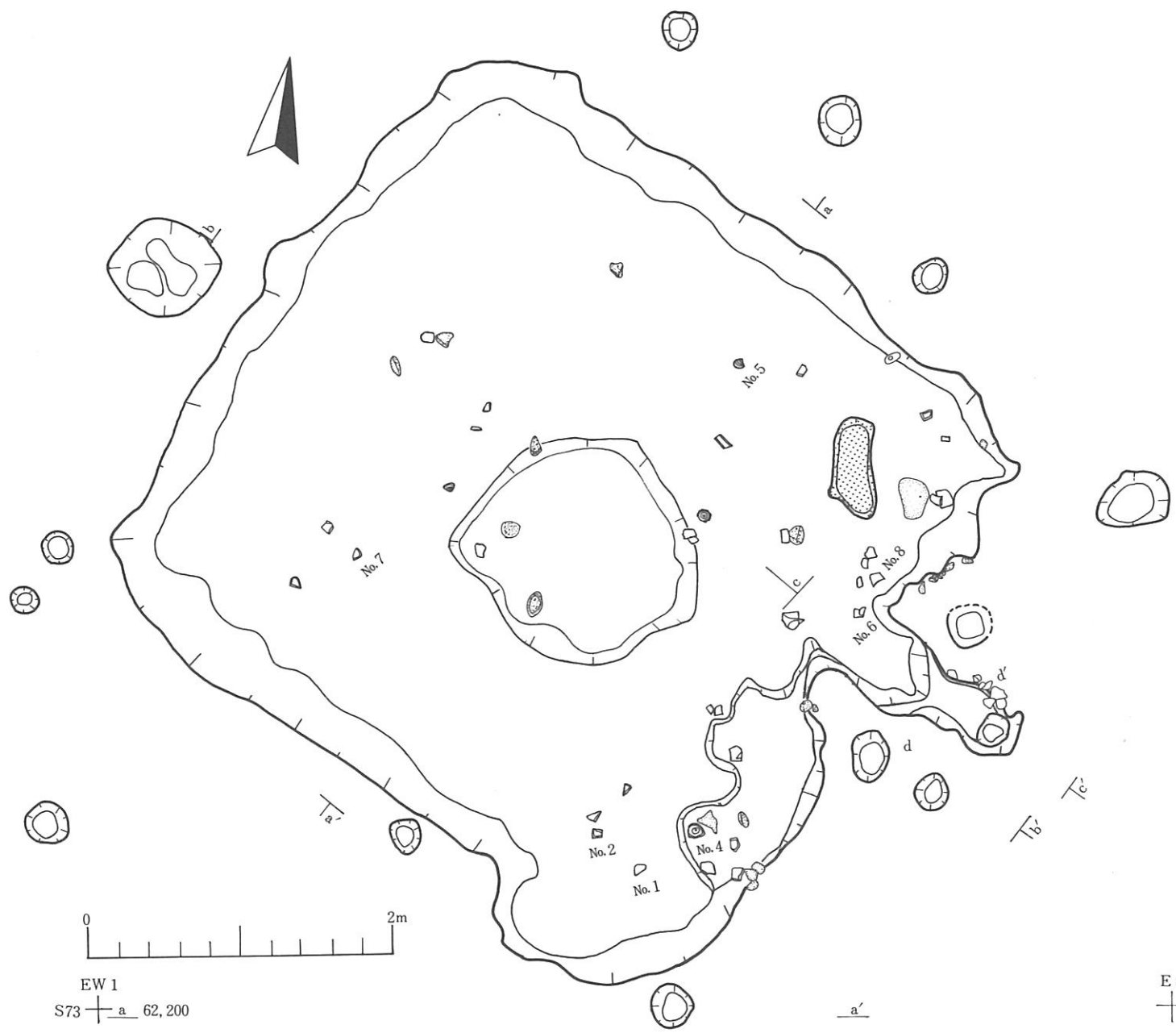
〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 東壁北寄りにとりつけられている。燃焼部及び煙道部よりなる。燃焼部の天井部分は既になくシルトで構築された両側壁は全体として焚き口部に崩れたような形で残存し、残存状況が悪く、特に、左側壁は一部しか残存していない。燃焼部は奥行約80cm、幅約50cmの舌状を呈し、東壁を掘り込んだ形である。煙道へは約10cmの段差をもって移行している。煙道は長さ約70cm、幅約40cmと他に較べて短く、煙出部にはわずかに落ち込みが認められた。焼土がびっしり堆積していたわりには残りが良くない。長軸方向はN-117°-Eである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 貯蔵穴状ピットは認められない。床面上から検出されたピットとして中央のピットがあるが、底面の一定しない皿状のもので住居に付随するものとは認められない。又、住居周辺にある小ピットは、煙道のところに一見「対」になっている小ピットがあり関連がありそうであるが明確ではない。その他、床面北東側、カマド右側にはそれぞれ焼土の堆積が認められたが性格は不明である。

EW 1
+ S66

E 8
+ S66



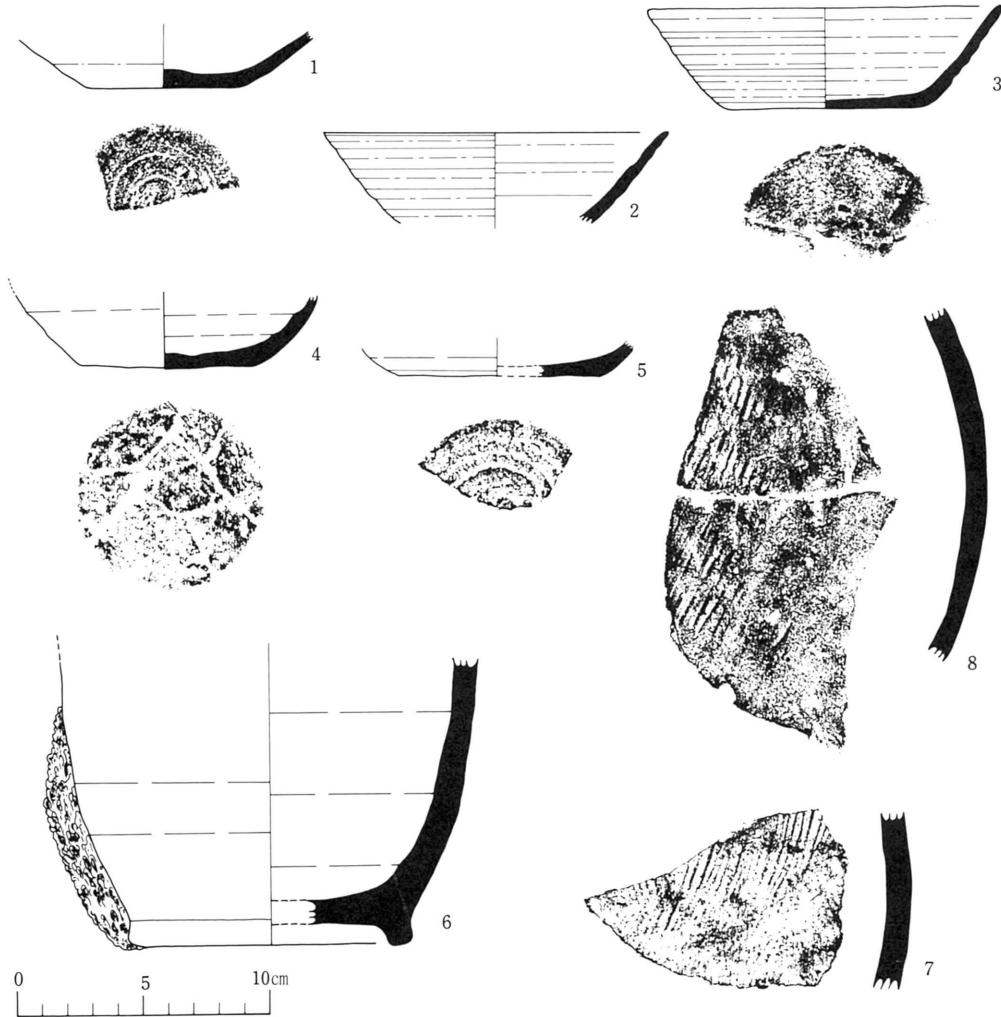
カマド堆積土

層	土色	土性	備考
1	5YR2/3 暗赤褐色	シルト	焼土微量
2	5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土
3	7.5YR3/1 黒褐色	シルト	炭化物
4	10YR5/8 黄褐色	シルト	
5	5YR3/3 暗赤褐色	シルト	炭化物質土多し
6	5YR3/6 暗赤褐色	シルト	焼土のブロックを多く含む
7	10YR5/6 黄褐色	シルト	焼土微量
8	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	焼土微量

堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR3/1 黒褐色	腐植質土	
2	7.5YR5/6 黄褐色	明褐色土	地山のシルトのブロック

第50図 第20号住居跡



(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調			整			底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径	分類番号
			外	面	内	面	内	面						
1	床面	須恵器(坏)	ロ	ク	ロ	ク	ク	回転ヘラ切り	(2.3)			(5.8)	C	
2	床面	須恵器(坏)	ロ	ク	ロ	ク	ク		(3.5)	(13.6)			C	
3	床面	須恵器(坏)	ロ	ク	ロ	ク	ク	回転ヘラ切り	3.9	14.0		(7.8)	C	
4	床面	須恵器(坏)	ロ	ク	ロ	ク	ク	回転ヘラ切り	3.0			(6.8)	C	
5	床面	須恵器(坏)	ロ	ク	ロ	ク	ク		1.5			(7.9)	C	
6	床面	須恵器(壺)	ロ	ク	ロ	ク	ク	回転糸切り	(11.9)			(11.7)	C	
7	床面	須恵器(甕)	タ	タ	キ	メ							C	
8	床面	須恵器(甕)	タ	タ	キ	メ							C	

第51図 第20号住居跡出土遺物

[年代決定資料] 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料は床面出土の土師器須恵器等である。

土師器 坏の出土はなく、いずれも甕だけの出土である。製作に際してはロクロ未使用のもの、ロクロ使用のものがあるが、口縁部、体部ともに小破片で実測できるものはない。

須恵器 いずれも破片で完形品はない。実測したものは坏5点、壺1点、その他に大甕の体部の破片の拓本がある。

坏 (第51図1～5) いずれも体部から口縁部まで外傾気の開くものと推定されるものである。(1、2)は灰白色、(3～5)はくすべ色を呈しているものである。底部の切り離し技法は一部不明なものもあるが、ほとんどがへら切り無調整のものである。

壺形土器 (第51図6) 破片なため正確な器形は不明であるが、高台付の壺形土器と推定されるものである。体部下半には窯壁の一部と思われるコークス状の塊が付着している。底部の切り離しは回転糸切りである。

甕 (第51図7、8) いずれも外面にタタキメが認められるもので、比較的大形の甕の体部破片と推定されるものである。

紡錘車 鉄製の紡錘車が北壁近くの床面より出土したが調査時の不手際により粉失した。

第21号住居跡 (B J 06) (第52図)

〔遺構の確認〕 C調査区の北端、ほぼ中央地点の地山面で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形はやや東西に長い長方形であり、南隅は丸く張り出している。南辺は直線的でなく出入りがみられる。規模は長軸(東西)約4.7m、短軸(南北)約3.8mで床面積は約17.1㎡である。

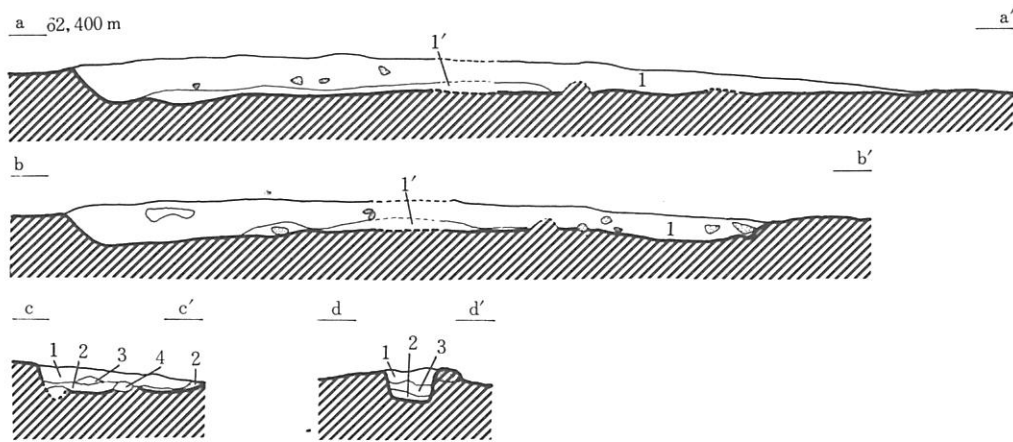
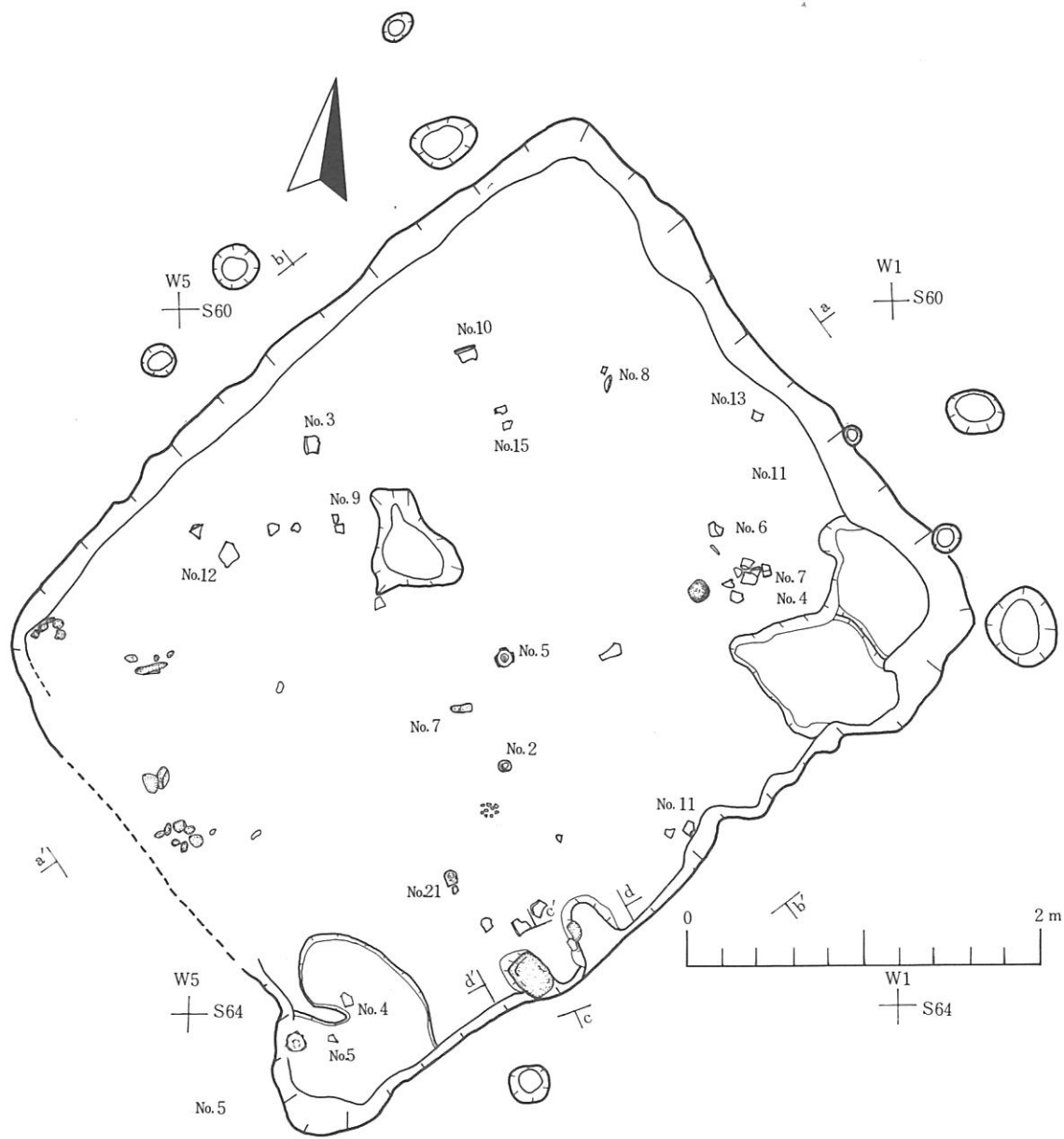
〔堆積土〕 ほぼ一層である。黒褐色の少しシルトの混じった腐植質土で木根や小礫が多く含まれている。床面をはじめ住居全域に堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているものであるが残存状況が悪く、北、東壁は良いところで約20cm内外の壁高を呈しているが、南、西壁では浅く皿状で南壁の一部は削平されて確認できないところもある。なお、南壁は出入りが多く直線的でない。

〔床〕 地山をそのまま床面としているが礫が多く凹凸が激しい。又、床面は全体として南から北へ緩かに傾斜している。南側は特に礫が多い。

〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 東壁南寄りにとりつけられている。検出されたカマドは燃焼部のみで、煙道については削平されて残存していないものか、当初からないものか不明であるが、前者の線がつよい。カマド本体は上部をかなり削平され、天井部も既に残存していない。両側壁はシルト、及び黒褐色土の混土で固めて構築されており、右側壁には芯材として砂岩性の直方体の石を利用している。燃焼部は奥行約40cm、幅30cmで舌状を呈し床面は皿状で奥壁で約20cmの段差をもっ



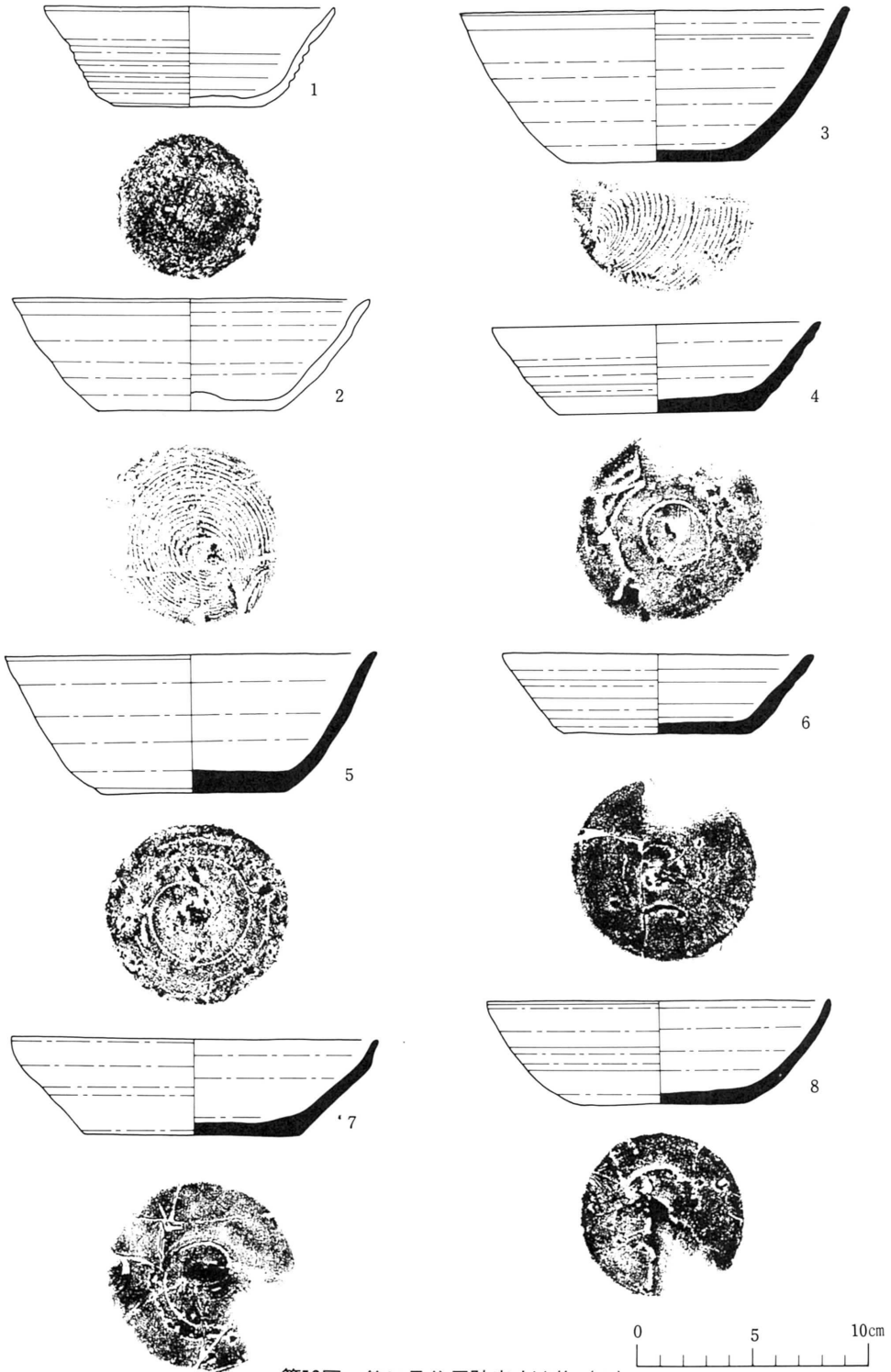
堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR ₂ 黒褐色	腐植質土	粘性があり、礫や木根を多く含む (ほとんど全面をおおっている)
1'	7.5YR ₁ 黒褐色	シルト	

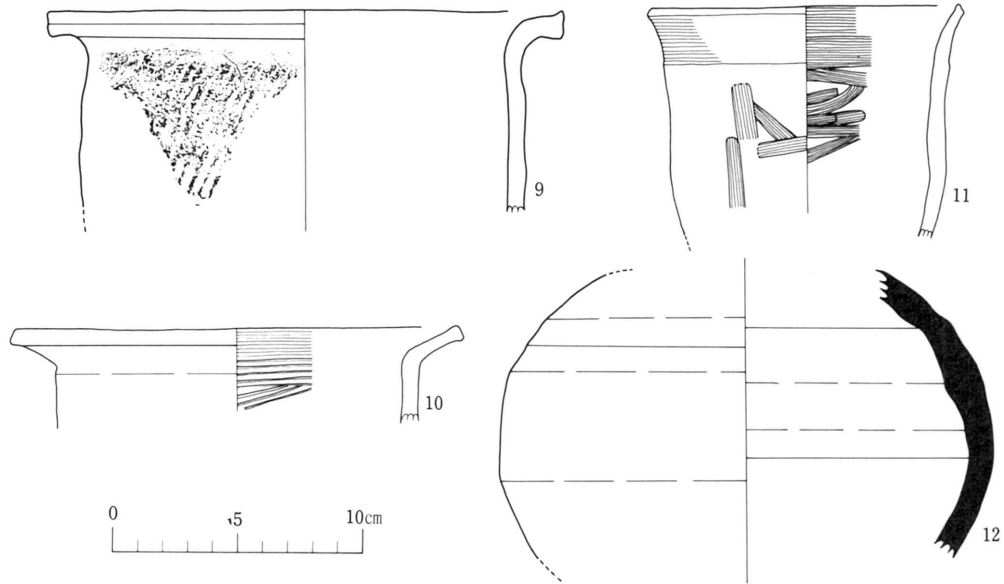
カマド堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR ₃ /3 暗褐色	シルト	径2cmぐらいの礫を含む
2	7.5YR ₄ /3 褐色	シルト	粘性なし
3	5YR ₃ /6 暗褐色		焼土、炭化物含む
4	10YR ₅ /6 黄褐色		荒いつぶ、小礫を含む

第52図 第21号住居跡



第53図 第21号住居跡出土遺物 (1)



(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類番号
			外面	内面						
1	床面	赤焼き土器(坏)	ロクロ	痕	ケズリ調整	4.3	12.5		6.4	
2	床面	赤焼き土器(坏)	ロク	ク	回転系切り	4.8	15.4		7.8	
3	床面	須恵器(坏)	ロク	ク	回転系切り	6.5	16.7		7.6	
4	床面	須恵器(坏)	ロク	ク	回転ヘラ切り	4.8	15.4		7.8	C
5	床面	須恵器(坏)	ロク	ク	回転ヘラ切り	5.9	16.0		8.1	C
6	床面	須恵器(坏)	ロク	ク	回転ヘラ切り	3.4	13.4		8.1	C
7	床面	須恵器(坏)	ロク	ク	回転ヘラ切り	4.2	15.8		9.3	C
8	床面	須恵器(坏)	ロク	ク	回転ヘラ切り	4.4	14.8		7.1	C
9	床面	土師器(甕)	ロク	ク	タタキ目	(7.7)	(20.5)			B
10	床面	土師器(甕)	ロク	ク		(3.5)	(18.1)			B
11	床面	土師器(甕)	ロク	ク	ナデ	(9.0)	(12.6)			B
12	床面	須恵器(壺)	ロク	ク		(11.5)		(19.6)		C

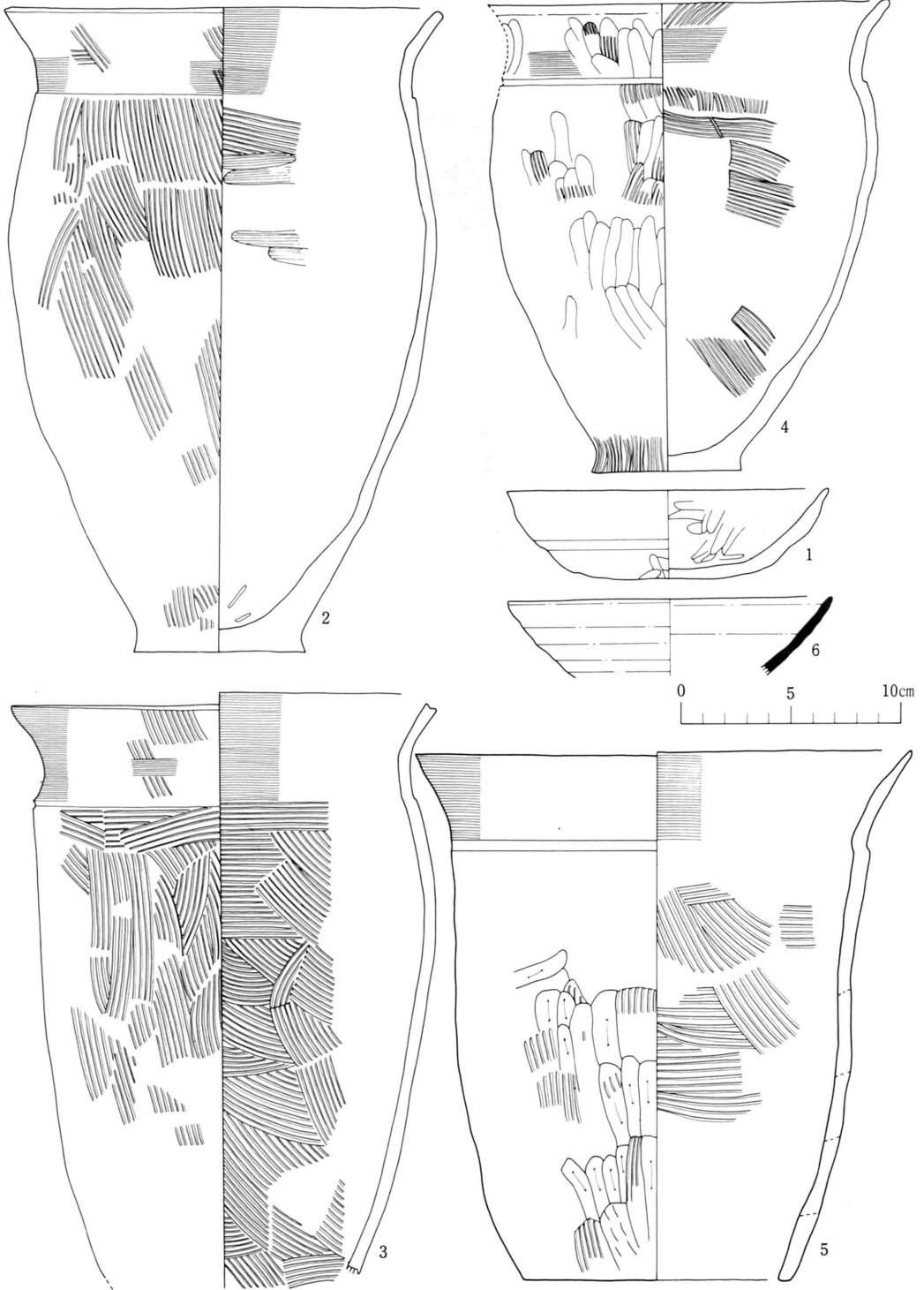
第54図 第21号住居跡出土遺物(2)

て地上に出ている。燃焼部内にはわずかに焼土の堆積が認められた。長軸方向はN-145°-Wである。

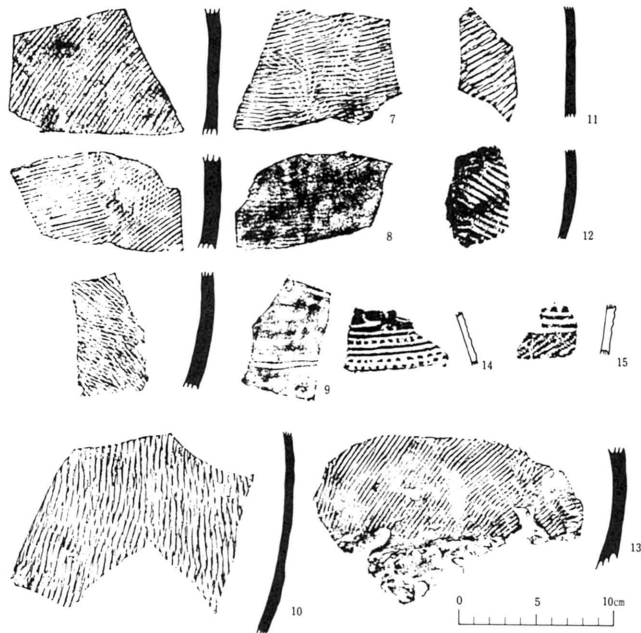
〔貯蔵穴状ピット等〕 南東隅、南西隅及び中央やや北寄りの床面より不整形のピットが検出された。そのうちP₁～P₃はそれぞれ壁に接し、深さは10cm前後の皿状を呈し、堆積土は炭化物や焼土を微量含むもので、底面より土師器の破片が少し出土している。貯蔵穴状ピットとも考えられるが、性格は不明である。なお、P₄は木根の攪乱によるものとみられる。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては床面より出土した土師器、須恵器等がある。

土師器 いずれも製作に際し、ロクロを使用しているものである。完形品はなくいずれも小破片である。実測したものは甕の口縁部3点だけで坏はない。



第55図 第21号住居跡堆積土出土遺物(1)



(出土遺物観察表)

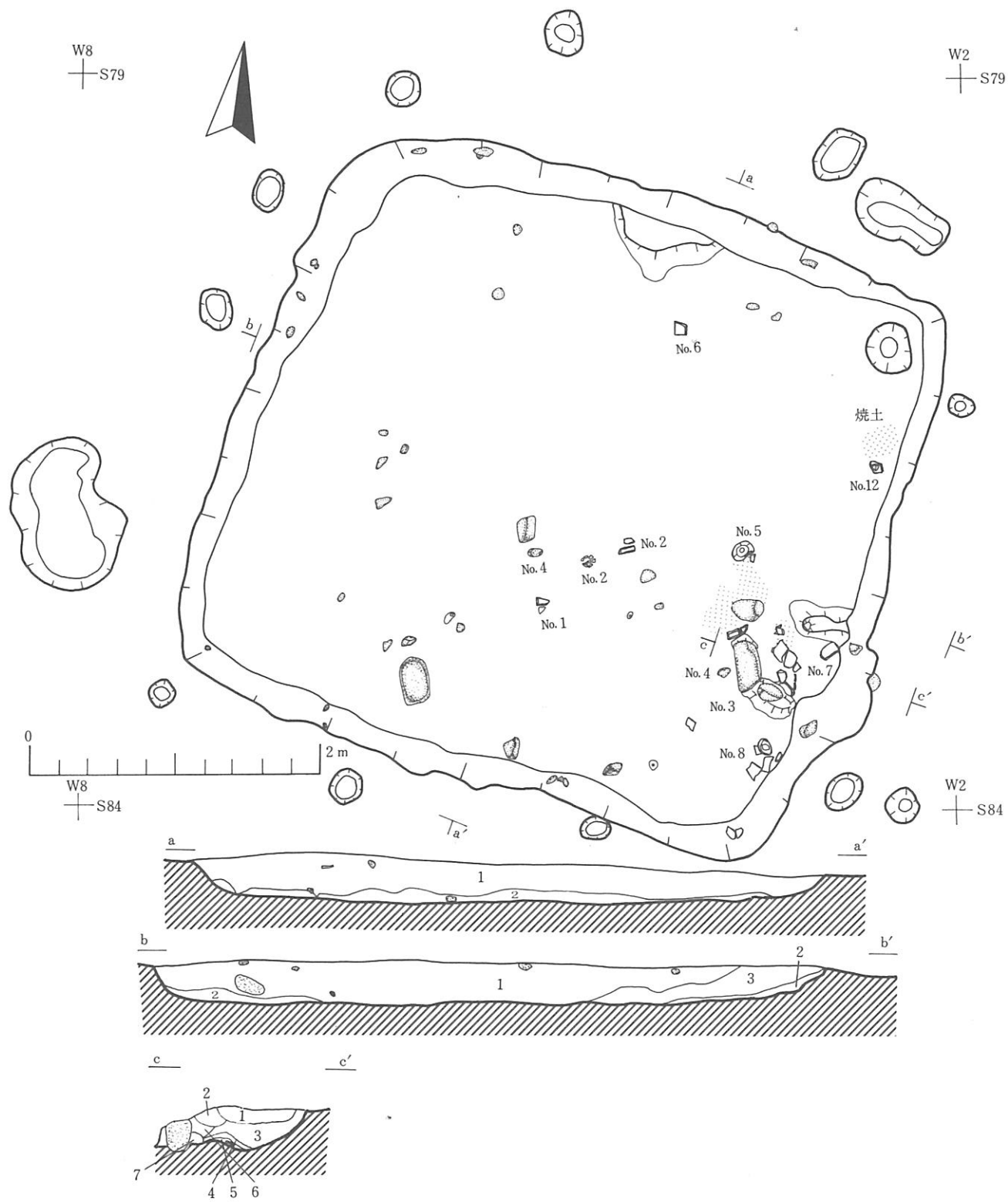
番号	出土層位	種別	調整		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	口径 (cm)	口径 (cm)	分類番号
			外面	内面						
1	埴積土	土師器(坏)	ヘラミナキ	ヘラミナキ・用色処理		4.0	14.7			A an
2	埴積土	土師器(甕)	ヨコナチ・ハケメ	ヨコナチ・ハケメ		29.0	19.9			A aiii
3	埴積土	土師器(甕)	ヨコナチ・ハケメ	ヨコナチ・ハケメ		(26.3)	19.3			A aiii
4	埴積土	土師器(甕)	ヨコナチ・ケスリ	ヨコナチ・ハケメ		21.1	18.3			A aiii
5	埴積土	土師器(甕)	ヨコナチ・ケスリ	ヨコナチ・ハケメ		23.6	22.4			
6	埴積土	須恵器(坏)				(3.4)	(14.4)			C
7	埴積土	須恵器(甕)	タタキメ							C
8	埴積土	須恵器(甕)	タタキメ							C
9	埴積土	須恵器(甕)	タタキメ							C
10	埴積土	須恵器(甕)	タタキメ							C
11	埴積土	須恵器(甕)	タタキメ							C
12	埴積土	須恵器(甕)	タタキメ							C
13	埴積土	須恵器(甕)	タタキメ							C
14	埴積土	縄文土器	羊歯状文							
15	埴積土	縄文土器	羊歯状文							

第56図 第21号住居跡堆積出土遺物(2)

甕(第54図9~11) (9)は口縁部「く」の字に外反しており(10)は強く「く」の字に外反し、口唇部がやや上方にわずかに引き出されているものである。(11)は外反気味の口縁を有し口唇部がやや上方にわずかに引き出されているものである。調整は多くは磨滅のため不明であるが(9)は体部外面にタタキメがみられ、その他ナデ、刷毛目などがみられる。

須恵器

坏(第53図1、2) (1)は体部が丸味をもって外傾し中半より口縁部にかけてやや強く外傾するものである。(2)は体部から口縁部にかけて外傾気味のものである。底部の切り離しは(2)は回転系切り技法によって切り離され無調整であるが、(1)は底部をケズリ調整しているため不明である。色調は(1、2)ともに浅黄橙色を呈し、胎土に微細な砂を多く含んでいる。(赤焼き土器)



堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色	腐植質土	
2	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色	腐植質土	シルトが多く混じる
3	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色	シルト	風化礫混じる

カマド堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色	シルト	焼土微量
2	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色	シルト	焼土微量
3	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色	シルト	焼土のブロック混じる
4	5YR $\frac{3}{4}$ 暗赤褐色	シルト	焼土
5	10YR $\frac{5}{6}$ 黄褐色	シルト	細かい礫多く混じる礫
6	10YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色	シルト	小礫0.5cm内外
7	10YR $\frac{5}{6}$ 黄褐色	シルト	

第57図 第22号住居跡

坏（第53図3～8）（3、8）は体部から口縁部まで丸味をもって外傾するものであり、(3)は他の坏に比べて器高の高いものであり、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。(4～7)は体部から口縁部まではほぼ直線的に外傾するものである。底部の切り離し技法はいずれも回転ヘラ切りであり(6、7)は体部と底部の境目をわずかに調整しているが技法の単位は不明である。

壺（第54図12） 壺の体部の破片と推定されるもので、体部外面は、褐灰色、灰白色、内面は橙色を呈しているものである。

〔堆積土出土遺物〕 堆積土より別表の如く多くの土師器、須恵器等の破片が出土しているが、その中で復元実測したものは、土師器の坏1点、甕3点、甑1点、須恵器の坏1点と、大甕の体部破片の拓本7点、縄文土器2点である。

土師器 製作に際しいずれもロクロを使用していないものである。

坏（第55図1） 底部形態は丸底のもので、体部外面に軽い段の巡るものである。対応する内面にはくびれは認められない。段から上は内湾気味に外傾する口縁を有するものである。器面調整は、一部不明のところもあるが内外面ともにヘラミガキされ、内面は黒色処理されている。

甕（第55図2～4） 最大径が口縁部にあり、器高が口径より大きいものである。いずれも頸部に段が巡り口縁部と体部を区画しているものである。口縁部はいずれも直立外反するもので胴部上半にふくらみのある長胴のものである。器面調整は、口縁部の内外面は一部ケズリのみられるもの(4)もあるが、いずれもヨコナデである。体部外面の(4)は軽いケズリであるが他はいずれも刷毛目である。内面は一部ナデのみられるもの(2)もあるが、いずれも刷毛目である。

甑（第55図5） 最大径が口縁部にあり、口径より器高の大きい口縁部が外反する無底のものである。器面調整は、口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面は下手にケズリ、内面は刷毛目である。

須恵器

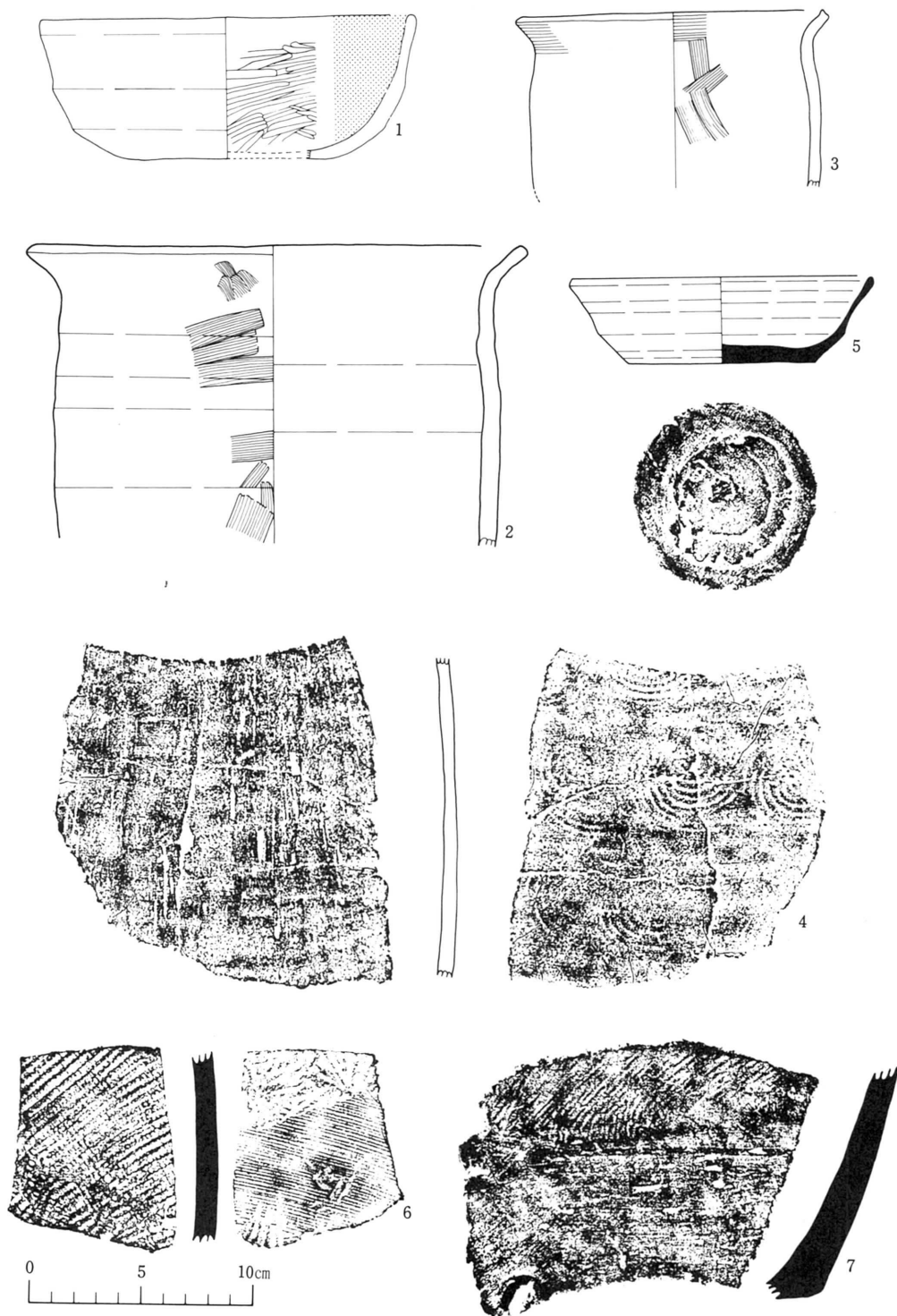
坏（第55図6） 口縁部が内湾気味に外傾する口縁を有する口縁部の破片である。

甕（第56図7～12） いずれも体部の破片で、外面には平行叩き目文があり、内面には当て工具痕や軽いナデのあるものである。

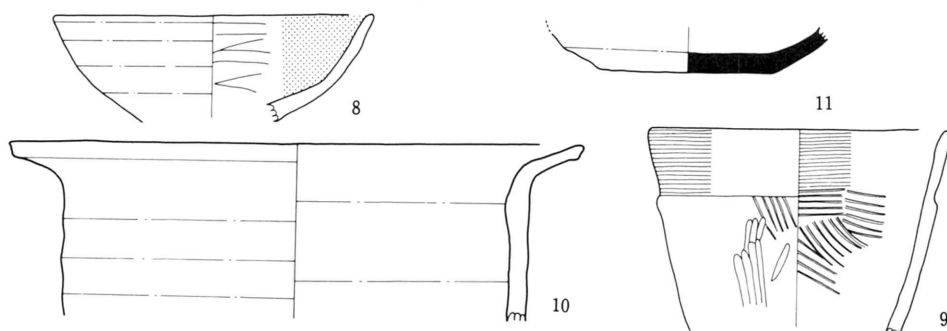
縄文土器

鉢形土器（第56図14、15） 小破片なため正確な器形は不明であるが簡略化された羊歯状文が施されている鉢形土器の口縁部近くの破片と推定されるものである。その文様の特徴から大洞C₁式に併行するものとみてよいものであろう。

—上餅田遺跡—



第58図 第22号住居跡出土遺物



(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ・黒色処理		6.3	(15.0)		(8.8)	B
2	床面	土師器(甕)	ナ	デ	ロクロ痕・ロクロ痕					B
3	床面	土師器(甕)	ナ	デ						B
4	床面	土師器(甕)	ケズリ		同心円状当て具痕					
5	須恵器	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラ切り	3.9	13.6		8.3	C
6	床面	須恵器(甕)	平行叩き目文	放射状当て具痕						
7	床面	須恵器(甕)	平行叩き目文							
8	堆積土	土師器(坏)	ロクロ痕	ミカキ・黒色処理		4.3	(12.9)			B
9	堆積土	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ		(8.2)	(12.0)			
10	堆積土	土師器(甕)	ロクロ痕	ロクロ痕		(7.0)	(22.9)			
11	堆積土	須恵器(坏)			ヘラ切り	(1.7)			6.9	C

第59図 第22号住居跡堆積土出土遺物

第22号住居跡 (C G 09) (第57図)

〔遺構の確認〕 C調査区の南側中央部、第11号住居跡の南東約4mの地点の地山で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は、ほぼ方形に近いものであり、規模は長軸(東西)約4.6m、短軸(南北)約4.3mである。床面積は約19.8㎡である。

〔堆積土〕 3層に大別される。1層は、黒褐色の腐植質土で、小礫を多く含み、壁沿いを除くほぼ全域に堆積している。2層は、黒褐色のシルトで主に壁近くより床面に薄く堆積している。3層は、黄褐色のシルト混じりの褐色土で、東側壁近くより西に向って床面に堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているもので、立ち上がりは緩かで深皿状を呈しているところが多い。壁高は、残存状況の良好な西壁で約25cmである。壁面には小礫が多く入っており、小さな凹凸が多くみられる。

〔床〕 地山をそのまま床としており全体としてみるとほぼ平坦であるが、小礫が多く出ており小さな凹凸が多くみられ、一見、石敷きの床のように見える床面である。

〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 東壁南寄りにとりつけられている。燃焼部のみで煙道部は検出されていない。燃焼部の天井は既になく両側壁のみが残存していたもので、特に、右側壁はほとんど崩れて形を留めず低くなっていた。残存状況の良好な左側壁でみると、黄褐色のシルトを固めて構築していたことがわかる。焚口部には、カマドの天井部や側壁等を構築した際利用したとみられる長さ約40cm、径約20cm楕円状のものなど大小数個の川原石が散乱していた。これらはいずれも熱を受けた跡があり、表面は赤変しもろくなっていた。燃焼部は奥行約50cm、最大幅約50cmの舌状を呈し底面はやや掘りくぼめられ焼土の堆積がみられた。長軸方向はN-108°-Eである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 北東隅床面より径約38cm、深さ約8cmの皿状のピットが検出されているが性格は不明である。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料は床面及び、カマド内出土の土師器、須恵器等がある。

土師器 いずれも製作に際してロクロを使用しているものである。出土したものは小破片がほとんどで、実測したものは坏1点、甕2点、拓本1点である。

坏（第58図1） 内湾気味に外反する口縁を有し、内面はヘラミガキで黒色処理を施しているものである。底部切り離し技法は磨滅のため不明である。

甕（第58図2、3） いずれも口縁部の破片である。最大径が口縁部にあり口径より器高の大きいもので長胴形と思われるものである。口縁部は「く」の字に外反するものでロクロ調整されているが体部内外面にナデがみられる。（4）は胴部の破片であるが、外面がケズリ、内面に同心円状の当て工具痕がみられるものである。

須恵器 復元可能なものは坏1点のみで他はいずれも甕の破片である。

坏（第58図5） 体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するもので、口径に比べて底径の大きいものである。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りで、調整はみられない。

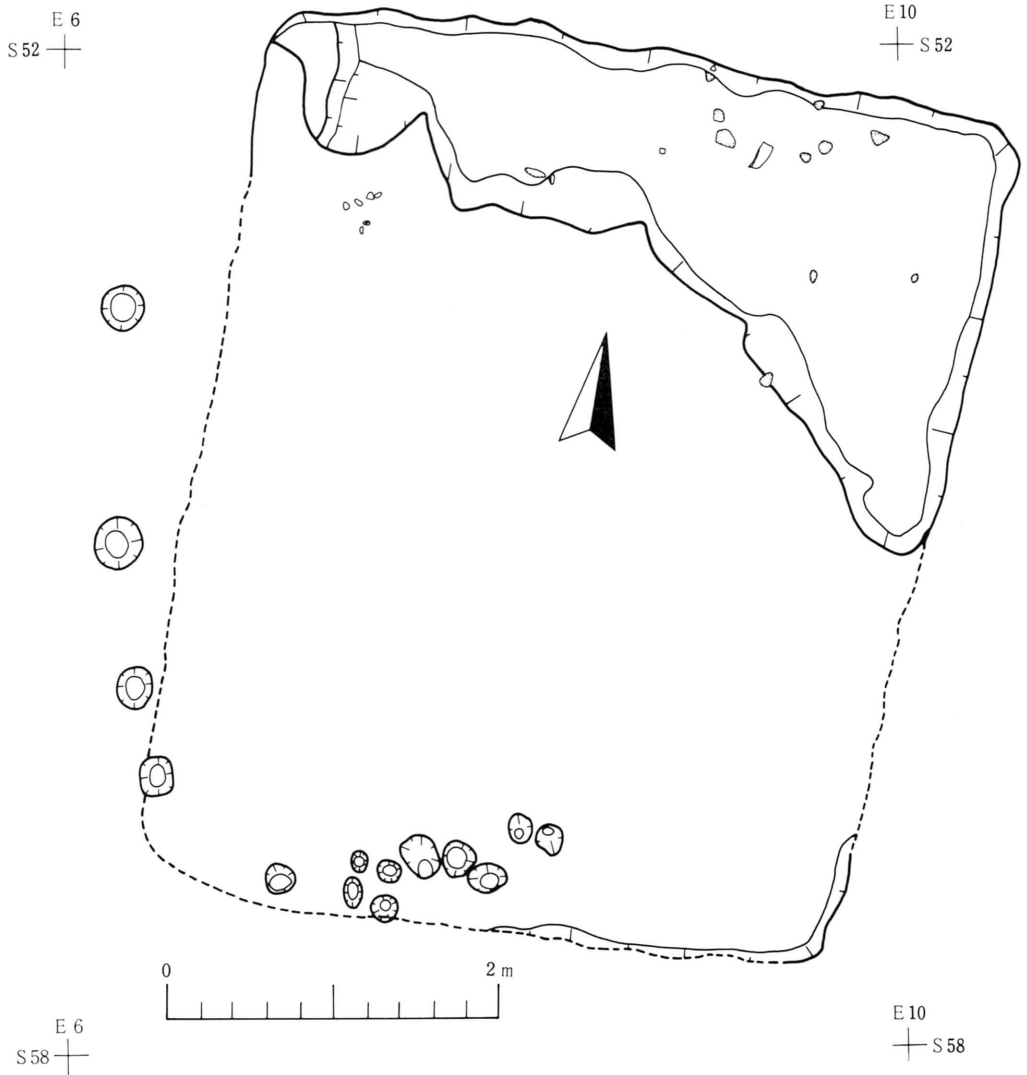
甕（第58図6、7） 体部の破片で外面は平行叩き目文、内面は放射状当て工具痕とヨコナデ痕がみられる。（7）は、大甕の底部とみられるもので底部近くは横のケズリ、その上部には平行叩き目文がみられ、内面は雑なナデ調整が施されている。表面は灰白色であるが内面は黄白色である。

〔堆積土出土遺物〕

土師器 製作に際してロクロ未使用のものとロクロ使用のものがある。いずれも口縁部の破片である。

坏（第59図8） 体部から口縁部にかけて内湾気味に外傾しているもので外面はロクロ痕、内面は、ミガキがなされ黒色処理されている。

甕（第59図9、10） （9）はロクロ未使用のもので、口縁部がわずかに外傾する小形の甕と



第60図 第23号住居跡

推定されるものである。内外面とも口縁部はヨコナデ、体部は刷毛目である。(10)は口縁部が「く」の字に強く外反しているロクロ使用のものである。

須恵器

坏 (第59図11) ヘラ切り痕のある坏の底部である。

第23号住居跡 (BH56) (第60図)

〔遺構の確認〕 B調査区の南端、第10号住居跡の南約3mの地点で、南壁の一部が第5号住

—上餅田遺跡—

居跡の北壁と接するような形で検出されたものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形〕 住居跡の大部分はすでに削平されており、北及び北東側の一部分と南側の壁の極一部が残っている。残存部から推定すると平面形は、ほぼ長方形と思われる。

〔堆積土〕 確認面が削平されて低い面なため比較的残りのよい北東隅附近を中心に北側に一部残っているにすぎない。礫の多少により2層に分けられるが、本質的には礫、地山の明黄褐色のシルト混じりの暗褐色シルト1層である。

〔壁〕 地山をそのまま壁としており、北壁及び東壁、南壁の一部が検出されている。残存高は最も高い北東隅で約10mであり立ち上がりもゆるやかである。

〔床〕 地山をそのまま床としているものである。北及び北東側に一部存在している。床面は木根による攪乱などにより凹凸が多い。

〔柱穴〕 住居内と推定される所により11個のピットが検出されているが、配列や深さ等からみて、それとみられるものは確認されなかった。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定するための資料として床面より出土したものはなく、埋土より須恵器の大甕の破片の他土師器の甕の破片数点が出土したのみである。

第24号住居跡 (BF 12) (第61図)

〔遺構の確認〕 B調査区の南西地域、第7号住居跡の南約3mの地点の地山面で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 隅丸方形である。規模は、東西、南北ともに約4.2mである。床面積は約17.6㎡である。

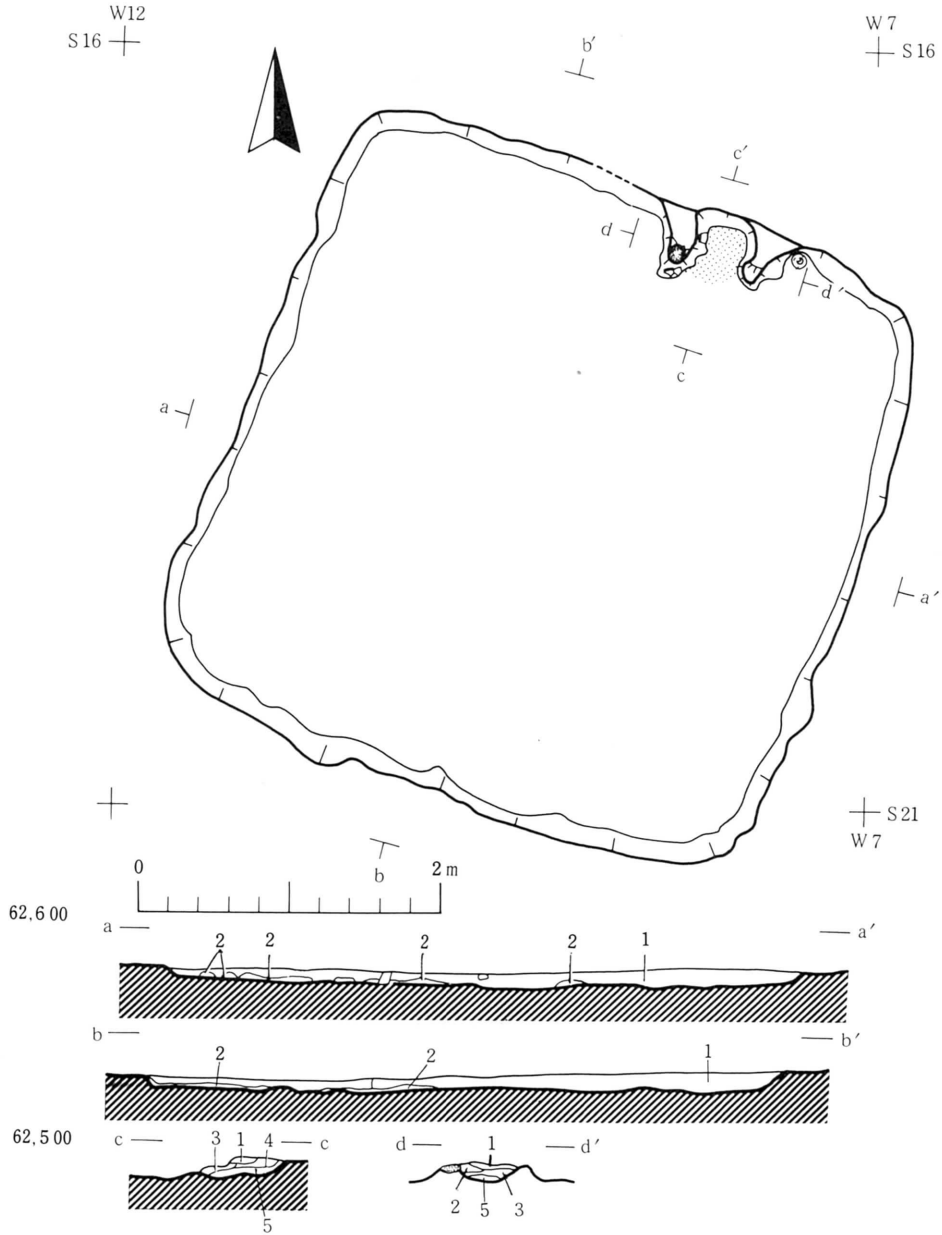
〔堆積土〕 2層に大別される。1層は暗褐色の炭化物を微量に含む腐植質土であり、住居のほぼ全域に堆積しており、ほぼ全般にわたり床面にも達している。2層は褐色のシルトで、礫を多く含み、南壁際及び住居の南西部分の床面上に薄く堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているものであり、全体に削平をうけて残存状態はよくない。壁高は最も残りの良い南壁で約10cmであり、他は6～8cmである。従って壁の立ち上がりも皿状に近く鋭さに欠ける。

〔床〕 地山をそのまま床としておりほぼ平坦でかたい。

〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 北壁東寄りにとりつけられている。検出されたカマドは燃焼部のみで、煙道はない。全体として上部を削平され両側壁も扁平な形で残存しているもので本体の天井部等も既に



(出土遺物観察表)

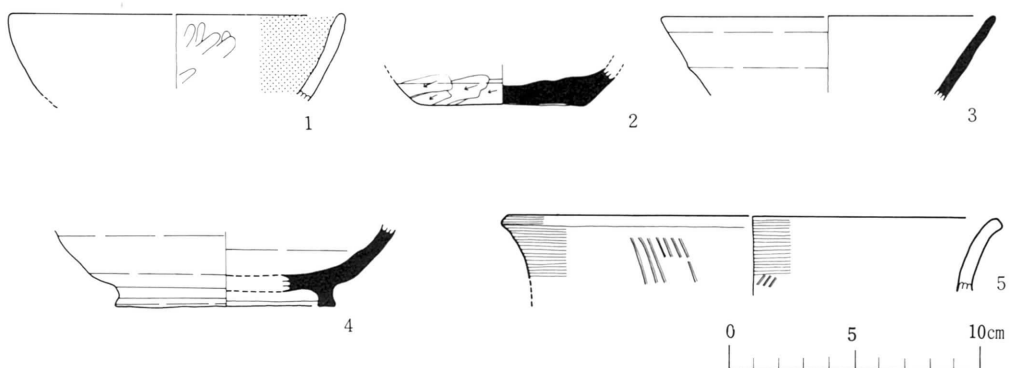
カマド堆積土

堆積土			
層	土色	土性	備考
1層	7.5YR ㄱ 暗褐色	腐植質土	炭化物を微量含む
2層	7.5YR ㄱ 褐色	シルト	礫を多く伴う 地山のシルトが混じる

層	土色	土性	備考
1層	7.5YR ㄱ 褐色	シルト	
2層	7.5YR ㄱ 暗褐色	シルト	
3層	10YR ㄱ におい黄褐色	シルト	焼土微量含む
4層	5YR ㄱ 赤褐色	シルト	焼土、炭水化物を含む
5層	10YR ㄱ におい黄橙色	シルト	焼土混じる

第61図 第24号住居跡

—上餅田遺跡—



(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高 (cm)	口径 (cm)	体径 (cm)	底径 (cm)	分類 番号
			外面	内面						
1	カマド内	土師器(坏)	不明	ミガキ、黒色処理			(13.5)			A
2	床面	須恵器(坏)	ロクロ、ケズリ	ロクロ	ヘラケズリ	(1.5)			6.5	C
3	床面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ		(3.4)	(13.4)			C
4	床面	須恵器(高坏)	ロクロ	ロクロ		(3.0)				C
5	床面	土師器(甕)	ヨコナデ	ヨコナデ		(1.8)	(20.0)			

第62図 第24号住居跡出土遺物

ない。燃烧部は奥行約40cm、幅約30cmで舌状を呈し底面は熱を受け赤変し焼土が2～3cm堆積していた。奥壁は約10cmの段差をもって地上へ続いているが、その外に煙道部らしきものは認められない。両側壁は芯材に直方体状の砂岩質の石を入れシルトでもって構築しているもので両側壁は熱をうけ赤変しているところが多い。長軸方向はN-18°-Eである。

〔貯蔵穴状ピット等〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用の年代を決定するための資料としては、カマド内及びその周辺の床面より出土の土師器、須恵器がある。製作に際してロクロを使用していないものとロクロを使用しているものがある。

土師器 いずれも小破片で復元できるものはない。

坏 (第62図1) (1)は内湾気味の口縁を有する坏の破片である。内面はヘラミガキ後黒色処理され、外面は磨滅のため不明である。

甕 (第62図5) (5)は外反気味の口縁を有し、口唇部が角に調整されている長胴の甕とみられるものの破片である。調整は内外ともにヨコナデである。

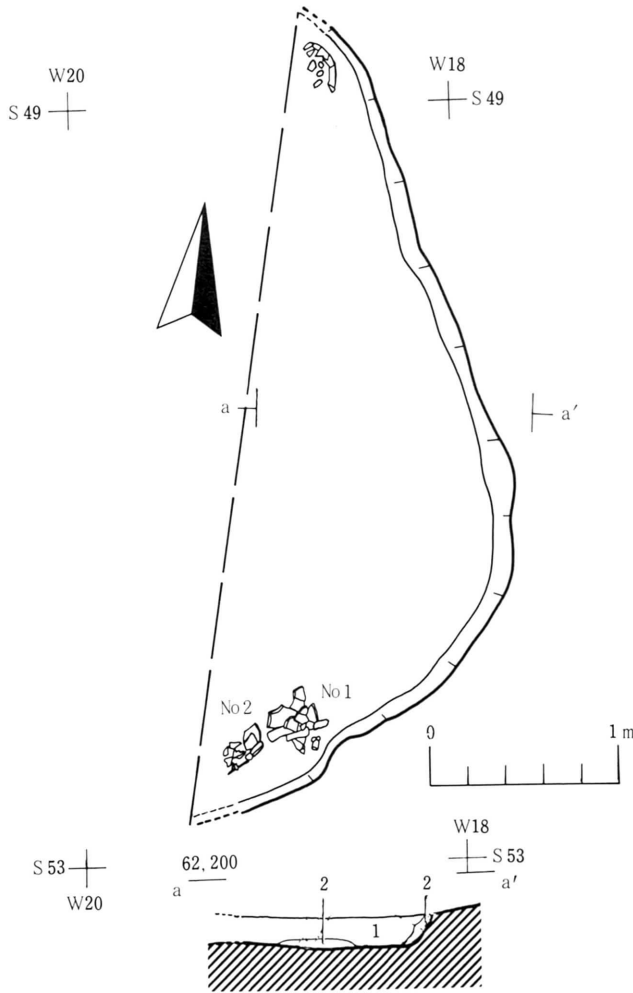
須恵器 (第62図2～4) いずれも底部や口縁部の破片である。

坏 (2)は、底部下端から底面にかけてヘラケズリ調整を施しているものであり、切り離し技法は不明である。(3)は外傾気味の口縁である。

高坏 (4)はやや開き気味の高台部であるが底部の切りはなし技法は小破片のため不明である。

第25号住居跡 (BG 21) (第63図)

〔遺構の確認〕 B調査区の西端、第14号住居跡の北約2mのところの地山面でその一部を確認



堆積土

層	土色	土性	備考
1層	7.5YR 暗褐色	腐植質土	小木根
2層	7.5YR 暗褐色	シルト	壁のシルトが

第63図 第25号住居跡

〔貯蔵穴状ピット等〕 検出した部分には認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築、使用等の年代を決定するための資料は、床面出土の土師器がある。

土師器 完形品、復元可能なものは甕2点である。いずれも製作に際してロクロ未使用のものである。

甕（第64図1、2） 最大径が口縁部にあり器高は口径より大きいもの（1）と、最大径が体部

したものであり、大部分は調査区外にあるものである。

〔重複〕 検出した部分には認められない。他は不明である。

〔平面形・規模〕 検出した部分から推測すると方形を基調とした隅丸方形になると思われるが正確なことは不明である。規模は、東壁とみられる部分が約3.5mである。その他は不明である。

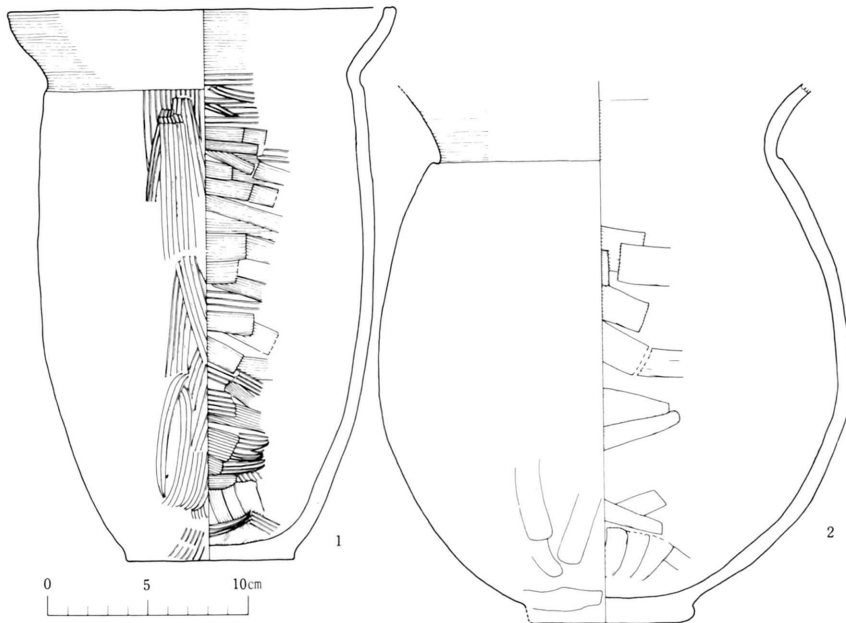
〔堆積土〕 2層に分けられる。1層は住居内のほぼ全域を覆っていると思われる黒褐色腐植質土であり、2層は壁際と床面の一部に堆積している。地山の混じった暗褐色土である。

〔壁〕 地山を壁としており比較的鋭い立ち上がりを呈している。検出した東壁の壁高は約20cmである。

〔床〕 地山をそのまま床としている。検出されたところは平坦で固い。

〔柱穴〕 検出した部分には認められない。

〔カマド〕 不明である。



(出土遺物観察表)

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・刷毛目	ヨコナデ・刷毛目	木葉底	27.5	19.4		8.5	AⅠa2i
2	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉底	(26.0)		23.6	8.5	AⅢa2ii

第64図 第25号住居跡出土遺物

にあり、器高が体部径より大きいもの(2)がある。いずれも頸部に段が巡るものである。(1)は口縁部が外傾気味に内湾し胴部がややふくらみをもつ長胴である。又、(2)は口唇部近くが欠損しており正確な器形は不明であるが、口縁部が外反し、体部はやや面長な球形を呈するものである。器面調整は、いずれも口縁部の内外面はヨコナデ、(1)の外面は刷毛目、内面は刷毛目後ヘラナデである。(2)は外面は磨滅しているところが多いが、下半はケズリがみられ、内面はヘラナデである。

2 溝遺構とその出土遺物

第1号溝(第3図)

〔確認面〕 調査区(A)の最北端の地山面で確認したものである。

〔形状、方向等〕 溝の断面形は、西側では逆台形状を呈し、東に移行するにつれてV字に近い形になっていて、東端の落ち込み部分は広くえぐれて滝壺状になり、底面、側面には多くの礫が露出している。溝は、ほぼ西から東へ走っており、東端は約1mの落差をもって落ち込み、更に崖下へと落ちており、第17号住居跡を切っているものである。性格は不明である。

〔規模〕 残存長は、約18 mで上幅は約70～100 cm、底面幅は25～50 cm、深さは約15～30 cmで東へ移行する程深くなる。落下部分は上端約2 m、底面幅は約70～100 cmである。

〔堆積土〕 主に黒褐色の腐植質土で1層である。

〔出土遺物〕 溝より出土はなく滝壺状の落ち込みの底面より、少量の土師器の坏、甕の体部の破片が出土している。

第2号溝（第3図）

〔確認面〕 第1号溝のすぐ南の地山面で確認したものである。

〔重複〕 第1号溝の西部分より分れて東へ走るものである。

〔形状、方向等〕 断面形は逆台形状を呈しており、緩かな傾斜で西より東端まで、わずかに蛇行しながら走るもので性格は不明である。

〔規模〕 現存長は約9.5 mで、上端幅は30～40 cm、底面幅は約20～25 cm、深さは約15～20 cmである。

〔堆積土〕 黒褐色の腐植質土1層のみである。

〔出土遺物〕 堆積土中より土師器の甕の体部破片が7片出土している。

第3号溝（第3図）

〔遺構の確認〕 第2号溝の南約2 mの地点の地山で確認したものである。

〔形状、方向〕 浅い皿状を呈しているもので途中は削平されて確認できなかったものである。やはり、東端で落込む。ほぼ、西から東へ走るものである。

〔規模〕 現存長約13 m、上端約30～40 cm、底面幅25～30 cm、深さは10 cm内外である。

〔堆積土〕 黒褐色の腐植質土一層である。

〔出土遺物〕 特に出土していない。

第4号溝（第3図）

〔遺構の確認〕 D調査区の南西地域、耕作土下の地山面で確認したものである。

〔形状、方向〕 逆台形状を呈すもので西に移行するほど底面が掘り込まれV字に近くなる。東から西へ調査区内を斜めに横切って走っているもので途中で枝状に浅い皿状の溝が入りこんでいるもので性格は不明である。

〔規模〕 現存長は約28 m、上端幅は1.2～1.4 m、底面幅は、0.8～1 m、底面幅0.6～0.8 m

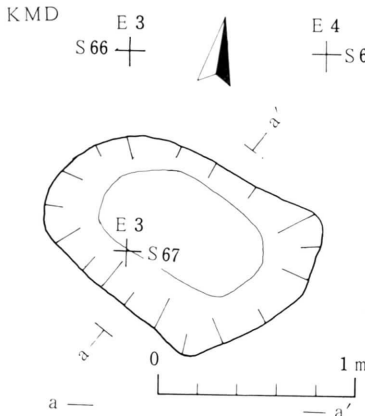
〔堆積土〕 黒褐色の腐植土1層であるが、西へ移行するほど小礫が多く含まれている。

〔出土遺物〕 堆積土中より、土師器の坏の口縁部1、甕の口縁部2、体部25、木葉底1が出土している。いずれも小破片で、復元、実測できるものはない。

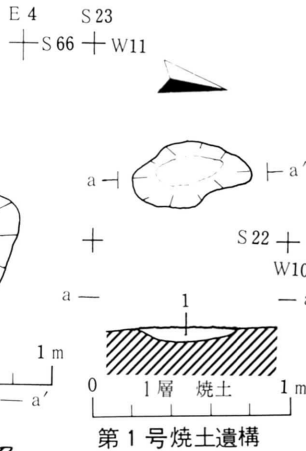
3 焼土遺構とその出土遺物

第1号焼土遺構

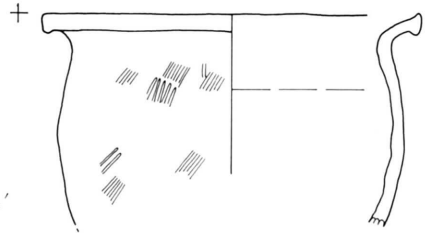
—上餅田遺跡—



1層 焼土、炭化物微量
第2号焼土遺構 (第65図)



第1号焼土遺構



第2号焼土遺構出土遺物 S=ㄨ
調査区の北西、第1号住居跡の北西

隅からわずか50cm北の地山面で確認したものである。平面形は、少しくずれた楕円形で、長軸約60cm、短軸約45cm、深さは約6cmである。底面は平坦で壁面は非常に緩かに皿状を呈しているものである。底面全体に熱で赤変した焼け面がみられた。堆積土は焼土のみで、遺物は出土し

ていない。性格は不明である。

第2号焼土 (C C 56) (第65図)

B調査区の北東第20号住居跡の北東約2m第5号住居跡との間の地山面で確認したものである。平面形は隅丸の長方形で、長軸約90cm深さは約10cmである。壁面は緩かで深皿状を呈している。底面は平坦で、特に熱を受けた様子はみられない。堆積土は、炭化物の少量混じった焼土のみである。出土遺物は堆積土中より土師器の甕の破片が出土している。性格は不明である。

土師器

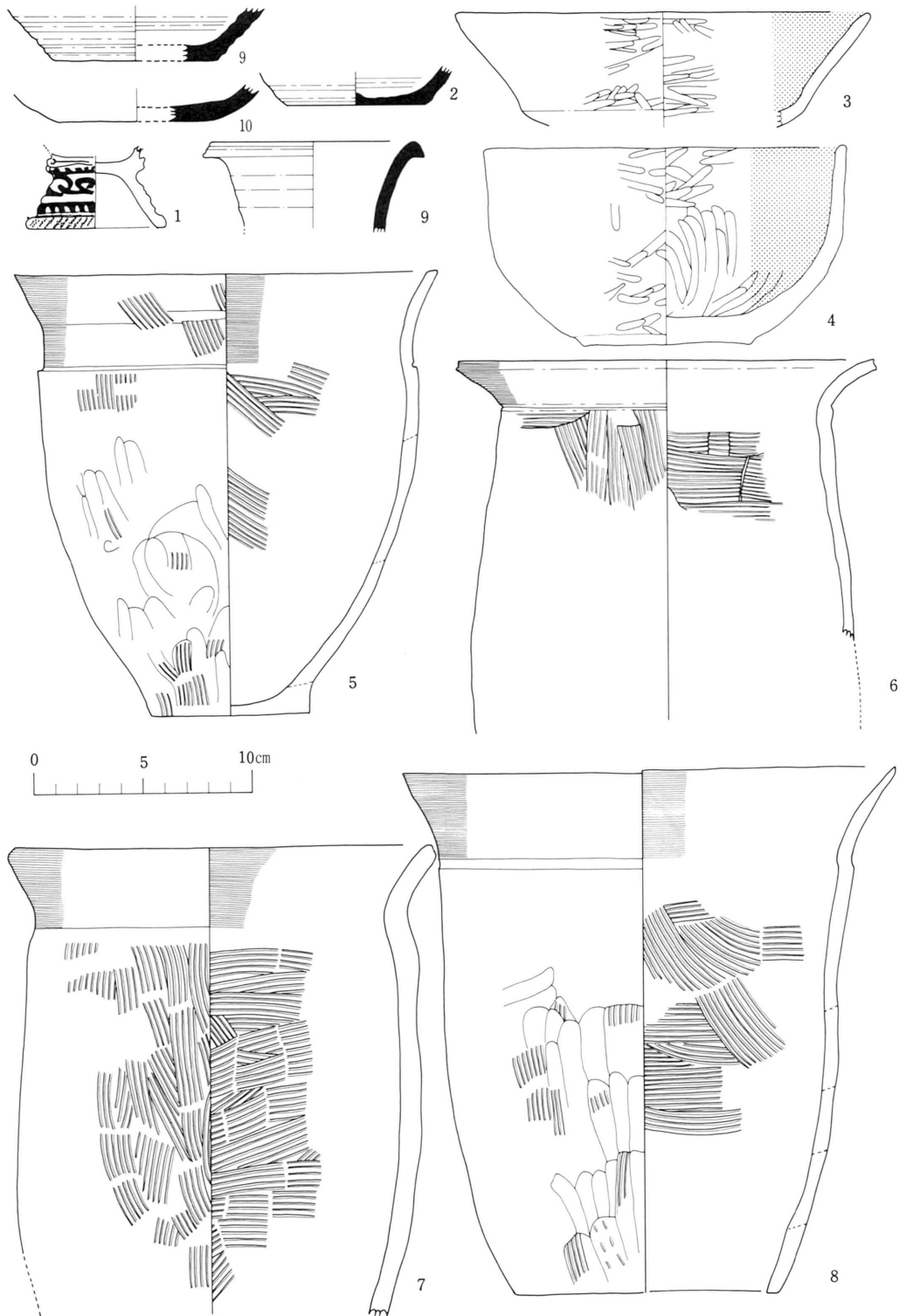
甕 (第65図1) 製作に際してロクロを使用しているもので、下半及び上半部の多くを欠損している破片なため正確な器形は不明であるが、体部中央がふくらむ長胴の甕とみられるものである。頸部で強く「く」の字に外反して短い口縁部がつくり出されている。口縁端部は上下にややのびて狭い縁帯状をなしている。器面調整は外面には平行タタキメ文がみられ、内面はロクロ調整である。

4 小ピット群

住居跡の周辺には、多くのピットが存在する。特にC区中央附近に多い。これらの平面形は円形、楕円形、あるいは不整形のものであり規模は径、深さともまちまちである。これらは、特に柱痕跡の確認されたものもなく、配列においても規則性に欠け、その性格を指摘できる根拠をもつものはない。

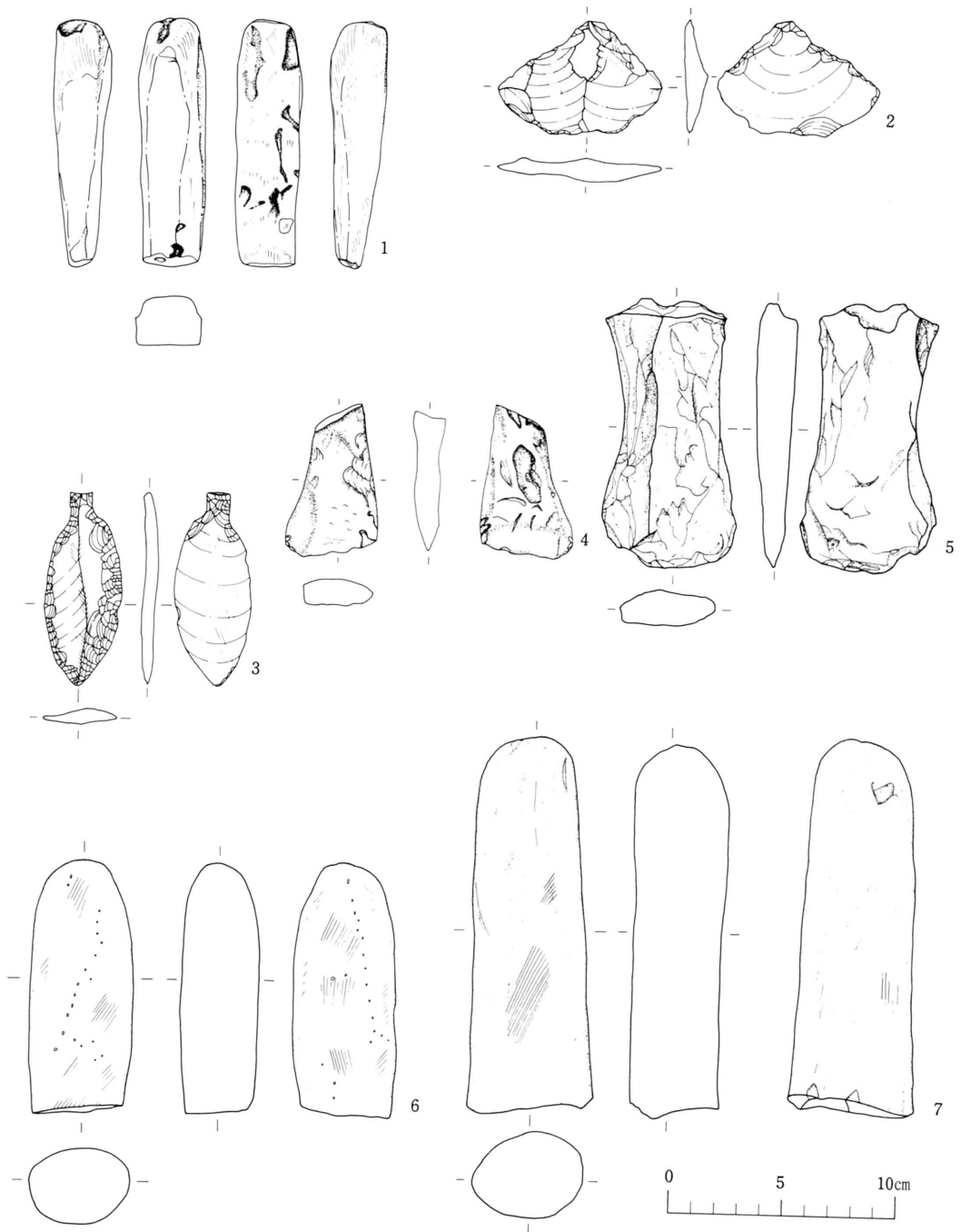
5 表土および出土地点不明の遺物 (第66、67図)

ここでとりあげる遺物は表土除去および遺構検出の際表土中より出土した遺物や表採等によ



第66図 表土、出土地点不明遺物(1)

—上餅田遺跡—



第67図 表土、出土地点不明遺物（2）

る出土地点不明の遺物である。縄文土器、土師器、須恵器、石製品がある。

縄文土器 羊歯状文や連続刻目文等のモチーフのみられる台付鉢の高台部である。縄文晩期前半B—C式或はC₁式に属するものであろう。

土師器 製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。実測したものは坏2点、甕2点、甌1点等である。

坏 いずれも底部形態が丸底と推定されるものである。(1)体部下半に段が巡り(2)は内面にくびれがみられず体部から口縁部にかけて内湾気味に外傾するものである。(3)は外面に段が巡り内面にくびれを有するもので体部から口縁部にかけて外傾気味のもので、高坏の坏部である可能性もある。調整はいずれも内外面ともヘラミガキし、内面は黒色処理されている。

埴形土器 (第66図4) 底部から口縁部にかけて内湾気味に直立するもので甕の底部に類似した低い台のついているものである。体部外面はヘラケズリされ、内面は粗いヘラミガキがなされ黒色処理されているものである。

甕 (第66図5～7) 最大径が口縁部にあり器高が口径より大きいもの、或は大きいものと推定されるものである。いずれも口縁部が外反するもので(5、6)は頸部に段が巡り体部と区画しており、(7)は無段のものである。器面調整は口縁部の内外面はヨコナデ、体部は(5)は下半にかけてケズリがみられるが他は刷毛目である。内面はいずれも刷毛目である。

甌 (第66図8) 口縁部が軽く外反し、頸部に段の巡るもので無底式のものである。器面調整は口縁部内外面はヨコナデで、体部外面は刷毛目、ケズリ、内面は刷毛目である。

須恵器

壺 (第66図9) 口縁部が逆台形状に外反する長頭壺の頸部と推定されるものの破片である。

石製品

a 砥石 (第67図1) 泥質細粒凝灰岩製のものである。砥面は3面からなり、いずれも中央部がへこみ孤状をした面をなしている。(長さ10.4cm、幅2.7cm、高さ1.1cm～2.4cm)

b 石器 6点出土している。(2)は片面に刃部加工のみられる不定形石器で材質は凝灰質珪質泥岩である。(3)は縦形の石匙で、打面周辺に両面から調整剥離を加えてつまみを作りだしているもので、片面にのみていねいな調整剥離を加えて刃部を作り出している。材質は珪質泥岩である。(4)は小形の石斧である。刃部は片面をわずかに剥離した後研磨して作り出している。材質は泥質細粒凝灰岩製である。(5)は粘板岩製の石鍬である。(6、7)は表面がわずかに研磨された石棒状のもので、材質は淡緑色石質凝灰岩、含凝灰岩小角礫硬質泥岩である。

IV 遺構と遺物に関する考察と問題点

1 竪穴住居跡の形態と構造

発見された住居跡25棟のうち、完全あるいはほぼ完全に近い形で検出された21棟について、住居の構造、形態等についてその特徴を簡単にまとめる。

〔平面形〕 いずれの住居跡も方形を基調としたものであり、その形は正方形あるいは正方形に近いものがほとんどで長方形を呈するものは謹か1棟のみである。正方形の中でも隅が丸味をおび、いわゆる隅丸方形になっているものがほとんどである。特殊なものとして不整円形に近いものも1棟存在する。

〔規模〕 床面積を比較してみると次のような各群に分けることができる。

a群 10㎡未満のもの：第14、15号住居跡

b群 10～20㎡のもの：第2、3、5、16、18、21、22号住居跡

c群 20～30㎡のもの：第9、12、19、20号住居跡

d群 30～40㎡のもの：第1、7、8、10、11号住居跡

e群 40㎡以上のもの：第4、6号住居跡

以上のように比較的小型の住居から大型の住居まで面積の異なる住居が集っているが、その中でもb群が最も多く次いでd群が多い。最大のものは、第4号住居跡で62.4㎡である。又、ロクロ未使用土器を出土する住居とロクロ使用土師器、須恵器を出土する住居とを比較してみると、前者はa～e群の各の住居が混在しているのに対して後者はb群主体でc群は1棟のみで小規模なものが多い。

〔壁〕 壁はすべて地山をそのまま壁としているもので、立ち上がりは残存状態の良好なものはやや外傾気味に立ち上がっているのに対して不良なものは立ち上がりが緩かになり床面との接点は丸味の強いものが多い。又、壁面は小礫が多く入りこんでおり小さな凹凸が多く崩れやすいものが多い。壁に附属する施設類は発見されていない。

〔床〕 地山をそのまま床としているもので、特に掘り方を有し貼り床等が行われているものはない。床面は比較的平坦で堅くしまっているが、壁面と同じように小礫が多く小さな凹凸が多い床面を有している住居が比較的多いのが特徴である。これは、礫層が比較的高い位置にあることが関係しているものと思われる。又、床面に周溝や貯蔵穴と明かに判明するものは皆無である。

〔柱穴〕 柱穴の確認できたものは第1、4、5、6、8、10、11、12、18、19号住居跡の12棟である。他の住居跡には柱穴は認められない。柱穴の配列は、方形プランの対角線上に壁際より内にはほぼ等間隔で配置され、4本が基本である。特に1棟を除き比較的小型の規模（a、b群）の住居跡とB、C類を伴出した住居跡に柱穴が認められていないのが特色である。

第1表 住居跡一覧表

	平面図	規		主 柱 穴	カ マ ド				煙 出 部 の ピ ット	重 複 他
		長軸×短軸 (m)	床面積 (㎡)		付 設 場 所	方 向	側 壁	煙 道 の 長 さ (cm)		
第1号住居跡(AH18)	隅丸方形	5.75 5.70	37.7	4	北壁中央	N-10°-W	シルト、芯材に土器、カマド石使用	なし	16号住居跡を切っている。支脚用土器	
第2号住居跡(AJ56)	隅丸方形	4.1 3.9	16.0	なし	北壁中央	N-18°-W	シルト、芯材に土器	なし	認められない。支脚用石	
第3号住居跡(BB53)	隅丸方形	3.9 3.5	13.0	なし	北壁ほぼ中央	N-18°-W	シルト、カマド石	なし	認められない。支脚用石	
第4号住居跡(BC59)	隅丸方形	7.9 7.9	62.4	4	北壁中央	N-10°-W	シルト、カマド石使用	不明	認められない。支脚用土器	
第5号住居跡(BJ56)	隅丸方形	4.3 4.2	18.1	4	北壁中央	N-100°-W	灰白色粘土、シルト、カマド石使用	皿状	認められない。	
第6号住居跡(AJ12)	隅丸方形	6.5 6.4	41.6	5	北壁ほぼ中央	N-36°-W	シルト、カマド石使用	皿状	認められない。支脚用石	
第7号住居跡(BC15)	隅丸方形	5.8 5.6	32.5	4	北壁ほぼ中央	N-40°-W	シルト、カマド石使用	なし	第8号住居跡により西壁の北半が切られている。支脚用土器	
第8号住居跡(BC21)	方形	5.8 5.7	33.1	4	北壁ほぼ中央	N-30°-W	シルト	なし	第9号住居跡の西壁の北半を切っている。支脚用石	
第9号住居跡(A103)	隅丸方形	5.45 5.35	29.2	4	北壁ほぼ中央	N-30°-W	シルト	有	認められない。支脚用石	
第10号住居跡(BE50)	隅丸方形	6.3 6.0	37.8	4	北壁中央	N-35°-W	白色粘土、シルト、カマド石使用	皿状	認められない。支脚用石	
第11号住居跡(CE15)	隅丸方形	5.8 5.7	33.1	4	北壁東寄、東壁北寄	N-10°-W N-103°-E	シルト	竪使用 なし	認められない。	
第12号住居跡(CA15)	隅丸方形	4.8 4.8	23.1	4	西壁中央	N-64°-W	シルト、カマド石使用	皿状	認められない。	
第13号住居跡(AJ62)	不明	4.8		不明	不明		シルト、カマド石使用		北側勾配落のためなし	
第14号住居跡(BI21)	隅丸方形	3.2 3.1	9.9	なし	東壁ほぼ中央	N-103°-E	シルト、芯材に石使用	なし	認められない。	
第15号住居跡(BG68)	不整形	2.7 2.5	6.8	なし	なし				認められない。	
第16号住居跡(AJ18)	不整形隅丸長方形	3.9 3.4	13.6	なし	なし				1号住居跡によって北東隅が切られている。 1号溝によって東西に切られている。 西半調査区外	
第17号住居跡(AJ21)	不明	5.8		不明	不明					
第18号住居跡(CG65)	ほぼ隅丸方形	4.1 3.9	(16.0)	4	西壁中央	N-83°-W	シルト、カマド石使用	なし	認められない。東側一部調査区外	
第19号住居跡(CF24)	隅丸方形	5.2 5.0	(25.1)	3	北壁中央	N-7°-W	シルト、芯材に石使用			
第20号住居跡(CC53)	ほぼ方形	4.8 4.5	21.6	なし	東壁北寄	N-17°-E	シルト	皿状	認められない。支脚用土器	
第21号住居跡(BT06)	長方形	4.7 3.8	17.1	なし	東壁南寄	N-145°-E	シルト、芯材に石使用	不明	認められない。	
第22号住居跡(CG09)	ほぼ方形	(4.5) 10.5	19.8	なし	東壁南寄	N-108°-E	シルト、カマド石使用	不明	認められない。	
第23号住居跡(BH56)	(長方形)	(4.5) (5.2)		不明	不明				削平のため、大部分が不明	
第24号住居跡(BF12)	隅丸方形	4.2 4.2	17.6	なし	北壁中央	N-18°-E	シルト、芯材に石使用	不明	認められない。	
第25号住居跡(BG21)	不明			不明	不明				大部分調査区外	

〔カマド〕 カマドは、それぞれの住居の北壁、東壁、西壁に付設されているが、第15、16住居跡にはカマドは認められない。カマドの付設場所とその軸方向からいくつかの群に分けられる。なお、カマド位置は、北カマドのものが全体の6割強を占めている。

(1) 付設場所

I類 北壁に位置するもの、()は磁北に対するカマドの主軸方向の振れ

a 北(10°以内) 第1、4、5、11(旧)、19号住居跡

b 北北西(20°以内) 第2、3号住居跡

c 北西(30°~40°) 第6、7、8、9、10号住居跡

II類 西壁に位置するもの

a 西(0~10°) 第12、18号住居跡

III類 東壁に位置するもの

a 北北東(110°以内) 第11(新) 14、22号住居跡

b 北東(110°以上) 第20、21号住居跡

(2) カマドの構築

カマドは削平や攪乱によって残存状態が比較的不良なものが多く、その実態を明確に把握できるものは少ないが次のようなことがいえる。

まず、カマド本体の構築にあたっては、カマドの側壁に芯石と掛口の芯に長楕円状の川原石を横石として使用しているものがみられる。それは第3、4、6、7、10、18号住居跡である。又、横石は認められないが側壁へ芯材として土器や石を使用しているものもある。それは第1、2、14、19、21、22、24号住居跡である。又、側壁に特に石、土器等の認められなかったものは第8、9、11、18、20号住居跡である。これらは、いずれも地山に類似したシルトで固めてあるが中には明かに白色粘土を混ぜ合わせて構築しているものもみられる。なお、特に掘り込み等は認められない。

次に、煙道部についてみると、溝状のものが全体の5割を占め、くりぬき状になっていたものが第1、6、10、12号住居跡の4棟存在した。底面はほぼ平坦あるいはなだらかに下降するもので、上昇する例はほとんどない。又、住居外に延びる場合、直接住居外に延びるものと燃焼部と奥壁が煙道の底面よりわずかに高くなって段差をつくり出しているものがあるが、後者の方が多い。煙道部の落ち込みは、明確に認められるものは第9号住居跡のみで、他は皿状の浅いもので、落差の大きいものはない。なお第11住居跡の北壁に付設するカマドの煙道部の立ち上がり部分にはカメの下半部をそのままはめ込んでいた特殊な例がある。

2 住居跡の時期と占地

前項では住居跡の形態や構造についてそれぞれの特色を簡単にまとめたが、ここでは住居跡

の時期や占地の状況等について若干述べる。各住居の時期決定については伴出土器が有力な資料となることは勿論であるが、竪穴住居における「カマド位置とその軸方向の磁北に対する振れ」というものは、時期設定する上での一つの手がかりとなることは膳性遺跡^(注1)、今泉遺跡^(注2)、石田遺跡^(注3)等の例からもある程度可能なものようである。即ち、例外的な場合のあることは当然のことではあるが、上記の遺跡においては、一般的に「古い時期に属するものほぼ磁北からの振れが少なく、新しい時期に属するものほど西に振れる」という傾向性が指摘できるようである。なお、竪穴住居とカマドの位置の変遷と時期差については、猫谷地遺跡^(注4)においても調査途中の段階ではあったが一つの視点として述べられている。以上のような点を前提として当遺跡における住居群をみると2期・3小期に分けることができる。

I期 a期 北カマドを有するもの 1、4、5、19号住居跡

b期 北西、北北西カマドを有するもの 2、3、6～10、(17) (18) (25) 号住居跡

c期 西、東カマドを有するもの 12、14、18号住居跡

II期 南東、北東カマドを有するもの 20、21、22、24号住居跡

従ってI期の中においてもa期が古い時期に属し以下b→c→II期という時期関係が考えられる。

次に、各住居間の占地についてみると、重複関係にあるものが非常に少なく、たくみに各期の住居を避けて空間を利用しているといえる。即ち、I—a期の住居群は北から南にかけて孤状に配置され、その後I—b期のそれはそれらを避けた北側地区に集中的に占地している。しかし、この場合、各住居間の距離が近接しているものも存在し、全体が同一期に在したというよりも、そこに多少の時期差の存在したことが推察される。特にこれはあくまでも推測にすぎないが、第17、18、23号住居跡の残存壁の方向から類推するとこれらも北西カマドを有していた一群とみなすことも可能であり、重複関係にある7、8号住居跡等の存在も考慮に入れるとその感が強いといえる。更に、I—c期においては南半の、しかも東、西端に占地しており、他の住居とは多少異なる占地状況を示している。

II期の住居跡は、これらを全く避けて南半に位置しているといえる。以上のような占地状況は各期の集落を構成する上において、何らかの規制が働いていたこと示すものかもしれない。

(注1) 埋蔵文化財センター高橋与エ門氏の教示による。 岩手県教育委員会

(注2) 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 第60集 昭和56年3月 日本道路公団

(注3) 同 上 第61集 “

(注4) 猫谷地遺跡現地説明会資料 1974 岩手県教育委員会文化課

3 出土土器の分類

本遺跡の出土土器には縄文土器、土師器、須恵器がある。そのうち縄文土器については前項

で既にふれているので、ここでは土師器、須恵器について述べる。

土師器

土師器には、坏、甕、高坏、壺、甑、碗があるが、分類に際しては、主として、比較的出土量の多い坏、甕、高坏について成形、器形、調整技法等の面より分類を行う。又、これらは器形が明瞭な図示遺物を対象に行うこととする。なお、器面調整の技法の用語は、宮城県岩切鴻ノ巣遺跡^(注)の調査報告書のそれを使用した。

(注) 岩切鴻ノ巣遺跡 宮城県文化財調査報告書 第35集 東北新幹線関係遺跡調査報告書 I

坏

坏には製作に際してロクロを使用していないもの(A)と、ロクロを使用しているもの(B)とがある。前者は、底部形態により2つに分類することが可能である。又、後者は、出土量が極端に少ないので特に細分は行わない。

A I 類 ロクロ未使用のもの、底部形態が丸底のもの

A II 類 ロクロ未使用のもの、底部形態が平底風のもの

以上の各類は、更に体部の特徴によりいくつかに分類される。

坏 A I 類 ロクロを使用せず、底部形態が丸底のものである。体部に段のもつものを A I a 類、沈線、稜を有するものを A I b 類、段、沈線、稜をもたないものを A I c 類とする。

〔A I a 類〕 17点出土している。体部外面に段が巡るものであるが、器形的には段より上は内彎気味に外傾するもの、外傾気味のものが大部分である。又、対応する内面に「くびれ」を有するもの(1)と、「くびれ」のないもの(2)とがある。器面調整は、体部外面においては、段より上は「ヨコナデ」、下は「ケズリ」、以下「ミガキ、ケズリ」「ミガキ、ハケメ」「ミガキ、ミガキ」と多種にわたっている。その中で最も多いのは「ミガキ、ミガキ」のものである。次に、内面はほとんどが「ヘラミガキ」されており「黒色処理されているもの」と「黒色処理されていないもの」があり内黒が50%である。口径は約14cm～29cmと変化に富んでいるが、平均で約19cm、器高は平均約6cmと比較的大型のものが多い。

〔A I b 類〕 7点出土している。体部外面に沈線、稜の巡るものである。器形的には、段を有するものに比べて底部の丸味が強いものが多く、内彎気味に口縁部まで立ち上がるものが多いが外傾するものもある。やはり対応する内面に「くびれ」を有するもの(1)、「くびれ」のないもの(2)とがある。器面調整は、体部外面に一部「ヨコナデ」の認められるものもあるが、ほとんどのものが内外面ともに「ヘラミガキ」である。やはり「黒色処理されているもの」と「黒色処理されていないもの」とがあり、内黒が約60%を占める。口径は約16cm前後のものがほとんどであり器高は、約6cm前後である。

〔A I c 類〕 4点出土している。体部内外面に段、沈線、稜を有しないものである。器形的に

は、底部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がるものである。器面調整は、体部外面に「ヨコナデ、ハケミ」のあるものの他、内外面ともに「ヘラミガキ」のものがほとんどである。内面は「黒色処理されているもの」と「黒色処理されていないもの」とがあり内黒が50%である。口径は7.5cm～18cmまでであるが、平均約11cm、器高も約4cmと他に比べて小型のものが多い。

坏AⅡ類 ロクロを使用せず本来的には丸底であったものが、ケズリ、ミガキ等により底部形態が平底風に変化しているもので完全な平底とは異なる。体部外面に沈線、稜の巡るものAⅡa類、沈線、稜のないものAⅡb類がある。

〔AⅡa類〕 6点出土している。体部外面に沈線、稜の巡るものである。器形的には底部より内彎気味に外傾するものが主体を占めている。器面調整は、他に比べて磨滅のため不明のものが多く、内外面ともに「ヘラミガキ」のものが主である。内面は「黒色処理されているもの」と、「黒色処理されていないもの」とがあり内黒が50%である。口径は約13～29cmと変化にとみ、平均は19cm、器高は約5cmである。

〔AⅡb類〕 3点出土している。体部外面に段、沈線、稜を有しないものである。器形的には底部より内彎気味に外傾するものである。個体数としては一番少ない。器面調整は、体部外面にヨコナデやケズリのみられるものが一部あるが一般的に不明なものが多い。内面はヘラミガキがほとんどである。3点中2点が「黒色処理されているもの」である。口径は平均約17cm器高約5cmである。以上坏全体の傾向をみると、口径が15cm以上、器高が5～6cm以上のものが8割を占めており比較的器高が深く大型のものが多いことと、内黒、不内黒の比率がそれぞれ50%であるということが大きな特徴である。

坏B類 製作に際しロクロを使用しているものである。既述の如くこの器種は、実測できたものは2点のみである。内彎気味に外傾する口縁を有するもので、内面は細かいヘラミガキがなされ、黒色処理を施しているものである。底部の切り離し技法は磨滅のため不明である。

＜土師器坏分類表＞

				土師器坏分類表	
A	ロクロ未使用	I 丸底	a 段の巡るもの b 沈線、稜の巡るもの c 段、沈線、稜の巡らないもの	(1) くびれあり	
		II 平底風	a 沈線、稜の巡るもの b 沈線、稜の巡らないもの	(2) くびれなし	
B	ロクロ使用	調整 内面黒色処理			A II b 2

甕

甕は、111点出土しており、製作に際してロクロを使用していないもの(A)とロクロを使用しているもの(B)とがある。これらを主として器形の特徴を中心に分類する。まずロクロ未使用の甕A類についてみると口径と器高の比率と最大径の位置の違いによって次のように大別できる。

〔甕A類〕

I類 最大径が口縁部にあり、器高が口径より大きいもの

II類 最大径が口縁部にあり、器高が口径より小さいもの

III類 最大径が体部にあり、器高が体径より大きいもの

IV類 最大径が体部にあり、器高が体径より小さいもの

甕A I類は器形的には主に長胴のものであり器高は約34cm～13cmまで大、中、小がありA II類は器高が10cm台の小甕が主である。又、III、IV類は球胴のものであるが、その中には本来的には「壺」の仲間を含めた方がよいと思われるものもあるが（特にIV類）一応口縁部の単純なものは全て甕として中に含めている。器高は30cm台の比較的大型のものが多く10cm台の小型が少ない。底部は木葉痕のものが約3割である。他は何らかの調整を施しているものや一部不明のものもある。これらの土器群は、更に形態上の特徴から次のように細分される。

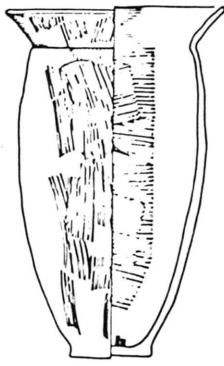
a類 頸部に段を有するもの

b類 頸部に段をもたないもの

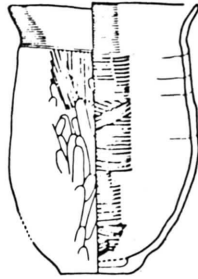
<土師器甕分類表>

	最大径の位置と器高の関係	段の有無	体部の最大径の位置	口縁形態
A ロクロ未使用のもの	I 最大径が口縁部にあり、器高が口径より大きいもの	a 頸部に段を有するもの	1 体部上端附近	i 外傾
	II 最大径が口縁部にあり器高が口径より小さいもの		2 体部中央附近	ii 外反
	III 最大径の体部にあり器高が体径より大きいもの	b 頸部に段のないもの		
	IV 最大径の体部にあり器高が体径より小さいもの			
	口縁部の形態	再調整の有無		
B ロクロ使用のもの	I 緩く外反	a 有		
	II 鋭く短く外反	b 無		

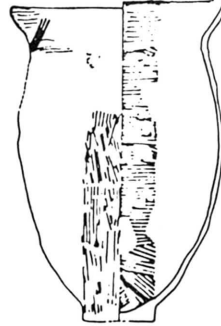
土師器甕分類表



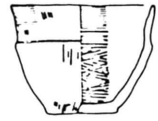
AI a 1i



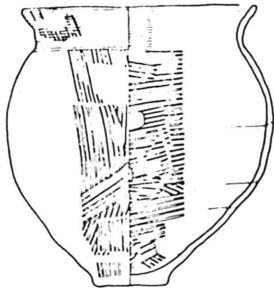
AI a 2ii



AI b 2i



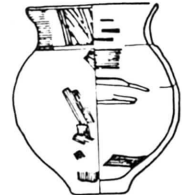
AII a 1i



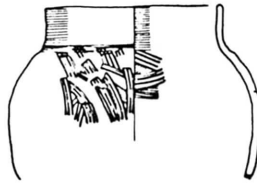
AIII a 1i



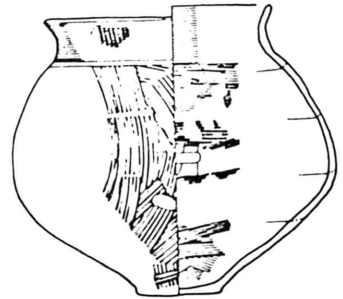
AIII b 1i



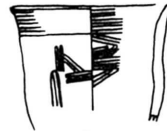
AIII a 2ii



AIV a 2i



AIV b 2ii



BI - a



BII

また、体部の最大径の位置の違いによってⅠ～Ⅳ類は次のように分けることができる。体部最大径の位置が、体部上端附近にあるもの(1) 体部中央附近にあるもの(2) の二つに分けられる。これらについて更に口縁部形態の特徴から、ⅰ 外傾するもの(直口気味も含む) ⅱ 外反するもの、というように細部にわたって分類される。器面調整については、口縁部の内外面については、ヨコナデがほとんどであり、体部については最も多くみられるものは刷毛目でありその他ケズリ、ミガキ等の手法が、主に下半にみられるもので、量的にはあまり多くないといえる。

〔甕B類〕 製作に際してロクロを使用しているものであるが、A類に比べてその出土量が極端に少なく、完形品は1点もない状況である。従って、図示できたものも口縁部の破片により反転復元したものがほとんどであるが口縁部の形態のちがいでより2つに分類できる。

BⅠ類 口縁部が緩く外反するもの

BⅡ類 口縁部が鋭く短く外反するもの

これらは更に内外面に調整のみられるもの(a)無調整のもの(b)の2つに分けられる。いずれも器形的には長胴を呈するものと推定されるものである。

高坏

高坏は、個体数が非常に少なく脚部のみのもを含めて11点出土している。分類することに難点はあるが坏部、脚部の形態により次のように分けられる。

成形はいずれも、ロクロ未使用のものであり、坏部の形態から

Ⅰ類 体部外面に段が巡るもの

Ⅱ類 体部外面に稜の巡るもの(屈折線を有するもの)

に分けられ又、脚部は、いずれも坏部底部より直接外方に開く感じで比較的低いのが特徴で、

a 外傾気味に開くもの

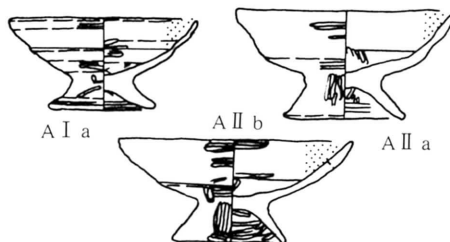
b 内彎気味に開くもの

に分けられる。器面調整は、坏部、及び脚部ともに「ヘラミガキ」による調整がなされ坏部内面はほとんどのものが黒色処理されているものであるが内黒でないものが2点ある。又「朱」の塗られているものが3点存在する。口径は17～18cmで器高は8cm前後のものである。その中で完全ではないが脚部底部の径が12.6cm、口径が20cm以上の大型の朱塗の坏が1点ある。

＜土師器高坏分類表＞

A ロクロ 未使用	坏部	脚部
	Ⅰ 段の巡るもの	a 外傾気味
Ⅱ 稜の巡るもの	b 内湾気味	

土師器高坏分類表



甔 器形の判明するものは5点出土している。いずれも無底式のものである。器形的には、肩部に段を有し口縁部が外反するもの、無段で口縁部が直口、或は緩く外傾するものがある。器面調整は、前者の口縁部は内外ともにヨコナデ、体部外面は刷毛目が主で一部ケズリがみられる。又、後者も口縁部の内外ともにヨコナデが主で一部内面に軽いケズリのあるものもある。体部外面は、軽いケズリのもの、刷毛目のものがあり、内面は刷毛目、ナデ等がある。

埴 1点出土している。ロクロは使用していない。口縁部が直立するものであり甕の底部のような台が付いている。内面は粗いヘラミガキがなされ、内黒処理されており、外面はケズリである。

壺 3点出土している。口縁部が直立気味にやや外反し長く、体部は楕円気味で底部は中央部がややへこみ具合のもので長頸壺的なものと、口縁部が外傾内彎気味に立ち上がるもので、頸部に段を有し、体部はやはりやや楕円気味のもので広口壺的なものがある。器面調整は、口縁部外面はいずれもヨコナデ、体部外面は細いミガキであるが、前者はそのミガキが口縁部まで及んでいる。内面はナデである。なお、第19図の体部が楕円状を呈する上げ底風のものも壺に含めるのが妥当かもしれない。

須恵器

須恵器(C)には、坏、高台付坏、甕、壺があるが坏を除いては出土量も少なく、しかも、そのほとんどが破片である。その中でも比較的出土量の多い坏を中心にしてみることにする。

坏 器形は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾しているものが多く、その他、内彎気味に外傾しているものがある。底部の切り離しの違いにより3つに分けることができる。

C 須 恵 器	底部の切り離し技法	調整の有無
	I 回転糸切り	a 無調整
	II ヘラ切り	b 調整のあるもの
III 技法の不明なもの		

4 遺構出土土器の共伴関係とその年代

(1) 出土土器の共伴関係

前項において本遺跡の遺構出土土器を中心に分類を行った。この分類の結果から各住居跡の共伴関係を表わしたのが第2表である。又、これをもとに各遺跡の共伴する土器の組み合わせ関係をまとめたのが第3表である。以上の二表をもとに各遺構の土器の共伴関係や遺構間における類似性等についてみることにする。この場合、より遺構の構築時期や使用時期の下限を示すものと考えられる床面およびカマド内出土土器を中心に考え、部分的な形で検出された住居跡から出土したものや堆積土より出土した土器は一応除外して考えることにする。

当遺跡出土の土師器は製作技法の相違からロクロ未使用のもの(A類)、ロクロ使用のもの(B類)の二つに分け、更に、須恵器(C類)を加えて三大別したことは既述の通りである。

従って、まず、これらを中心にその共伴関係についてみることにする。

A類主体の住居跡においてはB類を含む例は1例のみで、しかも、坏B類が1点のみで、その中における組成を示さない例外的なあり方を示している。又、これらの住居跡の堆積土中にもロクロ使用の破片が少ない。又、須恵器についても同様である。

須恵器を主体としB類を含む住居跡においては、甕類を除いて坏A類1点が例外的な有り方を示す例として存在するだけである。

従って、以上のような結果から、本遺跡においては、ロクロ使用の有無が組み合わせの大きな要素になっているということができ、土器は2群に大別される。

第1群土器 ロクロ未使用の土師器を主体に構成するもの

第2群土器 須恵器を主体とし、それにロクロ未使用、使用の土師器の含まれるもの

〔第1群土器の組み合わせと年代〕

第1群土器の共伴関係、組み合わせについて検討してみる。まず、器種ごとの関係についてみると、坏AⅠ類は、3～6、8、9、11、14、18、19号住居跡から出土し、坏AⅠ、Ⅱ類は1～10、12号住居跡から出土しており、従って、坏AⅠ、Ⅱ類は共伴関係にあり、すべての組み合わせは成り立つものと考えられる。又、体部の特徴の段、沈線等を主とした組み合わせにおいてもa、b、c類の組み合わせが成り立つが、b類とc類だけの組み合わせはない。次に、高坏についてみると、高坏AⅠ類は、第7号住居跡より出土し、高坏AⅡ類は、4～6、9、18号住居跡より出土し、第10、11号住居跡では高坏AⅠ、Ⅱ類が共伴している。このことから、数は少ないながらもAⅠ、Ⅱ類は組み合わせとして成り立つものと考えられる。甕の共伴関係についてみると次のようになる。

AⅠ類…第3、13～16号住居跡、AⅠ、Ⅲ類…第2号住居跡、AⅠ、Ⅱ、Ⅲ類…第1、12号住居跡

AⅠ、Ⅲ、Ⅳ類…第7号住居跡、AⅣ類…第9号住居跡、AⅠ、Ⅳ類…第11号住居跡

AⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ類…第4、6、10号住居跡

従って、甕Ⅰ～Ⅳ類についても共伴関係から結果としてすべての組み合わせが成り立つものと考えてよい。特に、大型の住居である4、6、10号住居跡では全ての器種が揃うのに対して、比較的小型の住居跡では、器種が少なく、その中でもⅡ類に属する小甕が少ないことが目立つ。

以上が同器種間における共伴、組み合わせ関係であるが、各異器種間相互の組み合わせ関係についてみると、第2号住居跡のように坏、高坏が全く含まれない例はあるものの、やはり、全ての組み合わせ関係が成り立つものと考えてよい。このことは、形態、技法等の相違は多少あるものの時期的差はそれほどない土器の一群とみなすことができそうである。しかしながら土器の共伴関係や遺構の配置関係からみた場合には、微妙な相違が存在することや占地の状況からみて遺構が同一時期に存在し得ない要素等も考えられることから、これらのそれぞれの土器群は

第2表 遺構に伴う図示遺物

	環												高環			甕												須惠器 C	防 須 惠 器 甕 車																	
	A I				A II				A III				A IV				B		I	II	I	II																								
	a1	a2	b1	b2	a1	a2	b1	b2	a1	a2	b1	b2	a1	a2	b1	b2	a1	a2					b1	b2																						
第1号住居跡	1	1			2								1												1	○																				
第2号住居跡																																														
第3号住居跡																																														
第4号住居跡																																														
第5号住居跡																																														
第6号住居跡																																														
第7号住居跡																																														
第8号住居跡																																														
第9号住居跡																																														
第10号住居跡																																														
第11号住居跡																																														
第12号住居跡																																														
第13号住居跡																																														
第14号住居跡																																														
第15号住居跡																																														
第16号住居跡																																														
第17号住居跡																																														
第18号住居跡																																														
第19号住居跡																																														
第20号住居跡																																														
第21号住居跡																																														
第22号住居跡																																														
第23号住居跡																																														
第24号住居跡																																														
第25号住居跡	13	4	2	7	0	5	0	4	0	2	2	5	1	1	0	3	3	22	21	1	13	6	8	1	1	6	5	0	0	2	0	1	4	3	1	0	2	0	0	0	2	3	2	5	10	
まん中の集計	1				2				3				0				2				0				1				1				1				2				2				4	